

HP Client Automation

管理者

Windows[®]、Linux、Macintosh 用オペレーティングシステム

ソフトウェア バージョン: 7.50

ユーザーガイド

製造パート番号: なし

ドキュメントのリリース日: 2009 年 5 月

ソフトウェアのリリース日: 2009 年 5 月



i n v e n t

ご注意

保証

HP 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HP はいかなる責任も負いません。

本書に記載した内容は、予告なしに変更することがあります。

権利の制限

コンピュータ ソフトウェアの機密保持。所有、使用、または複製を行う場合には、HP からの正規のライセンスが必要です。FAR 12.211 および 12.212 に従い、商用コンピュータ ソフトウェア、コンピュータ ソフトウェア ドキュメンテーション、および市販品の技術データは、各販売業者の標準営業許可のもとに米国政府にライセンスされています。

著作権

© Copyright 2007-2009 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

Microsoft®、Windows®、および Windows® XP は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。

OpenLDAP は、OpenLDAP Foundation の登録商標です。

PREBOOT EXECUTION ENVIRONMENT (PXE) SERVER

Copyright © 1996-1999 Intel Corporation.

TFTP SERVER

Copyright © 1983, 1993

The Regents of the University of California.

OpenLDAP

Copyright 1999-2001 The OpenLDAP Foundation, Redwood City, California, USA.

Portions Copyright © 1992-1996 Regents of the University of Michigan.

OpenSSL License

Copyright © 1998-2001 The OpenSSLProject.

Original SSLeay License

Copyright © 1995-1998 Eric Young (ey@cryptsoft.com)

DHTML Calendar
Copyright Mihai Bazon, 2002, 2003

ドキュメントの更新

本書のタイトル ページには、次の識別情報が含まれています。

ソフトウェア バージョン番号。ソフトウェアのバージョンを示します。

- ピリオドの前の番号は、メジャー リリースの番号を識別します。
- ピリオドの後の最初の番号は、マイナー リリースの番号を識別します。
- ピリオドの後の 2 番目の番号は、マイナー-マイナー リリースの番号を示します。

ドキュメントのリリース日。ドキュメントが更新されるごとに変わります。

ソフトウェアのリリース日。ソフトウェアのこのバージョンのリリース日を示します。

最近の更新がないか確認したり、最新版を使用していることを確認するには、次の URL に移動してください。

<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals>

このサイトでは、HP Passport に登録し、サインインする必要があります。HP Passport ID に登録するには、次のサイトにアクセスしてください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>

または、HP Passport サインインのページの **[New users - please register]** のリンクをクリックしてください。

適切な製品サポート サービスを購読している場合にも、更新版や新版を受け取ることができます。詳細は、HP 営業担当者までご連絡ください。

表 1 本ドキュメントの変更点を示します。

表 1 ドキュメントの変更点

章	バージョン	変更点
第 3 章	7.50	54 ページ、Vista デバイス上にユーザーの介入が必要なアプリケーションを配布するためには、 リソース インストール メソッド 法の「runasuser」修飾子を使用します。
第 3 章	7.20	73 ページ、 コンポーネントの選択モードでのパブリッシュ : シンクライアントのパブリッシュに関する情報を追加しました。
第 3 章	7.20	73 ページ、 コンポーネントの選択モードでのパブリッシュ : このセクションを更新し、レジストリ キーおよび リンクをパブリッシュする際の検証オプションおよび配信オプションに関する詳細情報を追加しました。
第 3 章	7.50	79 ページ、Vista デバイス上にユーザーの介入が必要なアプリケーションを配布するためには、 リソース インストール メソッド 法の「runasuser」修飾子を使用します。

章	バージョン	変更点
第 3 章	7.50	88 ページ、 Windows インストーラ ファイルをパブリッシュする: Windows インストーラ アプリケーションをパブリッシュし、それに応じた処理を行う際、 Administrator Publisher により VMware ThinApp から分離したアプリケーションを特定することができます。
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	100 ページ、 コマンドラインによるパブリッシュ : <code>test.cfg</code> コマンドラインを変更します。 <code>nvdtk.exe pubport.tkd -cfg "c:\program files\test.cfg" -user USER - password PASSWORD</code> 。
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	100 ページ、 表 17: パラメータ msi {body} に関する設定情報を追加しました。 設定名を <code>additionalfiles</code> および <code>connectaiptosvc</code> に修正しました。
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	102 ページ: サンプル設定ファイルの最後に右角括弧を追加しました。
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	103 ページ、 コマンドラインでパブリッシュするファイル を定義する: <code>-file</code> パラメータを使用するコマンドラインのサンプルを次のとおり変更しました。 <code>nvdtk.exe pubport.tkd -cfg "c:\program files\test.cfg" -file "c:\program files\testfile" -user USER -password PASSWORD</code>
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	103 ページ、 複数の .msi ファイルをパブリッシュする (バッチモード) : ディレクトリのスキャン方法に関する詳細と指定した場所に配置されたファイルに関する詳細を追加しました。
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	104 ページ、 複数の .msi ファイルをパブリッシュする (バッチモード) : スキャンするための場所を指定する Publisher を実行する際に使用することのできるコマンドラインのサンプルを次のとおり変更しました。 <code>nvdtk.exe pubport.tkd -batchmsi "c:\msifileslocation" -user USER -password PASSWORD</code> 。
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	104 ページ、 複数の .msi ファイルをパブリッシュする (バッチモード) : Publisher ログ ファイルの名前を <code>Publisher.log</code> から <code>pubport.log</code> に変更しました。

章	バージョン	変更点
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	106 ページ、シンボリック置換を使用して設定ファイルの値をカスタマイズする: MSI Properties Configuration ファイルに組み込まれたサンプルを修正しました。本ファイルの以前パブリッシュしたバージョンは作動しないため、使用しないでください。
第 3 章	5.10 2008 年 1 月 31 日	219 ページ: 最大サイズ、合計サイズ、選択したサイズなど機能セット エディタのメニュー オプション を定義しなおしました。

サポート

次の HP Software Web サイトを参照してください。

www.hp.com/go/hpsoftwaresupport

この Web サイトには、HP Software の製品、サービス、サポートに関するお問い合わせ先情報が掲載されています。

HP Software オンライン ソフトウェア サポートでは、お客様自身が問題を解決するのに有益な情報を提供します。ビジネスを管理するのに必要な、対話型技術サポート ツールにアクセスする、素早く効率的な方法を提供しています。サポートを受けるお客様は、サポート サイトを使って以下のことができます。

関心がある知識ドキュメントの検索

サポート事例および機能強化リクエストの提出とサポート状況の追跡

ソフトウェア パッチのダウンロード

サポート契約の管理

HP サポート連絡先の確認

利用可能なサービスに関する情報の確認

他のソフトウェア顧客とのディスカッションへの参加

ソフトウェア トレーニングの検索と登録

サポート エリアのほとんどでは、HP Passport ユーザーとして登録し、サインインする必要があります。サポートのアクセス レベルに関する詳細については、次の URL を参照してください。

http://h20230.www2.hp.com/new_access_levels.jsp

HP Passport ID を登録するには、次の URL を参照してください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>

目次

1 はじめに	15
はじめに	15
このマニュアルの Core Server および Satellite Server での使用	15
対象	16
前提条件	16
Administratorについて	16
各章のまとめ	17
関連ドキュメント	17
2 パッケージ化およびパブリッシュ	19
はじめに	20
パッケージ化とパブリッシュの比較	20
パッケージ化	20
パッケージ化の際の考慮アイテムのチェックリスト	22
どの製品を使用したらよいか	25
Windows	26
Linux	26
Macintosh	26
Batch Publisher	26
Native Packaging	27
3 Windows 用 Administrator	29
インストール	30
システム要件	30
プラットフォーム サポート	30
インストール ファイルについて	30
setup.exe	30
HPCAЕ-ADMIN72.MSI	31

Administrator のインストール Windows 用	31
インストール ウィザード	31
コマンドラインによるインストール	34
Administrator のインストールの変更	36
インストール ウィザードを使用してインストールを変更する	37
コマンドラインを使用してインストールを変更する	37
Agent Explorer.....	39
Agent Explorer の開始	39
Agent Explorer ウィンドウのメニュー	40
[ファイル] メニュー	41
[編集] メニュー	41
表示メニュー	42
[ウィンドウ] メニュー	42
[ヘルプ] メニュー	43
オブジェクト表示ウィンドウ	43
オブジェクト メニュー	43
変数メニュー	44
[インスタンス] メニュー	45
[オプション] メニュー	45
CSDB Editor から他のデータベースへのリダイレクト	46
Packager.....	47
パッケージのプロパティの設定	47
[管理エージェント] タブ	48
[データ オプション] タブ	51
[エージェントの動作] タブ	53
コンポーネント選択モード	55
インストール モニタ モード	55
推奨事項.....	56
インストール モニタ モードでパッケージを作成する	57
Publisher	72
概要	72
バッチ モード	72
標準的なパブリッシュのステップ	72
コンポーネントの選択モードでのパブリッシュ	73
Windows インストーラ ファイルをパブリッシュする	88
VMware ThinApp 分離アプリケーション	88
MSP ファイルを使用して既存のパッケージをアップグレードする	90
[詳細] パブリッシュ モード	91
基本パブリッシュ モード	98
コマンドラインによるパブリッシュ	100

コマンドラインでパブリッシュするファイルを定義する	103
複数の .msi ファイルをパブリッシュする (バッチ モード).....	103
複数の設定ファイルを使用する.....	104
変換 (.mst) ファイルを格納する.....	105
シンボリック置換を使用して 設定ファイルの値をカスタマイズする.....	106
組み込み MSI プロパティおよび Extensions for Windows Installer のユーザー定義 のプロパティ.....	108
ハードウェア構成要素のパブリッシュ	108
Screen Painter	109
[ファイル] メニュー	109
[編集] メニュー.....	110
[Font] メニュー	110
コントロール	111
コントロール ツールボックス	111
[Properties] ボックス.....	112
[Controls] メニュー	113
[Alignment] メニュー.....	121
[System] メニュー	123
[ヘルプ] メニュー.....	124
CSDB Editor	125
はじめに	125
CSDB Editor ウィンドウ	126
[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う	129
CSDB Editor の操作.....	137
CSDBにおける継承	140
ドメイン、クラス、インスタンスを管理する	141
ドメインを操作する.....	141
クラスを操作する	142
インスタンスを操作する.....	155
パスワード認証.....	162
EDMSIGN と EDMSIGNR	162
パスワード認証が有効になっていない場合.....	163
パスワード認証が有効になっている場合	164
パスワード認証の有効化.....	167
パスワードの変更	169
アクセス規則と管理者.....	169
新規アプリケーション ウィザードでサービスを作成する	170
新規アプリケーション ウィザードで MSI の基本動作を定義する	175
バージョン グループ エディタ	177
サービスの最適化.....	177

[サービスの最適化] オプションを使用する	178
サービス グループ	187
コンポーネントの機能拡張	188
前提条件	188
サービス グループ用のマスター サービスの作成	189
通知	192
フィルタで CSDB の表示内容を指定する	194
パーマネント フィルタ	195
テンポラリ フィルタ	197
ベース インスタンスまたは null インスタンスを表示する	198
フィルタ結果を追加する	198
コンポーネント クラスのインスタンスをフィルタする	198
高速フィルタ	199
CSDBで接続規則を維持する	202
接続規則の概要	202
新しいクラスで接続を有効にする	206
WI が有効なアプリケーションの管理	211
機能セット エディタの概要	211
機能セット エディタにアクセスする	212
MSI 機能セット エディタについて	212
Windows の [プログラムの追加と削除] 設定	219
Windows インストーラ対応パッケージのコピー	221
機能セットをネイティブ モードで管理する	222
レジストリ ファイル エディタ	223
レジストリ ファイル エディタにアクセスする	223
プロパティ設定ショートカット メニュー	225
レジストリ キーを編集する	227
AMP Editor	230

4 Linux および Macintosh 用 Administrator231

はじめに	232
インストール	232
システム要件	232
プラットフォーム サポート	232
前提条件	232
トラブルシューティング	233
推奨事項	233
インストール メソッド	233
Administrator LINUX用 または Macintosh用 インストール	234

グラフィカル インストール	234
コマンドラインによるインストール	236
Agent Explorer	237
Agent Explorer の起動	237
オブジェクト リスト ウィンドウのメニュー	238
オブジェクト メニュー	238
[編集] メニュー	240
表示メニュー	240
テーブル ウィンドウ メニュー	240
オブジェクト ビュー ウィンドウのメニュー	240
オブジェクト メニュー	240
変数メニュー	241
ヒープ メニュー	243
Packager	244
Publisher	244
前提条件	245
パブリッシュ	245
UNIX File Resources (UNIXFILE)	247
パブリッシュされた所有者、グループ、およびパーミッションの考慮事項	248
A コンポーネント インスタンスを修正する (非プロダクション環境 限定)	251
コマンドの使用例	252
コンポーネントの追加、編集、置換コマンドにアクセスする	253
コンポーネントを編集する	254
[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用する	257
コンポーネント データを置換する	258
コンポーネントを追加する	260
B 命名規則	263
情報を分類する	263
POLICY ドメインの命名規則	264
SOFTWARE ドメインの命名規則	264
索引	267

1 はじめに

はじめに

『HP Client Automation Administrator ユーザー ガイド』(Admin ガイド)では、Windows、Linux、Macintosh に使用することのできるプラットフォーム向け HP Client Automation Administrator (Administrator) の以下の 6 つの機能について説明しています。

- Agent Explorer (Windows、Linux)
- AMP Editor (Windows)
- CSDB Editor (Windows)
- Packager (Windows)
- Publisher (Windows、Linux、Macintosh)
- Screen Painter (Windows)

AMP Editor の詳細については、本書では説明していません。『HP Client Automation Application Management Profiles ユーザー ガイド』(AMPs ガイド)を参照してください。

このマニュアルの Core Server および Satellite Server での使用



お使いの環境で Core サーバーおよび Satellite サーバーを使用する場合、まず『Core および Satellite Servers 入門ガイド』をお読みください。当該マニュアルに記載されているインストール、設定、トラブルシューティングに関する情報はこのマニュアルに記載されている情報より優先される可能性があります。

対象

HP Client Automation (HPCA) 製品の管理者は本書から、Administrator のインストール方法とその 5 つの機能の使用方法について習得することができます。

前提条件

Administrator を使用する前に、HP Client Automation Configuration Server (Configuration Server) および HP Configuration Management Configuration Server Database (CSDB) について理解する必要があります。『HP Client Automation Configuration Server ユーザーガイド』(Configuration Server ガイド) および『HP Client Automation Configuration Server Database リファレンスガイド』(CSDB リファレンスガイド)を参照してください。

Administrator について

Administrator には、Configuration Server Database (CSDB) の内容を操作するために使用するツール群が搭載されています。

- **Agent Explorer**
Client Automation オブジェクトを作成し、編集することができます。
- **AMP Editor**
デスクトップクライアントで一般的に必要とされるソフトウェア製品 (Microsoft Office 2007、Symantec Antivirus、および Citrix Presentation Agent など) を迅速に配布および管理できます。『AMPs ガイド』を参照してください。
- **CSDB Editor**
CSDB の内容を検査し、操作することができます。
- **Packager**
パッケージに含めるべきコンポーネントがよくわからない場合に、インストール モニタ モードと呼ばれるパッケージング方式を使用することができます。この方式では、ソフトウェアのインストールの前後にスキャンを実行します。2 つのスキャン結果の相違点がパッケージの内容になります。

- **Publisher**
コンポーネントの選択モードを使用してパッケージを作成し、それから **CSDB** にそのパッケージを追加できます。この方式を使用する場合には、パッケージに追加する各コンポーネントを選択します。
- **Screen Painter**
ダイアログ ボックスを設計し、作成できます。

各章のまとめ

- 第 2 章, **パッケージ化およびパブリッシュ**
パッケージ化プロセス、パブリッシュプロセスおよび特定のニーズに合わせて使用できる製品について説明します。
- 第 3 章, **Windows 用 Administrator**
Windows用**Administrator**のインストール方法およびその機能の使用方法について説明します。
- 第 4 章, **Linux および Macintosh 用 Administrator**
Linux および **Macintosh** 用 **Administrator** の使用方法およびその機能の使用方法について説明します。
- 付録A, **コンポーネント インスタンスを修正する**
ファイルの配布済みコンテンツを、**Admin CSDB Editor** 内からダイナミックに編集する方法について説明します。
- 付録 B, **命名規則**
CSDB に格納されたデータを整理する点で、命名規則がどのように役立つかについて説明します。

関連ドキュメント

HP Client Automation Application Manager および Application Self-service Manager インストール および設定ガイド(Application Manager および Application Self-service Manager ガイド)

HP Configuration Management Batch Publisher インストールおよび設定ガイド(Batch Publisher ガイド)

HP Client Automation Configuration Server Database リファレンス ガイド(CDSB リファレンス ガイド)

HP Client Automation Configuration Server ユーザー ガイド Configuration Server ガイド

HP Client Automation Essential ガイド(Essential ガイド)

HP Configuration Management Extension Windows インストーラ用入門ガイド (Extensions WI 用入門ガイド)

HP Configuration Management Extension Windows インストーラ用ユーザーガイド (Extensions WI 用ガイド)

HP Client Automation Knowledge Base Server インストールおよび設定ガイド (KB Server ガイド)

HP Client Automation OS Manager ハードウェア設定ユーザー ガイド ハードウェア設定ガイド

HP Client Automation OS Manager System Administrator ガイド(OS Manager ガイド)

HP Client Automation Application Management Profiles ユーザー ガイド(AMPs ガイド)

2 パッケージ化およびパブリッシュ

この章は以下を目的としています。

- データのパッケージングとパブリッシングの違いを理解する。
- データのパッケージ化のためにどの **Client Automation** 製品を使用するかを理解する。
- データのパブリッシュのためにどの **Client Automation** 製品を使用するかを理解する。

はじめに

Client Automation では、データを環境に配布する前に、2 つの方法で処理する必要があります。まずデータをパッケージ化し、それから **Configuration Server Database (CSDB)** にパブリッシュします。**Client Automation** 製品の間には、このようなオペレーションを実行するものもあります。いずれの製品を使用するかは、配布を行うデータのタイプ及びオペレーティングシステムによって異なりますが、**HP Client Automation Administrator (Administrator)** を実行させます。

本章では、パッケージ化プロセス及びパブリッシュプロセスおよび特定のニーズに合わせてどの製品を使用するかについて説明します。

パッケージ化とパブリッシュの比較

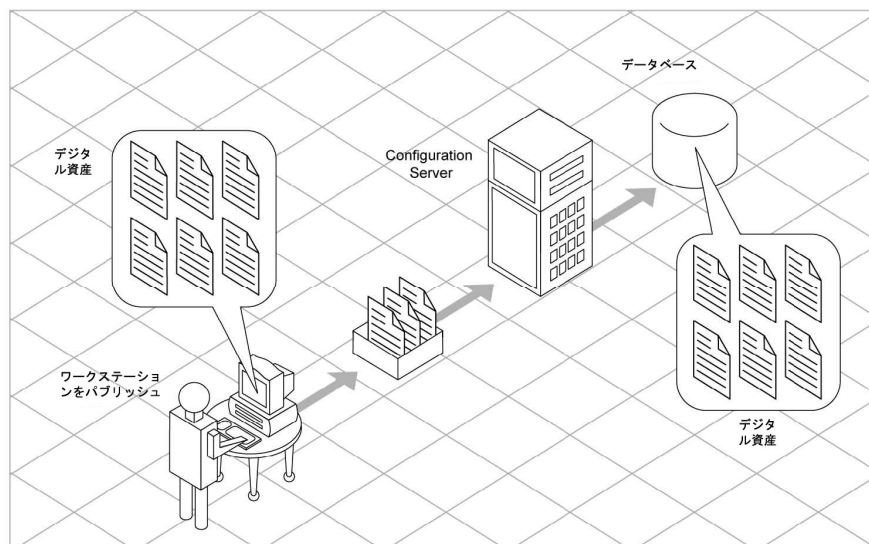
Client Automation では、データのパッケージ化とパブリッシュは2 つの異なるプロセスです。配布するデータには、会社の電話帳のような単一のデータ ファイルから、**Microsoft Office** のようなアプリケーションスイート全体まで、様々な種類があります。

- **Packaging**
管理するソフトウェアのコンポーネントを確認し、それらを **パッケージ** にまとめるプロセスです。**Packages** には、ソフトウェアを構成するファイル、ショートカット、リンク、およびレジストリ エントリが含まれます。
- **Publishing**
とは、パッケージとそれに組み込まれた情報を **CSDB** にインポートするプロセスです。パッケージのパブリッシュは、その内容をお使いの環境に分散して配布する前に行う必要があります。

パッケージ化

パッケージを作成する2 つの主な方法は、インストール モニタ モードとコンポーネント選択モードです。使用するモードを決める際には、アプリケーションがどの程度複雑か、アプリケーションの構造についてユーザーがどの程度知識を持っているか、アプリケーションのネイティブ インストール機能を使用するかどうかなどが考慮の対象になります。

図1 データのパッケージ化



- **インストール モニタ モードは、Packagerの機能です。**
インストール モニタ モードでは、Packager がソフトウェアのインストールの前後にコンピュータをスキャンして、パッケージするものを決定します。インストール前後のスキャンの差分により、コンピュータに対する変更が判別されます。これらの差分が、CSDB に転送されるパッケージになります。アプリケーションを構成するコンポーネントの一部が不明な場合は、インストール モニタ モードでパッケージ化することをお勧めします。このプロセスの詳細については、Packager (47 ページ) を参照してください。
- **コンポーネントの選択モードは、Publisher の機能です。**
コンポーネント選択モードでは、ファイル、ディレクトリ、レジストリ エントリ、リンクなど、アプリケーションの個別のコンポーネントを選択します。パッケージのすべてのコンポーネントを問題なく識別できる、単純なデータやアプリケーションをパッケージ化するには、このモードを使用することをお勧めします。このプロセスの詳細については、Publisher (72 ページ) を参照してください。

パッケージを作成した後、それを CSDB にパブリッシュします。パッケージは CSDB にコピーされ、以下のような複数のインスタンスが作成されます。

- **Application Packages (PACKAGE) インスタンス。** 転送されたパッケージを表します。
- **パッケージ内の各ファイルに対し 1 つのファイル リソース (FILE) インスタンス。**

- **Desktop (DESKTOP)** インスタンス。パッケージ内のプログラム グループ、リンク、およびショートカットごとに 1 つずつ作成されます。
- **Path (PATH)** インスタンス。ソフトウェアがインストールされる 一意のパスごとに 1 つずつ作成されます。
- **Registry Resources (REGISTRY)** インスタンス。パッケージ内のハイブごとに 1 つずつ作成されます。



ここで説明した各インスタンスは、**PACKAGE** や **FILE** など、**SOFTWARE** ドメインのデフォルト クラスのいずれかに格納されます。また、**DLL** クラスのような独自のクラスを **CSDB** に追加することもできます。クラスの追加方法の詳細については、[クラスを追加する \(142 ページ\)](#) を参照してください。

パッケージの転送後に、**CSDB Editor** を使用して、サービスを作成し、ポリシーを割り当てます。詳細は、『**HP Client Automation Application Manager** および **Application Self-service Manager** インストールおよび設定ガイド』（『**Application Manager** および **Application Self-service Manager** ガイド』）の「**Entitlement**」の章を参照してください。

パッケージ化の際の考慮アイテムのチェックリスト

データをパッケージ化する前には、多くの点を考慮する必要があります。

全般

- パッケージ化されるデータの内容をどの程度把握していますか。
 - 単純なパッケージで、そのコンポーネントを問題なくすべて把握できる場合には、**Publisher** のコンポーネントの選択モードを使用します。
 - 複雑なパッケージで、含めるべきファイルが把握できていない場合は、**Packager** のインストール モニタ モードを使用します。
- パッケージ名の命名については、現在の組織の命名規則に従ってください。付録 B (ページ [命名規則](#)) を参照してください。
- 一意のセッション ID を付けるかどうかについては、現在の組織の慣行に従ってください。

システム設定

必須のシステム 設定を設定する ([59 ページ](#)) を参照してください。

- ターゲット コンピュータ (ワークステーションまたはサーバー) のオペレーティング システムは何ですか。
- データの処理に必要な RAM は何 MB ですか。

- データの処理に最低限必要なプロセッサ速度は何 MHz ですか。

64 ビット アプリケーション

64 ビットコンピュータで 64 ビット アプリケーションをパッケージ化する場合、ならびに 32 ビット コンピュータで 32 ビット アプリケーションをパッケージ化する場合には、ターゲット コンピュータのビット アーキテクチャにはかかわりなく、**Packager** を使用します。これにより、1 つのパッケージ化セッションで、32 ビットおよび 64 ビットのレジストリおよびファイル システムの両方にアクセスすることを避けられます。

Program Files ディレクトリに配布される 32 ビット アプリケーションは、64 ビット マシン上の **Application Manager** で Program Files (x86) ディレクトリにリダイレクトされることはありません。これは、環境変数によって実装されている規則で、ハード的な要求ではありません。32 ビット アプリケーションを Program Files ディレクトリにインストールしたとしても、同じデバイス上で、同じ Program Files ディレクトリにアプリケーションの 64 ビットバージョンを配布することがない限り、悪影響はありません。もしもこのような状況が生じた場合には、解決する方法は 2 通りあります。

- **CSDB** を **Editor** 使用して 32 ビットのパッケージをコピーし、Program Files PATH インスタンスを Program Files (x86) を参照するように変更します。
- アプリケーションを **MSI** インストールに変換し、**MSI** に正しい Program Files の場所を決定させる。

64 ビット オペレーティング システム上のパッケージ化およびパブリッシュ ツールは自動的に **ZSTOP** 式を生成します。2 つの例を示します。

- `WORDPOS(EDMGETV(ZMASTER,ZOSTYPE),'WINX64_NT')=0`
- `WORDPOS(EDMGETV(ZMASTER,ZOSTYPE),'WINIA64_NT')=0`

アクティブ化オプション

- アプリケーションを配布後すぐにアクティブ化しますか、後でアクティブ化しますか。[日付と時刻の制約を設定する \(60 ページ\)](#) を参照してください。
- 配布するアプリケーションのバージョンは何ですか。また、それをいつアクティブ化しますか。詳細については、『**Application Manager および Application Self-service Manager ガイド**』の「サービスを準備する」の章を参照してください。

データ オプション

[[データ オプション](#)] [タブ \(51 ページ\)](#) を参照してください。

- 使用する圧縮のタイプは何ですか。
- データの保存先は **CSDB** ですか、プロキシ サーバーですか。

- NTFS ボリュームに配布中のファイルとフォルダに対して、セキュリティ設定を保持しますか。
- **Application Self-service Manager** エージェントにメンテナンスを配布しますか。
- リソースはどのように転送しますか。[ロック メソッドを強制する]を使用しますか。[ロック ファイル メソッド \(52 ページ\)](#) を参照してください。
- 更新を送信し、変更部分のみを配布しますか。

検証オプション

[管理エージェント] タブ (48 ページ) を参照してください。

- 標準のデフォルト検証オプションを使用しますか。
- インストールは今回が初めてですか。検証しなければならないものがありますか。
- ファイルの配布時に、日、時刻、サイズのどの統計情報をチェックしますか。
- すべてのファイルを更新しますか、新しいファイルのみを更新しますか。
- ファイルが既に存在する場合、新しいファイルを再配布することで、既存のファイルの変更内容が上書きされても良いですか。
- ファイルを配布するかどうかを判別する基準として内部バージョンを使用しますか。

配信オプション

[管理エージェント] タブ (48 ページ) を参照してください。

- ファイルまたはメソッドを配布する順番は決まっていますか。
- データは必須ですか、オプションですか。**Application Manager** がインストールされている場合、配信できるのは必須ファイルのみです。
- 必要なのは、ユーザー コンテキストで配布されたファイルですか、マシン コンテキストで配布されたファイルですか。

エージェントの動作

[エージェントの動作] タブ (53 ページ) を参照してください。

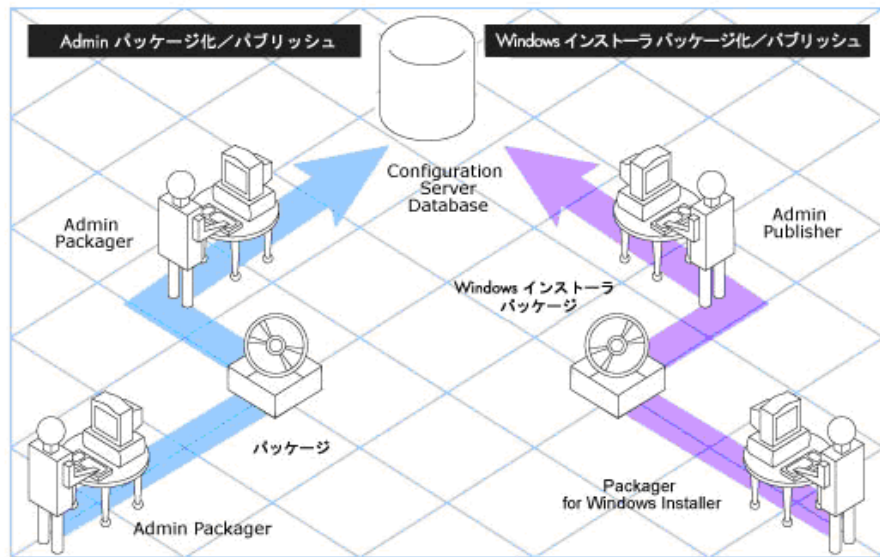
- ファイルの配布後に実行するメソッドがありますか。ある場合は、どのメソッドを実行しますか。
- 配布されたファイルを有効にしなければならない事態が発生しますか。そのような事態が発生する場合は、配布されたファイルを有効にするために、どのメソッドを実行しますか。

- サブスクライバがソフトウェアにこれ以上サブスクライブされない場合は、ファイルを削除しますか。
- 配布しているファイルの新旧バージョンを比較しますか。比較する場合は、どのメソッドを使用しますか。

どの製品を使用したらいいか

HP Client Automation には、データのパッケージ化とパブリッシュで使用できる、いくつかのツールが用意されています。作成およびパブリッシュするリソース パッケージのタイプを確認してから、必要な **Client Automation** パッケージ化製品およびパブリッシュ用製品を選択してください。

図 2 パッケージ/パブリッシュ オプション



- Windows インストーラ ファイルをパッケージ化する場合は、**Packager for Windows Installer** を使用します。『**Extensions Windows インストーラ用ユーザー ガイド**』を参照してください。
- Windows インストーラ ファイル、OS イメージ、またはハードウェア構成をパブリッシュする場合は、**Publisher** を使用します。**Publisher (72 ページ)**を参照してください。
- Windows 用のその他のすべてのタイプのファイルやアプリケーションをパッケージ化およびパブリッシュする場合は、**Packager** を使用します。

Windows

- **Packager**
インストール モニタ モードを使用して **Windows** アプリケーションをパッケージ化およびパブリッシュする場合に使用します。
- **Publisher**
OS イメージ、ハードウェア構成、および **MSI** ファイルをパッケージ化およびパブリッシュする場合、そしてコンポーネントの選択モードを使用する場合に使用します。
- **Batch Publisher**
パブリッシュを自動化する場合に使用します。下記の **Batch Publisher** を参照してください。
- **Packager for Windows Installer**
これは **Extensions for Windows Install** のコンポーネントで、**MSI** パッケージを作成する場合に使用します。

Linux

Linux では 2 つのパッケージ化/パブリッシュ ツールを使用できます。

- **Publisher**
データをパッケージ化およびパブリッシュする場合に使用します。このツールには、パブリッシュ用のコンポーネントの選択モードだけが含まれています。
- **Batch Publisher**
パブリッシュを自動化する場合、そしてネイティブな **Linux** ソフトウェアパッケージをパブリッシュする場合に使用します。

Macintosh

Macintosh では、**Administrator** ツールのうち、**Admin Publisher** だけが使用できます。アプリケーションをコンポーネントの選択モードでパッケージ化し、**CSDB** にパブリッシュするために使用します。

Batch Publisher

Batch Publisher は、コンポーネントの選択モードを使用する、コマンドラインの代替プログラムです。パッケージを作成し、それらを **CSDB** に格納するための、自動化された、コマンドラインのプロセスを提供します。『**HP Configuration Management Batch Publisher** インストールおよび設定ガイド』(**Batch Publisher** ガイド)を参照してください。

Batch Publisher は、以下のことが行えます。

- 複数のドライブやファイル システム上でファイルを検索できます。
- 任意のマップされたドライブやファイル システムからファイルを検索し、パブリッシュできます。
- 検索対象のサブディレクトリを制限するように設定できます。
- ファイル レベルでファイルを含めたり除外したりできます。
- ファイルをタイプ別に選択できます。

Batch Publisher は、内部的なアプリケーションに頻繁にパッチを適用するように適応させることもできます。コンテンツを修正する機能には信頼性があり、指定された時刻やあらかじめ設定された間隔で継続的に実行するように設定できます。**Batch Publisher** は、コマンド プロンプトを呼び出せる任意のスクリプトやコード内から簡単に実行できます。

Native Packaging

Native Packaging は、特に UNIX 環境用にデザインされた、**Batch Publisher** の機能です。**Native Packaging** は、コマンドライン駆動型のコンテンツ パブリッシュ ツールで、ネイティブな HP-UX および Solaris ソフトウェアをサポートします。**Native Packaging** は、**Batch Publisher** を UNIX システムに通常の方法でインストールすると、インストールされます。

Native Packaging は、UNIX ネイティブなソフトウェアの保管場所を調査して利用可能なネイティブ パッケージを検索し、ネイティブなソフトウェアをラップ化して **Configuration Server** にパブリッシュします。**Native Packaging** は、ネイティブなソフトウェアをエンド エージェントに直接インストールするために必要な、すべての情報をパブリッシュします。**Application Manager** エージェントをインストールすると、**Native Packaging** を使用してパブリッシュされるパッケージを配布するときに必要な Tel スクリプトが IDMSYS ディレクトリに含まれます。詳細については、『**Batch Publisher** ガイド』を参照してください。



Batch Publisher は、HP が提供するオプション機能です。詳細については、営業担当者にお問い合わせください。

3 Windows 用 Administrator

この章は以下を目的としています。

- **HP Client Automation Administrator (Administrator)** とその機能コンポーネントのインストール方法を理解する。
- **Agent Explorer** を使用してオブジェクトを作成し、編集する方法を理解する。
- **Packager** を使用してデータを **CSDB** にパッケージ化し、パブリッシュする方法を理解する。
- **Publisher** を使用してデータを **CSDB** にパッケージ化し、パブリッシュする方法を理解する。
- **Screen Painter** を使用してダイアログボックスを設計し、作成する方法を理解する。
- **CSDB Editor** を使用して、希望する状態を作成し、維持する方法を学ぶ。

インストール

Administrator インストール プログラムでは、**Microsoft Windows** インストーラを使用します。プログラムは、**6** つの機能セット、つまり— **Agent Explorer**、**Packager**、**Publisher**、**Screen Painter**、**CSDB Editor**、および **AMP Editor** を含む、**1** つの **MSI** パッケージから構成されています。

システム要件

- クリーンなコンピュータ(クリーンなコンピュータとは、ターゲットサブスクライバのオペレーティング システムのみがインストールされているコンピュータのことです。)
- Windows 2000、Server 2003、XP、または Vista (x86 または適用可能な場合には x64)。
- HP Client Automation Configuration Server (Configuration Server) への TCP/IP 接続。
- 800 x 600 の最低解像度。
- Windows 2000、Windows Server 2003、Windows XP、Vista の場合、Administrator をインストールするには、コンピュータの管理者権限が必要です。

プラットフォーム サポート

サポートされているプラットフォームの詳細については、本リリースに付属の **HPCA 7.20** リリース ノートを参照してください。

インストール ファイルについて

このセクションでは、インストールで使用するファイルについて説明します。

setup.exe

setup.exe は **Client Automation infrastructure** メディアの **Configuration Server\management_infrastructure\administrator_workstation\win32** フォルダにあります。これは、すべてのコマンドラインパラメータを受け付け、**Windows** インストーラに渡します。

ネットワーク インストール用に **Windows** インストーラの管理インストール ポイント (**AIP: Administrative Installation Point**) を作成することもできます。



Windows インストーラの管理インストール ポイント (AIP) は、管理制御ポイント (ACP : Administrative Control Point) とも呼ばれます。

AIP は、Windows インストーラを起動し、指定したパラメータをインストーラに渡します。指定のターゲット ディレクトリに Windows インストーラの管理インストール ポイント (AIP) を作成するには、次のように入力します。

SETUP.EXE /a TARGETDIR=drive:\targetdirectory /qb

ターゲット ディレクトリには HPCAЕ-ADMIN72.MSI、インストール フォルダ、および setup.exe が格納されます。

HPCAЕ-ADMIN72.MSI

HPCAЕ-ADMIN72.MSI は、インストールのデフォルト設定情報が格納されている MSI データベース ファイルです。このファイルは、**Client Automation infrastructure** メディアの Configuration Server
management_infrastructure\administrator_workstation\win32 フォルダに格納されています。

Administrator のインストール Windows 用

この節では、Administrator for Windows をインストールする方法について説明します。



Configuration Management 4.2i 以上の Administrator は、Configuration Management 4.0 以下のエージェントと互換できません。エージェント オブジェクトは破損したようです。4.2i または 5.0 Administrator を 4.0.x エージェント マシンにインストールすると、CENCODE 変数を LICENSE.EDM オブジェクトに追加します。これは、4.0 エージェントに破損したようなバージョン 4.0 オブジェクトを作成するよう NVDKIT に指示します。4.2i 以上の Administrator と 4.0 以下のエージェントは、同じマシンで共存できません。エージェントと Administrator は、同じレベルである必要があります。4.0 エージェントをもう一度動作させるには、LICENSE.EDM オブジェクトから CENCODE 変数を削除し、マシンから Administrator を削除してください。

インストール ウィザード

Administrator for Windows をインストールするには、インストール ウィザードを使用できます。

インストール ウィザードを使用して Administrator をインストールするには

- 1 インストールメディアの **Administrator** インストール ファイルが格納されているフォルダで、`setup.exe` を実行します。**Administrator** インストール ウィザードが開きます。
- 2 **[次へ]** をクリックします。[エンドユーザー ライセンス契約] ウィンドウが表示されます。
- 3 ライセンス契約を読み、ライセンス契約に同意して、**[次へ]** をクリックします。

Client Automation agent がコンピュータにインストールされていない場合は、[保存先フォルダ] ウィンドウが表示されます。



Client Automation agent が既にコンピュータにインストールされている場合、[保存先フォルダ] ウィンドウが開かず、**Administrator** は **Client Automation agent** と同じ場所にインストールされます。

Administrator の別の保存先を選択する場合は、**[ブラウズ]** をクリックして適切な保存先フォルダを指定し、**[OK]** をクリックして続きます。

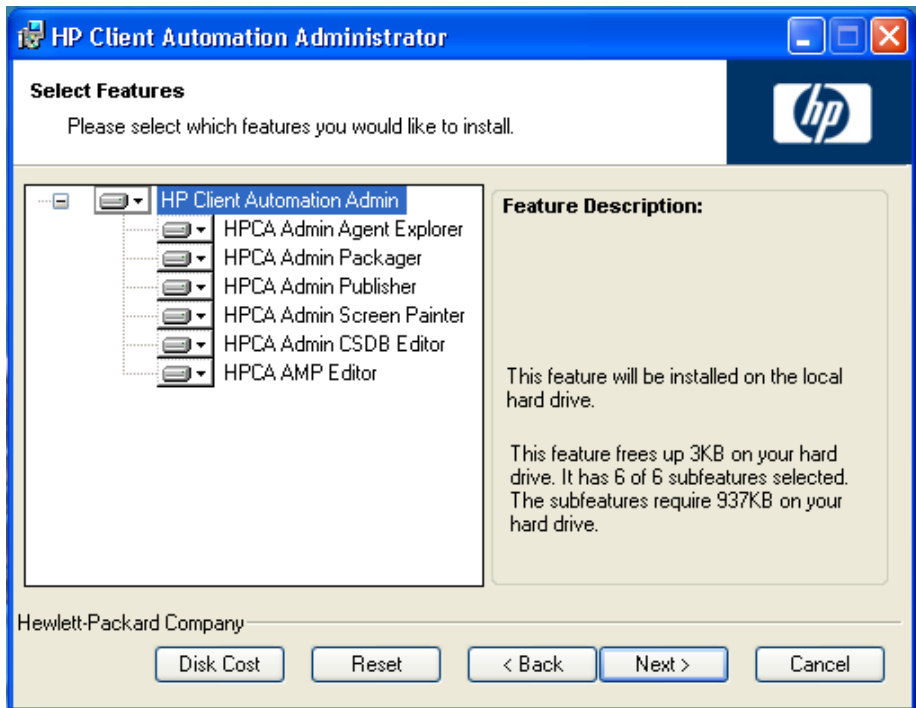
- 4 **[次へ]** をクリックします。[Configuration Server] ウィンドウが表示されます。
- 5 [IP アドレス] テキスト ボックスに **Configuration Server** の IP アドレスを入力します。
- 6 [ポート] ボックスにポート番号を入力します (デフォルトは **3464** です)。
- 7 **[次へ]** をクリックします。[ライセンス] ウィンドウが表示されます。
- 8 有効なライセンス ファイルを入力します (**Starter**、**Standard** または **Enterprise** 版) または移動し、そのファイルを選択します。
- 9 **[次へ]** をクリックします。[機能の選択] ウィンドウが表示されます。


— 手順 8 で説明した **Starter** または **Standard** ライセンス ファイルを入力した場合、いずれを選択したかによって 2 つの機能が得られます。**HPCA Admin Agent Explorer** および **HPCA Admin Publisher**。

— 手順 8 で説明した **Enterprise** ライセンス ファイルを入力した場合、いずれを選択したかによって 6 つの機能が得られます。**HPCA Admin Agent Explorer**、**HPCA Admin Packager**、**HPCA Admin Publisher**、**HPCA Admin Screen Painter**、**HPCA Admin CSDB Editor**、**HPCA AMP Editor**。




手順 8 で説明した **Enterprise** ライセンス ファイルを入力した場合、次のウィンドウが表示されます。



10  をクリックして、インストールする機能を選択します。



すべての機能に同じオプションを設定するには、[HP Client Admin] の隣の  をクリックして適切なオプションを選択し、すべての機能に設定を適用します。



をクリックするたびに、その機能のショートカットメニューが表示されます。

11 ショートカットメニューから、インストール オプションを選択します。これらのオプションの説明は、下記の表 1 を参照してください。

表 1 Administrator の機能の設定

オプション	説明
ローカル ハード ドライブにインストールします	最上位に表示される機能をローカル ハード ドライブにインストールします。ただし、下位機能はインストールしません。

オプション	説明
機能全体をローカル ハード ドライブにインストールします	下位機能も含め、機能全体をインストールします。 注意: このインストール プログラムでは、このオプションまたは [ローカル ハード ドライブにインストールします] オプションをどの機能に対して選択しても、これらの機能には下位機能がないため、インストール結果は同じになります。
機能全体が使用できなくなります	機能はインストールされません。以前にインストールした機能は削除されます。

- 12 インストールに必要なディスク容量を確認するには、**[必要ディスク容量]** をクリックします。
- 13 **[次へ]** をクリックします。[アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウが表示されます。
- 14 **[インストール]** をクリックしてインストールを開始します。インストールが完了すると、**Administrator** には正常にインストールされたことを示すウィンドウが表示されます。
- 15 **[完了]** をクリックしてインストールを終了します。

コマンドラインによるインストール

コマンド ラインを使用して **Administrator** をインストールすることもできます。**Administrator** のインストール ファイルが格納されているディレクトリから、次の構文でコマンドラインを入力します。

```
SETUP.EXE FeatureStateArgument=Feature1,Feature2
```

ここで、*FeatureStateArgument* は、下記の表 2 に示す引数で、*Feature1* と *Feature2* は、表 3 (35 ページ) に示す引数です。

表 2 Administrator の 機能状態引数

指定可能な引数	機能の状態の設定
ADDLOCAL	[ローカル ハード ドライブにインストールします] に設定する機能のカンマ区切りリストを入力します。
ADDSOURCE	[ネットワークから実行する形式でインストールします] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。

指定可能な引数	機能の状態の設定
ADVERTISE	[機能は必要になったときにインストールできます] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。
REMOVE	[機能全体が使用できなくなります] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。 この場合、削除されるのは機能のみであり、—製品全体ではありません。したがって、 REMOVE プロパティを使用して各機能名を入力しても、 Core の製品はコンピュータにインストールされたままとなります。 製品全体を削除するには、「 REMOVE=ALL 」と入力します。

表 3 Admin の機能引数

Admin の機能	機能引数
Agent Explorer	NVDINSTALLCLIENTEXPLORER
Packager	NVDINSTALLPACKAGER
Publisher	NVDINSTALLPUBLISHER
Screen Painter	NVDINSTALLSCREENPAINTER
CSDB Editor	NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER
AMP Editor	NVDINSTALLAMPEDITOR

例

コンピュータに Admin Packager だけをインストールする場合には、以下のコマンドラインを入力します。

SETUP.EXE ADDLOCAL=NVDINSTALLPACKAGER

コンピュータに CSDB Editor と Agent Explorer をインストールする場合には、以下のコマンドラインを入力します。

**SETUP.EXE ADDLOCAL=
NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER,NVDINSTALLCLIENTEXPLORER**



コマンドラインからインストールを実行する場合は、必ず **Configuration Server** の IP アドレスをインストール プログラムに渡してください。次に例を示します。

```
SETUP.EXE NVDOBJZMASTER_ZIPADDR=10.10.10.1
```

追加のコマンドライン引数

下記の表 4 では、コマンドラインでインストール プログラムに渡すことができる追加の引数について説明します。

表 4 コマンドライン引数

引数	説明
/qn	サイレント インストールを実行します。
/qb	インストール時に進行状況バーのみを表示します。
/l*v drive:\install.log	Windows インストーラの詳細なログを作成します。 注意: このオプションを使用すると、インストールのパフォーマンスに影響が生じる可能性があります。
/a TARGETDIR= drive: \targetdirectory	指定のターゲット ディレクトリに Windows インストーラの AIP を作成します。 ターゲット ディレクトリには、HPCAЕ-ADMIN72.MSI インストール フォルダ、および setup.exe が格納されます。 AIP の作成後は、setup.exe を実行して、適切なコマンドライン パラメータを渡すことができます。これにより、 Windows インストーラが起動し、指定したパラメータがインストーラに渡されます。
INSTALLDIR=	使用するインストール ディレクトリを指定します。パスにスペースが含まれる場合は、二重引用符で囲みます。

Administrator のインストールの変更

Windows インストーラのインストール プログラムは、**Administrator** の変更、修復、および削除を行う機能を備えています。

インストール ウィザードを使用して インストールを変更する

この節では、インストール ウィザードを使用して **Administrator** の変更、修復、および削除 (アンインストール) を行う方法について説明します。

▶ **Administrator** の特定の機能を削除するには、[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウの [変更] オプションを使用します。

インストール ウィザードを使用して Administrator インストールを変更するには

- 1 インストールメディアの **Administrator** インストール ファイルが格納されているフォルダで、**setup.exe** を実行します。[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウが表示されます。
- 2 **[変更]**、**[修復]**、または **[削除]** オプションを選択します。
- 3 **[次へ]** をクリックします。
 - **[変更]** を選択すると、[機能の選択] ウィンドウが表示されます。変更する機能を選択して、**[インストール]** をクリックします。機能の設定についての詳細は、[インストール ウィザード \(31 ページ\)](#) を参照してください。
 - **[修復]** を選択すると、[アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウが表示されます。**[インストール]** をクリックします。
 - **[削除]** を選択する場合には、**[削除]** をクリックします。
- 4 **[完了]** をクリックします。

コマンド ラインを使用してインストールを変更する

この節では、コマンド ラインを使用して **Administrator** の変更、修復、および削除 (アンインストール) を行う方法について説明します。

コマンド ラインを使用して Administrator をインストールするには

- インストールメディアの **Administrator** インストール ファイルが格納されているフォルダで、以下のコマンドラインを入力します。

```
SETUP.EXE FeatureStateArgument=Feature1,Feature2
```

ここで、*FeatureStateArgument* は、[表 2 \(34 ページ\)](#) に示す引数で、*Feature1* と *Feature2* は、[表 3 \(35 ページ\)](#) に示す引数です。

例

CSDB Editor および Agent Explorer を削除するには、次のとおり入力します。

```
SETUP.EXE REMOVE=NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER,  
NVDINSTALLCLIENTEXPLORER /qn
```

Packager をローカル ハード ドライブにインストールし、CSDB Editor および Agent Explorer を使用できないようにする場合は、次のコマンド ラインを使用します。

```
SETUP.EXE ADDLOCAL=NVDINSTALLPACKAGER  
REMOVE=NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER,NVDINSTALLCLIENTEXPLORER
```


Agent Explorer

この節では、**Agent Explorer** を使用して **Client Automation** オブジェクトを作成し、編集する方法について説明します。

Agent Explorer は **Administrator** と一緒に自動的にインストールされます。**Agent Explorer** を診断ユーティリティとして使用して、デスクトップ上のローカル オブジェクトを表示できますし、必要であれば、既存のオブジェクトを編集したり、新しいオブジェクトを作成したりすることができます。

環境下で、単一のファイル サーバーに依存している複数の **Client Automation agents** がある場合には、**Agent Explorer** を使用して、ファイル サーバー上に格納されたオブジェクトを編集することができます。

Agent Explorer を使用して、その他の **Client Automation agent** デスクトップ上のオブジェクトを編集することができます。診断目的では、ローカル エリア ネットワーク (LAN) に接続された他の **Client Automation Agent** 用に設定されたオブジェクトを表示し、編集することができます。


 **Client Automation** 画面オブジェクトを **Agent Explorer** で表示することはできますが、実際の画面は表示されません。**Client Automation** 画面は、**Screen Painter** を使用して作成し、編集する必要があります。**Agent Explorer** で表示しているときに、画面オブジェクトの変数を破壊しないように注意してください。

Agent Explorer の開始

次の手順は、**Agent Explorer** を開く、および閉じる方法を説明しています。

Agent Explorer を開くには、

- **[HP Client Automation Administrator]** フォルダの **[Client Automation Administrator Agent Explorer]** をクリックするか、
または
コマンドラインで **NVDOBJED.EXE** と入力します。

Agent Explorer が開き、右側にオブジェクト リストが表示されます。 [図 3 \(40 ページ\)](#) を参照してください。オブジェクト リストには、表示および編集可能な **Client Automation** オブジェクトの名前が含まれます。


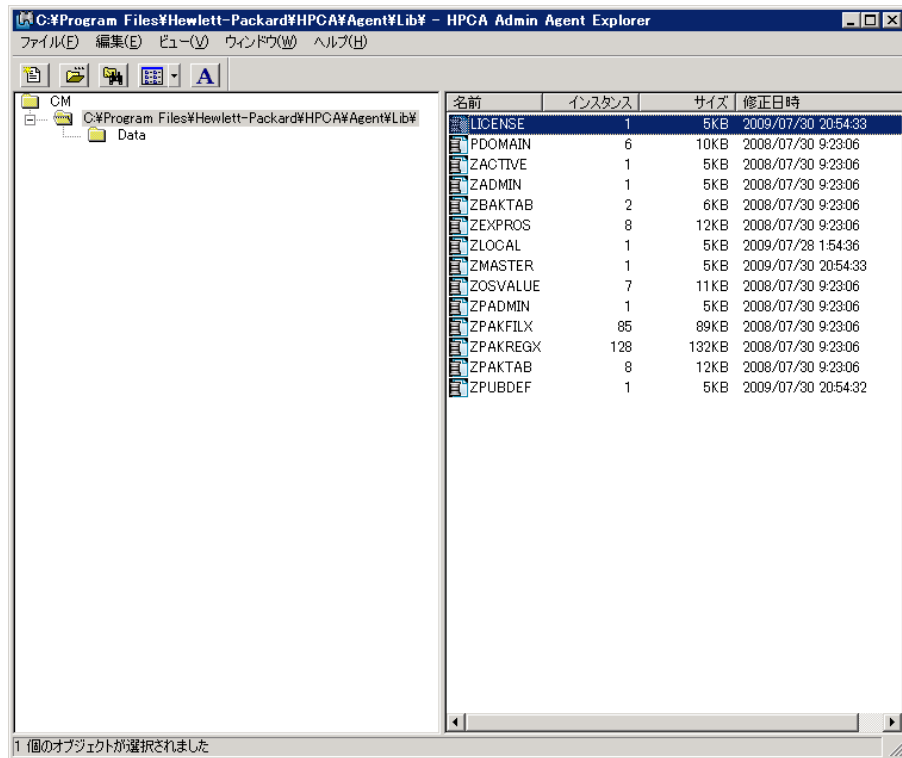
 「Z」で始まるオブジェクトは、**Client Automation** で使用されます。作成するオブジェクトに名前を付けるときには、「Z」から始まる名前をクリックしないよう推奨します。

図 3 Agent Explorer ウィンドウ



Agent Explorer ウィンドウのメニュー

オブジェクトを管理したり、Admin Agent Explorer ウィンドウの外見を管理したりするには、Admin Agent Explorer ウィンドウのメニューを使用します。

[ファイル] メニュー

ファイル メニューを使用して、新しいオブジェクトを開く、コピー、削除、名前変更、および作成します。

表 5 Agent Explorer の [ファイル] メニュー

メニュー オプション	機能
新規作成	[新規作成] をクリックし、新しいオブジェクトの名前を入力して、 [OK] をクリックします。
開く	オブジェクト リストからオブジェクトを選択して、 [開く] をクリックします。オブジェクトの表示ウィンドウが表示されます。
コピー	オブジェクト リストからオブジェクトを選択して、 [コピー] をクリックし、オブジェクトの特性のコピー先となる新規オブジェクトの名前を入力して、 [OK] をクリックします。
名前の変更	オブジェクト リストからオブジェクトを選択し、 [名前の変更] をクリックして、リストの古い名前の部分に新しい名前を入力します。
ディレクトリを変更	[ディレクトリを変更] をクリックし、希望するディレクトリを表示して、 [Enter] を押します。
指定されたディレクトリ	[指定されたディレクトリ] をクリックします。ショートカットメニューから [Admin] 、 [Lib] 、または [System] を選択します。
終了	[終了] をクリックして Agent Explorer を終了します。

[編集] メニュー

オブジェクトを操作するには、[編集] メニューを使用します。

表 6 Agent Explorer の [編集] メニュー

メニュー オプション	機能
すべて選択	カーソルを右ペインにおいて、 [すべて選択] をクリックします。
バイト変換	オブジェクト リストからオブジェクトを選択します。リトル エンディアンとビッグ エンディアンの間で変換するには、 [バイト変換] をクリックします。
オブジェクトの中で検索	[オブジェクトの中で検索] をクリックし、検索基準を入力して、 [検索] をクリックします。返されたオブジェクトのリストから、表示するオブジェクトをクリックすると、オブジェクト表示ウィンドウが開きます。

表示メニュー

Agent Explorer ウィンドウの表示方法をカスタマイズするには、[ビュー] メニューを使用します。

表 7 Agent Explorer の [ビュー] メニュー

メニュー オプション	機能
ツール バー	ウィンドウの上部にツール バーを表示するには、 [ツール バー] をクリックします。
ステータス バー	ウィンドウの下部にステータス バーを表示するには、 [ステータス] をクリックします。
行全体を選択	選択したときに、オブジェクト リストの中のオブジェクト情報の行全体 (インスタンス数、サイズ、最終更新日を含む) を強調表示するには、 [行全体を選択] をクリックします。
グリッド線を表示	オブジェクト リストにグリッド線を表示するには、 [グリッド線を表示] をクリックします。
リフレッシュ	ウィンドウを更新するには、 [リフレッシュ] をクリックします。
オブジェクト オプション	[オブジェクト オプション] をクリックして、以下のいずれか 1 つ、または複数を選択します。 <ul style="list-style-type: none">• ライブ エディタ メモリの代わりにディスクの内容を編集します。• ごみ箱を使用 削除したオブジェクトをゴミ箱に送ります。• Esc でオブジェクトを閉じる Esc を押すと、オブジェクトを閉じます。
ビュー スタイル	[ビュー スタイル] をクリックしてから、オブジェクトをアイコンまたはリストのどちらで表示するかを選択します。
ユーザー定義のディレクトリ	[ユーザー定義のディレクトリ] をクリックし、ロードするパスの名前を入力します。
フォント	[フォント] をクリックして、すべてのウィンドウの表示で使用するフォントを選択します。

[ウィンドウ] メニュー

すべてのオブジェクトを閉じるには、[ウィンドウ] メニューを使用します。

表 8 Agent Explorer の [ウィンドウ] メニュー

メニュー オプション	機能
すべて閉じる	開いているすべてのオブジェクトを閉じるには、 [すべて閉じる] をクリックします。

[ヘルプ] メニュー

[ヘルプ] メニューでは、Agent Explorer について情報を表示し、これを .edm ファイルのデフォルトのエディタとして登録することができます。

表 9 Agent Explorer の [ヘルプ] メニュー

メニュー オプション	機能
デフォルト ビューア ーとして登録	Agent Explorer を .edm ファイルのデフォルトのエディタとして設定します。
Agent Explorer につ いて	バージョンおよび著作権情報を表示します。

オブジェクト表示ウィンドウ

オブジェクト表示ウィンドウには、表示または編集できる Client Automation オブジェクトの内容が表示され、次の 4 つのドロップダウン メニューがあります。[オブジェクト]、[変数]、[インスタンス]、および [オプション]。

オブジェクト メニュー

オブジェクトの管理、表示、および印刷を行うには、[オブジェクト] メニューを使用します。

表 10 [オブジェクト] メニューのオプション

メニュー オプション	機能
情報	[オブジェクトの情報] 画面を表示します。
ソート	マルチヒープ オブジェクトのヒープを、変数の値に基づいてソートします。
ソート順	ソート順として昇順または降順を選択します。
印刷	オブジェクト表示ウィンドウの内容を印刷します。
エクスポート	オブジェクトを .csv ファイルにエクスポートし、オブジェクトファイルと同じ場所に置きます。

メニュー オプション	機能
保存	行った変更を保存します。
閉じる	オブジェクト表示ウィンドウを閉じます。

変数メニュー

[変数] メニューでは、変数の追加、削除、名前変更、およびオブジェクトをその変数の値に基づいてヒープ内で管理し、表示するために使用します。

表 11 【変数】メニューのオプション

メニュー オプション	機能
追加	ユーザー指定名を持つ変数をオブジェクトに追加します。
削除	オブジェクトから変数を削除します。
編集	変数の値を変更します。
すべてを修正	オブジェクト内のすべてのヒープのこの変数の値を変更します。
フィルタ	ユーザー指定文字列を含むすべての変数を表示します。
名前の変更	オブジェクト内の変数の名前を変更します。
行の値を計算	選択した変数に対して、オブジェクト内のすべてのヒープに対するすべての十進数エントリのみを合計します。
検索	ユーザー選択変数に対して、値にユーザー指定文字列を含むヒープを検索します。マルチヒープ オブジェクトでのみ利用可能です。
次へ検索	検索する文字列を入力するために [検索] コマンドを使用した後に、このコマンドはその文字列の次のオカレンスを検索します。
前へ検索	検索する文字列を入力するために [検索] コマンドを使用した後に、このコマンドはその文字列の前のオカレンスを検索します。
置換	変数の値の中の、ユーザーが指定した文字列を検索して、置換します。

[インスタンス] メニュー

オブジェクト内のインスタンスの追加、削除、コピーを行い、オブジェクト内のインスタンスを表示するには、[インスタンス]メニューを使用します。

インスタンスはヒープとも呼ばれます。オブジェクト内の各インスタンスを表示するには、オブジェクト ビュー ウィンドウの一番下にある [>>] または [<<] をクリックします。

表 12 [インスタンス]メニューのオプション

メニュー オプション	機能
追加	空白の値を持つインスタンスを追加します。 [変数] → [編集] と選択して値を入力します。
削除	選択したインスタンスを削除します。[>>] または [<<] をクリックして、削除するインスタンスに移動します。
ヒープを複製	選択したインスタンスのコピーを、値を含めて作成します。[>>] または [<<] をクリックして、複製するインスタンスに移動します。
ヒープのコピー先	選択したインスタンスを [インスタンスのコピー先] ダイアログ ボックスに入力したオブジェクトにコピーします。
移動先	[新しいインスタンスの数] ダイアログ ボックスに入力した番号のインスタンスに移動します。
ホーム	オブジェクトの最初のインスタンスに移動します。
末尾	オブジェクトの最後のインスタンスに移動します。

[オプション] メニュー

オブジェクト表示ウィンドウを管理するには、[オプション]メニューを使用します。

表 13 【オプション】メニューのオプション

メニュー オプション	機能
解決値	<p>名前の付いたオブジェクトと属性を、アンパサンド規則 &(変数) によって、変数で置き換えた結果を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • &(DATE) は、オブジェクトのヒープ内の DATE 変数の内容を表示します。 • &(ZERROR.ZERRDATA) は、現在のディレクトリ内の ZERROR オブジェクトから、ZERRDATA 変数の内容を表示します。
長さを表示	インスタンスの値で許されている文字数を表示します。
ビューを分割	2 つの連続するインスタンスの変数の値を同時に表示します。
ウィンドウの位置を保存	【オプション】メニューで行った、ウィンドウの形式の変更を保存します。
オブジェクトの形式	PC 用にはリトル エンディアン、UNIX および Mac 用にはビッグ エンディアンを選択します。

CSDB Editor から他のデータベースへのリダイレクト

Agent Explorer を使用すれば、CSDB Editor を他のデータベースにリダイレクトすることができます。

CSDB Editor を他のデータベースにリダイレクトするには

- 1 Agent Explorer を開きます。
- 2 ZMASTER オブジェクトを選択し、右クリックして、オブジェクト表示ウィンドウを開きます。
- 3 ZIPADDR の値を、他の Configuration Server が動作しているコンピュータの名前または IP アドレスに変更します。

CSDB Editor は、そのコンピュータに置かれているデータベースにダイレクトされます。

Packager

インストール モニタ モードでパッケージを作成するには、**Packager for Windows** を使用します。

[インストール モニタ モード] では、**Packager** がソフトウェアのインストールの前後にコンピュータをスキャンして、パッケージするものを決定します。インストール前後のスキャンの差分により、インストール後のコンピュータに対する変更が判別されます。これらの差分が、**CSDB** にパブリッシュされるパッケージになります。アプリケーションを構成するコンポーネントの一部が不明な場合は、インストール モニタ モードでパッケージ化することをお勧めします。

パッケージのプロパティの設定

データのパッケージ化を行う前に、**[グローバル デフォルト プロパティ]** ダイアログ ボックスで、パッケージに含めるファイルのデフォルトのプロパティを設定することができます。デフォルトのプロパティに加えた変更は、新規の**Packager** セッションに適用されます。

必要であれば、後ほど、インストール モニタ モードの**[インスタンス プロパティ]** ダイアログ ボックスで、任意のファイルまたはフォルダのプロパティを変更することができます。

CSDB Editor を使用して、ベース インスタンスのデフォルトのプロパティを変更することもできます。または、パッケージを **CSDB** に転送した後で、**FILE**、**REGISTRY**、または **DESKTOP** クラスの個々のインスタンスのプロパティを変更することができます。

[グローバル デフォルト プロパティ] および **[インスタンス プロパティ]** には、**[管理エージェント]**、**[データ オプション]**、および **[エージェントの動作]** という 3 つのタブがあります。

[グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスにアクセスするには

- 1 **[スタート]** → **[プログラム]** → **[HP Client Automation Administrator]** → **[Client Automation Administrator Packager]** へ移動します。
- 2 **[Packager のセキュリティ情報]** ダイアログ ボックスの **[ユーザー ID]** にユーザー ID、**[パスワード]** にパスワードを入力します。



出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更している場合があります。この設定は、**[パスワードの変更]** チェック ボックスをオンにして、**[新しいパスワード]** と **[新しいパスワードの確認]** の両テキストボックスに新しいパスワードを入力して変更することもできます。

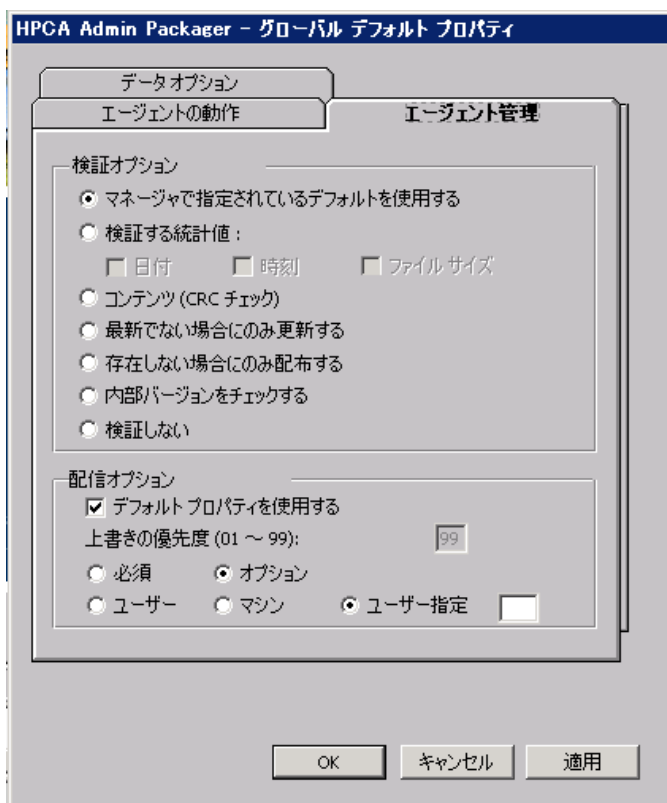
- 3 **[OK]** をクリックします。

- 4 [編集] メニューで、[グローバル デフォルトを変更する] を選択します。
[Packager – グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスには、
[管理エージェント]、[データ オプション]、および [エージェントの動作] と
いう 3 つのタブがあります。

[管理エージェント] タブ

[管理エージェント] タブを使用すると、パッケージ内の選択したファイルまたはフォルダの検証オプションおよび配信オプションが設定できます。このパッケージを CSDB にパブリッシュした後でも、CSDB Editor を使用すればこれらの設定を変更することができます。

- [検証オプション] では、選択したファイルまたはフォルダに対して **Client Automation Agent** が実行する検証アクションを指定します。
- [配信オプション] では、ファイルが配布される順序など、配信に関するオプションを指定します。



検証オプション

- **マネージャで指定されているデフォルトを使用する (デフォルト)**
このオプションを選択すると、そのファイルまたはフォルダの検証オプションが、CSDB データベースの FILE クラスのベース インスタンスから継承されます。

CSDB Editor で、FILE クラスのベース インスタンスの ZRSCVRFY 属性を参照すると、デフォルトの検証オプションが確認できます。
- **検証する統計値**
このオプションを選択すると、エージェントは、自分のコンピュータにあるファイルの統計情報 (日付、時刻、ファイル サイズ) をチェックします。ファイルの統計値がエージェント コンピュータのファイルと異なる場合、CSDB データベース (または Proxy Server) からファイルが配布されます。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。ZRSCVRFY=D、ZRSCVRFY=S、ZRSCVRFY=T、または ZRSCVRFY=Y。
- **コンテンツ (CRC チェック)**
このオプションを選択すると、Client Automation Agent は、エージェント コンピュータにあるファイルの統計値をチェックします。検証する際、ファイルは最初に日付、時刻、およびファイル サイズを基にチェックされます。検証の時間を節約するために、日付、時刻、およびファイル サイズの検証に合格した場合にのみ、CRC がチェックされます。その統計値がエージェント コンピュータの統計値と異なる場合に、Configuration Server (または Proxy Server) はファイルを配布します。このオプションを選択すると、Packager は、CRC を計算し、ZRSCCRC 属性に値を設定します。
- **最新でない場合のみ更新する**
このオプションを選択すると、そのファイルの日付および時刻のタイムスタンプがエージェント コンピュータのものよりも新しい場合に、CSDB (または Proxy Server) からファイルが配布されます。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。ZRSCVRFY=U と設定します。
- **存在しない場合のみ配布する**
このオプションを選択すると、そのファイルは、エージェント コンピュータに存在しない場合にのみ配布されます。エージェント コンピュータにファイルが既に存在する場合は、統計値が CSDB のものと異なっても何も実行されません。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。ZRSCVRFY=E と設定します。
- **内部バージョンをチェックする**
このオプションを選択すると、エージェント コンピュータにファイルが存在する場合はそのファイルのバージョンと配布されるファイルのバージョンが比較されます。これにより、複数のバージョンが存在する場合でも、適切なファイルが更新されます。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。この機能で比較されるファイル タイプは、.DLL, .EXE, .OCX, .SYS, .VBX。

- **検証しない**
このオプションを選択すると、アプリケーションが初めて配布されるときにファイルが配布されます。それ以降は何も実行されません。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCVRFY=N** と設定します。

配信オプション

- **デフォルト プロパティを使用する**
このチェック ボックスをオンにすると、配信の優先度がデフォルトの **50** になります。この優先度の高さによって、配布の順序が決まります。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCPRI=50** と設定します。

- **上書きの優先度 (01 ~ 99)**
1 ~ 99 の値を入力すると、デフォルトの優先度 **50** が上書きされます。最も高い優先度は **1**、最も低い優先度は **99** です。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCPRI=1** と設定します。

以下のオプションは、アプリケーション全体をインストールするのに十分な容量がエージェント コンピュータにない場合にのみ適用されます。

- **必須**
このオプションを選択すると、そのファイルはアプリケーションの必須ファイルになります。
 - アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がエージェント コンピュータにない場合は、**Client Automation** では必須ファイルのみが配布されます。
 - 必須ファイルを格納するのに十分な容量がない場合、アプリケーションは配布されません。

このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCMO=M** と設定します。

- **オプション (デフォルト)**
このオプションを選択すると、ファイルはアプリケーションの必須ファイルではなくなります。
 - アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がエージェント コンピュータにない場合は、**Client Automation** では必須ファイルは配布されません。

このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCMO=O** と設定します。

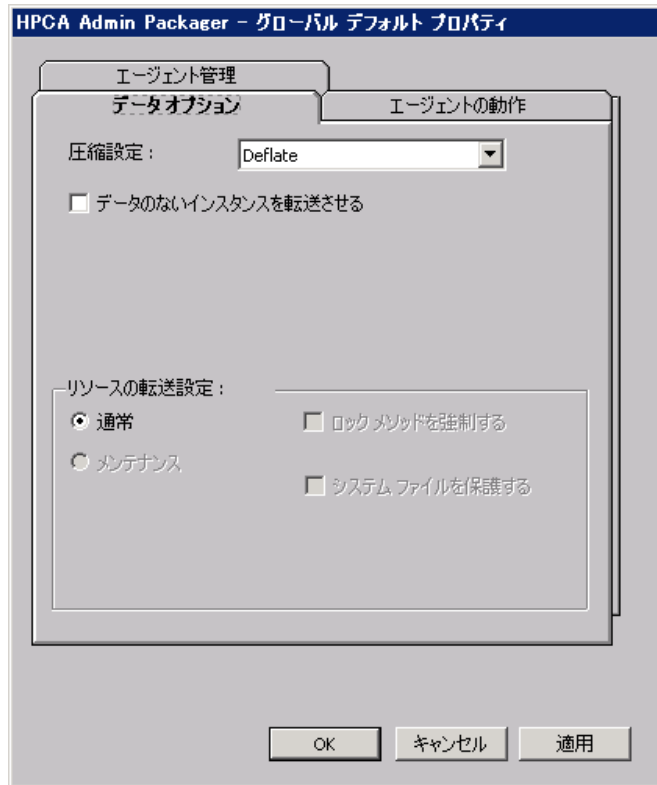
以下のオプションは、**Windows NT 4.0**、**2000**、**Windows Server 2003** など、複数のユーザーのサインオンをサポートしているオペレーティング システムに対してのみ適用されます。

- **ユーザー**
[ユーザー] を選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクリイバにだけファイルが配布されます。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZCONTEXT=U** と設定します。

- マシン
[マシン] を選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。ZCONTEXT=M と設定します。
- ユーザー指定
このオプションは、現時点では利用できません。

[データ オプション] タブ

[データ オプション] タブを使用すると、データ圧縮方法など、配布予定のファイルまたはフォルダに関する詳細が指定できます。



- 圧縮設定
必要に応じて、選択したファイルを CSDB データベースに格納する際の圧縮設定を選択します。ファイルを圧縮すると、データの転送時間が短縮され、格納に必要なディスク容量が軽減されます。
 - [Deflate] を選択すると、最も効率的にファイルが圧縮できます。[Deflate] は、データを圧縮してファイル サイズを小さくします。

— ファイルが既に圧縮されている場合は、**[なし]** を選択します。パッケージ化するアプリケーションに圧縮ファイルが含まれている場合は、**Packager** でファイルをさらに圧縮しないでください。圧縮すると、ファイルのサイズが大きくなる可能性があります。

- **データの無いインスタンスを転送させる**

このチェック ボックスをオンにすると、ファイルがパッケージの一部として **CSDB** データベースに送信されなくなります。ファイルを表すインスタンスのみがパッケージに含まれます。データは、圧縮された状態で、コンピュータの **IDMDATA** 内に保存されたままとなります。IDMDATA のデフォルトロケーションは、`SystemDrive:\Program Files\Hewlett-Packard\CM\Agent\Lib\Data\` です。



NT オペレーティング システムのセキュリティについて詳しい知識を持っていない場合は、このプロパティを使用しないことをお勧めします。

リソースの転送設定

- **普通**

このオプションを選択すると、そのファイルはアプリケーションの一部として配布されます。

- **メンテナンス**

これは旧バージョンの機能で、バージョン **4.0** では使用されていません。

- **ロック ファイル メソッド**

このチェック ボックスをオンにすると、選択したファイルの配布に対して **ロック ファイル メソッド** が強制的に使用されます。**Client Automation** がファイルの新しいコピーを配布する際に、エージェント コンピュータでそのファイルが使用中の場合は、通常、**ロック ファイル メソッド** でファイルが配布されます。必要に応じて、ファイルは解凍され、ローカルのフォルダに格納されます。エージェント接続プロセスが終了すると強制的に再起動され、起動時に適切な場所にファイルが配布されます。

- **システム ファイルを保護する (Windows 2000 および Windows Server 2003 のみ)**

このチェック ボックスをオンにすると、**Windows** のシステム ファイル保護 (**SFP**) が強制されます。最初に、現在の検証オプション (**FILE** クラスにある **ZRSCVRFY** 属性で指定されているオプション) に従ってリソースが検証されます。

— 検証に成功した場合、リソースは要求ステートにあり、これ以上の検証は不要になります。

- 検証に失敗した場合、システム ファイル保護によってファイルが保護されているかどうかチェックされます。保護されている場合、ファイルは配布されません。

最後にこの属性がチェックされ、**SFP** を強制する設定になっているかどうか確認されます。

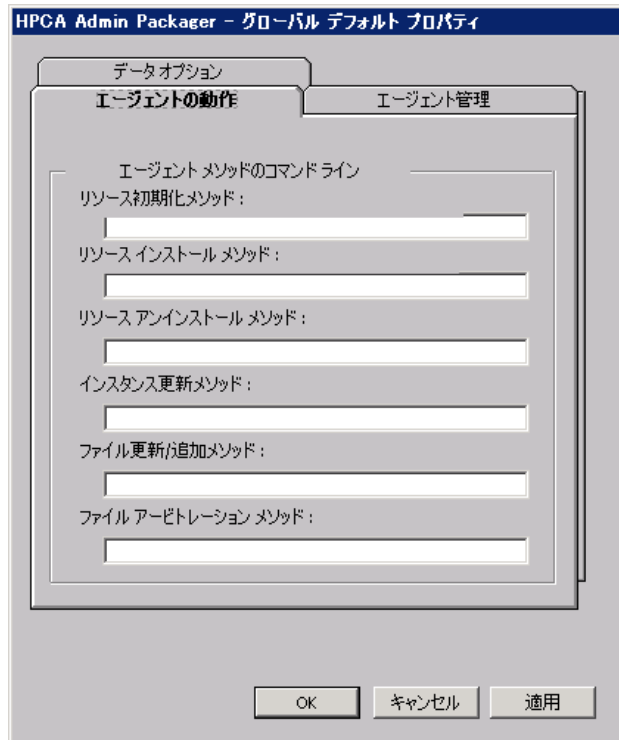
- このチェック ボックスをオンにしている場合、**ZRSCVRFY** 属性は **P** に設定されており、このリソースとサービスの配布は **SFP** 処理が原因で失敗したものと記録されます。
- **SFP** を強制するように設定していない場合、ファイルは検証に成功したものと記録されます。

SFP ファイルに対して行われたアクションを説明するために、**ZERROR** インスタンスが作成されます。

この WinZip の例では、デフォルトのデータ オプションを使用しています。

[エージェントの動作] タブ

[エージェントの動作] タブを使用すると、エージェント コンピュータに対して **Client Automation** が実行するメソッド(プログラム)が指定できます。



このダイアログボックスに入力したコマンドラインは、SOFTWARE ドメインの FILE クラス インスタンスの属性に格納されます。

エージェントメソッドのコマンドライン

- **[リソース初期化メソッド]** (データベース内の属性: ZINIT)
クライアント コンピュータにファイルが格納されたときに実行するメソッドを入力します。
- **リソース インストール メソッド** (データベース内の属性: ZCREATE)
エージェント コンピュータにファイルが格納された後に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、エージェント コンピュータでファイルを使用可能にする処理が要求された場合に使用します。



Vista デバイス上でユーザーの介入が必要なアプリケーションを配布するためには、「runasuser」メソッド修飾子を使用します。パブリッシュ中に、「runasuser」修飾子を リソース インストール メソッド テキスト ボックスに加えます。

次に例を示します。

```
runasuser setup.exe
```

注意: メソッド修飾子「runasuser」は修飾子「hide」と一緒に使用できません。これらは互いに矛盾する修飾子です。

- **[リソース アンインストール メソッド]** (データベース内の属性: ZDELETE)
通常、ソフトウェアへのサブスクリプションがキャンセルされると、ファイルは削除されます。共有 DLL ファイルなど、ソフトウェアのサブスクリプションをキャンセルしたときでもエージェント コンピュータから削除すべきでないファイルの場合は、**[リソース アンインストール メソッド]** に **_NONE_** (アンダースコア付き) と入力する必要があります。
- **インスタンス更新メソッド** (データベース内の属性: ZUPDATE)
ファイルを配布した後に、エージェント コンピュータでインスタンスが変更されたときに実行するメソッドを入力します。
- **ファイル更新/追加メソッド** (データベース内の属性: ZFILEUPD)
新しいファイルが追加されたとき、またはファイルが更新されたときに実行するメソッドを入力します。このメソッドは、エージェント コンピュータにファイルが配布される直前に実行されます。
- **[ファイル アービトレーション メソッド]** (データベース内の属性: ARBITRAT)
ファイルを置き換えようとする場合に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、現在クライアント コンピュータに存在するファイルまたはフォルダのバージョン情報と、置き換えるファイルまたはフォルダのバージョン情報を比較し、どちらを保持するかを判別します。



このフィールドを使用するには、CSDB データベースに ARBITRAT メソッドを追加する必要があります。詳細については、HP ソフトウェア Web サイトにある技術文書『About the File Arbitration Method』を参照してください。

コンポーネント選択モード

Package では今後コンポーネント選択モードをサポートしません。しかし、リンクまたはレジストリ キーをパッケージ化する場合は、Packager のコンポーネント選択モードを使用することができます。Packager のコンポーネント選択モードを使用する場合は、PKGCOMP という ZMASTER 変数を加え、その値を「Y」に設定します。その後、Packager でコンポーネント選択モードを使用することができます。

インストール モニタ モード

インストール モニタ モードでは5つのフェーズを利用してパッケージを作成します。

- 1 アプリケーションのハードウェア、ソフトウェア、およびオペレーティングシステムの要件を**定義**します。
- 2 コンピュータ上のハードウェアおよびソフトウェアを**解析** (スキャン) します。

- 3 パッケージ化するアプリケーションをインストールします。
- 4 コンピュータ上のハードウェアおよびソフトウェアを**解析**（スキャン）します。インストール前とインストール後のスキャンの差分が、インストールしたソフトウェアを表します。
- 5 パッケージを **CM-CSDB** に**パブリッシュ** します。

推奨事項

インストール モニタ モードでは、精度の高いスキャンが実行されます。ここでは、考慮しておくに役立つ細かい点をいくつか挙げておきます。システム管理ソフトウェアを理解しているユーザーであれば、既に認識済みの情報もあるかもしれません。

インストール モニタ モードでアプリケーションをパッケージ化する場合は、以下の点に留意してください。

- **クリーンなコンピュータ**を用意します。
クリーンなコンピュータには、ターゲット オペレーティング システムと同じオペレーティング システムおよび **Administrator** をインストールします。コンピュータの設定を変更しないでください。
- パッケージ化のどの段階でも、ターゲット コンピュータと同じオペレーティング システムと言語バージョンを使用します。



オペレーティング システムの各言語バージョンには、明らかな違いがあります。レジストリ キー名およびディレクトリ ロケーションが違っている場合は、パッケージ担当者が想定している動作と実際の動作の間に大きな差異が生じる可能性があります。

たとえば、フランス語版の **Windows 2000** または **Windows Server 2003** にフランス語版 **Office 2000 for Windows** をインストールする場合は、配布対象と同じフランス語版オペレーティング システムを実行しているコンピュータでアプリケーションをパッケージ化してください。

- **スタティック IP アドレス**を持つコンピュータでパッケージ化します。

パッケージ化を実行するコンピュータがダイナミック ホスト設定プロトコル (**DHCP**) を使用してダイナミック IP アドレスを取得している場合は、コンピュータを再起動するたびに、異なる IP アドレスが適用されます。インストール モニタ モードを使用しているときに、パッケージ化対象のソフトウェアによってコンピュータが再起動されると、レジストリ内の IP アドレスが変更されます。そのため、スタティック IP アドレスを持つコンピュータでパッケージ化することをお勧めします。

- **Visual Basic** アプリケーションをパッケージ化する場合は、**Visual Basic 6** のサポート ファイルを含む **Client Automation** パッケージを作成してください。

Administrator と一緒にインストールする場合、**CSDB Editor** は **Visual Basic 6** アプリケーションなので、以下の **Visual Basic 6** サポート ファイルがインストールされます。

ASYCFILT.DLL	COMCAT.DLL
COMCTL32.OCX	COMDLG32.OCX
MSVBVM60.DLL	OLEAUT32.DLL
OLEPRO32.DLL	STDOLE2.TLB

インストール モニタ モードを使用し、**CSDB Editor** がインストールされているコンピュータで **Visual Basic 5** アプリケーションをパッケージ化する場合、上記のサポート ファイルはパッケージには含まれません。これらのファイルは、インストール前のスキャンを実行する前からコンピュータに存在し、インストール後のスキャンでも、ソフトウェアのインストールでファイルが追加されたと認識されないためです。

必要なサポート ファイルを **Visual Basic** アプリケーションと共に配布する場合は、コンポーネントの選択モードで、**Visual Basic 6** サポートファイルのみを含むパッケージを作成し、**Visual Basic 6** 用にこのパッケージをアプリケーションパッケージにまとめます。

もう 1 つの方法は、**CSDB Editor** がインストールされていないコンピュータで **Visual Basic 6** アプリケーションをパッケージ化することです。**CSDB Editor** を使用せずに **Administrator** をインストールする場合、ドライブに CD-ROM を挿入して、以下のコマンドラインを入力します。

```
CDDrive:\HPCAE-Admin72.msi -ne
```

インストール モニタ モードでパッケージを作成する

ここでは、インストール モニタ モードによるパッケージ化の手順を示し、表示される各画面の詳細を説明します。

Task 1 Packager ヘログオンする

- 1 **[Start] → [Programs] → [HP Client Automation Administrator] → [Client Automation Administrator Packager]**
- 2 **[Packager のセキュリティ情報]** ダイアログ ボックスの **[ユーザー ID]** にユーザー ID、**[パスワード]** にパスワードを入力します。

- ▶ 出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更している場合があります。この設定は、**[パスワードの変更]** チェック ボックスをオンにして、**[新しいパスワード]** と **[新しいパスワードの確認]** の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力して変更することもできます。

3 **[OK]** をクリックします。

Task 2 [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウに必要な情報を指定する

[パッケージ] セッションを開きます] ウィンドウを使用すると、パッケージ化のモードを選択し、パッケージ化セッションを識別するための情報が入力できます。

パッケージ化セッションを完了すると、ソフトウェアまたはデータを配布可能な形式にまとめたパッケージが作成されます。このパッケージを後でサービスに接続することになります。ターゲット サブスクライバにソフトウェアまたはデータを配布するためのポリシーを設定します。

- ▶ パッケージ化セッションを開始する前にグローバル デフォルトを確認してください。**パッケージのプロパティの設定** (47 ページの始め) を参照してください。

- ▶ 旧バージョンの **Packager** では、**Windows** インストーラでインストールまたは管理されるアプリケーションに対してインポート モードが使用できました。これらのアプリケーションのパッケージ化については、『**HP Configuration Management Extensions Windows インストーラ用ユーザー ガイド**』 (**Extensions WI** 用ガイド)を参照してください。これは、個別のライセンスが必要な製品です。

- 1 [セッション タイプ] 領域では **[インストール モニタ モード]** だけが選択可能なオプションです。**Publisher** では、現在、コンポーネントの選択モードのみ使用することができます。**Publisher** (72 ページ) を参照してください。
- 2 [開く対象] 領域で、**[新しいセッション]** を選択して、新しいパッケージ化セッションを開始します。[セッション ID] および [説明] フィールドに入力する必要があります。
または
[セッションを終了しています] を選択して、前回のセッションを再開します。
- 3 [Session ID] フィールドに、このセッションの名前として、1～6 文字の一意の名前を入力します。パッケージ化セッションを完了しなかった場合に、後でこのセッションに戻るには、この ID を覚えておく必要があります。
- 4 [説明] フィールドに、セッションの説明を入力します。
- 5 **[次へ]** をクリックします。[パッケージ プロパティ] ウィンドウが表示されます。

Task 3 パッケージのプロパティの入力

[パッケージ プロパティ] ウィンドウを使用すると、パッケージ名を指定し、パッケージの補足説明となる情報が入力できます。

- 1 [パッケージ名] フィールド にパッケージ名を入力します。これは、**CSDB** データベースで **PACKAGE** クラス インスタンス名となるものです。現在の組織の命名規則に従って命名してください。名前にスペースを入れることはできません。



識別子が一意になるように命名規則を策定できます。**Packager** は、この識別子を基にデータ オブジェクトとファイル名を生成します。



既存のパッケージの名前を入力すると、エラー メッセージが出ます。戻って新しいパッケージに別の名前を入力するか、戻って既存のパッケージを開いてください。

- 2 [ドメイン] フィールドで、インスタンスを格納するドメインを選択します。**CSDB** を固有のドメインでカスタマイズした場合を除いて、通常は **SOFTWARE** ドメインです。

- 3 [説明] フィールドに、パッケージの説明を入力します。

- 4 [リリース] フィールドに、ソフトウェアのリリース番号を入力します。



現在のセッション情報は、お使いのコンピュータの `SystemDrive:\Program Files\Hewlett-Packard\CM\Agent\LIB\ZPAKSESS.EDM` に保存されています。**Agent Explorer** を使用するとこのオブジェクトを表示できます。

現在のパッケージ化セッションを終了し、再開しない場合は、このオブジェクトを削除できます。**CSDB Editor** を使用して、**CSDB** から **PACKAGE** インスタンスを削除します。**SOFTWARE** ドメイン、**PACKAGE** クラス内でオブジェクトを指定してください。

- 5 [次へ] をクリックして [システム コンフィグレーション] ウィンドウに進みます。

Task 4 必須のシステム 設定を設定する

[システム設定] ウィンドウ を使用すると、特定の条件を満たしたコンピュータにのみパッケージを配布できます。配布条件は、コンピュータのオペレーティングシステム、**RAM**、およびプロセッサ速度を基に指定します。

- 1 [ターゲット オペレーティング システム] を指定する場合は、[Operating System] ボックスが使用可能になります。このパッケージに必要な 1 つまたは複数のオペレーティング システムを選択してください。

- 選択するオペレーティング システムが一覧内で連続している場合は、キーボードの **Shift** キーを押しながらクリックします。
- 選択するオペレーティング システムが一覧内で連続していない場合は、キーボードの **Ctrl** キーを押しながらクリックします。

オプションを選択しなかった場合、パッケージはすべてのプラットフォームで利用可能です。

- 2 [必要な最小メモリ サイズ] チェック ボックスをオンにすると、[メモリ サイズ (MB)] ボックスが使用可能になります。このパッケージで最低限必要な RAM サイズを選択してください。

オプションを選択しなかった場合、パッケージは任意のメモリ量のサブスクライバが利用可能です。

- 3 [必要な最低プロセッサ速度] チェック ボックスをオンにすると、[プロセッサ] ボックスが使用可能になります。このパッケージで最低限必要なプロセッサ速度を選択してください。

オプションを選択しなかった場合、パッケージは任意のプロセッサのサブスクライバが利用可能です。

上記の 3 つのオプションのいずれも選択しなかった場合、パッケージは資格のあるすべてのサブスクライバが利用できます。

- 4 **[次へ]** をクリックして [可用部分] ウィンドウに進みます。

Task 5 日付と時刻の制約を設定する

[可用部分] ウィンドウでは、パッケージを配布できる日付または時刻 (あるいはその両方) を指定します。日付と時刻は、**Configuration Server** が動作しているコンピュータのシステム クロックに基づきます。

日付と時刻の制約を指定しなかった場合、パッケージは **CSDB** に転送され、配布の設定が行われると、すぐに利用できます。

- 1 [前] チェック ボックスをオンにすると、指定した日付と時刻より前には配布できなくなります。[月]、[日]、[年]、[時]、および [分] の各テキスト ボックスで日付と時刻を指定します。
- 2 [後] チェック ボックスをオンにすると、指定した日付と時刻より後には配布できなくなります。[月]、[日]、[年]、[時]、および [分] の各テキスト ボックスで日付と時刻を指定します。
- 3 **[次へ]** をクリックして [パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウの [スキャン対象] に進みます。

Task 6 スキャン対象を特定する

[スキャン対象]に進みます。[パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウの [スキャン対象] を使用すると、ソフトウェアによってターゲット コンピュータのどこが変更されたかが特定できます。指定できるオプションは、デスクトップ、レジストリ、またはファイル システムのスキャン、ファイルのコンテンツの比較です。

Packager は、アプリケーションをインストールする前に、選択した領域をスキャンし、各領域の現在の状態を記録する **スナップショット** を作成します。**Packager** は、アプリケーションをインストールした後で、もう一度スナップショットを作成します。この 2 つのスナップショットが比較され、その結果の差分によってパッケージが構成されます。

アプリケーションのインストールによってターゲット コンピュータがどのように変更されるかを把握していない場合は、全領域をスキャンし、アプリケーションによる変更がすべて記録されるようにします。

パッケージ化するソフトウェアに関して認識する情報が増えるほど、パッケージ化および配布は簡単になります。アプリケーションについて認識することで、スキャン時間が節約できるというメリットが生まれます。次に、その例をいくつか示します。

- アプリケーションがレジストリを変更しないことが明らかな場合は、[レジストリ] チェック ボックス をオフにすると、**Packager** はレジストリをスキャンしません。
- **Internet Explorer** に対してお気に入りの一部をパッケージ化する際、お気に入りが個別の .URL ファイルで **Internet Explorer** に格納されていることが明らかな場合は、ファイル システムのみをスキャンすれば、変更内容が取得できます。
- **Netscape Navigator** に対して複数のブックマークをパッケージ化する際、ブックマークが単一の .HTM ファイルで **Netscape Navigator** に格納されていることが明らかな場合は、そのファイルを [スキャンするファイル コンテンツ] ボックスの一覧に追加し、[ファイルのコンテンツを比較する] チェック ボックスをオンにすると、ブックマーク ファイルに対する変更が取得できます。



Client Automation は IDMSYS、IDMLIB、または IDMLOG ディレクトリにあるファイルのパッケージ化はサポートしていません。

- 1 コンピュータのどの領域をスキャンするかを指定するには、以下のチェックボックスの 1 つまたは複数を選択します。
 - ファイル システム
 - デスクトップ (アイコン、ショートカット、グループ)
 - レジストリ
 - ファイルのコンテンツを比較する

- 2 [ファイルのコンテンツを比較する] を選択した場合には、[File Contents to be Scanned] ボックスにファイル名を指定する必要があります。そうするには、[ファイル名] ボックスにファイル名をフルパスで入力するか、[ブラウズ] をクリックして目的のファイルを指定します。[追加] をクリックします。
- 3 [次へ] をクリックします。ステップ 1 でファイル システムのスキャンを選択していた場合には、[スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウが表示されます。そうでなかった場合には、[インストール前] ウィンドウが表示されます(タスク 8 に移動してください)。

Task 7 ファイル システム内のスキャン対象を特定する

[スキャン対象] ウィンドウの [ディレクトリ] を使用すると、スキャンするファイル システムの領域が選択できます。コンピュータに接続されているすべての (ローカルおよびネットワーク) ドライブが **ファイル システム** と見なされます。コンピュータのハードウェアおよびソフトウェアなど、さまざまな要素がシステムのスキャン時間に影響します。



このウィンドウは、[パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウの [スキャン対象] の [ファイル システム] チェック ボックスをオンにした場合のみ表示されます。[スキャン対象] ウィンドウ。

- 1 インストールによって変更されるすべての フォルダまたはドライブを選択します。



ネットワーク ドライブはスキャン しない ことをお勧めします。ネットワークの通信オーバーヘッドが原因で、スキャンに時間がかかる場合があります。また、ネットワーク ドライブのマッピングがユーザーごとに異なる可能性もあります。

- 2 [追加] をクリックして、選択したフォルダまたはドライブを [スキャンするディレクトリ] リストに移動します。
- 3 [次へ] をクリックして [インストール前] ウィンドウに進みます。

Task 8 インストール前のスキャンを開始する



[インストール前] ウィンドウでスキャンを開始します。

- 1 [スキャンを開始] をクリックします。スキャン済みの領域の横には、チェック マークが表示されます。
- 2 スキャンが完了すると、メッセージ ボックスが表示されます。
- 3 [OK] をクリックします。

Task 9 ソフトウェアをインストールする


インストール前のスキャンが完了したら、ソフトウェアをインストールする必要があります。

- 1 [インストール前] ウィンドウの [次へ] をクリックします。メッセージが表示されます。


- 2 **[OK]** をクリックします。Packager が最小化され、システム トレイに Packager のアイコンが表示されます。
- 3 ネイティブ インストールでアプリケーションをインストールします。
 -  アプリケーションのインストール以外の操作を行わないでください。アプリケーションのインストール以外の操作を行った場合は、ファイル システム、レジストリ、デスクトップなどが変更される可能性があります。インストール後のスキャン時に、これらの (無関係な) 変更が検出され、パッケージに含まれてしまいます。
 -  アプリケーションのインストールでコンピュータの再起動が要求された場合、システム トレイ内の **[Packager]** アイコンは、再びログオンしたときに有効になります。
- 4 アプリケーションがインストールされたら、システム トレイ内の Packager アイコンをダブルクリックします。インストールに成功したかどうかを確認するメッセージが表示されます。
- 5 **[はい]** をクリックします。Packager にログオン ウィンドウが表示されます。
- 6 ユーザー ID とパスワードを入力し、**[OK]** をクリックします。[インストール後] ウィンドウが表示されます。

Task 10 インストール後のスキャンを開始する

[インストール後] ウィンドウで最終的なスキャンを開始します。

-  レジストリ スキャンの比較には、時間がかかる場合があります。また、ディスク アクティビティが大幅に制限される可能性もあります。この手順では、進捗状況にまったく変化がないように見える場合もありますが、しばらく待っていると、レジストリ スキャンの比較は正常に完了します。処理時間をできる限り短縮するために、クリーンなコンピュータを使用してください。

インストール後のスキャンを開始するには

- 1 **[スキャンを開始]** をクリックします。スキャンが完了すると、メッセージボックスが表示されます。
- 2 **[OK]** をクリックします。インストール前のスキャンと比較して、異なるアイテムがどのくらい見つかったかを示すリストが表示されます。
 -  インストール前とインストール後のスキャンで差異を検出した後で、Packager は、REGISTRY クラスに 3 つのレジストリ (.EDR) ファイルを作成します。各ファイルは、Configuration Server に転送されます。
- 3 **[次へ]** をクリックして [要約] ウィンドウに進みます。

Task 11 ファイル システムの変更内容を確認する

[要約] ウィンドウで、コンピュータにソフトウェアをインストールしたときに加えられた変更点を確認します。

- 1 **[ファイル]** タブをクリックすると、追加、削除、または更新されたファイルが確認できます。
- 2 **[デスクトップ]** タブをクリックすると、追加、削除、または更新されたプログラム グループ、リンク、またはショートカットが確認できます。
- 3 **[レジストリ]** タブをクリックすると、レジストリで検出された変更内容が確認できます。

[ファイル]、[デスクトップ]、および [レジストリ] タブの詳細については、下記の **ファイルのプロパティとロケーションを表示する** で説明します。

Task 12 ファイルのプロパティとロケーションを表示する


[要約] ウィンドウの [ファイル] タブを使用すると、パッケージに含まれるファイルとフォルダが参照できます。

選択したアイテムを表示するには


- 1 ツリーの最上部の **[選択]** ブランチを右クリックし、**[すべてを展開]** をクリックします。チェック マークは、ファイルのプロパティが指定済みで、**Packager** が転送の準備を完了していることを示します。
- 2 ツリー ビューのアイテムをクリックし、リスト ビューにプロパティを表示します。**[検証]**、**[優先度]**、**[必須/オプション]** など、プロパティの一部は、**[Packager – グローバル デフォルト プロパティ]** ダイアログ ボックス (47 ページの説明を参照) で選択した内容に従ってあらかじめ設定されています。

表示されたファイルとフォルダに対してフィルタを実行するには

パッケージに含まれるアイテム数が多い場合、フィルタを使用すると、ウィンドウに表示するアイテムのタイプが制限できます。

- 1 フィルタ ボタン  をクリックし、ツリー ビュー内のアイテムに対してフィルタを実行します。
- 2 **[フィルタの設定]** ダイアログ ボックスで、アイテムのタイプを「.DLL」などの文字列で入力します。フィルタ条件の文字列を含むアイテムがあると、一致したと見なされます。
- 3 **[OK]** をクリックします。フィルタの条件を満たしたアイテムだけが表示されます。

フィルタを削除するには

- 1 フィルタ ボタン  をクリックし、[フィルタの設定] ダイアログ ボックスを表示します。
- 2 **[クリア]** をクリックします。
- 3 **[OK]** をクリックします。すべてのファイルが表示されます。
- 4 **[次へ]** をクリックして続行します。

Task 13 ファイルのプロパティとロケーションを設定する

[ファイル] タブに表示されているファイルとフォルダのプロパティは変更できます。ファイルまたはフォルダをパッケージから除外することもできます。

ファイルのプロパティを編集するには

- 1 ファイルを右クリックします。以下の 3 つのオプションがあるショートカットメニューが表示されます。
 - プロパティを設定
 - アクティブ
 - 非アクティブ
- 2 このファイルをパッケージから除外するには、**[非アクティブ]** をクリックします。
- 3 このファイルをパッケージに含めるには、**[アクティブ]** をクリックします。これはデフォルトの設定です。
- 4 ファイルのプロパティを変更するには、**[プロパティを設定]** をクリックします。[インスタンス プロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 5 [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスは、**パッケージのプロパティの設定 (47 ページ)** で説明されている方法で使用します。

フォルダのプロパティを編集するには

- 1 フォルダを右クリックします。以下の 3 つのオプションがあるショートカットメニューが表示されます。
 - プロパティを設定
 - アクティブ
 - 非アクティブ
- 2 このフォルダをパッケージから除外するには、**[非アクティブ]** をクリックします。このフォルダ内のすべてのファイルが非アクティブになります。

- 3 このフォルダをパッケージに含めるには、**[アクティブ]** をクリックします。これはデフォルトの設定です。このフォルダ内のすべてのファイルがアクティブになります。
- 4 フォルダのプロパティを変更するには、**[プロパティを設定]** をクリックします。また、**[ディレクトリのみ]** または **[ディレクトリとファイル]** のいずれかをクリックして、ディレクトリのみを変更するか、ディレクトリとファイルの両方を変更するかを指定する必要があります。
- 5 **[ディレクトリとファイル]** を選択します。**[インスタンスのプロパティ]** ダイアログ ボックスが表示されます。

このダイアログ ボックスで、パッケージ内のファイルの属性を変更します。ファイルのプロパティは、**CSDB** データベースの各インスタンスに格納されます。これらのプロパティのデフォルト値は、**[グローバル デフォルト プロパティ]** ダイアログ ボックスで設定します。詳細については、**パッケージのプロパティの設定 (47 ページ)**を参照してください。

Task 14 ファイルを更新する

追加されたファイルに加えて、更新されたファイルが存在する場合があります。

更新されたファイルは、設定ファイルなど、その **ASCII** テキストが変更された制御ファイルです。標準 **ASCII** テキスト ファイルのプロパティを設定する方法については、**ファイルのプロパティとロケーションを設定する (65 ページ)** で説明します。

WIN.INI などの制御ファイルが更新された場合、変更された .INI ファイルで、デスクトップ オブジェクトのファイル名がセクションの名前の前に表示されます。セクション名の下に、各行の変更内容が表示されます。各行は個別に表示されているので、必要に応じて編集できます。

制御ファイル内の行を編集するには

ツリー ビューで、変更する行を右クリックします。

- テキスト ファイルの変更内容をパッケージに含める場合は、**[アクティブ]** をクリックします。
または
- テキスト ファイルの変更内容をパッケージに含めない場合は、**[非アクティブ]** をクリックします。
または
- テキスト ファイルの変更内容を編集する場合は、**[値を上書き]** をクリックします。**[テキストファイルデータの上書き]** ダイアログ ボックスが表示されます。

[値を上書き] 機能を使用するには

- 1 **[値を上書き]** をクリックします。
- 2 **[新しい値]** ボックスに、行の新しい値を入力します。

- 3 **[OK]** をクリックします。

テキスト行を復元するには

- 1 ツリー ビューで、変更する行を右クリックします。
- 2 **[値を上書き]** をクリックします。
- 3 **[リセット]** をクリックします。
- 4 **[OK]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

Task 15 デスクトップのプロパティとロケーションを設定する

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウの [デスクトップ] タブを使用すると、パッケージ内の選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示し、それぞれのプロパティが変更できます。

選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示するには

- **[選択したリンク]** を右クリックし、**[すべてを展開]** をクリックします。

プログラム グループ、リンク、およびショートカットのプロパティを設定するには

- ツリー ビューで、リンクを右クリックします。下に示すオプションのあるショートカット メニューが表示されます。



フォルダまたはリンクを選択すると、ツリー ビューのフォルダ内またはリンク内のすべてのリンクに変更が適用されます。

— ジャスト イン タイム (アプリケーション マネージャのみ)

HPCA Application Manager (App Mgr) を使用すると、アプリケーションがセルフ メンテナンスを実行するように指定できます。セルフ メンテナンスとは、アプリケーションを起動するたびに、**Configuration Server** に自動接続してアプリケーションを検証し、必要に応じて更新または修復することです。

マシン / ユーザー アプリケーションでの [ジャスト イン タイム] を使用した場合、サービスのマシンまたはユーザーの部分のいずれか一方だけを検証または修復することに注意してください。[ジャスト イン タイム] アイコンを **context=M** で使用する場合、**startdir** は **SYSTEM** に設定します。サービスのユーザーの部分は検証/修復されません。[ジャスト イン タイム] アイコンを **context=U** で使用する場合、**startdir** は **\$USER** に設定します。サービスのユーザーの部分だけが検証/修復されます。

— アクティブ

[アクティブ] を選択すると、このリンクまたはフォルダはパッケージに含まれます。

- **非アクティブ**
[非アクティブ] を選択すると、このリンクまたはフォルダはパッケージから除外されます。
- **[プロパティ]**
[プロパティ] をクリックすると、[検証] および [タイプ] サブメニューが表示されます。

[検証] メニュー コマンド

- **完全な検証**
このコマンドを選択すると、リンクは、エージェント コンピュータに既に存在する場合でも、サブスクリバが **CM Configuration Server** に接続するたびに配布されます。これにより、破損したリンクまたは変更されたリンクが修復されます。
- **検証しない**
最初の配布以降、リンクを検証しない場合は、このコマンドを選択します。リンクを変更または削除した場合でも、リンクは修復されません。
- **存在**
このコマンドを選択すると、リンクは最初の配布時に配布されます。それ以降は、接続したときにクライアント コンピュータにリンクが存在しない場合にのみ配布されます。リンクが再配布されるのは、削除された場合のみです。このことから、ユーザーはリンクを変更することができます。

[タイプ] メニュー コマンド

以下のオプションは、Windows 2000、XP、または Windows Server 2003 など、複数のユーザーをサポートしているオペレーティング システムに対してのみ適用されます。

- **ユーザー**
このコマンドを選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクリバにだけリンクが配布されます。
- **マシン**
このコマンドを選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。

Task 16 レジストリのプロパティと値を設定する

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウの [レジストリ] タブを使用すると、アプリケーションが配布される際に変更されたレジストリの内容が確認できます。また、レジストリ キーの値を変更し、配布オプションが設定できます。

選択したレジストリを表示するには

- **[選択したレジストリ キー]** を右クリックし、**[すべてを展開]** をクリックします。

レジストリ キーの値を編集するには

- 1 ツリー ビューでレジストリ キーをクリックします。
- 2 リスト ビューでレジストリ キーをダブルクリックします。
- 3 [新しい値] ボックスでデータを編集します。
- 4 **[OK]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ キーを元の値に戻すには

- 1 リスト ビューでレジストリ キーをダブルクリックします。
- 2 **[リセット]** をクリックします。
- 3 **[OK]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ キーのプロパティを設定するには

- ツリー ビューで、リンクを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。



レジストリ キーを右クリックすると、ツリー ビューのレジストリ キーのすべてのキーに変更が適用されます。

— アクティブ

このコマンドを選択すると、レジストリの変更がパッケージに含まれます。

— 非アクティブ

このコマンドを選択すると、レジストリの変更はパッケージに含まれません。

— プロパティ – 配布 / 検証

— 無条件 / 強制

このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、エージェント コンピュータに既に存在している場合でも配布されます。レジストリ キーを変更する場合、サブスクリイバが次回 **Configuration Server** に接続するときに、パッケージ化された値にリセットされます。この設定は、アプリケーションの動作を保証するために変更してはならないレジストリ キーに使用します。

— [無条件 / 存在] (デフォルト)

このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、最初の配布の時点か、削除されたときに配布されます。ただし、レジストリ キーの値はリセットされません。

- 存在 / 存在

このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、エージェント コンピュータに存在しない 場合にのみ配布されます。この機能では、レジストリ キーを変更してもかまいません。レジストリ キーは削除された場合にのみ再配布されるので、変更内容は上書きされません。

Task 17 パッケージのパブリッシュ

ここで、CSDB のパッケージのためのインスタンスを作成する必要があります。

- すべてのファイルのプロパティとロケーションを設定したら、**[次へ]** をクリックします。**Packager** は、パブリッシュされるオブジェクトを作成します。これは、CSDB にパブリッシュされるパッケージです。



パッケージをパブリッシュさせると、セッションのオブジェクトは削除されるので、セッションを再開することはできません。後で再びセッションを開く場合に備えて、セッションを保存した方が良いケースもあります。たとえば、パッケージの配布をテストしているときに問題が見つかり、パッケージを修正しなければならない場合、次の方法でセッションを保存します。

LIB ディレクトリ (およびそのサブディレクトリ) を `SystemDrive:\Program Files\Hewlett-Packard\CM\Agent\LIB` からバックアップ先にコピーします。LIB ディレクトリには、パッケージ化セッション中に **Packager** によって構築されたオブジェクトが含まれています。

LIB ディレクトリを保存すると、パッケージを転送させた後でも、LIB ディレクトリが復元できます。**Packager** ウィンドウで設定を変更すれば、パッケージを再びパブリッシュさせることができます。ツールバー ボタンをクリックすると、**Packager** の各ウィンドウに直接ジャンプできます。

以上の方法を用いれば、転送後のパッケージの配布をテストしているときに問題が見つかっていても修復することができます。



選択内容を変更する場合は、目的の設定ウィンドウが表示されるまで **[前へ]** をクリックします。パッケージの設定を変更したら、**[次へ]** をクリックしてこのウィンドウに戻ります。

ツールバーのボタンをクリックして、前の画面に戻ることもできます。

転送させるファイルを表示するには

- **[転送させるファイル]** を右クリックし、**[すべてを展開]** をクリックします。

パッケージをパブリッシュするには

- 1 **[転送させるファイル]** を右クリックし、**[すべてを展開]** をクリックして、転送させるファイルを表示します。

- 2 **【転送】** をクリックします。
- 3 パッケージが正常に転送されたことを示すメッセージが表示されたら **【OK】** をクリックします。
- 4 **【完了】** をクリックして **Packager** を終了します。
- 5 **Packager** の終了を確認するメッセージが表示されたら **【はい】** をクリックします。

次に、**CSDB Editor** を使用して、サービスを作成します。詳細については、[新規アプリケーション ウィザードでサービスを作成する \(170 ページ\)](#) を参照してください。

Publisher

Administrator Publisher (Publisher) は、Client Automation が管理しやすい形式でデータをパッケージ化し、CSDB にパブリッシュするツールです。

▶ Vista への配布を目的とするアプリケーションをパブリッシュするとき、システム アカウントでインストールを選択した場合には、ターゲットの Vista マシン上でユーザーの操作を必要とせずに配布できるようになっていることを確認してください。

概要

Publisher は、4 種類のパブリッシュ方法をサポートしています。下記の表 14 では、パブリッシュのタイプと、タイプごとの参照箇所を示しています。本書では、コンポーネントの選択と Windows インストーラ ファイルの 2 種類についてのみ、説明します。

表 14 Publisher でパブリッシュできるファイルのタイプ

パブリッシュのタイプ	参照先
コンポーネントの選択	コンポーネントの選択モードでのパブリッシュ (73 ページ)
ハードウェア設定	HP Client Automation OS Manager ハードウェア設定ガイド
OS イメージ	HP Client Automation OS Manager システム管理者ガイド
Windows インストーラ ファイル	Windows インストーラ ファイルをパブリッシュする (88 ページ)

バッチ モード

Publisher では、バッチ モードでファイルがパブリッシュできます。これにより、1 つの設定ファイルを使用して、1 回のパブリッシュ セッション中に、複数の .msi ファイルを CSDB にパブリッシュすることができます。詳細については、複数の .msi ファイルをパブリッシュする (バッチ モード) (103 ページ) を参照してください。

標準的なパブリッシュのステップ

まず、Publisher を開始してログオンする必要があります。

Publisher を起動するには

- 1 **Publisher** をインストールしたデバイスで、**[スタート]** メニューを使用して、以下のように移動します。

[スタート] → **[すべてのプログラム]** → **[HP Client Automation Administrator]** → **[HP Client Automation Administrator Publisher]**

- 2 **Publisher** にログオンするには、**Administrator** のパスワードを使用します。デフォルトでは、ユーザー名は **rad_mast** で、パスワードは **secret** です。

本書で扱うパブリッシュ モード、つまりコンポーネントの選択と **Windows** インストーラは、どちらも以下の 4 つの基本的なタスクから構成されます。

タスク 1 - [選択] ウィンドウ—パッケージ化するファイルを選択します。

タスク 2 - [編集] ウィンドウ—ファイルのプロパティを編集します。

タスク 3 - [コンフィギュレーション] ウィンドウ—パッケージおよびサービス情報を入力します。

タスク 4 - [パブリッシュ] ウィンドウ—パッケージを **CSDB** にパブリッシュします。

コンポーネントの選択モードでのパブリッシュ

Publisher の 5.1 リリースには、新しい機能が含まれています。コンポーネント選択モードパブリッシュのこのモードは、このリリースの前には **Packager** で利用できたものです。現在、**Packager** では利用できず、**Publisher** でのみ利用できます。

コンポーネントの選択モードでパブリッシュするには

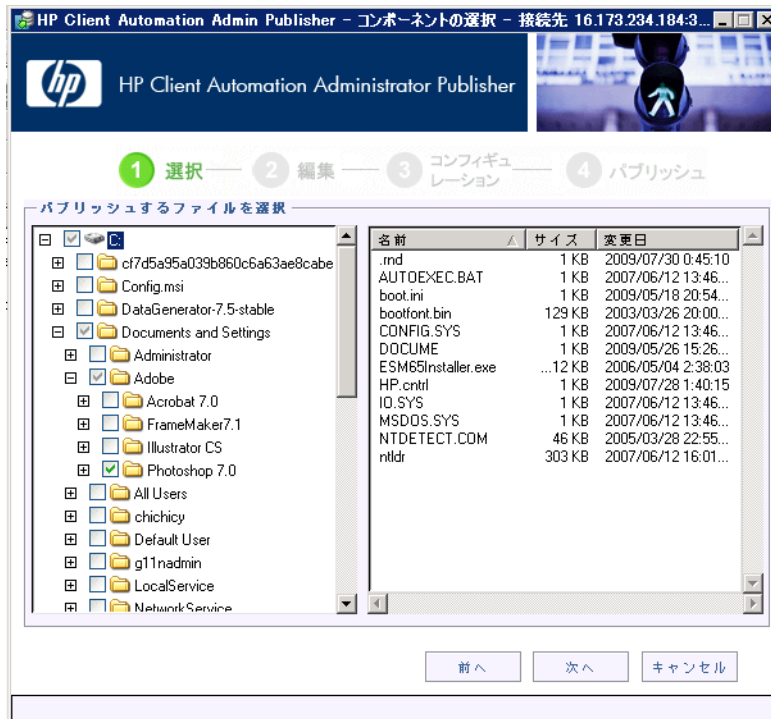
- 1 **Publisher** を起動します。[パブリッシュ オプション] ウィンドウが表示されます。



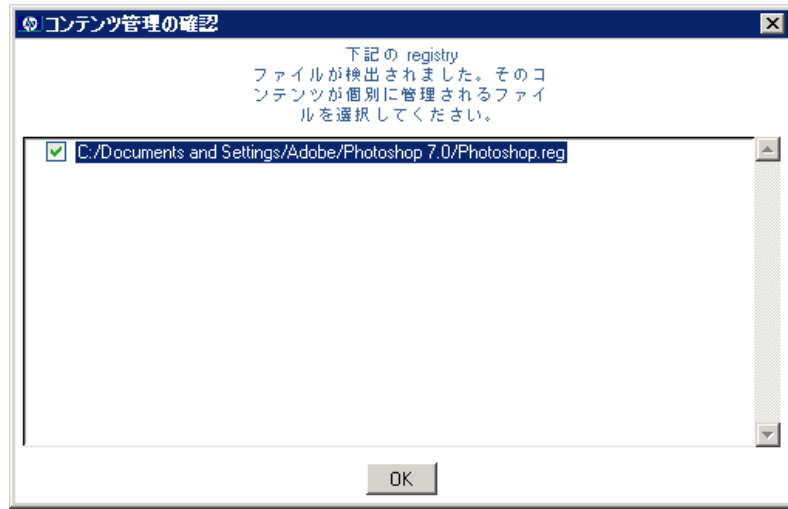
- 2 [パブリッシュ オプション] ウィンドウでは、
 - シン クライアントにパブリッシュする場合は、**[シン クライアントのパブリッシュ]**を選択します。
 - ドロップダウン リストから **[コンポーネントの選択]** を選択します。
- 3 **[OK]** をクリックします。[選択] ウィンドウが開きます。

Task 1 パブリッシュするファイルを選択する

[選択] ウィンドウでパッケージに含めるファイル、フォルダ、レジストリ キー、アイコン、リンクを選択します。



- 1 ファイル システム (左パネル) を移動して、パッケージに含めるすべてのアイテムを選択します。
- 2 **[次へ]** をクリックします。
 - 1 つまたは複数のレジストリ ファイルを選択した場合は、[コンテンツ管理の確認] ダイアログ ボックスが表示されます。コンテンツを個別に管理するレジストリ ファイルを選択し、**[OK]** をクリックします。



- 1 つまたは複数のリンク ファイルを選択した場合は、[コンテンツ管理の確認] ダイアログ ボックスが表示されます。コンテンツを個別に管理するリンク ファイルを選択し、**[OK]**をクリックします。

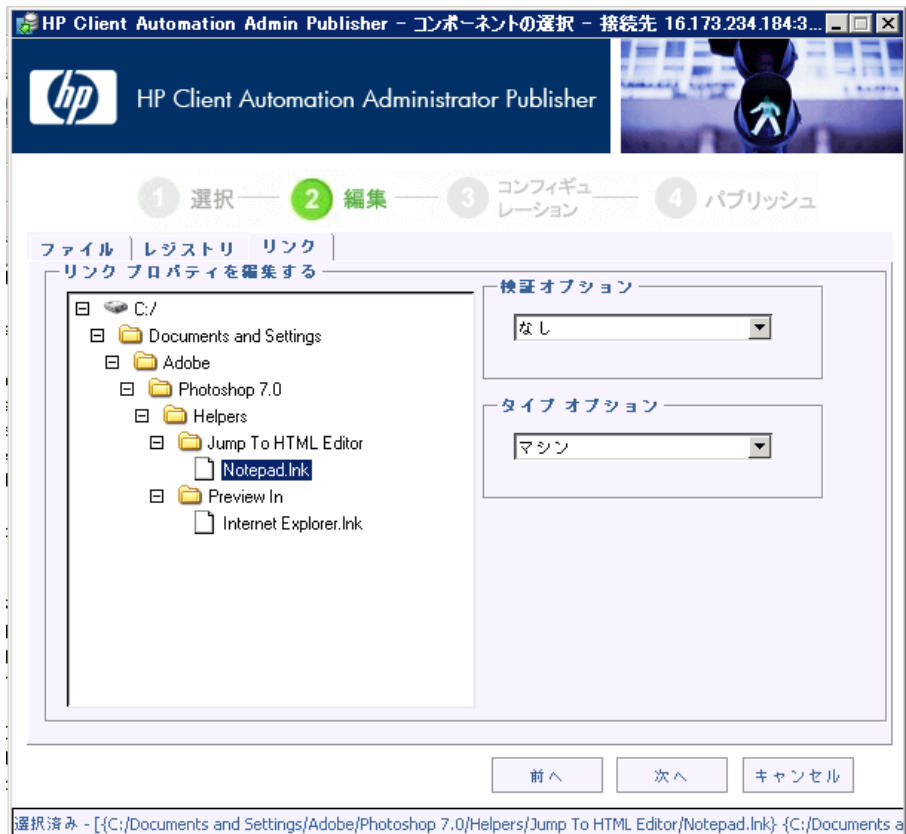
[編集] ウィンドウが表示されます(タスク 2 プロパティおよびメソッドを編集する.に進みます)

Task 2 プロパティおよびメソッドを編集する

[編集] ウィンドウでプロパティとメソッドを編集します。

ファイルおよびフォルダのプロパティを編集する

- 1 [ファイル] タブを選択します。
- 2 パッケージに含まれるすべてのファイルとフォルダは、左パネルに一覧表示されます。



- 3 編集するプロパティのファイルまたはフォルダを選択します。
- 4 **[プロパティ]** タブをクリックして、ファイルやフォルダの検証および配信オプションを編集します。

検証オプション

— [サーバー上のデフォルトを使用] (デフォルト)

このオプションを選択すると、CSDB データベースにある **FILE**、**REGISTRY**、**DESKTOP** クラスのベース インスタンスから検証オプションを継承します。

— ファイルの統計値

このオプションを選択すると、Client Automation エージェントは、自分のコンピュータにあるファイルの統計情報 (日付、時刻、ファイル サイズ) をチェックします。[検証オプション] ドロップリストの下のチェックボックスで、[日付]、[時刻]、[サイズ] を選択してください。コンピュータ上のファイルやフォルダの統計値がデータベースのファイルやフォルダの統計値と異なる場合、CSDB データベースからファイルやディレクトリが配布されます。このオプションを設定するには、CSDB Editor

を使用します。ZRSCVRFY=D、ZRSCVRFY=S、ZRSCVRFY=T、または ZRSCVRFY=Y。

— **CRC を使用したコンテンツのチェック**

このオプションを選択すると、HPCA Application Manager は、エージェント コンピュータにあるファイルの統計値をチェックします。検証する際、ファイルは最初に日付、時刻、およびファイル サイズを基にチェックされます。検証の時間を節約するために、日付、時刻、およびファイル サイズの検証に合格した場合にのみ、CRC がチェックされます。その統計値がエージェント コンピュータの統計値と異なる場合に、Configuration Server (または Proxy Server) はファイルを配布します。このオプションを選択すると、Publisher は、CRC を計算し、ZRSCCRC 属性に値を設定します。ZRSCVRFY は Y に設定されます。



コンテンツの CRC チェックは時間のかかるプロセスなので、控えめに使用してください。

— **最新でない場合に更新する**

このオプションを選択すると、そのファイルの日付および時刻のタイムスタンプがエージェント コンピュータのものよりも新しい場合に、CSDB (または CM Proxy Server) からファイルが配布されます。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。ZRSCVRFY=U と設定します。

— **存在のみ**

このオプションを選択すると、そのファイルは、エージェント コンピュータに存在しない場合にのみ配布されます。エージェント コンピュータにファイルが既に存在する場合は、統計値が CSDB のものと異なっても何も実行されません。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。ZRSCVRFY=E と設定します。

— **なし**

このオプションを選択すると、アプリケーションが初めて配布されるときにファイルが配布されます。それ以降は何も実行されません。このオプションを設定するには、CSDB Editor を使用します。ZRSCVRFY=N と設定します。

配信オプション

以下のオプションは、アプリケーション全体をインストールするのに十分な容量がサブスクリバのコンピュータにない場合にのみ適用されます。アプリケーションに対し、[必須] または [オプション] を選択してください。

— **必須**

このオプションを選択すると、これらのファイルやフォルダはアプリケーションの必須ファイルになります。アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がエージェント コンピュータにない場合は、必須ファイルのみが配布されます。必須ファイルを格納するのに十分な容量がない

場合、アプリケーションは配布されません。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCMO=M** と設定します。

— **[オプション] (デフォルト)**

このオプションを選択すると、ファイルまたはフォルダはアプリケーションに必須ではなくなります。アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合は、オプション ファイルは配布されません。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCMO=O** と設定します。

— **デフォルト プロパティを使用する**

このチェック ボックスをオンにすると、配信の優先度がデフォルトの **50** になります。配布は、優先度が高いものから低いものという順でおこなわれます。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCPRI=50** と設定します。

このチェック ボックスをオフにした場合、**1 ~ 99** の値を入力でき、デフォルトの優先度 **50** が上書きされます。最も高い優先度は **1**、最も低い優先度は **99** です。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZRSCPRI=1** と設定します。

- 5 ファイルのプロパティの編集を終えたら、**[メソッド]** タブをクリックしてメソッドを編集します。**[メソッド]** タブのダイアログ ボックスに入力したコマンドラインは、**SOFTWARE** ドメインの **FILE** クラス インスタンスの属性に格納されます。

— **[リソース初期化メソッド] (データベース内の属性: ZINIT)**

エージェント コンピュータにファイルまたはフォルダが格納されたときに実行するメソッドを入力します。

— **[リソース インストール メソッド] (データベース内の変数: ZCREATE)**

エージェント コンピュータにファイルが格納された後に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、エージェント コンピュータでファイルを使用可能にする処理が要求された場合に使用します。



Vista デバイス上でユーザーの介入が必要なアプリケーションを配布するためには、「**runasuser**」メソッド修飾子を使用します。パブリッシュ中に、「**runasuser**」修飾子を リソース インストール メソッド テキスト ボックスに加えます。

次に例を示します。

```
runasuser setup.exe
```

注意: メソッド修飾子「**runasuser**」は修飾子「**hide**」と一緒に使用できません。これらは互いに矛盾する修飾子です。

- **[リソース アンインストール メソッド]** (データベース内の変数: **ZDELETE**)
通常、ソフトウェアへのサブスクリプションがキャンセルされると、ファイルは削除されます。共有オブジェクト ファイルなど、ソフトウェアのサブスクリプションをキャンセルしたときでもエージェント コンピュータから削除すべきでないファイルの場合は、[リソース アンインストール メソッド] に「**_NONE_**」(アンダースコア付き) と入力する必要があります。
- **[インスタンス更新メソッド]** (データベース内の変数: **ZUPDATE**)
ファイルを配布した後に、エージェント コンピュータでインスタンスが変更されたときに実行するメソッドを入力します。
- **[ファイル更新/追加メソッド]** (データベース内の変数: **ZFILEUPD**)
新しいファイルが追加されたとき、またはファイルが更新されたときに実行するメソッドを入力します。このメソッドは、エージェント コンピュータにファイルが配布される直前に実行されます。
- **[ファイルアービトレーションメソッド]** (データベース内の変数: **ARBITRAT**)
ファイルまたはフォルダを置き換えようとする場合に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、現在クライアント コンピュータに存在するファイルまたはフォルダのバージョン情報と、置き換えるファイルまたはフォルダのバージョン情報を比較し、どちらを保持するかを判別します。



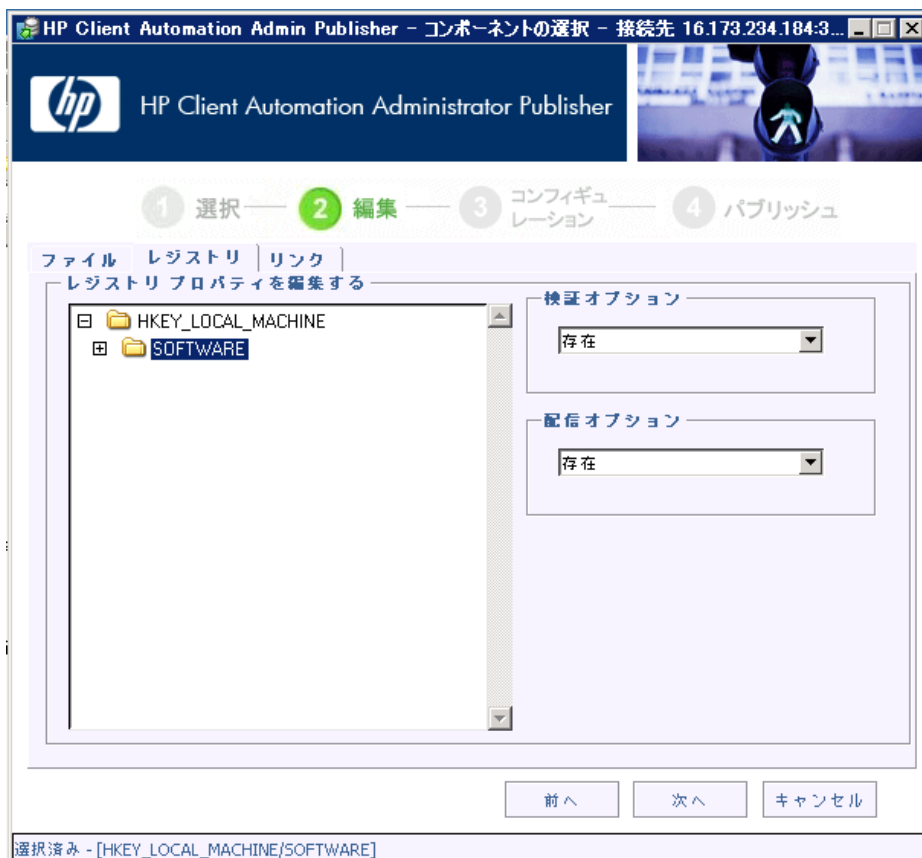
このフィールドを使用するには、**CSDB** データベースに **ARBITRAT** メソッドを追加する必要があります。詳細については、HP ソフトウェア Web サイトにある技術文書『**About the File Arbitration Method**』を参照してください。

- 6 ファイルとメソッドのプロパティの編集を終えたら、**[次へ]** をクリックして、[コンフィギュレーション] ウィンドウに移動します (パッケージおよびサービス情報を入力する (83 ページ) に移動します)。

レジストリ ファイル プロパティを編集します

このウィンドウでは、選択したレジストリ キーの検証オプションおよび配信オプションを編集することができます。

- 1 [レジストリ] タブを選択します。パッケージに含まれるすべてのレジストリ キーは左パネルに一覧表示されます。



- 2 編集するプロパティのレジストリ キーを選択します。
- 3 検証オプションおよび配信オプション ボックスでは、以下の組み合わせの検証オプションおよび配信オプションから選択します。

— **無条件 / 存在**

このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、エージェント コンピュータに既に存在している場合でも配布されます。レジストリ キーを変更する場合、サブスクリバが次回 **Configuration Server** に接続するときに、パッケージ化された値にリセットされます。この設定は、アプリケーションの動作を保証するために変更してはならないレジストリ キーに使用します。

— **無条件 / 存在**

このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、最初の配布の時点か、削除されたときに配布されます。ただし、レジストリ キーの値はリセットされません。

— 存在 / 存在

このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、エージェント コンピュータに存在しない 場合にのみ配布されます。この機能では、レジストリ キーを変更してもかまいません。レジストリ キーは削除された場合にのみ再配布されるので、変更内容は上書きされません。



[存在の値を配信する] と組み合わせて [強制の値を検証する] を選択しないことも可能です。この組み合わせは有効なものではありません。このような選択を行う場合は、値を [強制の値を検証する] および [無条件の値を配信する] に復帰させます。

リンク プロパティを編集します

- 1 リンク タブを選択します。
- 2 パッケージに含まれるすべてのリンクは、左パネルに一覧表示されます。



- 3 編集するプロパティのリンクを選択します。
- 4 検証オプション ボックスでは、ドロップダウン リストから **[完全]**、**[なし]** または **[存在]** を選択します。
 - **完全**

このコマンドを選択すると、リンクは、エージェント コンピュータに既に存在する場合でも、サブスクリバが **Configuration Server** に接続するたびに配布されます。これにより、破損したリンクまたは変更されたリンクが修復されます。
 - **なし**

最初の配布以降、リンクを検証しない場合は、このコマンドを選択します。リンクを変更または削除した場合でも、リンクは修復されません。
 - **Exist**

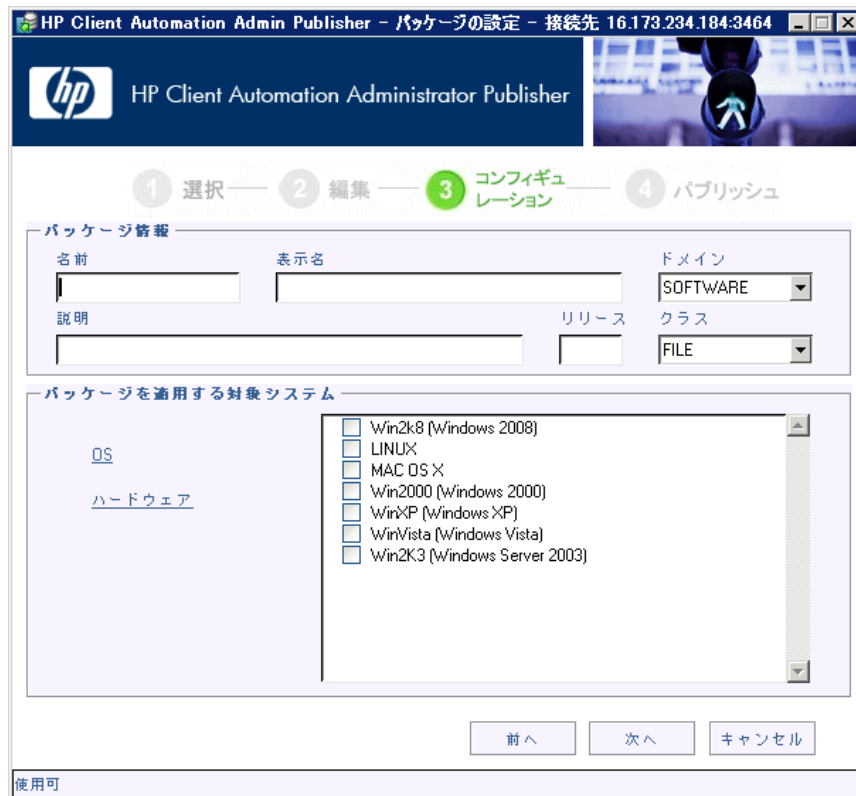
このコマンドを選択すると、リンクは最初の配布に配布されます。それ以降は、接続したときにエージェント コンピュータに存在 しない 場合にのみ配布されます。リンクが再配布されるのは、削除された場合のみです。このことから、ユーザーはリンクを変更することができます。
- 5 [配信オプション] ボックスでは、ドロップダウン リストから **[ユーザー]** または **[マシン]** を選択します。
 - **ユーザー**

このオプションを選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているエージェントにだけファイルが配布されます。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。
 - **マシン**

[マシン コンポーネント] を選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。このオプションを設定するには、**CSDB Editor** を使用します。:
- 6 ファイルとメソッドのプロパティの編集を終えたら、**[次へ]** をクリックして、[コンフィギュレーション] ウィンドウに移動します (下記の **パッケージおよびサービス情報**を入力するに移動します)。

Task 3 パッケージおよびサービス情報を入力する

パッケージとサービスについての情報は、[コンフィギュレーション] ウィンドウで入力します。パッケージに名前を付けて、説明となる付加的な情報を含め、そしてハードウェアおよびオペレーティング システムの設定に基づくパッケージ配布の制限を設定してください。また、サービスについての説明となる情報、および配布後にどのように管理するかについての情報も入力します。



1 [パッケージ情報] 領域で、以下の情報を入力します。

- a [名前] フィールドにパッケージ名を入力します。これは、CSDB データベースで **PACKAGE** クラス インスタンス名となるものです。現在の組織の命名規則に従って命名してください。名前にスペースを入れることはできません。



識別子が一意になるように命名規則を策定できます。**Publisher** は、この識別子を基にデータ オブジェクトとファイル名を生成します。詳細については、付録 **B** (ページ **命名規則**) を参照してください。

- b [表示名] フィールドに、パッケージの表示名を入力します。これは、**CSDB Editor** で使用されている簡略名です。
- c [ドメイン] ドロップダウン リストで、インスタンスを格納するドメインを選択します。**CSDB** を固有のドメインでカスタマイズした場合を除いて、通常は **SOFTWARE** ドメインです。出荷時のデフォルトのドメインは、**ADMIN**、**AUDIT**、**CLIENT**、**PATCH**、**POLICY**、**PRDMAINT**、**SOFTWARE**、および **SYSTEM** です。

- d [説明] フィールドに、パッケージの説明を入力します。
 - e [リリース] フィールドに、ソフトウェアのリリース番号を入力します。
 - f [クラス] ドロップダウン リストで、インスタンスを格納するクラスを選択します。
- 2 [パッケージを適用する対象システム] 領域で、以下の情報を入力します。どのオプションも選択しなかった場合、パッケージは資格のあるすべてのサブスクライバが利用できます。
- a **オペレーティング システム**
このパッケージを適用するオペレーティング システムを選択してください。
 - b **ハードウェア**
最小 RAM またはプロセッサ速度に基づいて配布を制限するには、適切な設定オプションの隣にあるチェック ボックスをオンにし、テキストボックスに必要な最小値を入力します。
- 3 [次へ] をクリックして [サービス情報] ウィンドウに進みます。

HP Client Automation Admin Publisher - サービスの設定 - 接続先 16.173.234.184:3464

HP Client Automation Administrator Publisher

1 選択 — 2 編集 — 3 **コンフィギュレーション** — 4 パブリッシュ

サービス情報

新規作成 既存のサービスを使用 サービスなし

名前 表示名

ベンダー Web URL

説明 作成者

割り当てのタイプ

必須 オプション

管理のタイプ

自動 手動


イベントについてのレポート

<input type="checkbox"/> ベース インスタンスを使用する		
インストール	<input checked="" type="checkbox"/> 成功	<input checked="" type="checkbox"/> 失敗
削除	<input checked="" type="checkbox"/> 成功	<input checked="" type="checkbox"/> 失敗
更新	<input checked="" type="checkbox"/> 成功	<input checked="" type="checkbox"/> 失敗
検証	<input type="checkbox"/> 成功	<input checked="" type="checkbox"/> 失敗
修復	<input type="checkbox"/> 成功	<input checked="" type="checkbox"/> 失敗


前へ 次へ キャンセル

使用可

- 4 新しいサービスを作成する ([新規作成])、既存のサービスを使用する ([既存のサービスを使用])、現時点ではサービスを作成しない ([サービスなし])、のいずれかを選択します。

 1つのパッケージの作成のみ行う場合は、**[サービスなし]** をクリックします。サービスが 1 つあり、複数のパッケージを作成して後から **CSDB Editor** を使ってそのサービスにそれらのパッケージを接続する場合などに便利です。

- 5 [名前]、[表示名]、[ベンダー]、[Web URL]、[説明]、および [作成者] を入力します。

 既存のサービスを使用する場合には、サービス名を正しく入力したことを確認してください。

- 6 [割り当てのタイプ] セクションで、サービスが [必須] か、或いは [オプション] かを選択します。デフォルトは **[必須]** です。これはサービスをすべての有効なサブスクリバに配布します。オプション サービスは **HPCA Application Self-service Manager** を使用している場合のみ指定可能です。

- 7 [管理のタイプ] セクションで、配布後のアプリケーションの管理方法を指定します。

管理のタイプと割り当てのタイプは、**ZSVCMO** サービスの属性値に対応しています。各タイプの選択内容に応じて、このフィールドには 2 つの値が格納できます。下の表に、設定可能な属性値を示します。

表 15 ZSVCMO 変数

割り当てのタイプ	管理のタイプ	ZSVCMO 値	説明
必須	自動	M	サービスはすべてのサブスクリバに配布され、 Client Automation によって管理されます。
必須	手動	MO	サービスはすべてのサブスクリバに配布されます。 Client Automation は配布後のサービスを管理しません。
オプション	自動	OM	サービスは設定されたサブスクリバのみに配布されます。サービスは Client Automation によって管理されます。

割り当てのタイプ	管理のタイプ	ZSVCMO 値	説明
オプション	Manual	0	サービスは設定されたサブスクライバのみに配布されます。 Client Automation は配布後のサービスを管理しません。

- 8 [イベントについてのレポート] セクションで、記録を残すイベントの横にある各チェック ボックスをオンにします。ベース インスタンスで利用可能なデフォルトのアプリケーション レポート イベントを使用する場合には、**[ベース インスタンスを使用する]** を選択します。
- 9 **[次へ]** をクリックして、[パブリッシュ] ウィンドウを開きます。

Task 4 パッケージのパブリッシュ

[パブリッシュ] ウィンドウでは、パッケージおよびサービス情報を表示して、それをパブリッシュします。



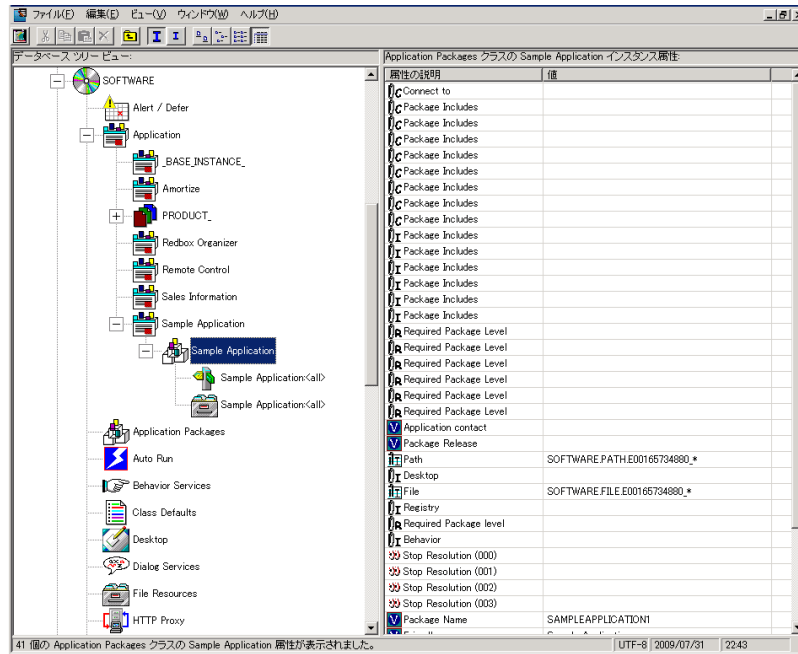
選択内容を変更する場合は、目的の設定ウィンドウが表示されるまで **[前へ]** をクリックします。パッケージの設定を変更したら、**[次へ]** をクリックしてこのウィンドウに戻ります。

ツールバーのボタンをクリックして、前の画面に戻ることもできます。

パッケージをパブリッシュするには

- 1 **[パブリッシュ]** をクリックします。パッケージはデータベースにパブリッシュされます。
 - 2 ウィンドウの下部のステータス バーに「プロセスは正常に完了しました」というメッセージが表示されたら、**[完了]** をクリックします。
 - 3 確認するメッセージが表示されたら、**[はい]** をクリックして、終了します。
- CSDB Editor で、パブリッシュされたサービスを確認できます。

図 4 サンプル アプリケーション



Windows インストーラ ファイルをパブリッシュする

Windows インストーラは、MSI ファイルを使用してオペレーティング システムにソフトウェア パッケージを配布します。Publisher では、この MSI ファイルを使ってパッケージおよびサービスを作成し、CSDB にパブリッシュします。CSDB にパブリッシュした後、ソフトウェア パッケージを環境へ配布する準備が整いました。

VMware ThinApp 分離アプリケーション

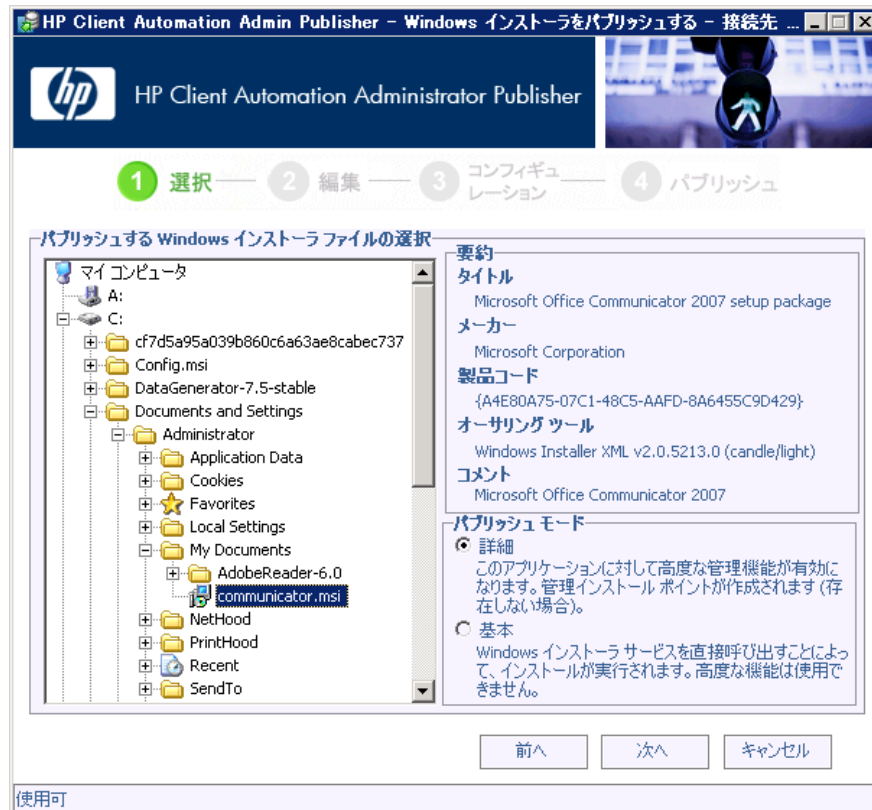
Administrator Publisher は更新され、MSI にパッケージ化された VMware ThinApp 分離アプリケーションの存在を認識しています。検出された場合、詳細パブリッシュ モード ([詳細] パブリッシュ モード (91 ページ)参照してください) が無効になり、関連するサービスは VMware ThinApp に含まれているかどうかを確認します。管理者は VMware AppSync 機能を使用して、ThinApp の自動更新をするかどうかを尋ねられます。選択した場合、このオプションは今後処理を行う関連サービス内にも表示されます。この変更は仮想アプリケーションと統合させる最初の段階であり、この領域で今後改善する際に活用します。

Windows インストーラ ファイルをパブリッシュするには

- 1 Publisher を起動します。
- 2 パブリッシュするデータのタイプ ドロップダウンリストから **[Windows インストーラ]** をクリックします。
- 3 **[OK]** をクリックします。[選択] ウィンドウが開きます。

Task 1 パブリッシュするファイルを選択する

[選択] ウィンドウでパッケージに含めるすべてのファイルを選択します。



- 1 左パネルで、パブリッシュする Windows インストーラ ファイルを選択します。右パネルには、選択した .msi ファイルで使用可能な情報が表示されます。
- 2 [パブリッシュ モード] セクションで、**[基本]** または **[詳細]** のいずれかをクリックします。
- 3 **[次へ]** をクリックして [編集] ウィンドウに進みます。

Task 2 ファイルのプロパティおよびメソッドを編集する

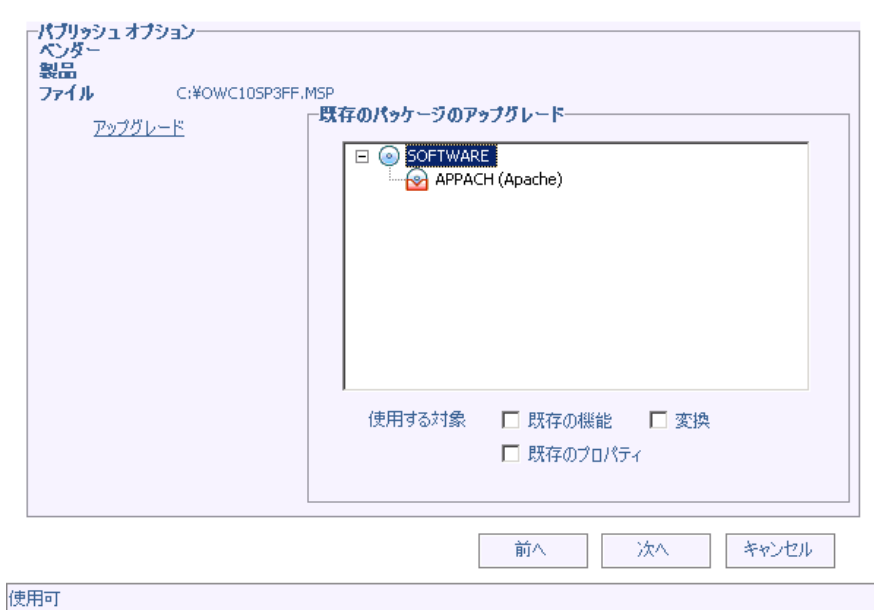
このタスクは、以下のうちのどれを選択するかによって異なります。

- タスク 1、ステップ 1 で **Microsoft** パッチ ファイル (.msp) を選択した場合には、下記の **MSP ファイル** を使用してに進みます。
- タスク 1、ステップ 2 で [詳細] パブリッシュ モードを選択した場合には、[詳細] **パブリッシュ モード (91 ページ)** に進みます。
- タスク 1、ステップ 2 で [基本] パブリッシュ モードを選択した場合には、**基本パブリッシュ モード (98 ページ)** に進みます。

MSP ファイルを使用して既存のパッケージをアップグレードする

Microsoft パッチ ファイル (.msp) をパブリッシュするように選択した場合、[編集] ウィンドウには [アップグレード] というオプションだけが表示されます。アップグレード[既存のパッケージのアップグレード] ウィンドウには、選択したファイルでアップグレードできる、**CSDB** 内の利用可能なすべてのパッケージが表示されます。

- 1 [既存のパッケージのアップグレード] ウィンドウで、アップグレードする、対応するパッケージを選択します。



- 2 既存のパッケージの機能、プロパティまたは変換を使用するには、ウィンドウの下部にある [使用する対象] セクションの対応するチェック ボックスをオンにします。

別の **Windows** インストーラ ファイルを使用して既存のパッケージをアップグレードすることもできます。このタイプのファイル (.msi) をパブリッシュする場合には、[\[詳細\] パブリッシュモード](#)に **[アップグレード]** オプションが表示されません。詳細については、下記の [\[詳細\] パブリッシュ モード](#)を参照してください。



Publisher は、アップグレード用の新しいパッケージを作成します。作成した新しいアップグレード パッケージを **CSDB** にパブリッシュしたら、**CSDB Editor** を使用して、そのパッケージを既存のパッケージに接続します。

[\[詳細\] パブリッシュ モード](#)

[\[詳細\] パブリッシュ モード](#)では、パッケージの作成で使用する多くのパブリッシュ オプションを編集することができます。

[\[詳細\] パブリッシュ モードでパブリッシュを行うには](#)

- 1 [\[管理インストール ポイント\] \(AIP\)](#) ウィンドウが開いていない場合には、左側の **[管理インストール ポイント]** オプションをクリックします。[\[管理インストール ポイント\] \(AIP\)](#) ウィンドウが表示されます。



Windows インストーラ AIP の作成

以前は、Windows インストーラのパブリッシュ プロセスでは、パブリッシュ プロセスの外部で AIP を手動で作成する必要がありました。Publisher 4.0 から、これは必要なくなりました。今は、変更を加えていないオリジナルの状態の .msi ファイルを用意すれば、Publisher は自動的に、短いファイル名の形式で AIP を作成します。

2 このウィンドウで、以下の項目を選択して、AIP を作成します。

表 16 AIP を作成する

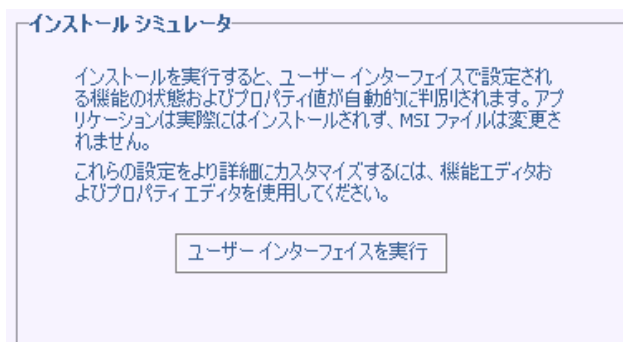
AIP を使用してパブリッシュ	AIP を使用してパブリッシュを行う場合には、このチェック ボックスをオンにします。
AIP のロケーション	入力するか、 [ブラウズ] をクリックして、AIP の場所を指定します。
ユーザー インターフェイスを実行	パッケージのインストール後に、詳細なユーザー インターフェイスと基本のユーザー インターフェースのどちらを実行するかを選択します。

AIP を使用してパブリッシュ	AIP を使用してパブリッシュを行う場合には、このチェック ボックスをオンにします。
パブリッシュ完了時に AIP を削除	パッケージが CSDB にパブリッシュされた後で AIP を削除する場合には、オンにします。
AIP パッケージをサービスに接続	AIP パッケージを関連するサービスに接続する場合には、オンにします。
MSI リダイレクト用にローカルの AIP サポートを使用	インストール時に、 Client Automation の詳細なデータ管理およびキャッシングをサポートする一時的なローカル AIP を作成する場合には、オンにします。この機能は、本来 HTTP ベースの MSI インストールをサポートしていないインストールの場合に使用してください。オンにして、長いファイル名を使用する場合には、[長いファイル名を使用] チェックボックスをオンにします。
AIP 作成用のオプションの引数	AIP 作成時に含める付加的な引数があれば、入力します。

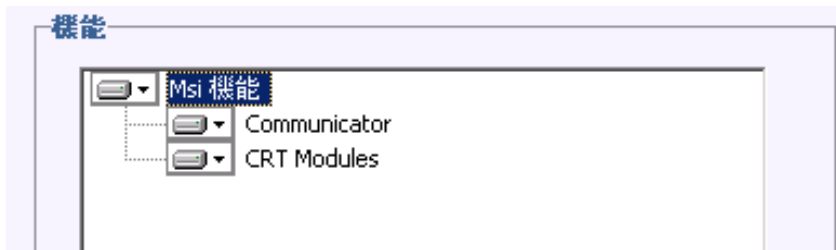


AIP パッケージをサービスに接続するには、**[AIP パッケージをサービスに接続]** チェック ボックスをオンにします。このチェックボックスをオンにすると、AIP パッケージがサービスに接続され、その **ZSTOP000** は **1** に設定されます。この結果、AIP パッケージはデスクトップに配布されませんが、**Proxy Server** の稼動中、サービスへの接続が保証されます。

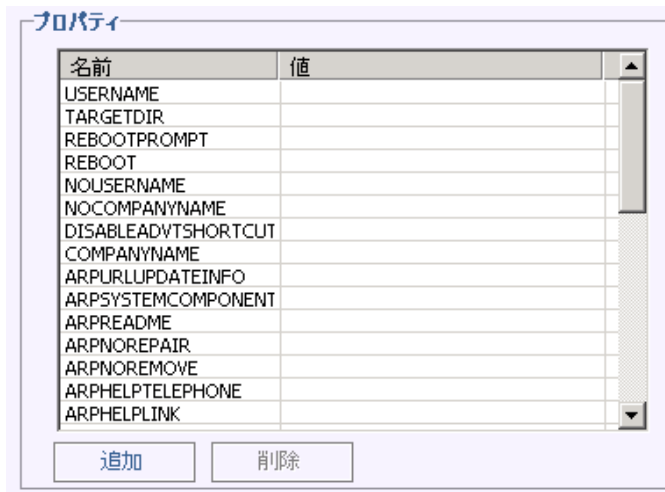
- 3 まず **[インストール シミュレータ]** を、それから **[ユーザー インターフェイスを実行]** をクリックします。これによりインストールがシミュレートされますが、ソフトウェアは実際にはインストールされません。



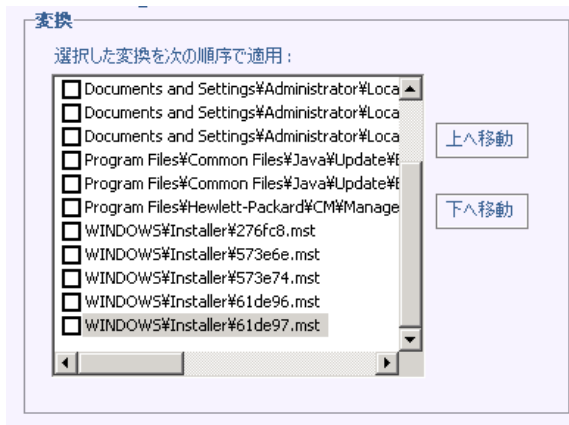
- 4 **[機能]** をクリックします。[機能] ウィンドウが表示されます。このウィンドウでは、利用可能な **MSI** 機能を設定します。



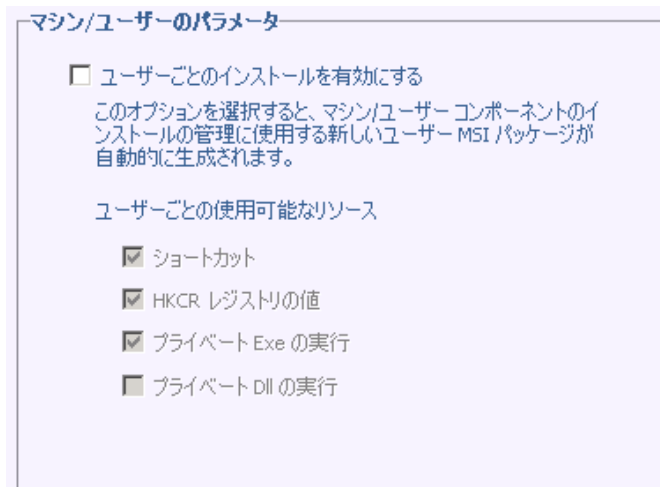
- 5 それぞれの機能を右クリックし、非表示にするか、または無効にするかを選択します。
- 6 **[プロパティ]** をクリックします。



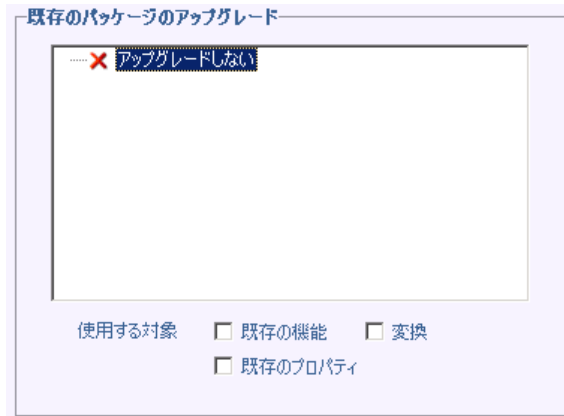
- 7 [プロパティ] ウィンドウで、msi ファイルのプロパティを確認し、変更します。**Windows** インストーラ ファイルには、正しく配布するために追加のコマンド ライン パラメータが必要な場合があります。たとえば、アプリケーションはインストール中にシリアル番号を渡すカスタムのプロパティを必要とすることがあります。付加的なパラメータを含めるには、[プロパティ] ウィンドウを使用します。
 - 新しいプロパティを追加するには **[追加]** をクリックします。
 - 既存のプロパティを削除するには **[削除]** をクリックします。
 - プロパティの **[名前]** または **[値]** を変更するには、変更するアイテムをクリックして新しい値を入力します。
- 8 **[変換]** をクリックします。このウィンドウでは、**Windows** インストーラ ファイルに関連付けられた変換ファイルの適用を再設定します。



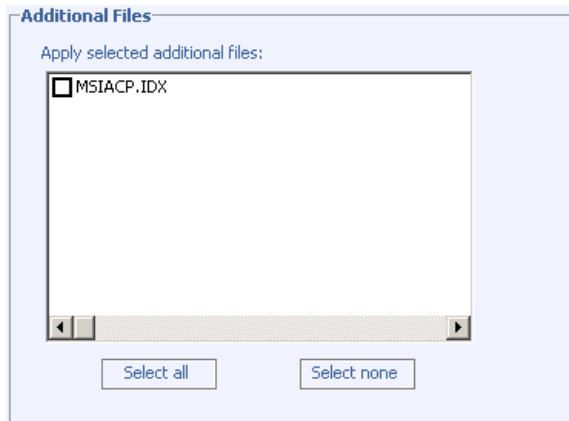
- 9 **[マシン / ユーザー]** をクリックします。このウィンドウでは、マシン / ユーザーのパラメータを定義します。



- **[ユーザーごとのインストールを有効にする]** – マシン/ユーザー コンポーネントのインストールを管理するために使用する、新しいユーザー MSI パッケージを自動的に生成する場合には、このチェック ボックスをオンにします。
 - **[ユーザーごとの使用可能なリソース]** – ユーザー単位でどのリソースを利用可能にするかを選択します。
- 10 **[アップグレード]** をクリックします。このウィンドウには、現在の Windows インストーラ パッチ (.MSP) を使用してアップグレード可能な、CSDB 内にある既存の MSI パッケージを表示します。適切なチェック ボックスをクリックして、使用する既存の機能プロパティまたは変換を選択します。



- 11 **[追加のファイル]** をクリックします。AIP の一部として含める追加のファイルがあれば、選択します。



- 12 **[動作]** をクリックします。このウィンドウには、ローカル MSI ファイルキャッシュの使用、ローカルな修復の有効化、インターネット キャッシュの保存、MSI 機能の制御、およびサルベージ ステータスの決定のためのオプションが含まれています。

動作

MSI ファイル用にローカル キャッシュを使用

キャッシュのロケーション ディスクに占める割合

ローカルでの修復を使用

インターネット キャッシュを保存

復旧

管理対象アプリケーション

非管理対象アプリケーション

ユーザーが MSI 機能を管理

- **[MSI ファイル用にローカル キャッシュを使用]** – キャッシュの場所をサイズを決める場合には、オンにします。キャッシュの場所を [キャッシュのロケーション] テキスト ボックスに入力し、[ディスクに占める割合] テキスト ボックスに使用するディスク スペースの割合の上限値を入力します。

[MSI ファイル用にローカル キャッシュを使用] をオンにすると、アプリケーションのインストール中、指定した場所にキャッシュ ディレクトリが作成されます。ターゲット マシンでのディスク使用状況がキャッシュの割合の限界を超えると、キャッシュ機能は自動的にオフになります。

- **[ローカルでの修復を使用]** – ローカルな修復を有効にする場合は、オンにします。このオプションをオンにすると、ローカルのエージェント コンピュータに MSI キャッシュが保持されるので、データが失われた、または必要になった場合、CSDB に要求する代わりに、修復をローカルに行うことが可能になります。
- **[インターネット キャッシュを使用]**– HTTP インストールの後にインターネット キャッシュを消去しないようにする場合には、オンにします。
- **[復旧]** – ターゲット コンピュータの既存のファイルを利用することを可能にします。パッケージをインストールするときに、パッケージの一部が見つかった場合には、重複するデータを CSDB に要求する代わりに、既存のファイルを使用します。HPCA が管理する、および管理しないアプリケーションで [復旧] を有効にするオプションがあります。適切なチェック ボックス ([管理対象アプリケーション]、[非管理対象アプリケーション]) をオンにして、どのタイプのアプリケーションでこの機能を有効にするかを選択してください。両方のタイプのアプリケーションを選択することができます。

- **[ユーザーが MSI 機能を管理]** — インストール中にどの MSI 機能をインストールするかをエンド ユーザーが制御できるようにする場合に、オンにします。このオプションをオンにすると、アプリケーションのインストール時に機能エディタが表示されます。

13 **[次へ]** をクリックして **[コンフィギュレーション]** ウィンドウに進みます。

基本パブリッシュ モード

基本パブリッシュモードには 4 つのオプションがあります。これらは **[パブリッシュ オプション]** ウィンドウで利用できます。

[基本] パブリッシュ モードでパブリッシュを行うには

- 1 **[選択]** ウィンドウでパブリッシュ モードを選択したら、**[次へ]** をクリックします。**[編集]** ウィンドウが表示されます。このウィンドウには 4 つのオプションがあります。任意のリンクをクリックして、基本パブリッシュ モードのオプションを設定します。



- **管理オプション**

適用する管理オプションを選択します。選択した管理オプションに従って、配布後のアプリケーションの実行方法が定義されます。

- setup を使用
- msiexec を使用
- コマンドライン

— 変換

Windows インストーラ ファイルに関連付けられた変換ファイルの適用を再設定します。

— 追加のファイル

利用可能な追加ファイルを適用します。

— アップグレード

現在の Windows インストーラ パッケージを使用してアップグレード可能な、CSDB 内にある既存の MSI パッケージを表示します。適切なチェック ボックスをクリックして、使用する既存の機能プロパティまたは変換を選択します。

- 2 パブリッシュ オプションの編集を終えたら、**[次へ]** クリックして、[コンフィギュレーション] ウィンドウに移動します。

Task 3 パッケージおよびサービス情報を入力する

パッケージとサービスについての情報は、[コンフィギュレーション] ウィンドウで入力します。これらのウィンドウの詳細については、[パッケージおよびサービス情報を入力する \(83 ページ\)](#) を参照してください。

- 1 [パッケージ情報] セクションで、パッケージ情報を入力します。
- 2 [パッケージを適用する対象システム] セクションを使用して、パッケージを特定のオペレーティング システムまたはハードウェアに限定します。いずれかのリンクをクリックして、設定可能なオプションを表示します。
- 3 **[次へ]** をクリックします。[サービス情報] ウィンドウが表示されます。
- 4 このウィンドウでサービス情報を入力します。
- 5 **[次へ]** をクリックして [パブリッシュ] ウィンドウに進みます。

Task 4 パッケージのパブリッシュ

- 1 [要約] セクションで、以前の手順で設定したパッケージおよびサービスの情報を確認します。情報を確認したら、**[パブリッシュ]** をクリックします。
- 2 パブリッシュ プロセスが完了したら、**[完了]** をクリックして **Publisher** を終了します。オペレーティング システムのパッケージまたはサービスを表示するには、**CSDB Editor** を使用します。

これで、サービスを配布する準備が整いました。

コマンドラインによるパブリッシュ

Publisher では、非グラフィカルのパブリッシュ モードもサポートされています。**Publisher** のユーザー インターフェイスによるパブリッシュ時に入力する値の代わりに、設定ファイルで事前定義した値を使用します。設定ファイルを使用すると、パッケージやサービスの値を事前に定義して、テキスト ファイルに保存しておくことができます。その後、コマンドラインで **Publisher** に `-cfg` パラメータを付け、パブリッシュ セッション中に使用する設定ファイルを指定して実行します。

`test.cfg` という設定ファイルを使用して **Publisher** を実行するコマンドラインの例を次に示します。

```
nvdtk.exe pubport.tkd -cfg "c:\program files\test.cfg" -user  
USER -password PASSWORD
```



設定ファイルを指定する時は、フルパスのファイル名を使用してください。

下記の表 17 では、設定ファイルのパラメータについて説明します。

表 17 設定ファイルのパラメータ

パラメータ	説明
パッケージ	PACKAGE クラス インスタンスの名前を定義します。
pkgname	PACKAGE クラス インスタンスの簡略名 (NAME 属性) を指定します。
pkgdesc	PACKAGE クラス インスタンスの説明 (DESCRIPT 属性) を指定します。
サービス	オプションで作成される ZSERVICE クラス インスタンスの名前を定義します。
svcname	ZSERVICE クラス インスタンスの簡略名 (NAME 属性) を指定します。 ZSVCNAME 属性もこの値から設定されます。
svcdesc	ZSERVICE クラス インスタンスの説明 (DESCRIPT 属性) を指定します。
addtosvc	このセッションのサービス インスタンスを作成するかどうかを指定します。 1 = サービスを作成します 0 = 作成しません

パラメータ	説明
path	パッケージがパブリッシュされるファイルやドメインの CSDB パス (たとえば PRIMARY.SOFTWARE) を定義します。
attr CLASS {body}	<p>パブリッシュ プロセスで追加されるインスタンスの属性値。CLASS の値として指定できるのは、PACKAGE と ZSERVICE のみです。この 2 つのクラスの値は、ユーザー インターフェイスではサポートされていないとしてもコマンド ラインに渡すことができます。例:</p> <pre> attr ZSERVICE { AUTHOR {John J. User} URL {http://www.nowhere.com} OWNER {Microsoft Corp} } attr PACKAGE { RELEASE {1.0} } </pre> <p>値は中かっこ ({}) で囲みます。</p>
msi {body}	<p>MSI ユーザー インターフェイスの設定を指定します。以下の値が設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • aiplocation 必要に応じて AIP の作成場所を指定します。 • publishmode 詳細なパブリッシュまたは基本パブリッシュを指定します。 • execu AIP 作成時の MSI のユーザー インターフェイスの実行方法を定義します。設定可能な値は Full、Basic、または None です。 • deleteaip パブリッシュ後に AIP を削除するかどうかを指定します。設定可能な値は [y] または [n] です。 • aiparguments AIP 作成用のオプションの引数 • enableperuser このパッケージのユーザーごとのインストールを無効にする (N) かどうかを指定します。または、S (ショートカット)、R (レジストリ)、E (プライベート exe)、D (プライベート dll) の各値を組み合わせることもできます。たとえば、「SD」を指定すると、ショートカットおよびプライベート dll のユーザーごとのインストールが有効になります。

パラメータ	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • additionalfiles 追加のファイルを含めるかどうか。設定可能な値は [y] または [n] です。 • connectaiptosvc AIP を含めるかどうか。設定可能な値は [y] または [no] です。 <p>msi セクションの例を次に示します。</p> <pre>msi { aiplocation {c:\testaip} publishmode advanced execu none deleteaip n aiparguments "" enableperuser sre }</pre> <p>注意: 値では大文字と小文字が区別されます。</p>

サンプル設定ファイルは次のとおりです。

```
pkgname    MYTESTPKG
package    CJMTEST
pkgdesc    {This is a test package}
path       PRIMARY.SOFTWARE
addtosvc   1
service    CJMTESTS
svcname    MYTESTSVC
svcdesc    {This is a test service}
attr PACKAGE {
    RELEASE 1.0
    BEHAVIOR
}
attr ZSERVICE {
    AUTHOR    me
    URL       {HTTP://WWW.NOWHERE.COM}
    OWNER     {Microsoft Corp.}
    PRICE     {5}
}
msi {
    aiplocation      {g:\aip}
    publishmode     advanced
    deleteaip      n
    aiparguments    {}
    enableperuser   n
}
```


コマンドラインでパブリッシュするファイルを定義する

コマンドラインで設定ファイルを定義するほかに、パブリッシュするファイルを定義することもできます。パブリッシュセッションで使用するファイルを定義するには、`-file` パラメータを使用します。

```
nvdtk.exe pubport.tkd -cfg "c: \program files\test.cfg" -file  
"c:\program files\testfile" -user USER -password PASSWORD
```

複数の .msi ファイルをパブリッシュする (バッチ モード)

Publisher では、1 回のパブリッシュセッション中に、複数の .msi CSDB ファイルを CSDB にパブリッシュすることができます。そのためには、**Publisher** をコマンドラインから呼び出し、`-batchmsi` パラメータで場所を指定します。**Publisher** によってスキャンされ、.msi ファイル、設定ファイルまたは変換 (.mst) ファイルが検出されます。

 **Publisher** で複数の .msi ファイルをまとめてパブリッシュする場合、コマンドラインを使用して単独の .msi ファイルをパブリッシュする場合とは異なり、コマンドラインパラメータ `-cfg` で設定ファイルを指定することはできません。代わりに、.msi ファイルのディレクトリ内に少なくとも 1 つの設定ファイルが格納されている必要があります。

一致するディレクトリが検出されるまでディレクトリをスキャンします。各ディレクトリには、CSDB にパブリッシュされる **Client Automation** パッケージのコンポーネント (設定ファイル、利用可能な変換ファイル、1 つ以上の .msi ファイルなど) が格納されていなければなりません。一致するディレクトリを処理した後、さらに一致するディレクトリが開始ディレクトリの下にあるか引き続きスキャンを行います。

指定した場所に配置されたファイルは、以下の簡単な規則に準拠する必要があります。

- 1 つのディレクトリに複数の .msi ファイルがある場合、エラーが記録され、パブリッシュセッションのスキャンが続行します。
- 1 つのディレクトリに複数の設定ファイルがある場合、エラーが記録され、パブリッシュセッションのスキャンが続行します。
- 必要であれば、検出されたすべての .msi ファイルに対して 1 つの設定ファイルを使用するようにすることができます。ルートディレクトリの場所で見つかった設定ファイルが 1 つのみの場合は、以降に検出されるすべての .msi ファイルにその設定ファイルが適用されます。この後、[シンボリック置換を使用して設定ファイルの値をカスタマイズする \(106 ページ\)](#) で説明するシンボリック置換を使用して各パッケージの一意の名前を定義します。

- スキャンが成功するためには、ルート ディレクトリの場所にまたは検出された MSI と共存する少なくとも 1 つの設定ファイルが必要です。
- MSI ファイルが検出されるまでスキャンの再帰呼び出しをします。この時、MSI ファイルを処理し、スキャンはディレクトリ ツリーのなかでこれ以上深いところで再帰呼び出しが行われることはありません。検出された MSI ファイルの親ディレクトリで引き続きスキャンを行います。
- 「additionalfiles」 キーワードを設定ファイルの [y] 値で定義した場合、MSI ファイル以下の追加ファイルはいずれも AIP (詳細モードの場合) または パッケージ (基本モードの場合) に含まれません。
- バッチ モードでは、MSI ファイルと共存している変換ファイルはいずれもパッケージに含まれます。

Publisher を実行し、スキャンする場所を指定するコマンド ラインのサンプルを次に示します。

```
nvdtk.exe pubport.tkd -batchmsi "c:\msifileslocation" -user USER -password PASSWORD
```

この例では、**Publisher** はディレクトリ "c:\msifileslocation" とすべてのサブディレクトリをスキャンして、.msi ファイル、設定ファイルまたは変換ファイルを検出します。

パブリッシュ セッションが終了したら、log ディレクトリ内の pubport.log ファイルを参照してセッションを検証します。

複数の設定ファイルを使用する

シンボリック置換を使用して 設定ファイルの値をカスタマイズする (106 ページ) に説明するように、シンボリック置換を使用して一意のパッケージ名を割り当てる場合、パブリッシュするすべての .msi ファイルに必要な設定ファイルは 1 つのみです。ただし、各 .msi に異なる設定ファイルを適用する場合は、.msi のディレクトリ内に、適用する設定ファイルを個別に配置する必要があります。

あるディレクトリ内で設定ファイルが検出されると、その後と同じディレクトリ内で検出された .msi ファイル、および各サブディレクトリ内の .msi ファイルに適用されます。この設定ファイルは、別の設定ファイルが検出されるまで使用されます。

たとえば、[図 5 \(105 ページ\)](#) に表示されている Acrobat Reader 6.msi ファイルは、\Acrobat Reader 6.0 ディレクトリ内に設定ファイルがないため、ルートディレクトリ \Adobe MSI Apps to Publish にある設定ファイル global.cfg を使用します。

図 5 設定ファイルが格納されているルート ディレクトリ

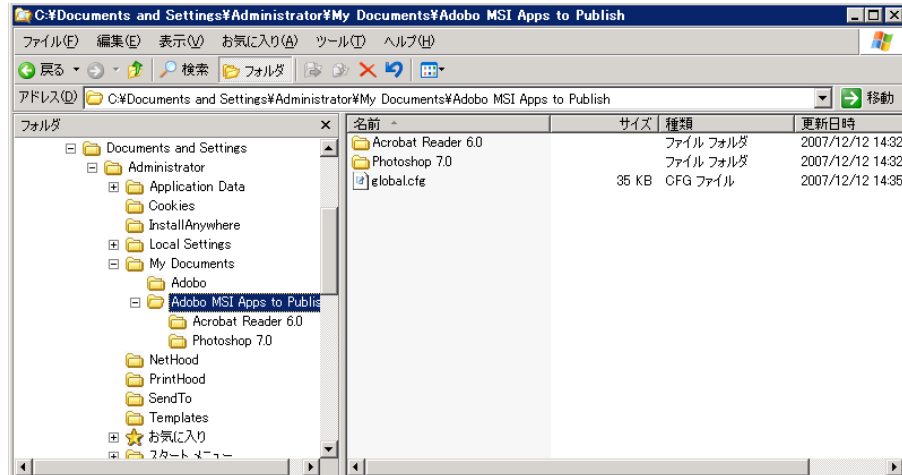
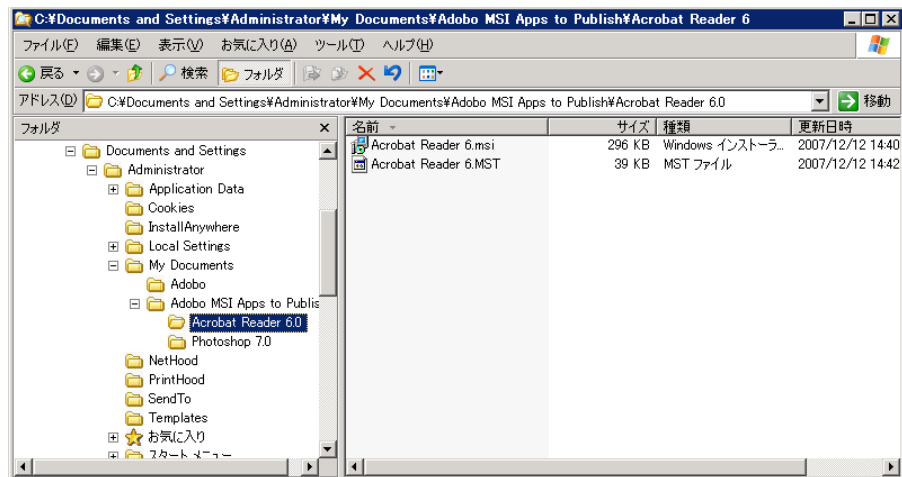


図 6 ディレクトリ構造内の設定ファイル

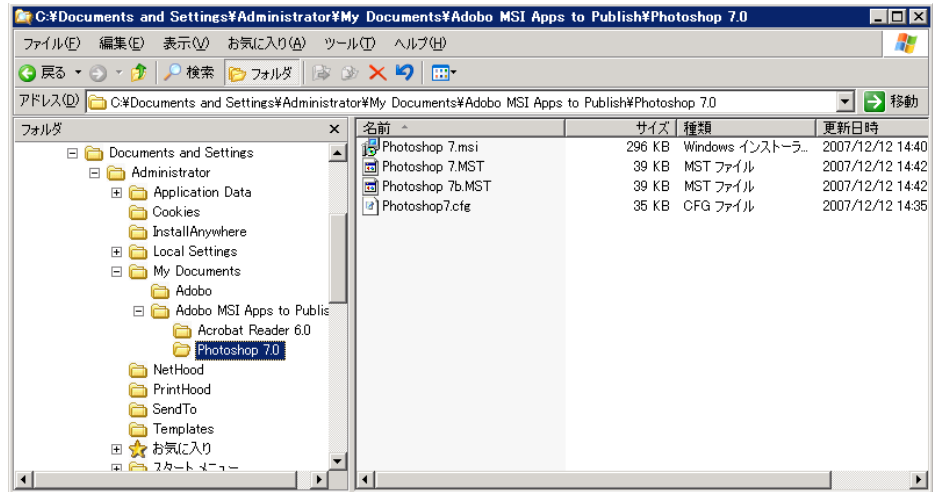


変換 (.mst) ファイルを格納する

.msi ファイルに複数の変換ファイルを適用するには、その .msi ファイルと同じディレクトリ内に該当する変換ファイルを格納します。変換ファイルは、ディレクトリを共有している .msi ファイルにのみ適用されます。

下記の 図 7 に表示されている 2 つの変換ファイルは、どちらもパブリッシュ時に Photoshop 7.msi パッケージに格納されます。


図 7 ディレクトリ構造内の変換ファイル



シンボリック置換を使用して 設定ファイルの値をカスタマイズする

類似する複数の .msi ファイルをパブリッシュするときに使用する設定ファイルを 1 つのみにする場合、シンボリック置換を使用して一意の値を割り当てることができます。たとえば、一意のパッケージ名を作成するには、設定ファイルの pkgname 変数に、%MSIPROP.VARNAME% または .msi ファイル内にある別のシンボリック変数を設定します。**Publisher** は、パブリッシュを実行中の各 .msi ファイルを検索し、指定されたシンボリック値に基づいて、pkgname の値を .msi ファイル内の対応する値と置換します。

シンボリック置換の使用方法を示す、下記のサンプル設定ファイルをご覧ください。

 path 属性にシンボリック置換を使用することはできません。

```
# -----  
# Publisher - Sample imbedded MSI Properties Configuration File  
# -----  
#  
# Package related variables
```

```

#-----
pkgname          {%MSIPROP.RADIA_PKG_DISPLAY_NAME%}
package          {%MSIPROP.RADIA_PKG_INSTANCE_NAME%}
pkgdesc          {%MSIPROP.RADIA_PKG_DESCRIPTION%}
path             PRIMARY.SOFTWARE
#-----
#   Service related variables
#-----
addtosvc         {%MSIPROP.RADIA_ADDTOSVC%}
service          {%MSIPROP.RADIA_SVC_INSTANCE_NAME%}
svcname          {%MSIPROP.RADIA_SVC_DISPLAY_NAME%}
svcdesc          {%MSIPROP.RADIA_SVC_DESCRIPTION%}

attr PACKAGE {
RELEASE          {%MSIPROP.RADIA_PKG_RELEASE%}
}

attr ZSERVICE {
AUTHOR           {%MSIPROP.RADIA_SVC_AUTHOR%}
URL              {%MSIPROP.RADIA_SVC_URL%}
OWNER            {%MSIPROP.RADIA_SVC_OWNER%}
PRICE            {%MSIPROP.RADIA_SVC_PRICE%}
ZSVCMO           {%MSIPROP.RADIA_SVC_ZSVCMO%}
ZCREATE          {%MSIPROP.RADIA_SVC_ZCREATE%}
}

msi {
aiplocation      {%MSIPROP.RADIA_AIPLOCATION%}
publishmode      {%MSIPROP.RADIA_PUBLISHMODE%}
execui           {%MSIPROP.RADIA_EXECUI%}
deleteaip        {%MSIPROP.RADIA_DELETEAIP%}
aiparguments     {%MSIPROP.RADIA_AIPARGS%}
enableperuser    {%MSIPROP.RADIA_ENABLEPERUSER%}
additionalfiles  {%MSIPROP.RADIA_ADDITIONALFILES%}
}

```

上の例では、作成されるパッケージおよびサービスのそれぞれの値は、関連する .msi ファイルのプロパティ テーブルから生成されます。

MSI 置換値送信元には、主に次の 2 つがあります。

- `%MSISUMM_summary_variable_name%`
MSI ファイルに関連付けられた要約情報から抽出されます。
- `%MSIPROP_property_name%`
MSI ファイルに関連付けられたプロパティ テーブルから抽出されます。

組み込み MSI プロパティおよび Extensions for Windows Installer のユーザー定義のプロパティ

.msi パッケージの作成のために **Extensions for Windows Installer** を使用する場合には、自動的に **MSI** プロパティのセットと、そのデフォルト値を追加できます。そのためには、統合されたパッケージセッションの終わりに表示される、→ **[Windows Installer Options]** ダイアログボックスを使用します。**[情報]** タブを選択して、ユーザー定義のプロパティを定義します。これらのプロパティは、**Wise**、**InstallShield**、または他のベンダーで作成されたものなど、どのパッケージにも手動で追加できます。詳細は『**Extensions WI** 用ユーザーガイド』を参照してください。

ハードウェア構成要素のパブリッシュ

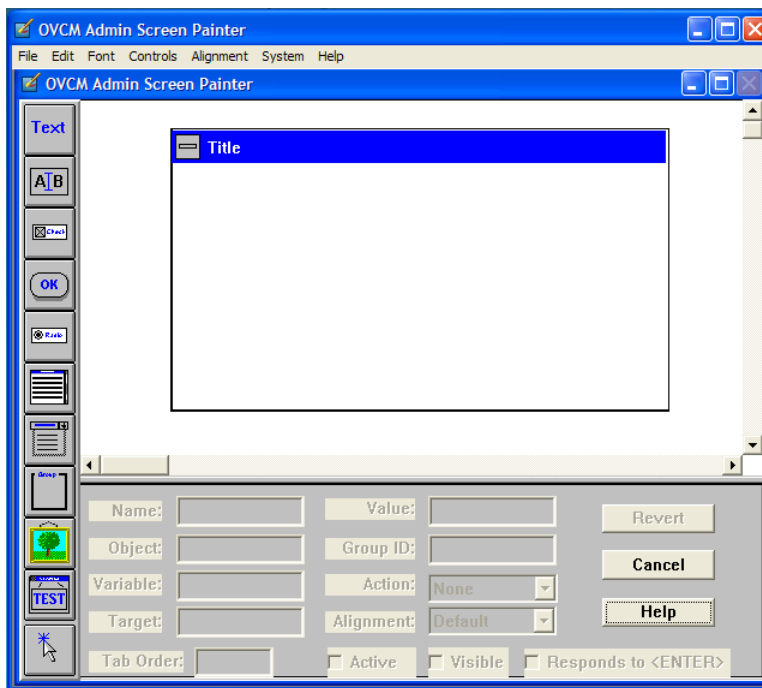
お使いの環境のデバイスに配布するハードウェア構成要素をパブリッシュするには **Publisher** を使用します。詳細は、『**HP Client Automation OS Manager** ハードウェア設定ガイド』 (**OS Manager** ガイド) を参照してください。このガイドには、ハードウェア構成要素をパブリッシュするための詳細なステップが含まれています。

Screen Painter

ここでは、ダイアログボックスを設計し、作成するためのツールである、**Screen Painter** について説明します。これにはグラフィカル ユーザー インターフェイスがあり、ドラッグアンドドロップを使用して、チェック ボックス、リスト ボックス、ボタンなど、よく使うコントロールを作成して、配置することができます。

Screen Painter を開くには

- **HP Client Automation Administrator** フォルダの **Client Automation Administrator Screen Painter** をクリックします。Screen Painter のウィンドウが開きます。



[ファイル] メニュー

表 18 (110 ページ) **[File]** ドロップダウン メニューのナビゲーション機能について説明しています。

表 18 Screen Painter の [File] メニュー

オプション	機能
新規作成	ダイアログボックスを新規作成します。
開く	[Select a Panel Object File for Editing] ダイアログ ボックスを開きます。リストから、編集するパネル オブジェクトを選択します。
閉じる	現在の編集セッションを閉じます。
保存	現在のパネル オブジェクトを同じ名前で保存します。
Save As	現在のパネル オブジェクトを新しい名前で保存します。
Revert	前に保存されたバージョンのパネル オブジェクトに復帰します。
Page Setup	現在のダイアログ ボックスの一部を選択すると、このオプションが使用可能になります。これは Windows の標準的な [Print Setup] ダイアログ ボックスです。
印刷	ダイアログ ボックスのコピーを印刷します。 注意: Screen Painter の印刷機能は、現在のダイアログ ボックスを、1 ピクセルがプリンタの 1 ドットになるように印刷します。600 DPI の高解像度プリンタを使用する場合、プリントアウトは非常に小さくなり、読みにくくなります。この点を改善するには、[Page Setup] ダイアログ ボックスの [Properties] ボタンをクリックし、プリンタの解像度を画面解像度に近くなるように小さくしてください。これにより、プリントアウトは、画面上の表示とほぼ同じサイズになります。
終了	Screen Painter を閉じます。

[編集] メニュー

[Edit] メニューには、Windows の標準的な編集機能が含まれています。

[Font] メニュー

[Font] メニューでは、選択したダイアログ ボックス要素で表示されるテキストのフォントを変更できます。










コントロール


次に、ダイアログ ボックスにコントロールを追加し、設定する方法、およびダイアログ ボックスにタイトルを追加する、またはタイトルを変更する方法について、説明します。これは、コントロール ツールバーまたは **[Controls]** メニューから行えます。

コントロール ツールボックス

コントロール ツールボックスには、コントロールをダイアログ ボックスに追加するためのボタンがあります。下は、ボタンと、それに関連付けられているコントロールの機能についての説明です。

表 19 コントロール ツールボックス

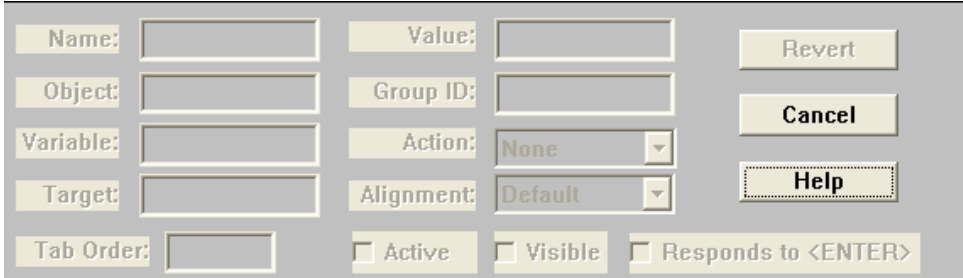
ボタン	ボタン名	機能
	スタティック テキスト	ラベル、説明、およびオブジェクトの変数値の表示のために使用します。
	編集	テキストの入力と、オブジェクトの変数値の表示のために使用します。
	チェック ボックス	[Yes/No] または [On/Off] タイプのコントロール用に使用します。
	プッシュ ボタン	[EXIT] などのアクションを実行するため、または他のダイアログ ボックスを表示するために使用します。
	ラジオ ボタン	1 つのアイテムだけを選択できる、複数の選択オプション用に使用します。
	List Box	1 つのアイテムだけを選択できる、選択肢のスクロール可能なリスト用に使用します。
	リスト ボタン	1 つのアイテムだけを選択できる、選択肢のドロップダウンリスト用に使用します。
	グループ ボックス	コントロールのグループ化および整理のために使用します。
	Image	ビットマップイメージの表示用に使用します。
	テスト	ダイアログ ボックスをリアルタイム モードで実行するために使用します。

ボタン	ボタン名	機能
	選択	ダイアログ ボックス、コントロール、およびプロパティの選択と変更のために使用します。

[Properties] ボックス

[Properties] ボックスは、画面上のオブジェクトの各要素にプロパティを割り当てるために使用します。画面上のオブジェクトの各コントロールに対し、これらのすべてのプロパティを割り当てる必要はありません。一部のコントロールでは、少数のプロパティだけが必要です。プロパティを追加するには、**Screen Painter** のウィンドウの下部にある [設定] ボックスを使用します。

図 8 **Screen Painter** の [設定] ボックス



下記の表 20 では、これらのプロパティについて説明します。

表 20 **[Properties] ボックスの要素**

プロパティ	説明
名前	コントロールに表示されるラベルです。ターゲット名を示すためにも使用されます。
オブジェクト	コントロールがデータを読み書きするオブジェクトです。
変数	コントロールがデータを読み書きする変数です。
ターゲット	[Action] フィールドで指定した事柄によって影響を受けるダイアログ ボックス、ファイル、またはコントロールです。
値	チェック ボックス、ラジオ ボタン、およびリスト ボックスの場合にのみ有効です。このフィールドの指定方法についての説明は、これらのセクションを参照してください。
Group ID	複数コントロールをまとめるための、ユーザー指定の識別子です。

プロパティ	説明
アクション	選択したときに、コントロールが行う事柄を指定します。
Alignment	スタティック テキスト コントロールの [Static] フィールドに入力したテキストの揃え方です。プッシュ ボタン テキストのデフォルトは「center」です。
Tab Order	ユーザーが Tab キーを押したときにフォーカスが移動する順序を指定します。デフォルトは、コントロールがダイアログ ボックスに追加された順序になります。
アクティブ	コントロールが初期状態で選択可能か、またはグレー表示かを決めます。(デフォルト: Active.)
Visible	コントロールが初期状態で表示されているか、または非表示かを決めます。(デフォルト: Visible.)
Responds to <Enter>	Enter キーを押すことにより、ユーザーが強調表示されたプッシュ ボタンを選択できるようにします。この機能はプッシュ ボタンでのみ動作します。設定できるのは、ダイアログ ボックスごとに 1 箇所だけです。
Revert	コントロールの値を、コントロールが直前に更新されたときの値に戻します。
キャンセル	変更を保存せずに、編集セッションを閉じます。
ヘルプ	オンラインヘルプを呼び出します(現時点では使用できません)。

[Controls] メニュー

ここでは、[Controls] メニューで利用可能なコントロールについて説明します。

コントロールの削除

ここでは、コントロールの削除方法について説明します。

コントロールを削除するには

- 1 つまたは複数のコントロールを選択して、**削除** キーを押します(キーボード上)。

スタティック テキスト

このコントロールは、他のコントロールにラベルを付けるため、またはダイアログボックスに説明や指示を追加するために使用します。

スタティック テキストを挿入するには

- 1 ツールバーのスタティック テキスト ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[スタティック テキスト]** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
- 3 作成したスタティック テキスト コントロールをクリックします。
- 4 **[Properties]** ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。
スタティック テキスト コントロールの場合、[名前] フィールドが [スタティック] フィールドになります。詳細は、下記の **表 21** を参照してください。

表 21 **[Static]** フィールド

フィールド	説明
Static	このフィールドには、このダイアログ ボックスのコントロールにラベルをつけるためのスタティック テキストを入力できます。テキストがオブジェクトの変数から来る場合には、空白にしておきます。

編集

このツールは、テキスト ボックスを追加するために使用します。テキスト ボックスは、変数データを入力し、表示することができるコントロールです。

テキスト ボックスを挿入するには

- 1 ツールバーの編集ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[編集]** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
- 3 作成したテキスト ボックスをクリックします。
- 4 **[設定]** ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。
編集コントロールの場合、[名前] フィールドが [編集] フィールドになります。詳細は下記の **表 22** を参照してください。

表 22 **[Edit]** フィールド

フィールド	説明
編集	グループで参照するための、このコントロールの名前です。

プッシュ ボタン

プッシュ ボタンを使えば、ユーザーはアクションを開始できます。

プッシュ ボタンを挿入するには

- 1 ツールバーのプッシュ ボタン ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[プッシュ ボタン]** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
- 3 作成したプッシュ ボタンをクリックします。
- 4 [設定] ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。
プッシュ ボタン コントロールの場合、[名前] フィールドが [コントロール] フィールドになります。詳細は、下記の [表 23](#) を参照してください。

表 23 [Push] フィールド

フィールド	説明
Push	ボタンに表示されるラベルです。

下の表は、プッシュ ボタンに割り当てることができるアクションの説明です。

表 24 プッシュ ボタンのアクション

アクション	説明
EXIT	ダイアログ ボックスの内容を保存して閉じます。
CANCEL	変更を保存せずに、ダイアログ ボックスを閉じます。
SHOW	[Target] フィールドで指定された名前のコントロールの、表示と非表示を切り替えます。[Target] フィールドに、ダイアログ ボックス内のコントロールのグループのグループ ID が含まれている場合、コントロールのグループの表示と非表示が切り替わります。
ENABLE	[Target] フィールドで指定された名前のコントロールの、有効 (入力のフォーカスになれること) と無効 (入力のフォーカスになれないこと) を切り替えます。[Target] フィールドに、ダイアログ ボックス内のコントロールのグループのグループ ID が含まれている場合、コントロールのグループの有効と無効が切り替わります。

アクション	説明
PANEL	<p>現在のダイアログ ボックスを終了して、[Target] フィールドで指定されたダイアログ ボックスを表示します。[Target] フィールドが空白の場合、[Object] および [Variable] フィールドが、表示されるダイアログ ボックスの名前を含む変数を指定します。</p> <p>プッシュ ボタンとリスト ボックスを組み合わせると、ユーザーが、次に表示するダイアログ ボックスをリストから選択できるようになります。ユーザーがリスト ボックスからアイテムを選択し、関連するプッシュ ボタンを押すと、その選択対象が起動されます。これを行うには、プッシュ ボタンの [ターゲット] フィールドにリスト ボックスの名前を含め、プッシュ ボタンの [オブジェクト] および [変数] フィールドで、リスト ボックスのデータ ソースとなるマルチヒープ オブジェクトの何らかの変数を識別するようする必要があります。リスト ボックスの データ ソース オブジェクトの各ヒープで、この変数には、次に表示するダイアログ ボックスに対応するパネル オブジェクトの名前を含めます。ユーザーは、ヒープから、リスト ボックスに表示されるデータと関連付けられた項目を選択します。</p>
LAUNCH	<p>[Target] フィールドで指定されたアプリケーションを起動します。[Target] フィールドが空白の場合、[Object] および [Variable] フィールドが、起動されるファイルのパスとファイル名を含む変数を指定します。</p> <p>プッシュ ボタンとリスト ボックスを組み合わせると、ユーザーが、起動するプログラムをリストから選択できるようになります。ユーザーがリスト ボックスからアイテムを選択し、関連するプッシュ ボタンを押すと、その選択対象が起動されます。これを行うには、プッシュ ボタンの [ターゲット] フィールドにリスト ボックスの名前を含め、プッシュ ボタンの [オブジェクト] および [変数] フィールドで、リスト ボックスのデータ ソースとなるマルチヒープ オブジェクトの何らかの変数を識別するようする必要があります。リスト ボックスの データ ソース オブジェクトの各ヒープで、この変数には、起動するプログラムのパスとファイル名を含めます。ユーザーは、ヒープから、リスト ボックスに表示されるデータと関連付けられた項目を選択します。</p>
PREVHP	<p>マルチヒープ オブジェクトの前のヒープ (最初のヒープでなければ) にページを切り替え、そのオブジェクトを使用するすべてのコントロールを再読み込みします。ページ切り替えされるオブジェクトは、[Object] フィールドで指定します。[Value] フィールドで指定された変数が表示されます。</p>

アクション	説明
NEXTHP	マルチヒープ オブジェクトの次のヒープ (最後のヒープでなければ) にページを切り替え、そのオブジェクトを使用するすべてのコントロールを再読み込みします。ページ切り替えされるオブジェクトは、[Object] フィールドで指定します。[Value] フィールドで指定された変数が表示されます。
LNCHEX	起動して終了します。LAUNCH アクションと同じ動作をして、ダイアログ ボックスは終了します。
STDFILE	Windows の標準の [ファイルを開く] ダイアログ ボックスを表示して、ユーザーが選択したものを (フルパスの情報とともに) [オブジェクト] および [変数] フィールドで指定された変数に入れます。
STDFOLD	Windows の標準の [フォルダの選択] ダイアログ ボックスを表示して、ユーザーが選択したものを (フルパスの情報とともに) [オブジェクト] および [変数] フィールドで指定された変数に入れます。

チェック ボックス

チェック ボックスを使えば、ユーザーは ([yes/no] のような) 二者択一の選択を行えます。

チェック ボックスを挿入するには

- 1 ツールバーのチェック ボックス ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **チェック ボックス** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。コントロールは、後でサイズを変更することができます。
- 3 作成したチェック ボックスをクリックします。
- 4 [設定] ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。

チェック ボックス コントロールの場合、[名前] フィールドが [確認] フィールドになります。詳細は、下記の [表 25](#) を参照してください。

表 25 [チェック] フィールド

フィールド	説明
Check	チェック ボックスのラベルで、他のコントロールからターゲットとして参照されるとき、このコントロールの名前です。

ラジオ ボタン

ラジオ ボタンを使えば、ユーザーはセットになっているものから 1 つのアイテムをクリックできます。ラジオボタンは個別に挿入しますが、セットにするために複数をグループ化します。

ラジオ ボタンを挿入するには

- 1 ツールバーのラジオ ボタン ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[ラジオ ボタン]** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
- 3 作成したラジオ ボタンをクリックします。
- 4 [設定] ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。

ラジオ ボタン コントロールの場合、[名前] フィールドが [ラジオ] フィールドになります。詳細は、下記の [表 25](#) を参照してください。



作成時には、ラジオ ボタンのサイズはデフォルトのプリセットサイズになります。入力したテキストがテキスト ボックスの限界を超えた場合には、横方向に拡張してください。グレーの領域のサイズは変わりませんが、ユーザーにはテキスト全体が表示されます。

表 26 [Radio] フィールド

フィールド	説明
Radio	ラジオ ボタンに表示されるラベルです。また、他のコントロールからターゲットとして参照されるとき、このコントロールの名前です。

グループ ボックス

グループ ボックスを使えば、コントロールのセットを、ダイアログ ボックスの特定の領域内でグループ化することができます。

グループ ボックスを挿入するには

- 1 ツールバーのグループ ボックス ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[グループ ボックス]** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
- 3 作成したグループ ボックスをクリックします。
- 4 [設定] ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。

グループ ボックス コントロールの場合、[名前] フィールドが [グループ] フィールドになります。詳細は、下記の [表 27](#) を参照してください。



まずコントロールを作成し、整列してから、その周りにグループ ボックスを配置してください。こうすれば、グループ化するコントロールの位置変更、追加、または削除を行う場合に、時間の節約になります。

表 27 [Group] フィールド

フィールド	説明
グループ	グループ ボックスのテキスト ラベルです。

List Box

リスト ボックスは、ユーザーが 1 つのアイテムだけを選択できる、スクロール可能なボックスです。

リスト ボックスを挿入するには

- 1 ツールバーの リスト ボックス ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[リスト ボックス]** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
- 3 作成したリスト ボックスをクリックします。
- 4 [設定] ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。

リスト ボックス コントロールの場合、[名前] フィールドが [リスト ボックス] フィールドになります。詳細は、下記の [表 28](#) を参照してください。

表 28 [List Box] フィールド

フィールド	説明
List Box	ターゲットとして指定するためのコントロールの名前で、他のコントロールからターゲットとして参照されるとき、このコントロールの名前です。

リスト ボタン

リスト ボタンはドロップダウン リスト コントロールで、ユーザーは提示されている選択肢のいずれかを選択できます。

リスト ボタンを挿入するには


- 1 ツールバーのリスト ボタン ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[リスト ボタン]** を選択します。
 - 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
 - 3 作成したリスト ボタンをクリックします。
 - 4 [設定] ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。
リスト コントロールの場合、[名前] フィールドが **[List]** フィールドになります。詳細は、下記の **表 29** を参照してください。
-  リスト ボタンにドロップダウンの機能を持たせるには、デザイン スペースでコントロールを縦に拡張する必要があります。

表 29 [List]フィールド

フィールド	説明
一覧	ターゲットとして指定するための、このコントロールの名前です。また、他のコントロールからターゲットとして参照される際の、このコントロールの名前です。

Image

ビットマップ イメージを挿入するには


- 1 ツールバーのビットマップ イメージ ツールを選択するか、[コントロール] メニューの **[画像]** を選択します。
- 2 ダイアログボックス内で、クリックアンドドラッグにより、表示するイメージに適した四角形を描きます。必要であれば、このコントロールのサイズを変更します。
 イメージは、フレーム全体に収まるようにスケーリングされます。
- 3 作成したフレームをクリックします。
- 4 [設定] ボックスで、アクティブなフィールドの値を指定します。
イメージコントロールの場合、[名前] フィールドが **[画像]** フィールドになります。詳細は、**表 30 (121 ページ)** を参照してください。

表 30 [Image] フィールド

フィールド	説明
Image	表示するビットマップ イメージのフルパスです。 .bmp 拡張子を含めます。

選択

マウスカーソルは、選択 (矢印) ツールとして機能します。このモードでダイアログ ボックス内のコントロールをクリックすると、**Screen Painter** は、そのコントロールをハンドルの付いた状態で強調表示します。

コントロールのサイズを変更するには

- コントロールのハンドルのいずれかをクリックし、希望するサイズにドラッグします。

コントロールの位置を変更するには

- アイテム (ハンドル以外の部分) をクリックして、希望する場所にドラッグします。

タイトルの設定

ダイアログボックスに名前を付ければ、ユーザーはその機能を覚えやすくなります。

ダイアログ ボックスにタイトルを付けるには

- 1 [Controls] メニューから **[タイトルの設定]** を選択します。または、ダイアログ ボックスの青いタイトル バーをダブルクリックします。
- 2 ダイアログ ボックスのタイトルを入力して、**Enter** を押します。


[Alignment] メニュー

挿入したコントロールを配列して、読み取りやすくします。下の表は、コントロールの整列で利用できる 9 つのオプションについて説明しています。

それに続く部分では、コントロールの整列方法について説明しています。コントロールを適切に配列すれば、ユーザーがダイアログ ボックスを使用しやすくなります。これらの機能は、[Alignment] メニューからのみ使用できます。

表 31 整列の機能

オプション	機能
Align Tops	選択したコントロールの上端を、選択したコントロールの中で最も上にあるものに揃えます。
Align Bottoms	選択したコントロールの下端を、選択したコントロールの中で最も下にあるものに揃えます。
Align Lefts	選択したコントロールの左端を、選択したコントロールの中で最も左にあるものに揃えます。
Align Rights	選択したコントロールの右端を、選択したコントロールの中で最も右にあるものに揃えます。
Align Centers	選択したすべてのコントロールの中央を、選択したコントロールの中で最も右にあるものの右端と、最も左にあるものの左端の間を二等分する、仮想的な垂直線に合わせます。
Align Same Height	選択したすべてのコントロールの高さを変更して、(最初に) 選択した参照コントロールの高さに合わせます。
Align Same Width	選択したすべてのコントロールの幅を変更して、(最初に) 選択した参照コントロールの幅に合わせます。
Align Even Vertical	選択したコントロールのグループ内での間隔を調整し、隣接する 2 つのコントロールの縦方向の間隔がどれも等しくなるようにします。
Align Even Horizontal	選択したコントロールのグループ内での間隔を調整し、隣接する 2 つのコントロールの横方向の間隔がどれも等しくなるようにします。


 [Align Even Vertical] および [Align Even Horizontal] 機能を使用するためには、少なくとも 3 つのコントロールを選択する必要があります。

コントロールを整列するには

[Alignment] メニューの最初の 5 つのオプションを使えば、標準的な外見になるようにコントロールの位置を調整することができます。

- 1 基準となるコントロールを、希望する位置にドラッグアンドドロップします。
- 2 **[Shift]** キーを押しながらクリックして、基準コントロールに揃えるコントロールを、少なくとも 3 つ選択します。

- コントロールを縦方向に整列するには、[整列] メニューから **[左揃え]** または **[右揃え]** を選択します。
- コントロールを横方向に整列するには、[整列] メニューから **[上揃え]** または **[下揃え]** を選択します。
- コントロールを中心線に合わせて整列するには、[整列] メニューから **[中央揃え]** を選択します。

 コントロールの整列は、その周囲にグループ ボックスを配置する前に行ってください。ここで行った整列や位置の変更は、後ほど変更できます。

コントロールの高さと幅を調整するには

コントロールのサイズを変更して、一貫した外見を持たせることができます。

- 1 基準として使用するコントロールを選択します。(このコントロールのサイズは変化しません。他のコントロールの高さまたは幅が、この基準コントロールと同じになるように変更されます)。
- 2 サイズを変更する、残りのコントロールを選択するには、**[Shift]** キーを押しながらクリックします。
- 3 [整列] メニューから、**[高揃え]** または **[幅揃え]** を選択します。

コントロールの間隔を調整するには

コントロールの間隔を変更して、一貫した外見を持たせることができます。

- 1 **[Shift]** キーを押しながらクリックして、少なくとも **3** つのコントロールを選択します。
- 2 [整列] メニューから、**[左右揃え]** または **[上下揃え]** を選択します。

[System] メニュー

[System] メニューには、ダイアログ ボックスのテスト用の選択項目が含まれています。

ダイアログ ボックスの作成中には定期的に、そして完成後には特に、ダイアログ ボックスをテストして、デザインし、意図したとおりに動作することを確認するのがよいでしょう。テストを行うと、現在のダイアログ ボックスを使用して、**Panel Manager** プログラムである `edmpnlwr.exe` が実行されます。これにより、実運用時にダイアログ ボックスがどのように表示されるかを確認できます。

ダイアログ ボックスのテスト方法としては、次に説明する **2** 通りがあります。

- 共通

- REXX 処理

共通

共通メソッドを使用して画面をテストするには

- 1 コントロール ツールバーの テスト ツールを選択するか、[システム] メニューの **[テスト]** を選択します。
- 2 テストを終了するには、表示されているダイアログ ボックスの「close」アイコンをクリックするか、そのアクションによってダイアログ ボックスを終了させるプッシュ ボタンをクリックします。

REXX プログラミング

REXX 処理を使用して画面をテストするには

- 1 [システム] メニューから **[Use REXX for Test]** をクリックします。
- 2 テストを終了するには、表示されているダイアログ ボックスの「close」アイコンをクリックするか、そのアクションによってダイアログ ボックスを終了させるプッシュ ボタンをクリックします。

Do Not Resolve Panel

オブジェクトを解決せずに変数名を表示するには

- 1 解決しないままにしておくコントロールの **[Name]** フィールドで、シンボル記法を指定します。Client Automation は、**[Properties]** ボックスの **[Object]** および **[Variable]** フィールドで指定したデータは、常に解決することに注意してください。
- 2 [システム] メニューから、**[Do Not Resolve Panel]** を選択します。

[ヘルプ] メニュー

現時点で動作する機能は、**[バージョン情報]** だけです。この機能は Client Automation のバージョン番号を表示します。

CSDB Editor

ここでは、CSDB Editor を使用して CSDB を管理する方法について説明します。

はじめに

ここでは、CSDB Editor を使用する前に知っておき、行う必要のある事柄について説明します。

CSDB Editor を開くには、

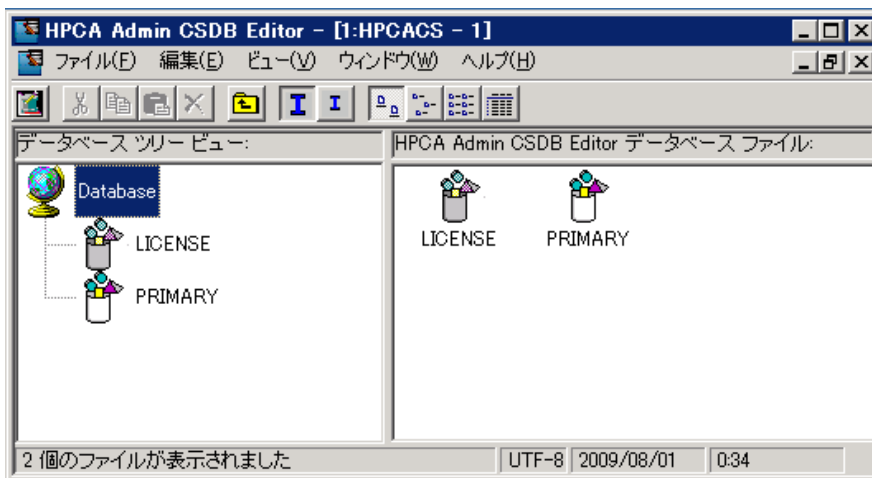
- 1 **[Start] → [Programs] → [HP Client Automation Administrator] → [Client Automation Administrator CSDB Editor]** をクリックします。[ログオン] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 2 ユーザー ID とパスワードを入力します。



出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更している場合があります。

管理者が CSDB Editor でパスワードが必要なように設定していた場合には、割り当てられたパスワードで正常にログオンしてから、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力して、パスワードを変更することができます。

- 3 **[OK]** をクリックします。CSDB Editor の初期ウィンドウが表示されます。



CSDB Editor ウィンドウ

これは、**CSDB Editor** のメイン ウィンドウです。ここでは、その外見をカスタマイズする方法と、それぞれのメニューの使用方法について説明します。

CSDB Editor のウィンドウをカスタマイズする

CSDB Editor の外見と、ショートカット メニューのオプションによる動作は、カスタマイズすることができます。最もよく使う機能は、**CSDB Editor** のツールバーから利用できます。これらの機能の詳細については、**CSDB Editor ツールバー (128 ページ)** を参照してください。

CSDB Editor ウィンドウメニュー

ここでは、メインの [**CSDB Editor**] ウィンドウの各メニューについて説明します。

【ファイル】メニュー

これらのオプションは、付加的な [**CSDB Editor**] ウィンドウを開く、または現在のものを閉じるために使用します。同時に複数のウィンドウを開くことができます。複数のウィンドウ間で、アイテムをドラッグすることができます。

【編集】メニュー

これらのオプションは、**CSDB** を編集するために使用します。最初の **6** つの選択項目は、アクティブなペインまたはダイアログ ボックス内の選択したアイテムに適用されます。

表 32 【編集】メニューのオプション

オペレーション	説明
新規作成	ドメイン、クラス、インスタンスなど、選択したアイテムの新しいオカレンスが作成できます。
切り取り	選択したテキストを削除して、 Windows のクリップボードにコピーします。
コピー	選択したテキストを Windows のクリップボードにコピーします。
貼り付け	Windows のクリップボードのコンテンツを、現在のカーソル位置にコピーします。
名前の変更	選択したアイテムの簡略名や内部名を変更します。
削除	選択しているアイテムを CSDB から削除します。
すべて選択	[CSDB Editor] ウィンドウのリスト ビューのすべてのインスタンスを選択します。

オペレーション	説明
選択を反転	リスト ビューにあるすべてのインスタンスの選択ステータスを切り替えられます。選択されていたインスタンスが選択解除され、選択されていなかったインスタンスが選択されます。
検索	指定したテキストを含むインスタンスが、選択したクラスの [名前] カラムおよび [インスタンス名] カラムで検索できます。検索結果は、リスト ビューのリストの最上部にソートされて強調表示されます。

[ビュー] メニュー

これらのオプションは、**CSDB Editor** を開きます。ツールバーおよびステータス バーの表示と非表示、アイコンのサイズと表示のコントロール、このメニュー内での表示および動作オプションの設定を行えます。

表 33 [表示] メニューのオプション

オプション	説明
ツールバー	ツールバーを表示するかどうかを切り替えます。
ステータスバー	ステータスバーを表示するかどうかを切り替えます。
ツリーアイコン	アイコンを大きいアイコンと小さいアイコンのいずれかで表示するかを切り替えます。
リストビュー	リスト ビューの表示を 4 種類の表示 ([大きいアイコン]、[小さいアイコン]、[リスト]、および [詳細]) の中から選択することができます。
アイコンの整列	アイコンの配列を縦並びまたは横並びにして、リスト ビューを再表示します。
リフレッシュ	選択した [CSDB Editor] ウィンドウを見やすくするためにすべての要素を整列して、リスト ビューを再表示することができます。
オプション	CSDB Editor の [オプション] ダイアログ ボックスを開きます。詳細については、 [オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う (129 ページ) を参照してください。
フォント	[CSDB Editor] ウィンドウでテキストの表示に使用されるフォントを変更することができるダイアログ ボックスが表示されます。

[ウィンドウ] メニュー

複数の **CSDB Editor** ウィンドウを表示している場合は、このオプションをご使用ください。

表 34 【ウィンドウ】メニューのオプション

オプション	説明
重ねて表示	CSDB Editor インターフェイスの左上隅を起点にして、複数のウィンドウを少しずつずらしながら重ねて表示します。
上下に並べて表示	ウィンドウの幅は自動的に CSDB Editor インターフェイスの幅に表示されます。高さはインターフェイスの高さを等分したものになり、開いている複数のウィンドウを重ねないように縦並びに表示することができます。
左右に並べて表示	ウィンドウの高さは自動的に CSDB Editor インターフェイスの高さになり、幅はインターフェイスの幅を等分したものになります。開いている複数のウィンドウを重ねないように横並びに表示することができます。
アイコンにする	複数の [CSDB Editor] ウィンドウを最小化して、インターフェイスの左下隅に表示します。
11:CSname-1	複数のセッション を表示しているときには、管理者は、開いている複数の CSDB Editor セッションを切り替えられます。セッションの横にあるチェックマークは、アクティブなウィンドウを示します。

【ヘルプ】メニュー

CSDB Editor についての詳細、または **HP** ソフトウェアの **Web** サイトへのリンクを表示します。

表 35 【ヘルプ】メニューのオプション

オプション	説明
目次	スタイルのヘルプ インターフェイスを表示します。
Hewlett-Packard の Web サイト	Hewlett-Packard の Web サイトにある、テクニカルサポートページやホーム ページに接続するためのサブメニューが表示されます。これらのリンクのいずれかを選択すると、デフォルトの Web ブラウザが起動し、インターネットを通じて選択したページに接続されます。
CS Database Editor について	現在の CSDB Editor に関する情報が表示されます。バージョン番号、 Configuration Server の情報などは、ここで確認できます。 [システム情報] をクリックすると、標準的な Microsoft の [システム情報] ウィンドウが表示されます。このウィンドウでは、使用しているマシンを分析して、操作しやすい形式で結果を表示します。

CSDB Editor ツールバー



CSDB Editor のツール バーを使用すると、頻繁に使用する機能に簡単にアクセスできます:

図 9 CSDB Editor ツールバー



下記の表 36 では、これらのツールバー ボタンの機能について説明します。

表 36 CSDB Editor ツールバーボタン

ボタン	機能
	新しい [CSDB Editor] ウィンドウを開きます。
	使用不可
	選択されたアイテムをコピーします。
	使用不可
	選択されたアイテムを削除します。
	1 つ上のデータベース レベルを表示します。
	ツリー ビューに大きなアイコンを表示します。
	ツリー ビューに小さなアイコンを表示します。CSDB Editor のツリー ビューに一度に表示できるアイテムの数を最大限に増やせます。
	リスト ビューに大きなアイコンを表示します。
	リスト ビューに小さなアイコンを表示します。CSDB Editor のツリー ビューに一度に表示できるアイテムの数を最大限に増やせます。
	縦並びにしてリスト ビューを表示します。CSDB Editor のツリー ビューに一度に表示できるアイテムの数を最大限に増やせます。
	縦並びにしてリスト ビューを表示します。縦並びにし、クラス、インスタンスなどの TYPE のカラムを追加してリスト ビューを表示します。リスト ビューのアイテム数を最大限に増やすだけでなく、詳細な説明も表示します。

[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う

CSDB Editor には、[オプション] ダイアログ ボックスが用意されています。このダイアログ ボックスを使用して、CSDB Editor の機能の一部をコントロールすることができます。

- [オプション] ダイアログ ボックスを開くには、**[表示] → [オプション]** の順に選択します。

[オプション] ダイアログ ボックスには、以下の 5 つのタブがあります。

- 全般
 - インスタンス オプション
 - 詳細
 - KB AutoImport
 - 通知
- 各タブの設定オプションにアクセスするには、そのタブをクリックします。

[全般] タブ

図 10 CSDB Editor の [オプション] の [全般] タブ

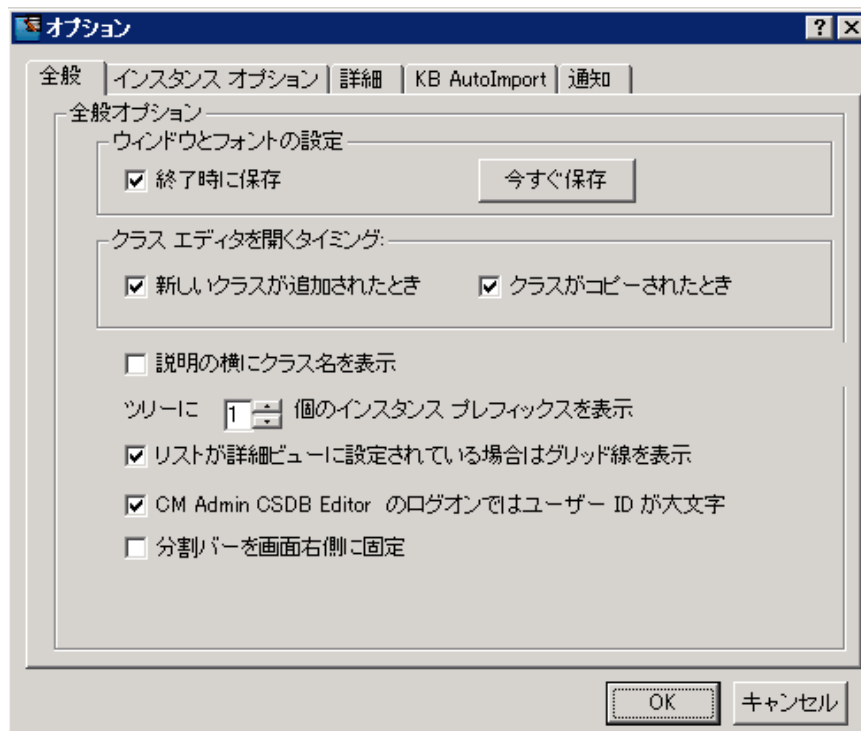


表 37 では、[全般] タブのオプションについて説明します。

表 37 [オプション] の [全般] タブの機能

オプション	機能と使用方法
<p>ウィンドウとフォントの設定</p>	<p>[終了時に保存] チェック ボックスをオンにすると、CSDB Editor セッションの終了時に、その時点のウィンドウの設定とテキストの表示に使用されているフォントを記録することができます</p> <p>ウィンドウの設定には、[CSDB Editor] ウィンドウのツリー ビューおよびリスト ビューに対する表示設定 ([大きいアイコン]、[小さいアイコン]、[一覧]、または [詳細])、各ペインの相対的な幅などがあります。ウィンドウの設定は、CSDB のレベルごとに別々に保存されます。</p> <p>[今すぐ保存] をクリックすると、現在使用しているウィンドウの設定とフォントを保存することができます。</p> <p>フォントは、[ビュー] → [フォント] をクリックすると表示されるダイアログ ボックスからフォントを選択して変更することができます。</p>
<p>クラス エディタを開くタイミング</p>	<p>[新しいクラスが追加されたとき] チェック ボックスをオンにすると、クラスの追加時に [クラス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。</p> <p>[クラスがコピーされたとき] チェック ボックスをオンにすると、クラスのコピー時に [クラス編集] ダイアログ ボックス を表示することができます。</p> <p>新しくコピーされたクラスに対しても追加されたクラスに対しても編集ができるように、これらのチェック ボックスを2つともオンにしておくこともできます。</p>
<p>説明の横にクラス名を表示</p>	<p>ツリー ビューおよびリスト ビューで、クラスの簡略名の横にその Client Automation 内部名を表示します。内部名は簡略名の横にかっこ付きで表示されます。</p> <p>この機能は、通常、リスト ビューで [詳細] ビューを使用しない場合に便利です。リスト ビューの [詳細] ビューでは、常に [タイプ] カラムにクラスの内部名が表示されます。</p>
<p>ツリーに n 個のインスタンスプレフィックスを表示</p>	<p>このオプションは、0、1、2、または 3 に設定できます。これにより、ツリービューで折りたたんだり展開したりすることができる、インスタンス名のプレフィックスのレベル数を指定することができます。CSDB Editor の操作 (137 ページ) を参照してください。</p>
<p>リストが詳細ビューに設定されている場合はグリッド線を表示</p>	<p>表示オプションが [詳細] の場合にリスト ビューにグリッド線を表示します。</p>
<p>CSDB Editor のログオンではユーザー ID が大文字</p>	<p>ユーザー ID が自動的にすべて大文字に変換されます。</p>

オプション	機能と使用方法
分割バーを画面右側に固定	<p>[CSDB Editor] ウィンドウのサイズ変更時に右側の幅を固定することができます。</p> <p>このチェック ボックスがオフになっている場合にウィンドウのサイズを変更すると、ウィンドウの左側の幅が固定され、右側の幅が変化します。</p>

[インスタンス オプション] タブ

図 11 CSDB Editor の [オプション] の [インスタンス オプション] タブ

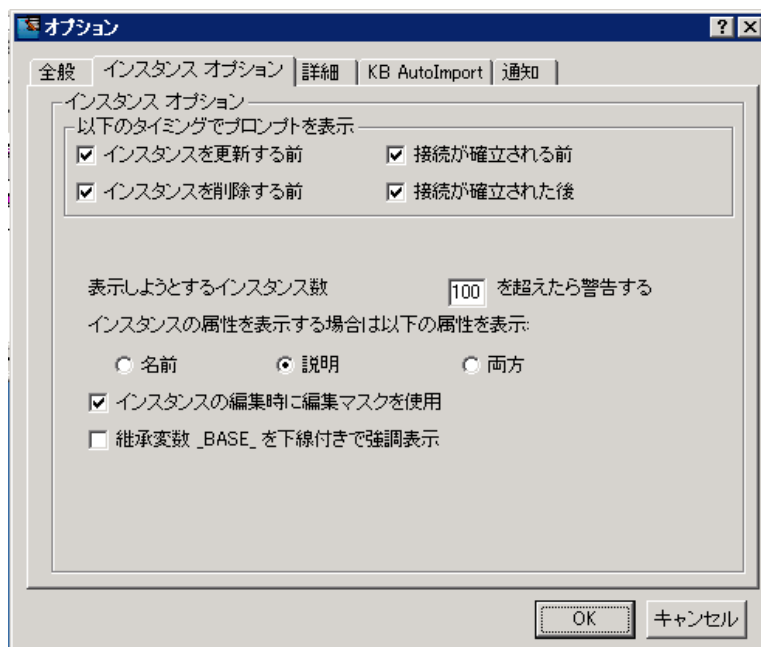



表 38 では、[インスタンス オプション] タブのオプションについて説明します。

表 38 [オプション] の [インスタンス オプション] タブの機能

オプション	機能と使用方法
以下のタイミングでプロンプトを表示	<p>これら 4 つのチェック ボックスを使用して、その説明で示されているアクションを完了する前に確認のメッセージを表示するかどうかを指定できます。</p>

オプション	機能と使用方法
<p>表示しようとするインスタンス数 n を超えたら警告する</p>	<p>規模の大きい配布モデルでは、FILE や USER などの特定のクラスに多くのインスタンスが含まれることがあります。このオプションの設定数より多いインスタンスを含むクラスのインスタンスを表示しようとする、次のような警告が表示されます。この警告により、クラス インスタンスが表示される前にそれらをフィルタすることができます。インスタンスの表示数はパフォーマンスに関連しています。あまりに多くのインスタンスを表示しようとする、CSDB Editor が CSDB からインスタンスを取得する間待つこととなります。また、操作対象のインスタンスを見つけるのに長いリストをスクロールしなければならないようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● [クラスをフィルタ] ダイアログ ボックスを表示して、適切なフィルタを入力するには、[はい] をクリックします。 ● すべてのインスタンスを表示するには、[いいえ] をクリックします。 ● インスタンスを表示せずに警告を閉じるには、[キャンセル] をクリックします。
<p>インスタンスの属性を表示する場合は以下の属性を表示</p>	<p>この設定を使用して、ツリー ビューでインスタンス名をダブルクリックしてインスタンスを表示する場合にウィンドウのリスト ビューの [詳細] ビューで表示されるカラム ([名前]、[説明]、または[両方]) が指定できます。</p>
<p>インスタンスの編集時に編集マスクを使用</p>	<p>この設定を使用して、[クラスを編集] ダイアログ ボックスのデータ入力領域で属性のタイプを区別するかどうか指定できます。</p> <p>このチェック ボックスをオンにすると、論理的な ([はい] / [いいえ] など) データを保持する属性の場合、データ入力領域にチェック ボックスが表示されます。複数のオプションがある属性の場合、データ入力領域にドロップダウン リストが表示されます。フラグ セットは、データ入力領域に一連のチェック ボックスとして表示されます。</p> <p>クラス定義で属性の説明の最後にある角かっこ内に属性の有効なオプションを入力することで、マスクを設定することができます。</p> <p>このチェック ボックスをオフにすると、[インスタンスを編集] ダイアログ ボックスのデータ入力はすべてプレーンテキストで行うこととなります。</p> <p>この機能の詳細については、オプションの属性編集コントロール (152 ページ) を参照してください。</p>
<p>下線付きの継承変数 _BASE_ を強調表示</p> 	<p>この設定は、インスタンスのどの値がクラスの _BASE_INSTANCE_ から継承されているかを確認する場合に使用します。継承されたインスタンスは、赤色の下線付きで表示されます。</p>

[詳細] タブ

図 12 CSDB Editor の [オプション] の [詳細] タブ

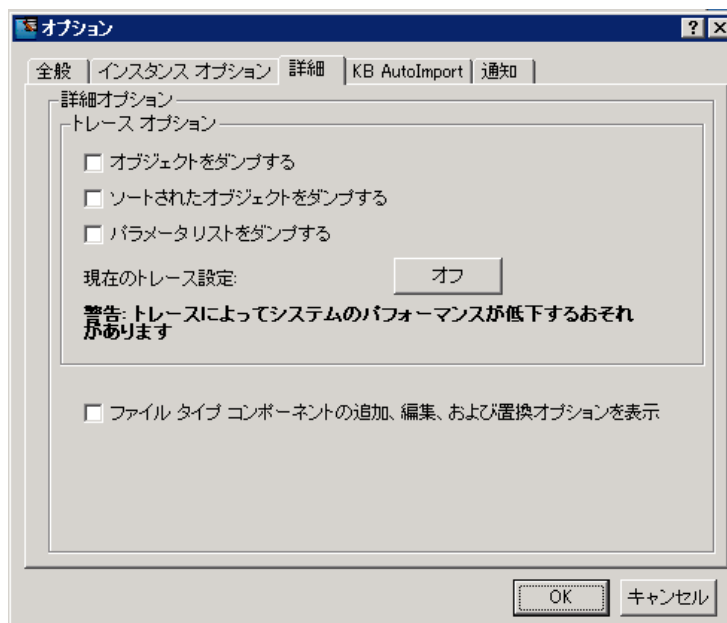




表 39 では、[詳細] タブのオプションについて説明します。

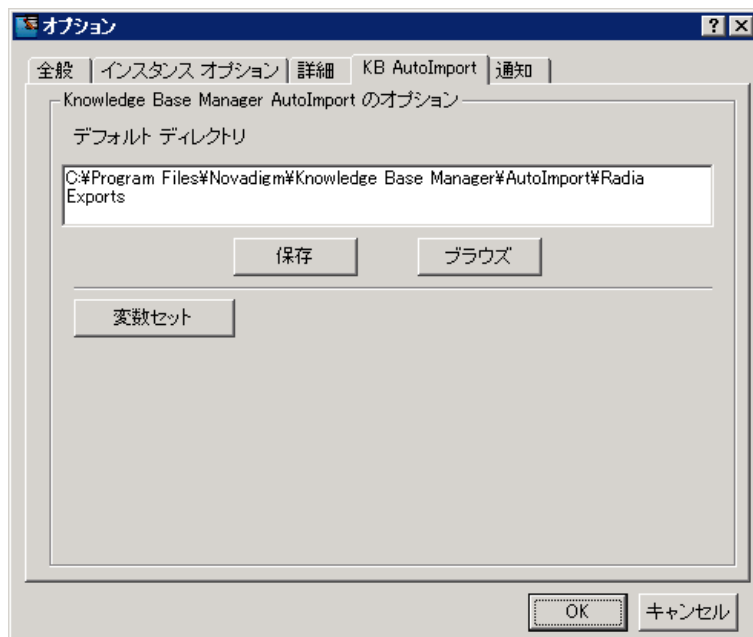
表 39 【オプション】の【詳細】タブの機能

オプション	機能と使用方法
トレース オプション	<p>これらの設定は、CSDB Editor のトラブルシューティングを行う場合にのみ使用してください。</p> <p> HP のテクニカル サポートからの指示がない限り、これらの設定は変更しないでください。</p>
ファイル タイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示	<p> これらの設定は、実運用以外の環境でのみ使用してください。</p> <p>この設定を使用して、ファイルタイプ コンポーネントに対するショートカットメニューで以下のコマンドを表示するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● このコンポーネントを編集 ● コンポーネント データを置換 ● コンポーネントを追加 <p>詳細については、付録 B (ページ 命名規則) を参照してください。</p>

[KB AutoImport] タブ

[KB AutoImport] タブ は、HP Client Automation Knowledge Base Server (KB Server) のデフォルトの自動インポート ディレクトリを定義するために使用します。詳細は『HP Client Automation Knowledge Base Server インストールおよび設定ガイド』(KB Server ガイド)を参照してください。

図 13 CSDB Editor の [オプション] の [KB AutoImport] タブ



[KB AutoImport] オプションを指定するには

- 1 **KB Server** データベースに**状態ファイル**をインポートするために使用するデフォルトのディレクトリを指定するか、ブラウズします。デフォルトのロケーションは、**KB Server** によってインストールされるエクスポート ディレクトリです。このディレクトリには、必要な変数セット サブディレクトリ、\VarSets が含まれます。

▶ エクスポート ディレクトリとして使用されるディレクトリには、と
いう名前のサブディレクトリ \VarSets が含まれている必要があります。

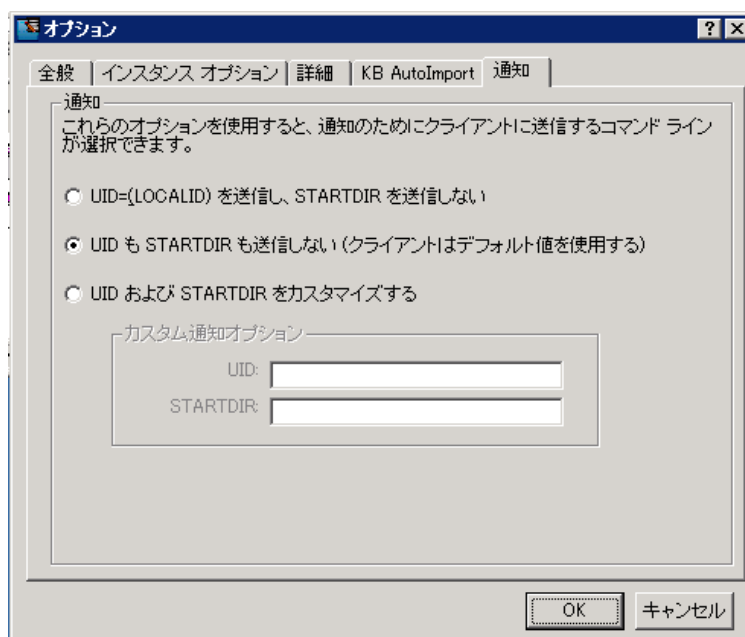
- 2 [KB AutoImport] タブの **[保存]** をクリックすると、指定したデフォルトのディレクトリが **KB Server** のデフォルトの自動インポート ディレクトリに設定されます。

[通知] タブ

[通知] タブを使用すると、通知時にエージェントに送信される、radskman.exe コマンドラインの UID 値と STARTDIR 値を指定できます。UID は現在のセッションを特定するために使用され、STARTDIR は IDMLIB 開始ディレクトリを指定します。たとえば、**[UID/STARTDIR をカスタマイズする]** をクリックすると、現在ログオンしているユーザーの名前ではなく、マシン名でクライアントに通知するための値を入力したり、そのまま使用したりすることができます。

ここで設定した [通知] オプションは **Notify Manager** によって使用され、下記の **図 14** に示す [通知オプション] ダイアログ ボックスに表示されます。詳細は **通知 (192 ページ)** を参照してください。

図 14 CSDB Editor の [オプション] の [通知] タブ



下記の **表 40** では、[通知] タブのオプションについて説明します。

表 40 [オプション] の [通知] タブの機能

オプション	機能と使用方法
UID=[LOCALID] を送信し、STARTDIR を送信しない	UID=[LOCALID] を使用する通知コマンドを作成します。このコマンドは、現在ログオンしているユーザーの名前でエージェントに通知します。 マシンの名前でエージェントに通知するには、下の [UID および STARTDIR をカスタマイズする] オプションを使用します。

オプション	機能と使用方法
[UID も STARTDIR を通信しない (クライアントはデフォルト値を使用する)]	<p>UID の値も STARTDIR の値も使用しない通知コマンドを作成します。エージェントは、UID および STARTDIR のデフォルト値を使用します。</p> <p>デフォルト値以外の値を指定するには、下の [UID と STARTDIR をカスタマイズする] オプションを使用します。</p>
UID および STARTDIR をカスタマイズする	<p>[カスタム通知オプション] のそれぞれのテキスト ボックスに入力された UID 値および STARTDIR 値を使用する通知コマンドを作成することができます。このオプションを使用すると、マシン名でエージェントに通知したり、適切な開始ディレクトリを指定したりすることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • マシン名でエージェントに通知するには、\$MACHINE のカスタム UID 値をそのまま使用します。カスタム値を使用している現在のセッションを特定するために別の UID 値を入力することもできます。 • マシン コンテキストでアプリケーションに通知したり、アプリケーションをインストールするには、SYSTEM のカスタム STARTDIR 値をそのまま使用します。別の STARTDIR 値を入力することもできます。

CSDB Editor の操作

CSDB は階層構造となっており、ファイル、ドメイン、クラス、およびインスタンスで構成されています。ツリー ビューでは、階層構造の下位のレベルを順次表示することができ、特定の CSDB を容易に見つけて操作することができます。

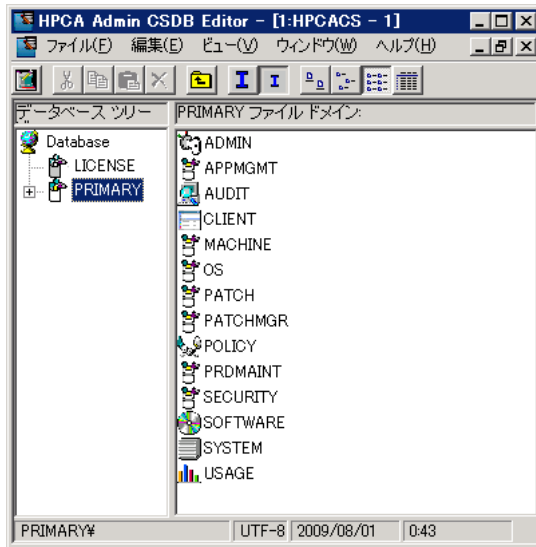
ツリー構造を表示するには

- 1 CSDB Editor を開いて、ツリー ビューの **PRIMARY** をダブルクリックします。



PRIMARY ファイル ドメインは、環境にどの Client Automation 製品をインストールしたかに応じて異なります。

次のような [CSDB Editor] ウィンドウが表示されます。



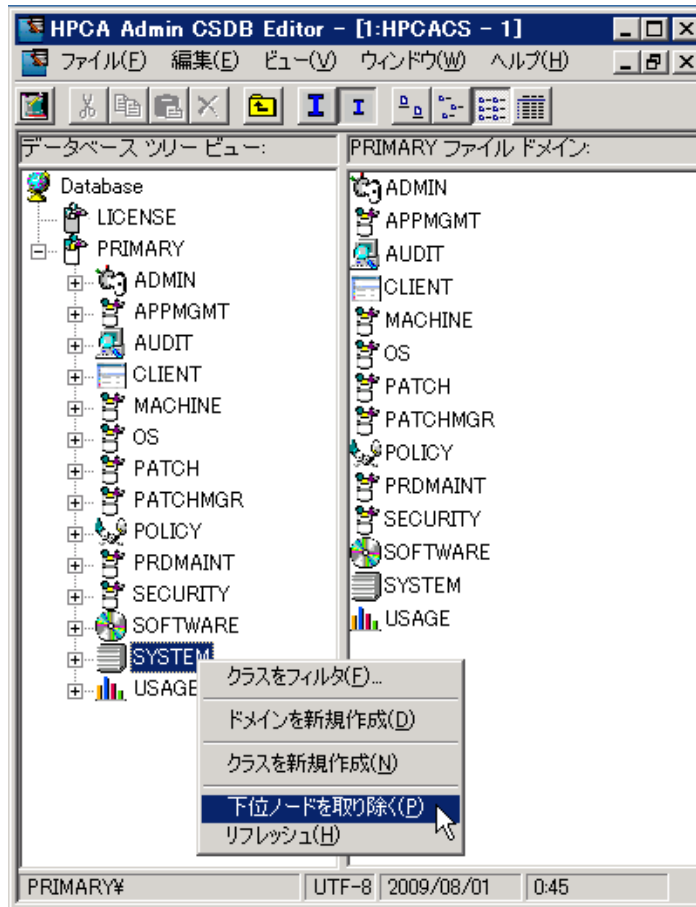
- 2 CSDB コンポーネントを開くには、そのコンポーネントのアイコンをダブルクリックします。

ナビゲーション履歴

CSDB Editor のナビゲーション機能は、Windows のエクスプローラのものによく似ています。ただし、特定のコンポーネントの下で以前に開いたブランチの履歴を破棄するには、[下位ノードを取り除く]機能を使用します。

[下位ノードを取り除く] 機能を使用するには

- 1 ツリー ビューで **SOFTWARE** ドメインのアイコンを右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。



- 2 **[下位ノードを取り除く]** をクリックします。ツリー ビューの **SOFTWARE** ドメインの下に展開されているすべてのノードが折りたたまれ、ナビゲーション履歴が破棄されます。

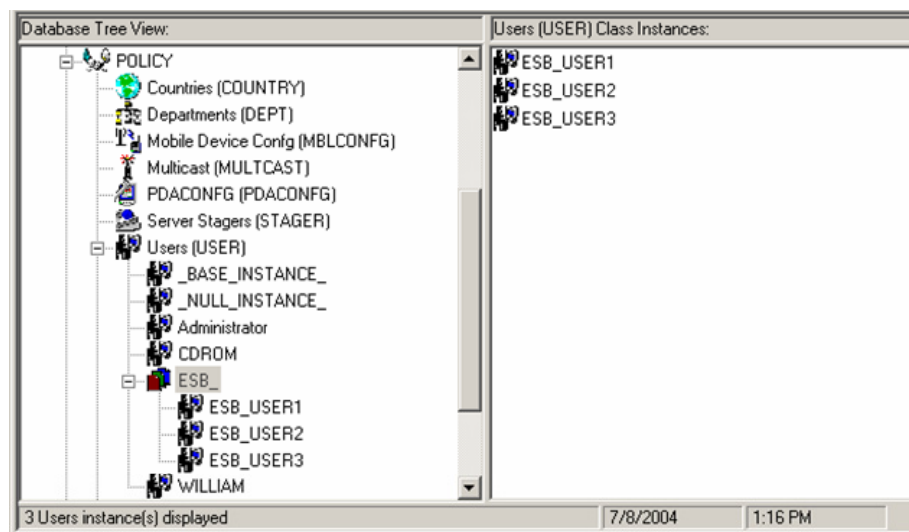
複合名

複合名を使えば、ツリー ビューのナビゲーションが管理しやすくなります。**Client Automation** では、インスタンス名の 1、2、または 3 レベル上の修飾子に基づく、1、2、または 3 レベルの折りたたみ機能が用意されています。

複合名には、1、2、または 3 レベルのプレフィックスがあり、それぞれは、アンダースコア文字によって区切られています。たとえば、ユーザーがいるビルを基準にして、ユーザーのグループを作成するとします。これらのユーザーのインスタンス名に、ビルを識別するプレフィックスを付けます。エンパイア ステートビルにユーザーがいる場合、そのユーザーを識別するためのインスタンス名

のプレフィックスとして "ESB_" を割り当てます。エンパイア ステート ビルに
いる各ユーザーには、**ESB_** で始まるインスタンス名が割り当てられます。ツリ
ービューによって、自動的にレベルが追加されます。

図 15 複合名



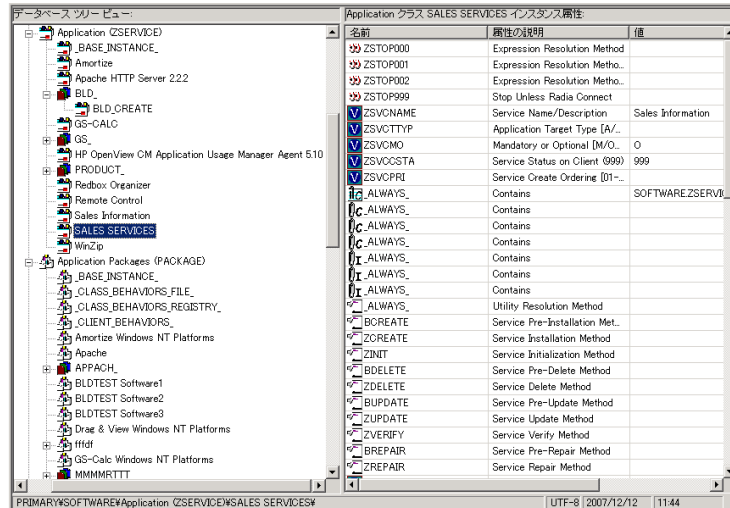
ツリービューに表示されるインスタンス名のプレフィックスのレベル数 (0 ~ 3)
は、[ツリーに n 個のインスタンス プレフィックスを表示] オプションで指定し
ます。このオプションは、[ビュー] メニューの [オプション] ダイアログ ボック
スの [全般] タブにあります。[オプション] ダイアログ ボックスについては、[\[オ
プション\] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う \(129 ページ\)](#) を参照して
ください。

ツリービューのレベルは、インスタンス名の各アンダースコアに対応して区切ら
れます。したがって、インスタンス名 **ESB_FLOOR10_USER1** の場合、プレフィッ
クスのレベル数は 2 となります。[ツリーに n 個のインスタンス プレフィッ
クスを表示] が 2 または 3 に設定されていれば、このインスタンスは 2 つの折りたた
み可能な非要素レベル (**ESB** およびその下位の **FLOOR10**) 内に表示されます。

CSDB における継承

CSDB の各クラスには、**_BASE_INSTANCE_** というベース インスタンス
があります。これは、クラスの他のインスタンスのデフォルト値となります。イン
スタンスの属性は、特定の値を割り当てない限り、**_BASE_INSTANCE_** の
同じ属性からの値を継承します。

図 16 アプリケーション (ZSERVICE) クラスの _BASE_INSTANCE_



インスタンスに継承された値と、インスタンスに直接入力した値の表示に区別はありません。_BASE_INSTANCE_を調べることにより、変数の値が_BASE_INSTANCE_から継承されたかどうかを判別できます。また、変数から値を削除した後(値を削除する方法については、[クラスを操作する 142](#) ページ参照)、値が自動的にインスタンスに再表示された場合、その値は_BASE_INSTANCE_から継承されています。

ドメイン、クラス、インスタンスを管理する

CSDB Editor では、CSDB コンポーネント(ドメイン、クラス、インスタンス)の追加、コピー、編集、名前の変更、および削除を行うことができます。また、インスタンス間を接続することもできます。

これらの機能は、[CSDB Editor] ウィンドウで操作対象を右クリックしたときに表示されるショートカットメニューからアクセスできます。表示されるメニューの内容は、右クリックした対象によって異なります。

ドメインを操作する

ここでは、ファイルにドメインを追加する方法について説明します。ドメイン名に入力できる文字数は、半角で 8 文字までです(数字も使用可)。

ファイルにドメインを追加するには

- 1 PRIMARY ファイルまたは任意のドメインを右クリックし、表示されたショートカット メニューの **[ドメインを新規作成]** をクリックします。[ドメインの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 2 新しいドメインの名前を入力し、**[OK]** をクリックします。

クラスを操作する

ここでは、クラスの追加、編集、削除を行う方法について説明します。

クラスを追加する

新しいクラスの追加方法は、次のいずれかとなります。

- 既存のクラスをコピーする
または
- クラスを新規作成します。

追加するクラスと実質的に類似する属性を持つクラスが存在するかどうかによって、どちらを選択するかが決まります。該当するクラスがあればそのクラスをコピーし、ない場合はクラスを新規作成します。

クラスをコピーすると、コピーされたクラスと同じ属性を持つ新しいクラスが作成されます。新しいクラスの `_BASE_INSTANCE_` には、コピーされたクラスの `_BASE_INSTANCE_` の属性値が設定されます。

既存のクラスをコピーするには

- 1 コピーするクラスを強調表示して、右クリックします。
- 2 ショートカット メニューの **[クラスのコピー]** をクリックします。[クラスのコピー] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 3 新しいクラスの名前を入力し、**[OK]** をクリックします。
 - [オプション] ダイアログ ボックスで **[設定]** を選択し (詳細は [\[オプション\] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う 129 ページ](#) を参照)、クラスのコピー時に **Class Editor** を開くオプションを選択していない場合は、コピー元のクラスが新しい名前で作成され、クラス エディタは表示されません。また、警告も表示されません。新しくコピーしたクラスを編集するには、クラス エディタを手動で開く必要があります。
 - 逆に、**Class Editor** を開くオプションを選択しない場合、**[クラスを編集]** ダイアログ ボックスが表示されます。 [クラスを編集する \(145 ページ\)](#) を参照してください。



- 4 コピーしたクラスの追加を完了するには、[説明] フィールドを変更して新しいクラスを特定することができるようにし、クラスを編集して新しいクラスの要件を反映してから **[OK]** をクリックします。

[クラスの編集の確認] 警告メッセージが表示され、続ける前に、データベースのバックアップを取るように警告されます。

- 5 **[はい]** をクリックします。新しいクラスが追加されます。



[クラスの編集の確認] 警告メッセージに対し **[いいえ]** または **[キャンセル]** を選択した場合には、クラス エディタは閉じますが、クラスのコピーは完了しません。

クラスを作成した後で削除する場合には、[クラスを削除する \(155 ページ\)](#) を参照してください。

クラスを作成したら、**MASTER_CONNECTION_RULES** 変数をチェックして、そのクラスにドラッグ アンド ドロップ規則を設定する必要があるかどうか決めてください。接続規則およびドラッグ アンド ドロップ接続の詳細については、[CSDBで接続規則を維持する \(202 ページ\)](#) を参照してください。

新しいクラスを作成するには

- 1 新しいクラスを作成するドメインを強調表示します。
- 2 ドメイン名を右クリックします。

- 3 ショートカット メニューの **[クラスを新規作成]** をクリックします。[クラスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 4 新しいクラスの名前 (BIZUNITS など)を入力し、**[OK]** をクリックします。[クラス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。 [クラスを編集する \(145 ページ\)](#) を参照してください。

- 5 新しいクラスの追加を完了するには、[説明] フィールドを変更して新しいクラスを特定することができるようにし、クラスを編集して新しいクラスの要件を反映してから **[OK]** をクリックします。
- 6 **[はい]** をクリックします。新しいクラスが追加されます。



[クラスの編集の確認] 警告メッセージに対し **[いいえ]** または **[キャンセル]** を選択した場合には、クラス エディタは閉じますが、クラスのコピーは完了しません。

クラスを作成した後で削除する場合には、[クラスを削除する \(155 ページ\)](#) を参照してください。

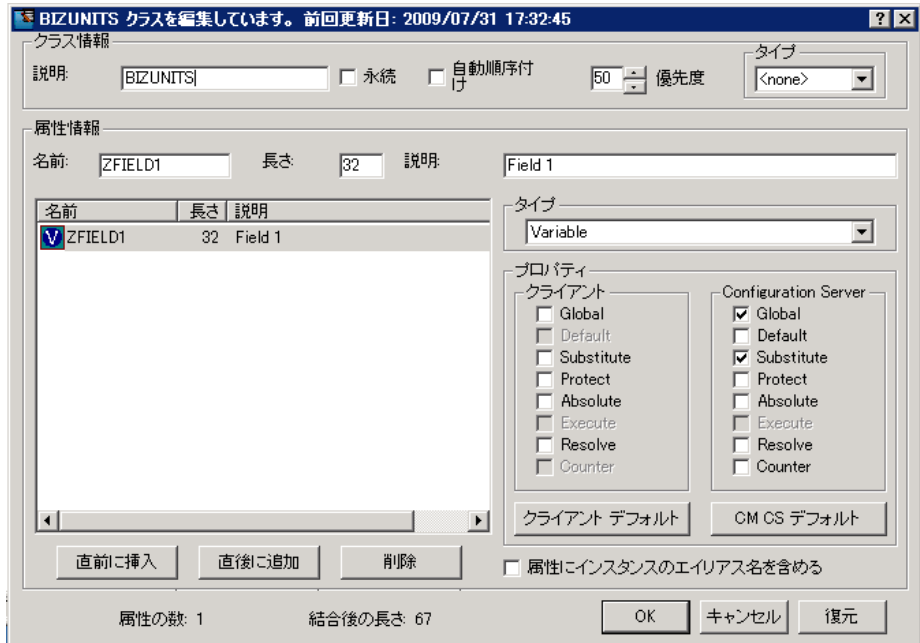
クラスを作成したら、**MASTER_CONNECTION_RULES** 変数をチェックして、そのクラスにドラッグ アンド ドロップ規則を設定する必要があるかどうか決めてください。接続規則およびドラッグ アンド ドロップ接続の詳細については、[CSDBで接続規則を維持する \(202 ページ\)](#) を参照してください。

クラスを編集する

ショートカットメニューの **[クラスを編集]** を選択したとき、または新しいクラスを追加したとき（[クラスを追加する 142](#) ページ）に、**[クラスを編集]** ダイアログボックスが表示されます。

クラスを編集するには

- 1 ツリービューで **部署** クラスを右クリックし、表示されたショートカットメニューの **[クラスを編集]** をクリックします。**[クラスを編集]** ダイアログボックスが表示されます。



- 2 ダイアログボックスの上部にある **[クラス情報]** の各プロパティを設定します。

説明

クラスおよびその用途を説明する簡略名です。ツリービューで、クラスのアイコンの横にこの名前が表示されます。

永続

このプロパティは、**Client Automation** の解決プロセスを十分に理解している管理者だけが使用します。

永続クラスとは、解決プロセスの実行中、その属性およびオブジェクトがグローバルメモリに保持されるクラスです。永続クラスから作成されたインスタンスは、**Client Automation Agent** のデスクトップに保存できます。

永続クラスでないクラスは、一時クラスといいます。一時オブジェクトは、解決の過程で処理されるときにしか存在しません。一時クラスから作成されたインスタンスは、**Client Automation Agent** のデスクトップに保存できません。

永続オブジェクトと一時オブジェクト、およびこれらのオブジェクトが解決プロセスで扱われる方法の詳細については、『**Essentials ガイド**』の解決についての説明を参照してください。

自動順序付け

属性の解決は通常、属性リストでの表示順に従って実行されます。『**CM Essentials ガイド**』の解決についての説明を参照してください。

このチェック ボックスをオンにするとクラスの属性が以下のようにグループ化され、解決時の処理順が決まります。

- 式
- 変数
- クラス (接続)
- メソッド

優先度

このフィールドには、**00 ~ 99** の半角 **2** 文字の値が設定できます。オブジェクトの解決時に、**Configuration Server** によって **ZOPJPRI** 変数にこの値が代入されます。このフィールドの値がゼロに設定されている場合、または値が設定されていない場合は、そのクラスに対して指定されているデフォルト値が代入されます。各クラスのデフォルト値は以下のとおりです。

PATH	5
REGISTRY	60
DESKTOP	70
FILE	50
METACLAS	10
ZSERVICE	50
MACALIAS	70
その他すべて	50



タイプ




クラスを用途と目的に従って分類します。この分類は、解決プロセスに影響を与えます。たとえば、エージェント コンピュータに サービスリストを格納するための解決では、[コンポーネント] に分類されたクラスは処理されません。

ドロップダウン リストから次のいずれかのオプションをクリックします。

- [**<none>**] – このクラスは分類されません。
 - **Configuration** – このクラスは、エージェント コンピュータ上で **Client Automation** によって管理されるコンテンツを集計レベルで指定します。通常、このクラスのインスタンスには、配布可能なデータは含まれません。これらは、1 つまたは複数のコンポーネント クラスに接続されます。例:**ZSERVICE**、**PACKAGE**、**VGROUP**、**VERSION** など。
 - **Component** – このクラスは、設定クラスのインスタンスによって指定されるコンテンツを構成するアイテム（ファイル、レジストリ エントリ、リンク、アイコンなど）を特定します。通常、このクラスのインスタンスには、配布可能なデータが含まれます。例: **FILE**、**REGISTRY**、および **DESKTOP**。
 - **Policy** – **This class identifies one, or a group of agent computers.**通常、ポリシー クラスのインスタンスは、別のポリシー クラスのインスタンス、または設定クラスのインスタンスのいずれかに接続されています。
- 3 属性の定義を変更するには、属性リストでその属性の名前をクリックして強調表示します。[属性情報] の各テキスト ボックスに、強調表示されている属性の名前、長さ、および説明が表示されます。[タイプ] ボックスには、その属性のタイプが表示されます。
 - 4 [属性情報] データ入力フィールドに変更内容を入力し、[タイプ] オプションをクリックして属性のタイプを設定します。クラスの属性は、表 41 で説明する 4 つのタイプのいずれかとなります。

表 41 クラスの属性のタイプとその機能

属性のタイプ	利用状況
式 	解決時に実行される 1 行の REXX コマンドが格納されます。 ZSTOP という属性で、式が「 true 」と評価されると、現在のインスタンスの解決が終了されます。
変数 	変数値を保持する、名前の付けられた格納場所です。変数の値は、エージェントの解決済み要求ステートの一部であり、メッセージングやシンボリック置換を介して解決プロセスに影響を与えます。
接続 (使用可能)	クラス接続によって、エージェント接続プロセスにおいて、エージェントの要求ステートの解決に使用するパスが特定されます。 使用可能な接続とは、別のクラスへの接続が設定できる属性のことです。

属性のタイプ	利用状況
 <p>接続 (設定済み)</p>  <p>注意: アイコン内の文字は、以下の接続タイプを意味します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • A – 常時 • C – クラス • I – インクルード • R – 必須 	<p>設定済みの接続とは、別のクラスへの接続が既に指定されている属性のことです。</p> <p>クラス接続は、実際には解決プロセスの一部です。『Essentials ガイド』の「解決プロセス」を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 常時 接続 は、属性の名前に関係なく常に解決されます。 • クラス接続は、属性の名前が <code>_ALWAYS_</code> の場合、またはシステム メッセージの現在の値と一致する場合に解決されます。 • インクルード 接続 は、属性の名前に関係なく常に解決されます。 • 必須接続 では、必須のインスタンスおよびその子のインスタンス名が、それを必要とするインスタンスおよびその子のインスタンス名と一致する場合、前者のインスタンスの解決は行われません。 <p>必須接続タイプとインクルード接続タイプは、パッケージ間の関係を表し、PACKAGE クラスのインスタンスを接続する場合に、他の接続タイプよりも便利に使用できます。</p> <p>あるパッケージが別のパッケージを必要とする場合、必須のパッケージのコンポーネントはそれを必要としているパッケージのコンポーネントに上書きされます。</p> <p>あるパッケージが別のパッケージをインクルードする場合は、どちらも単独のエンティティとして配布されます。</p>
<p>メソッド</p> 	<p>メソッドは、解決プロセスの一部として実行されるプログラムです。メソッド属性によって、実行するプログラムが特定されます。</p>

変更を行うと、その変更が直ちに属性リストに反映されます。

- 5 **【プロパティ】** の各チェック ボックスは、属性のタイプに応じてオンまたはオフにできます。

エージェントのプロパティ



Client Automation エージェントのプロパティは、[保護] と [実行] 以外はすべて将来の拡張用に予約済みです。デフォルト値以外に設定しないでください。

- エージェント保護プロパティを選択すると、エージェント コンピュータのオブジェクトに格納された属性の値が暗号化されます。
- エージェント実行プロパティを選択すると、実行対象のメソッドはエージェント コンピュータで実行されます。このプロパティはメソッド属性にのみ適用されます。

Configuration Server のプロパティ

次の表は、**Configuration Server** プロパティの意味を示しています。

- **グローバル**
一時クラスの変数に設定した場合、解決の過程で一時オブジェクトが消滅する前に、子オブジェクトから親オブジェクトへのその変数の移動（フロー）が許可されます。
- **デフォルト**
Client Automation 内部で使用され、管理者は使用できません。一時クラスオブジェクトのデフォルト値が、親の永続クラス オブジェクトに反映されるのを妨げます。
- **置換**
変数の値のシンボル（他の変数への参照で、アンパサンドで始まる）に対しシンボリック置換が行われます。このチェック ボックスをオフにすると、変数の値はリテラル テキストとして扱われ、シンボリック置換は行われません。

置換プロパティは、**Configuration Server** の **GET** オペレーション（たとえば、**REXX** プログラムによる **EDMGET** 関数の呼び出し）の結果として変数が作成された場合に、シンボリック置換を行うかどうかを指定します。**EDMGET** によって取得されたオブジェクトの変数にシンボルが含まれ、オブジェクトが作成されたときに [置換] チェック ボックスがオンになっていると、その変数が領域内に作成されるときに置換が行われます。

たとえば、シンボリック置換の実行時に **ZMASTER** オブジェクトの **ZUSERID** 属性の値が **WILLIAM** の場合、式 **&(ZMASTER.ZUSERID)** がシンボリック置換の後に **WILLIAM** になります。

- **保護**
解決の実行時に属性の値が暗号化されることを示します。解決の実行中、属性値は暗号化形式でメモリに格納されますが、**CSDB** にはプレーン テキストとして格納されます。
- **絶対**
永続クラスの変数に設定した場合、一時クラスからインスタンス化された子オブジェクトの変数は、親オブジェクトの同じ名前の変数の値を上書きしません。
- **実行**
属性の値によって、**Configuration Server** で実行されるメソッドが特定されることを示します。
- **解決**
変数の値のシンボル (他の変数への参照で、アンパサンドで始まる) に対しシンボリック置換が行われます。このプロパティのチェック ボックスをオフにすると、変数の値はリテラル テキストとして扱われ、シンボリック置換は行われません。

解決プロパティは、オブジェクトに変数が格納される時 (たとえば、クラス インスタンスが **CSDB** データベースから取得され、オブジェクトとして領域内でインスタンス化される時) に、シンボリック置換を行うかどうかを指定します。

- **カウンタ**
変数に **Configuration Server** で累積される整数が格納されることを示します。累積合計は、すべての親永続オブジェクトの変数と同じ名前の変数に格納されます。

たとえば、あるサービス用に配布するすべてのリソースの非圧縮サイズの合計を計算し、その結果を **ZSERVICE** オブジェクトに格納するタスクにこのプロパティを使用するとします。**FILE** クラスの **ZRSCSIZE** 変数に対してこのチェック ボックスをオンにすると、**ZSERVICE** オブジェクトに **ZRSCSIZE** 変数が追加されます。この変数は、サービスのすべての **FILE** インスタンスの **ZRSCSIZE** 値の合計を保持します。ユーザーに対する全サービスのリソースの合計サイズが、そのユーザーの **ZMASTER** オブジェクトの **ZRSCSIZE** 変数に自動的に格納されます。**FILE** クラス テンプレートの **ZRSCSIZE** 変数に対して、[カウンタ] チェック ボックスをオンにすると、**ZSERVICE** オブジェクトと **ZMASTER** オブジェクトの **ZRSCSIZE** 変数が、**Configuration Server** によって自動的に作成および管理されます。

クラス テンプレートの変数の定義でこのプロパティを選択することにより、整数を格納する変数は累積の対象となり、親永続オブジェクトに格納されます。たとえば、**FILE** クラスの **ZCMPsize** 変数でこのチェック ボックスをオンにすると、サービス用に配布されるリソースの圧縮サイズの合計が計算されます。

[プロパティ] グループ ボックスの下部にあるデフォルト ボタンをクリックすると、選択した (強調表示された) 属性のプロパティの設定がデフォルト値にリセットできます。

クラスに属性を追加するには

- 1 新しい属性を追加するには、最初に属性リストで、属性を挿入する位置を決めます。説明しているとおりに、[自動順序付け] チェック ボックスがオンになっていないかぎり、属性は解決時に属性リストの表示順に処理されます。
- 2 挿入先の前または後となる属性をクリックし、強調表示します。**[直前に挿入]** または **[直後に追加]** をクリックします。指定した場所に空の属性 (デフォルトでは変数属性) が挿入されます。
- 3 [属性情報] データ入力フィールドに、名前、長さ、説明を入力し、ドロップダウンリストで [タイプ] オプションを選択します。

属性名に入力できる文字数は、半角で 8 文字までです。属性名によっては、解決プロセスに影響を与える場合があります。一時クラスからインスタンス化された子オブジェクトの変数の値は、永続クラス内で表される、親オブジェクトの同じ名前の変数の値に取って代わることができます。メソッド属性またはクラス接続属性の名前に応じて、メソッドおよびクラス接続が条件付きで実行される場合と無視される場合とがあります。属性の名前が **ALWAYS** であれば、メソッドまたはクラス接続は無条件に実行されます。それ以外の場合でメソッドまたはクラス接続が実行されるのは、属性の名前がシステム メッセージの現在の値と同じ場合のみです。詳細は『**Essentials** ガイド』を参照してください。

属性の長さは文字数で指定します。属性の値の最大文字数と同じかまたはそれ以上の数を入力します。接続属性およびメソッド属性に設定する値は、通常は 50 で十分です。変数属性に必要な長さは、その変数に格納されるデータによって異なります。

入力した説明は、[インスタンスを編集] ダイアログ ボックスの [属性の説明] カラムに表示されます。明確な説明を入力しておけば、後でクラスのインスタンスを編集する人にとってわかりやすくなります。変数属性には、その変数属性に格納されるデータを明確に特定する説明を入力します。クラス接続には、「**Connect to**」と入力するか、または目的を表す説明を入力します。メソッドおよび式の場合は、そのメソッドまたは式の目的を表す説明にします。

- 4 属性の値を CSDB Editor での表示名として設定するには、属性を選択してから **[属性にインスタンスのエイリアス名を含める]** チェックボックスをオンにします。これは通常 Name (簡略名) 属性に設定されます。この設定が可能な属性は、各インスタンスにつき 1 つのみです。

オプションの属性編集コントロール

変数属性の [属性の説明] を利用して、[インスタンスを編集] ダイアログ ボックスでその変数属性を入力または編集する場合に表示されるコントロールが指定できます。通常、変数属性はテキスト ボックスにフリー テキストで入力または編集します。これは、チェック ボックス、チェック ボックスのセット、ドロップダウンリストに変更できます。

この機能を有効にするには、[オプション] ダイアログ ボックスの [インスタンスオプション] タブで、[インスタンスの編集時に編集マスクを使用] チェック ボックスをオンにします。詳細については、表 38 (132 ページ) を参照してください。

- **フラグ属性**

フラグ属性は 1 文字のフィールドで、値は Y または N です。インスタンスのフラグ属性を入力または編集する場合にチェック ボックスが表示されるようにするには、クラス テンプレートで属性の説明の最後に [Y/N] を付ける必要があります。次に下記の 図 17 を示します。

図 17 フラグ属性に [Y/N] を含む ZSVCCAT 変数



ZSVCCAT 属性の長さは 1 文字で、[属性の説明] には、最後に [Y/N] が付いた「Service Visible in Catalog? [Y/N]」が表示されています。したがって、この変数の入力または編集を行う場合には CSDB Editor のユーザー インターフェイスにチェック ボックスが表示されます。

- フラグセット属性

フラグセット属性は 2 文字以上のフィールドで、ゼロまたは 1 つ以上の単一文字フラグで構成される値を格納します。フラグがオンの場合、そのフラグに関連付けられた文字値がフラグセット文字列に表示されます。フラグがオフの場合、そのフラグに関連付けられた文字値はフラグセット文字列に表示されません。フラグセット文字列に何も表示されない場合は、そのフラグセットにオンのフラグがないことを意味します。

たとえば、特定のファイルの DOS ファイル属性のフラグセットは、FILE クラスの ZRSCRASH 属性に格納されています。この 4 文字の属性は、ファイルをユーザーのデスクトップに配布するときに、FILE インスタンスに関連付けられたそのファイルの DOS ファイル属性 (R = 読み取り専用、A = アーカイブ、S = システム、H = 非表示) のうちどれをオンにするかを示す文字列を格納します。インスタンスのこの属性を編集するときは、下記の 図 18 のように表示されます。

図 18 単一文字オプションセットが入力された属性



[属性の説明] の最後にスラッシュ区切りの複数の単一文字オプションが入力されていて、オプションの数が属性の長さとも一致している場合 (上の ZRSCRASH 属性を参照)、その属性はフラグセットとして扱われます。[インスタンスを編集] ダイアログボックスには、フラグセットの使用可能な各値に対応するチェックボックスが表示されます。任意のチェックボックスをオンにすると、それに関連付けられた値が属性に挿入されます。

- ドロップダウンリスト

クラステンプレートで属性の説明の最後に、角かっこで囲まれたスラッシュ

区切りの複数のオプションが入力されている場合、属性の入力または編集にドロップダウン リストが表示されます。

たとえば、下記の 図 19 は、FILE クラスの ZRSCSTYP 属性が [属性の説明] に 2 つのオプションを備えていることを表示します。角かっこで囲まれたスラッシュ区切りの複数のオプションが最後に付加された [属性の説明] には、属性の編集にドロップダウン リストが表示されます。

図 19 ZRSCSTYP 属性



- 1 クラスに変更を加えるときに、変更をやり直したくなる場合も想定されます。クラスの編集中に変更が行われると、[復元] が選択可能になります。このボタンをクリックすると、[クラスを編集] ダイアログ ボックスが表示されてからそのクラスに対して行った変更を破棄できます。

[復元の確認] メッセージが表示されます。

- [はい] をクリックして、クラスの変更内容を破棄し、編集を再開します。
- 変更内容を破棄せずに確認ダイアログ ボックスを閉じる場合は [いいえ] をクリックします。

- 2 クラスの編集が完了したら、[OK] をクリックして変更を保存し、[クラスを編集] ダイアログ ボックスを閉じます。

- クラスの属性名または説明が入力されていない場合や、属性の長さがゼロの場合には、警告メッセージが表示されます。
- 属性名および説明が入力されていて、属性の長さがゼロでなければ、[クラスの編集の確認] メッセージが表示されます。先に進む前にデータベースをバックアップするように警告します。

- 3 **[はい]** をクリックすると、クラスの既存のインスタンスがすべて更新されます。
[いいえ] をクリックすると、クラスに対する変更が破棄され、インスタンスの更新は行われません。
[キャンセル] をクリックすると、[クラスを編集] ダイアログ ボックスに戻ります。

クラスを削除する

クラスとそのすべてのインスタンスを削除するには

- 1 **CSDB Editor** のツリー ビューでクラスを右クリックします。
- 2 表示されたショートカット メニューの **[クラスを削除]** をクリックします。
[削除の確認] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 3 クラスおよびそのすべてのインスタンスを削除する場合は、**[OK]** をクリックします。
削除を行わずにメッセージを閉じる場合は **[キャンセル]** をクリックします。

インスタンスを操作する

管理者が行う操作の大部分は、さまざまなクラスのインスタンスの追加、編集、削除、およびインスタンスの接続の設定や削除です。

命名インスタンス

CSDB 内のインスタンスを命名するときには、次のガイドラインを参照してください。

- 表示および印刷可能な文字を使用してください。
- ピリオド (.) を使用しないでください。). ピリオドは、CSDB 内の完全修飾インスタンスのファイル、ドメイン、クラス、およびインスタンス名 (F.D.C.I) を区切るために使用される予約文字です。
- 次のような、オペレーティング システムのファイル システムまたはコマンド シェルに対して特別な意味を持つ特殊文字を使用しないでください。
\
|
/
:
;
<
>
*
?
`
"
'
,
(
)
&
- シーケンス アンダースコアを使用しないでください。この予約シーケンスは、CSDB 内のグループ リソースを示します。
- 空白、CR (キャリッジ リターン)、LR (ライン リターン)、またはタブなどの埋め込みスペースまたは制御文字を使用しないでください。

簡略なインスタンス名

簡略なインスタンス名は、インスタンス名とは異なる制限を持ちます。表示および印刷可能な文字を使用してください。スペースおよびその他の特殊文字は許可

されます。混同を避けるため、簡略名にピリオドを使用しないことを推奨します。

インスタンスを追加する

クラスを新規作成してから追加することができます。または 既存のインスタンスをコピーすることができます。追加するクラスと実質的に類似する属性を持つクラスが存在するかどうかによって、どちらを選択するかが決まります。該当するクラスがあればそのクラスをコピーし、ない場合はクラスを新規作成してから追加します。

インスタンスをコピーする

インスタンスをコピーすると、コピーされたインスタンスと同じ属性値を持つ新しいインスタンスが作成されます。

既存のインスタンスをコピーするには

- 1 ショートカット メニューの **[インスタンスをコピー]** をクリックします。[インスタンスをコピー] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 2 新しいインスタンスの表示名 (簡略名) およびインスタンス名を入力し、**[OK]** をクリックします。

インスタンスが作成され、[CSDB Editor] ウィンドウのツリー ビューとリスト ビューの両方に表示されます。

簡略名はツリー ビューに、インスタンス名 (内部名) は [CSDB Editor] ウィンドウのリスト ビューのタイトル バーに表示されます。

インスタンスを追加する

インスタンスを新規作成すると、クラスの `_BASE_INSTANCE_` で設定されている属性値を持つインスタンスが作成されます。

新しいインスタンスを追加するには

- 1 ショートカット メニューの **[インスタンスを新規作成]** をクリックします。[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 2 表示名 (簡略名) およびインスタンス名を入力し、**[OK]** をクリックします。

インスタンスが作成され、[CSDB Editor] ウィンドウのツリー ビューとリスト ビューの両方に表示されます。

簡略名はツリー ビューに、インスタンス名 (内部名) は [CSDB Editor] ウィンドウのリスト ビューのタイトル バーに表示されます。

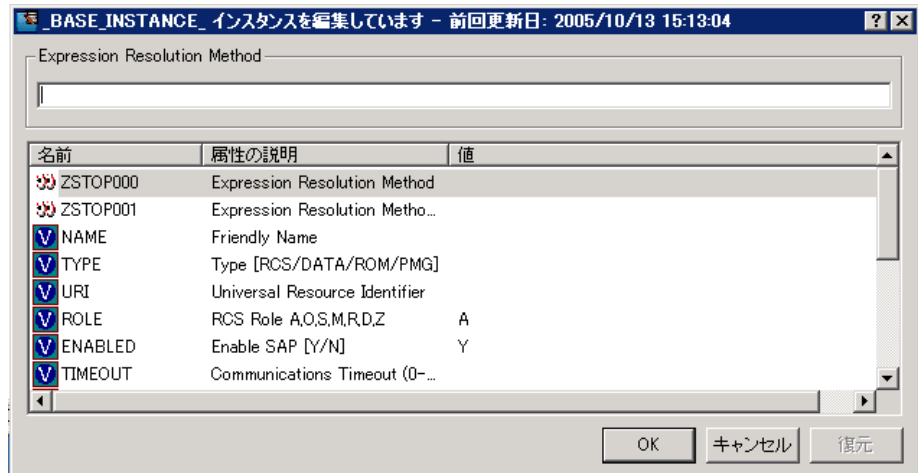
新しいインスタンスの属性値を編集できるようになります。

インスタンスを編集する

この節では、単一のインスタンスを編集する方法について説明します。

インスタンスを編集するには

- 1 ショートカット メニューの **[インスタンスを編集]** をクリックするか、または [CSDB Editor] ウィンドウのリスト ビューで属性の名前をダブルクリックします。[インスタンスを編集] ダイアログ ボックスが表示されます。



ダイアログ ボックスには、インスタンス内の属性およびその現在の値の一覧が表示されます。強調表示された属性が、ダイアログ ボックスの上部のデータ入力フィールドで編集可能な状態となっています。

- 2 ダイアログ ボックスの上部にあるテキスト ボックスに値を入力します。

CSDB Editor が特定の属性に対してどの編集コントロールを使用するかを決定する方法については、オプションの**属性編集コントロール (152 ページ)**を参照してください。

- 3 別の属性を選択して強調表示するには、その属性の名前をクリックします。
- 4 変更するそれぞれの属性の編集を続行します。
- 5 **[OK]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。



プロンプトを選択する場合、[インスタンスを更新する前] チェックボックスをオンにすると、[インスタンスの編集の確認] メッセージボックスが表示されます (図 11 132 ページ) を参照してください。[インスタンスの編集の確認] メッセージボックスが表示されます。

6 [インスタンスの編集の確認] メッセージボックスが表示されます。

- [はい] をクリックすると、インスタンスの更新が完了します。
- [いいえ] をクリックすると、インスタンスに対する変更が破棄され、CSDB Editor のメイン ウィンドウに戻ります。
- [キャンセル] をクリックすると、[インスタンスを編集] ダイアログボックスに戻ります。

接続属性の編集時には、クラス接続の手動編集についての警告がダイアログボックスの下部に表示されます。接続の値の入力は複雑になる場合があり、1 つでも入力ミスがあると、解決の実行時に予期せぬ結果が生じる可能性があります。ドラッグアンドドロップメソッドを行うことをお勧めします。

複数のインスタンスを編集する

CSDB Editor では、1 回の操作で複数のインスタンスが編集できます。

選択したインスタンスのうち 1 つをテンプレートとして使用します。[インスタンス編集] ダイアログボックスには、テンプレートインスタンスの値が表示されます。テンプレートインスタンスの値を変更すると、選択したインスタンスセット全体にその変更が適用されます。変更は、変更操作を確認してダイアログボックスを終了した後で CSDB に保存されます。

同時に複数のインスタンスを編集するには

1 [CSDB Editor] ウィンドウのリストビューのすべてのインスタンスを選択します。

インスタンスを 1 つクリックして選択します。

- 選択したセットにインスタンスを 1 つ追加するには、**Ctrl** キーを押しながらクリックします。

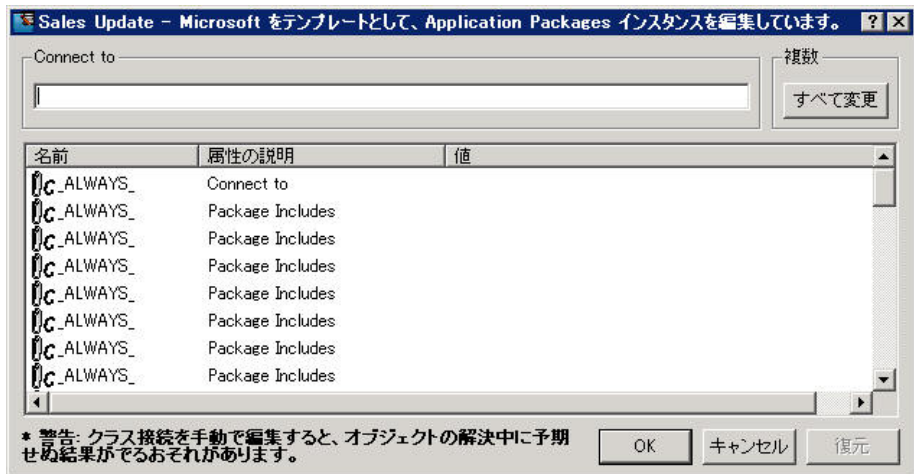
または

- 選択したセットに複数のインスタンスを範囲選択して追加するには、**Shift** キーを押しながらクリックするか、または **Ctrl** キーと **Shift** キーを押しながらクリックします。

選択したインスタンスは、次のように強調表示されます。

名前	インスタンス名	タイプ
_BASE_INSTANCE_	_BASE_INSTANCE_	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
_CLASS_BEHAVIORS_FILE_	_CLASS_BEHAVIORS_FILE_	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
_CLASS_BEHAVIORS_REGISTRY_	_CLASS_BEHAVIORS_REGISTRY_	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
_CLIENT_BEHAVIORS_	_CLIENT_BEHAVIORS_	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
ADOBE	ADOBE	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Amortize Windows NT Platforms	AMORTIZE2_NT	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Drag & View Windows NT Platforms	DRAGVIEW2_NT	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
GS-Calc Windows NT Platforms	GSCALC2_NT	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Radia Behaviors 5/18/99	ADAPT	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Radia Behaviors Panels	RADIA_BEHAVIORS_PANELS	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Radia Client Behaviors	CLIENT_BEHAVIORS_237	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Redbox Organizer Windows NT Platforms	REDBOX2_NT	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Sales Demo Windows NT Platforms	SALES2_NT	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Sales Update - Microsoft	SALES_MS	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Sample Application	SAMPLEAPPLICATION1	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
SAMPLEAPPLICATION	SAMPLEAPPLICATION	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
StratusPad Windows NT Platforms	STRATUSPAD2_NT	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
TightVNC	TIGHTVNC	SOFTWARE PACKAGE インスタンス
Update and Install Behavior August 10, 1998	CLIENT_BEHAVIOR_081098	SOFTWARE PACKAGE インスタンス

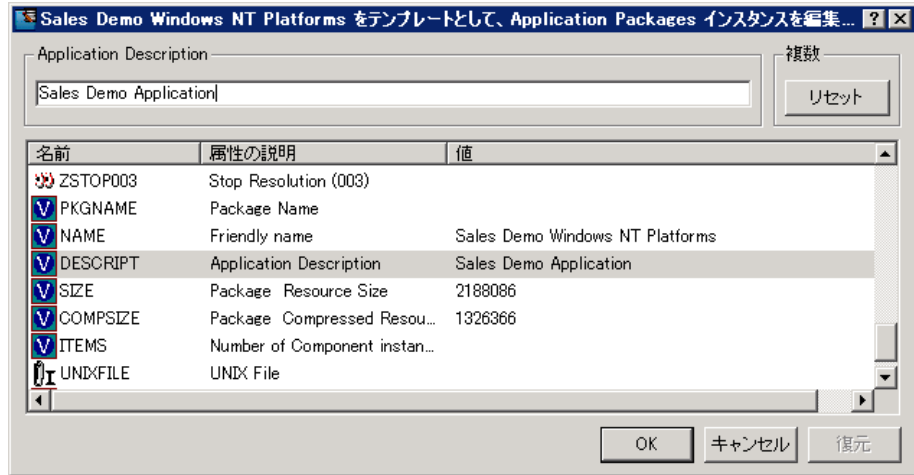
- 2 複数インスタンスの編集操作のテンプレートとして使用するインスタンスを右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。
- 3 **[複数のインスタンスを編集]** をクリックします。次の [インスタンスを編集] ダイアログ ボックスが表示されます。



選択されているインスタンスの数、それらのインスタンスのクラスの簡略名、およびテンプレート インスタンスの簡略名がタイトル バーに表示されます。

- 4 選択したインスタンス セットのすべてのインスタンスにコピーする値を持つ変数を、スクロールしてクリックします。

- テンプレート インスタンスの選択した変数に、目的の値が既に設定されている場合、**[すべて変更]** をクリックして、選択したセットの他のインスタンスにその値をコピーします。
- 選択した変数に目的の値が設定されていない場合は、値を編集します。どちらの場合も、**[すべて変更]** ボタンの文字が**[リセット]** に変わります。



現在選択されている変数の値を元の内容に戻すには、次の操作を行います。

- **[リセット]** をクリックします。
インスタンスの変数をスクロールするとき、このボタンの文字を参照することにより、選択した変数に変更が行われたかどうかを判別できます。
 - ボタンの文字が**[すべて変更]** の場合、現在の**[インスタンスを編集]** セッションではその変数に対する変更は行われていません。
 - ボタンの文字が**[リセット]** の場合、選択した変数に変更が加えられています。

少なくとも 1 つの変数に変更を行ってから別の変数を選択すると、**[復元]** が使用可能になります。

現在の編集セッションで行われたすべての変更を元に戻すには

- 1 **[復元]** をクリックします。**[復元の確認]** メッセージが表示されます。
- 2 現在の**[インスタンスを編集]** ダイアログ ボックス セッションで行われたすべての変更を元に戻すには、**[はい]** をクリックします。

[いいえ] をクリックすると、元の値には戻されず、編集セッションが再開します。

編集セッション中に行われた変更は **[OK]** をクリックし、変更を確認するまで **CSDB** には保存されません。

- 3 テンプレート インスタンスで行った変更を選択したすべてのインスタンスに適用して変更を保存するには、**[OK]** をクリックします。

[キャンセル] をクリックすると、[インスタンスを編集] ダイアログ ボックスセッションが再開します。

[インスタンスを編集] ダイアログ ボックスで **[キャンセル]** をクリックすると、変更を保存せずにダイアログ ボックスが終了できます。

インスタンスの名前を変更する

インスタンスの名前を変更する場合は、注意が必要です。インスタンスは、各自に設定されている接続属性を介して相互に接続されています。インスタンスの名前を変更すると、そのインスタンスに接続されている他のインスタンスの接続が無効になります。この結果、解決の実行時に予期せぬ影響が生じる可能性があります。インスタンスの名前を変更する前に、そのインスタンスに接続されているインスタンスを確認し、該当するインスタンスを適切に編集してください。

インスタンスの名前を変更するには

- 1 ツリー ビューで、インスタンスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。
- 2 **[インスタンス名の変更]** を選択します。[インスタンス名の変更] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 3 インスタンスの新しい表示名 (簡略名) および新しいインスタンス名を入力し、**[OK]** をクリックします。

インスタンスを削除する

インスタンスを削除する場合は、注意が必要です。インスタンスは、各自に設定されている接続属性を介して相互に接続されています。インスタンスを削除すると、そのインスタンスに接続されている他のインスタンスの接続が無効になります。この結果、解決の実行時に予期せぬ影響が生じる可能性があります。インスタンスを削除する前に、そのインスタンスに接続されているインスタンスを確認し、該当するインスタンスを適切に編集してください。

インスタンスを削除するには

- 1 インスタンスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。
- 2 **[インスタンスの削除]** をクリックします。[削除の確認] メッセージが表示されます。
- 3 インスタンスを削除するには、**[はい]** をクリックします。

インスタンスを削除せずにダイアログ ボックスを閉じるには、**[いいえ]** をクリックします。

パスワード認証

この節では、**Client Automation agent** および **Administrator Configuration Server** にログオンするときに **EDMSIGN** および **EDMSIGNR** を使用してパスワード認証を有効にする方法を説明します。

EDMSIGN と EDMSIGNR

SIGNON (**EDMSIGN** を使用) と **RACF_SIGNON** (**EDMSIGNR** を使用) の 2 つの **ZMETHOD** インスタンスの 1 つを使用してセキュリティ設定を有効にします。

RACF_SIGNON インスタンスが **RACF** セキュリティのみを実装するよう見えても、このメソッドはその他のプラットフォーム固有セキュリティアダプタにアクセスするために使用できます。


EDMSIGN

EDMSIGN は **Configuration Server** が **ZPWD** 変数をパスワード認証の使用できるようにします。

- **Client Automation agent** を **Configuration Server** に接続した場合、**ZMASTER** オブジェクトの **ZPWD** 値はユーザーのプロファイルに格納されているパスワードと比較されます。
- **Administrator** を **Configuration Server** に接続した場合、**ZMASTER** オブジェクトの **ZPWD** 値はユーザーのプロファイルに格納されているパスワードと比較されます。

EDMSIGNR

EDMSIGNR は、**Client Automation agent** または **Administrator** がセッションを開始したときに、**Configuration Server** がパスワード認証に **Windows** セキュリティなどの外部セキュリティシステムを使用できるようにします。

 **Windows** ユーザーの注記:このメソッドに送信されるユーザー資格情報は、**Client Automation agent** または **Administrator** マシンではなく、**Configuration Server** を実行しているマシン上で有効になっている必要があります。ユーザーは使用している **Windows** セキュリティのタイプに基づいて、アプリケーションを実行し、サービスを実行するために必要なすべての権限を付与されていることを確認してください。

次の 2 つのタイプの **Windows** セキュリティを区別してください。**Workgroup Security** と **Domain Security**。

- **Windows Workgroup Security**:特殊ユーザー ID (SID) に対する権限は次のように設定されます

Workgroup_Name + Computer_Name + Group_User_Belongs_To + User_Name。

- **Windows Domain Security:** ユーザー権限は、次のように設定されます
Domain_Name + Domain_Group_User_Belongs_To + Computer_Name + Computer_Group_User_Belongs_To + User_Name。

ZMASTER (Client Automation agent 用) または ZADMIN (Administrator 用) オブジェクト内の ZPWD 変数に格納されているパスワードは、そのユーザー ID のネイティブ セキュリティ システムに格納されているオブジェクトと比較されます。

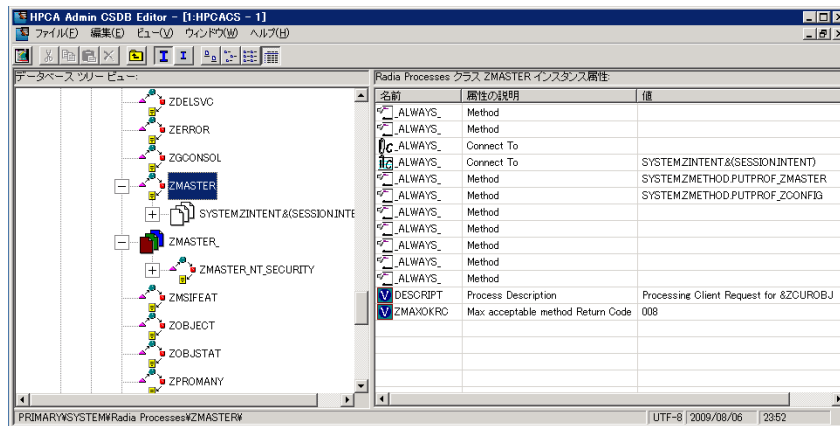
パスワード認証が有効になっていない場合

この節では、**Configuration Server** がログ オン時にパスワードが必要ないことを決定する方法を説明します。

エージェント

パスワード認証は、SYSTEM.PROCESS.ZMASTER 内の最初のメソッド属性が下記の **図 20** に示されているように空白の場合は、**Client Automation agent** に対して有効になっていません。

図 20 パスワード認証が有効になっていない場合



このように **Client Automation agent** を **Configuration Server** に接続した場合、

- 1 **Client Automation agent** が **ZMASTER** オブジェクトを **Configuration Server** に送信した場合、

- 2 **Configuration Server** は `SYSTEM.PROCESS.ZMASTER` インスタンス内で最初の `_ALWAYS_` メソッド属性を探します。
- 3 属性が空白の場合は、パスワードは必要なく、ログオンが許可されます。

管理者

Administrator を接続すると、**ZADMIN** オブジェクトが **Configuration Server** に送信されます。このケースでは、**Configuration Server** は `SYSTEM.PROCESS.ZADMIN` インスタンスを探します。この値が空白の場合は、パスワードは必要ありません。

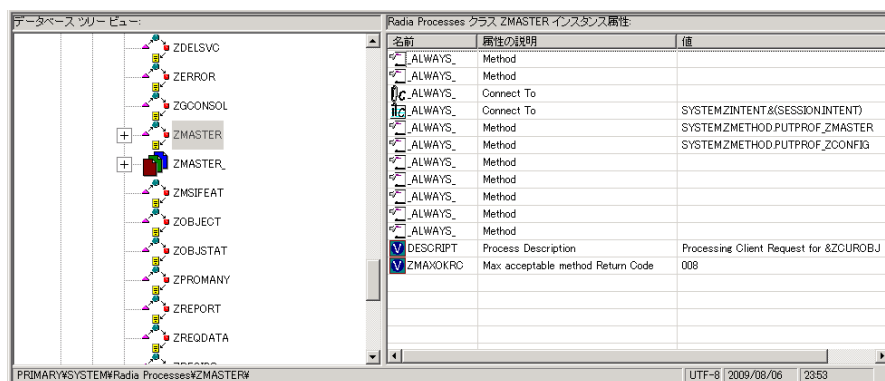
パスワード認証が有効になっている場合

この節では、**Configuration Server** がログオン時にパスワードが必要であることを決定する方法を説明します。

エージェント

エージェントが **Configuration Server** に接続しようとするときに、**Configuration Server** は `SYSTEM.PROCESS.ZMASTER` インスタンスを探します。`SYSTEM.PROCESS.ZMASTER` 内の最初のメソッド属性が値、たとえばに示されているような `SYSTEM.ZMETHOD.AGENT_SIGNON` 下記の **図 21** を含んでいる場合、**Configuration Server** はログオンにパスワードが必要かどうか決定するためのメソッドを探します。

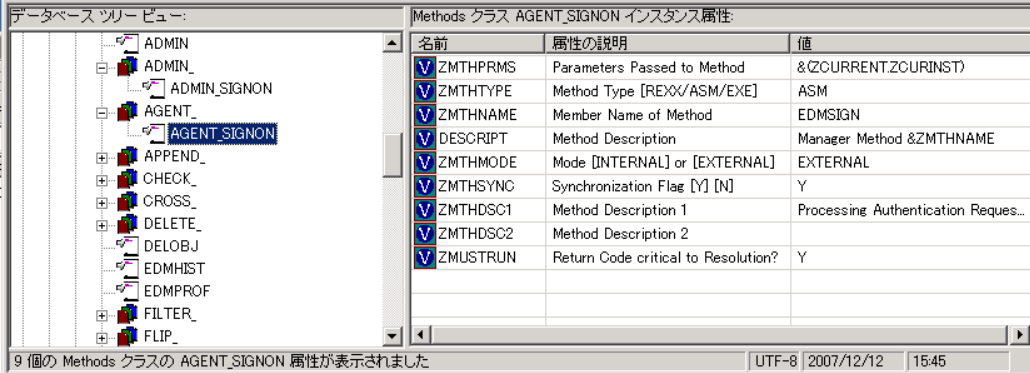
図 21 パスワード認証が有効になっている場合



このように Client Automation agent を Configuration Server に接続した場合、

- 1 Client Automation agent が ZMASTER オブジェクトを Configuration Server に送信した場合、
- 2 Configuration Server は SYSTEM.PROCESS.ZMASTER インスタンス内で最初の _ALWAYS_ メソッド属性を探します。図 21 (164 ページ) に示されているケースでは、AGENT_SIGNON を探します。
- 3 Configuration Server は、このメソッドインスタンスを SYSTEM.ZMETHOD 内で見つけ、メソッドの名前を取得して (ZMTHNAME 属性から)、に示されているように認証に使用します (このケースでは、EDMSIGN または EDMSIGNR) 下記の 図 22。

図 22 EDMSIGN メソッドの SYSTEM.ZMETHOD.SIGNON



名前	属性の説明	値
ZMTHPRMS	Parameters Passed to Method	&@CURRENT.ZCURINST)
ZMTHTYPE	Method Type [REXX/ASM/EXE]	ASM
ZMTHNAME	Member Name of Method	EDMSIGN
DESCRIPT	Method Description	Manager Method &ZMTHNAME
ZMTHMODE	Mode [INTERNAL] or [EXTERNAL]	EXTERNAL
ZMTHSYNO	Synchronization Flag [Y] [N]	Y
ZMTHDSC1	Method Description 1	Processing Authentication Reques...
ZMTHDSC2	Method Description 2	
ZMUSTRUN	Return Code critical to Resolution?	Y

- 4 認証に使用するメソッドが EDMSIGN の場合、Configuration Server は、エージェントから取得したばかりの ZMASTER オブジェクトからパスワードを取得します。そのパスワードがデータベース内のこのエージェント用の ZMASTER オブジェクトの ZPWD 変数内のパスワードと一致する場合は、ログオンが許可されます。一致しない場合は、ログオンは拒否されます。

認証に使用するメソッドが EDMSIGNR の場合、Configuration Server は、パスワード認証に Windows などの外部セキュリティシステムを使用します。

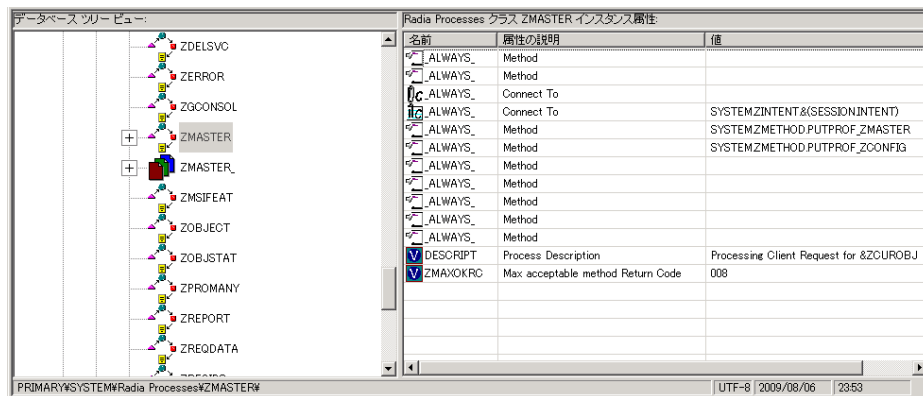
管理者

Administrator が Configuration Server に接続しようとするときに、Configuration Server は SYSTEM.PROCESS.ZADMIN インスタンスを探します。

SYSTEM.PROCESS.ZADMIN 内の最初のメソッド属性が値、たとえば 図 23 (166 ページ) に示されているような SYSTEM.ZMETHOD.ADMIN_SIGNON を含んでいる場合、

Configuration Server はログオンにパスワードが必要かどうか決定するためのメソッドを探します。

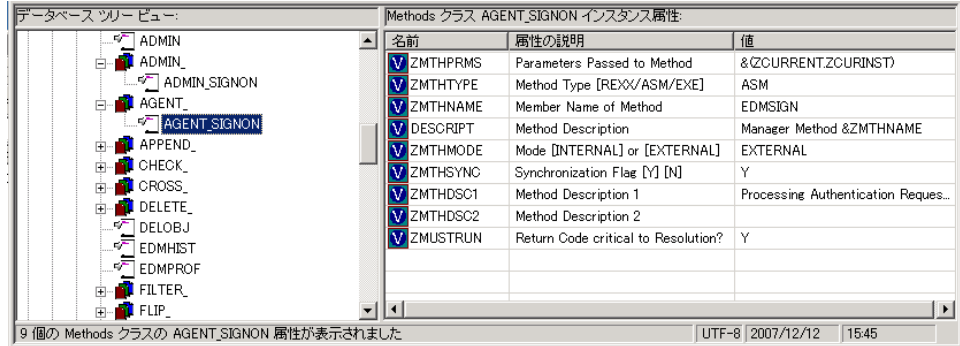
図 23 SYSTEM.PROCESS.ZADMIN



このように、Administrator を Configuration Server に接続する場合、

- 1 Administrator は ZADMIN オブジェクトを Configuration Server に送信します。
- 2 Configuration Server は SYSTEM.PROCESS.ZADMIN インスタンス内で最初の _ALWAYS_ メソッド属性を探します。上記の 図 23 に示されているケースでは、値 SYSTEM.ZMETHOD.ADMIIN_SIGNON_ADMINを探します。
- 3 Configuration Server は、このメソッドインスタンスを SYSTEM.ZMETHOD 内で見つけ、メソッドの名前を取得して (ZMTHNAME 属性から)、認証に使用します (このケースでは、EDMSIGN または EDMSIGNR)。

図 24 EDMSIGN メソッドの SYSTEM.ZMETHOD.SIGNON



- 4 認証に使用するメソッドが EDMSIGN の場合、Configuration Server は、ログオンにパスワードが必要であると判断し、Administrator から取得したばかりの ZADMIN オブジェクトからパスワードを取得します。そのパスワードがデータベース内のこの管理者用の ZADMIN オブジェクトの ZPWD 変数内のパスワードと一致する場合は、ログオンが許可されます。一致しない場合は、ログオンは拒否されます。

認証に使用するメソッドが EDMSIGNR の場合、Configuration Server は、パスワード認証に Windows などの外部セキュリティシステムを使用します。

パスワード認証の有効化

この節は、EDMSIGN および EDMSIGNR を使用したパスワード認証を有効にする手順を説明しています。次の例で、Client Automation エージェントの例では EDMSIGN を使用し、Administrator の例では EDMSIGNR を使用します。これらメソッドは両方ともそれぞれの Client Automation コンポーネントと一緒に使用することができます。

EDMSIGN を使用した Administrator 用のパスワード認証を実装するには

- 1 CSDB Editor を開き、次のパスに移動します。PRIMARY.SYSTEM.ZMETHOD。
- 2 ZMETHOD Class で、SIGNON インスタンスを見つけてコピーし、コピーの名前を変更します (例: AGENT_SIGNON)。

- 3 新しいインスタンス **AGENT_SIGNON** が **ZMETHOD** クラスのインスタンスとしてリストに入れられます。
- 4 **AGENT_SIGNON** をダブルクリックして、**CSDB Editor** のリスト ビューに属性を表示します。
- 5 **ZMTHPRMS** の値を **ZMASTER** に変更します。
- 6 **SYSTEM Domain** の **Radia Processes (PROCESS)** クラスに移動します。
- 7 **ZMASTER** インスタンスをダブルクリックして、**CSDB Editor** のリスト ビューに属性を表示します。
- 8 最初の **_ALWAYS_ (Method)** フィールドの値を **SYSTEM.ZMETHOD.AGENT_SIGNON** として指定します。

Client Automation エージェントに対してパスワード認証が実装されました (**EDMSIGN** を使用)。

EDMSIGNR を使用した Administrator 用のパスワード認証を実装するには


- 1 **CSDB Editor** を開き、次のパスに移動します。 **PRIMARY.SYSTEM.ZMETHOD**。
- 2 **ZMETHOD Class** で、**RACF_** インスタンスを見つけてコピーし、コピーの名前を変更します (例: **ADMIN_SIGNON**)。
- 3 新しいインスタンス **ADMIN_SIGNON** が **ZMETHOD** クラスのインスタンスとしてリストに入れられます。
- 4 **ADMIN_SIGNON** をダブルクリックして、**CSDB Editor** のリスト ビューに属性を表示します。
- 5 **ZMTHPRMS** の値を **ZADMIN** に変更します。
- 6 **SYSTEM Domain** の **Radia Processes (PROCESS)** クラスに移動します。
- 7 **ZMASTER** インスタンスをダブルクリックして、**CSDB Editor** のリスト ビューに属性を表示します。
- 8 最初の **_ALWAYS_ (method)** フィールドの値を **SYSTEM.ZMETHOD.ADMIN_SIGNON** として指定します。



最初の **_ALWAYS_ (Connect To)** フィールドが次のようになることを確認してください。 **ADMIN.ADMINID.&ZUSERID**。

Administrator に対してパスワード認証が実装されました (**EDMSIGN** を使用)。

パスワードの変更

 この節の情報は、Client Automation パスワードのみに適用されます。

Client Automation パスワードは次のいずれかの方法で変更できます。

- Agent Explorer を開き、ZMASTER オブジェクト (CM エージェント用) または ZADMIN オブジェクト (Administrator 用) 内で、ZNEWPWD に新しいパスワードを、ZPWD に古いパスワードを指定します。
- CSDB Editor ログ オン画面で、**[パスワードの変更]** チェック ボックスを選択してパスワード情報を指定します。

アクセス規則と管理者

Administrator のデータベース アクセスは、アクセスの 3 つのレベルのいずれかとして定義できます。詳細は 下記の表 42 を参照してください。CSDB Editor 管理者アクセス規則は、ZACCESS Domain に格納されています。

表 42 管理者アクセス レベル値

Access Value	Definition
ALLOW	<p>Configuration Server は管理者にアクセス権を付与する前に管理者アクセス規則をチェックしません。</p> <p>この値は、データベース内に定義されていた場合でも、すべての管理者アクセス規則チェックを無効にします。</p>
DENY	<p>Configuration Server は、管理者にアクセス権を付与する前に管理者アクセス規則をチェックします。</p> <p>管理者は、その管理者に対して特に許可されたデータベース内に定義されたアクセス規則がある場合を除いて、アクションを実行できません。管理者セキュリティを設定しているときにはこの設定を推奨します。</p> <p>注意:このオプションが指定されている場合は、未定義の管理者は、ADMINID_NULL_INSTANCE_ がそれらの機能へのアクセスを許可するように変更されていない限り、どの CSDB 管理者機能にもアクセス権を持ちません。</p>

Access Value	Definition
無視	Configuration Server は、管理者にアクセス権を付与する前に管理者アクセス規則をチェックします。管理者は、その管理者に対して特に禁止されたデータベース内に定義されたアクセス規則がない限り、アクションを実行できます。

すべての Configuration Servers は edmprof ファイルを持っています。このファイルは、複数のセクションに分割され、CSDB への管理者アクセスに関する動作を含む、Configuration Server のオペレーション パラメータを定義します、詳細は、表 42 (169 ページ) を参照。管理者アクセス パラメータは、MGR_ACCESS セクションにあります。

管理者アクセス値を設定/変更するには

- 1 Configuration Server をシャットダウンします。
- 2 edmprof ファイルを開きます。
- 3 ADMIN 設定を表 42 (169 ページ) の値の 1 つを使用して指定します。
- 4 edmprof ファイルを保存して閉じます。
- 5 Configuration Server を再起動します。

新規アプリケーション ウィザードでサービスを作成する

Packager または Publisher でパッケージを作成したら、CSDB Editor の新規アプリケーション ウィザードを使用してサービスを作成します。サービスとは、Client Automation によって管理されるコンテンツの基本的な構成単位です。CSDB Editor では、サービスは Application (ZSERVICE) クラスとして表示されます。

Task 1 CSDB Editor を開始します。

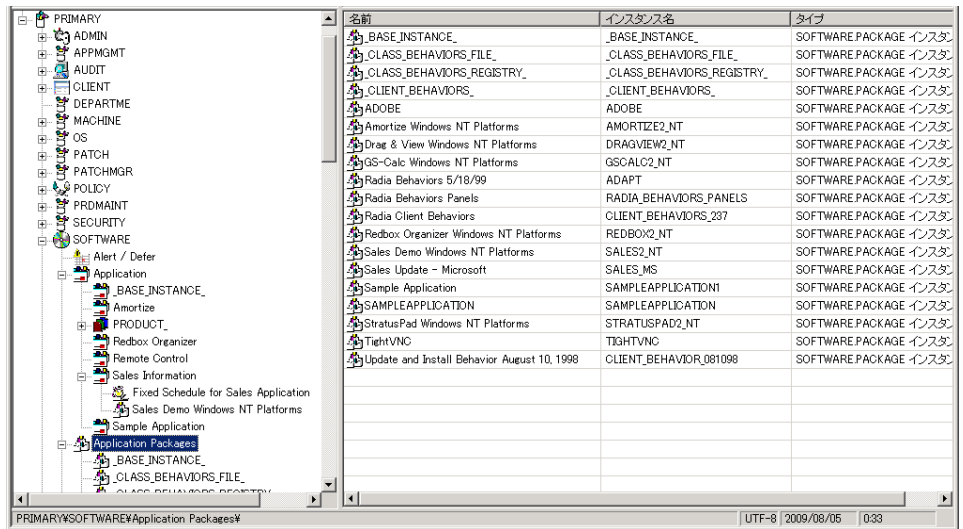
実行方法については、はじめに (125 ページ) を参照してください。

Task 2 パッケージ クラスに移動する

SOFTWARE ドメインの PACKAGE クラスを指定するには

- 1 **[PRIMARY]** をダブルクリックします。PRIMARY ファイルのドメインが、ツリー ビューおよびリスト ビューのアイコンの下に表示されます。

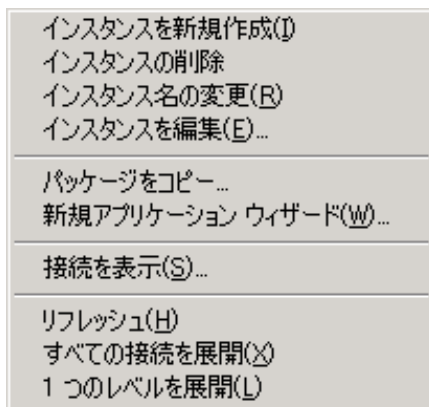
- 2 **[SOFTWARE]** をダブルクリックします。**SOFTWARE** ドメインのクラスが、ツリー ビューおよびリスト ビューのアイコンの下に表示されます。
- 3 **[Application Packages (PACKAGE)]** をダブルクリックして **PACKAGE** クラスを開きます。**PACKAGE** クラスのインスタンスが、次の図に示されているようにツリー ビューおよびリスト ビューのアイコンの下に表示されます。



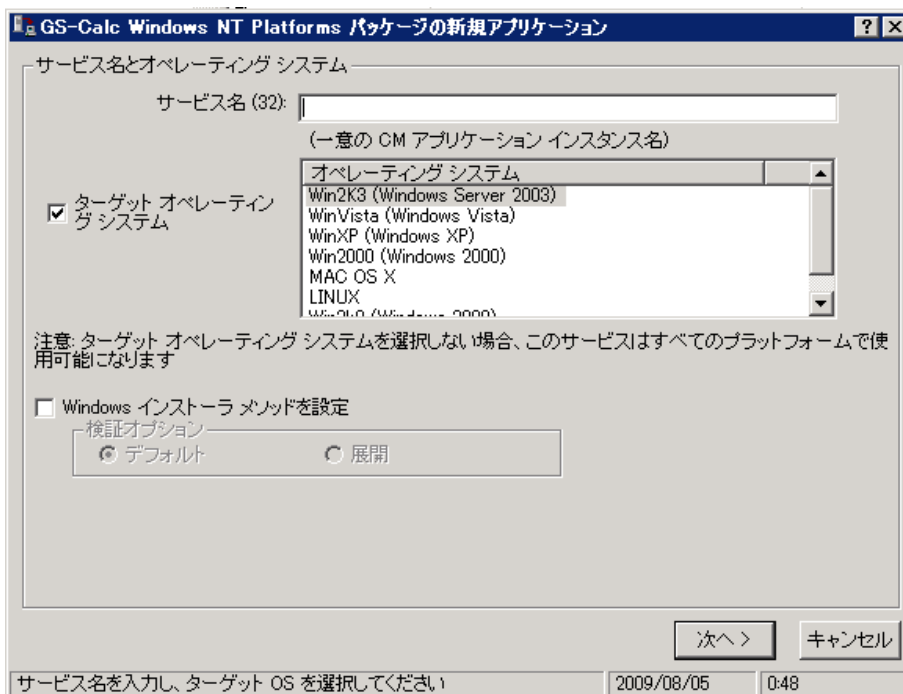
Task 3 サービスの作成

新規アプリケーション ウィザードを使用してサービスを作成するには

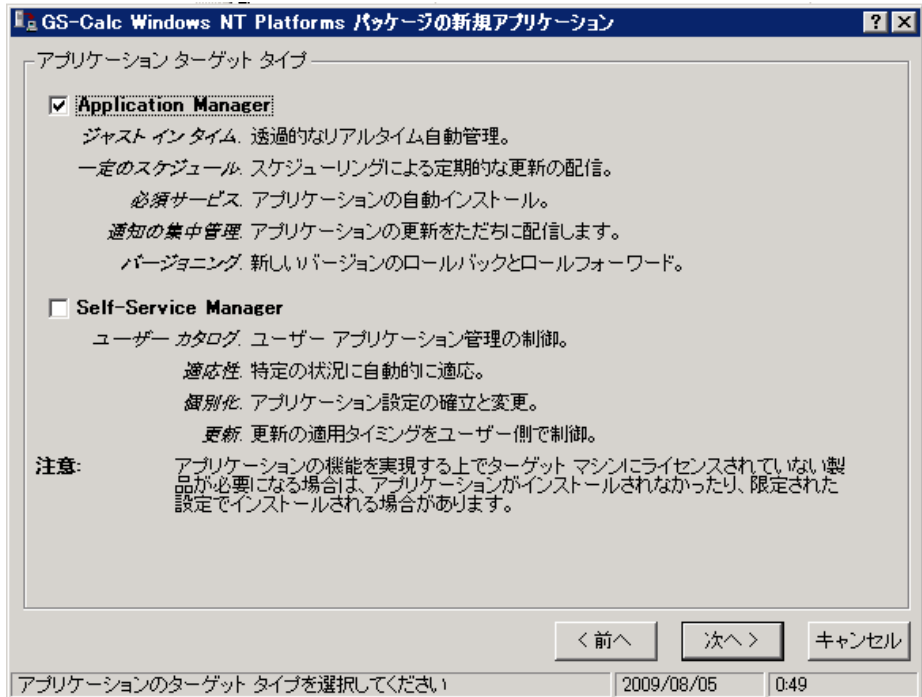
- 1 **SOFTWARE** ドメインの **PACKAGE** クラスで、サービスを作成したい **PACKAGE** クラス インスタンスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。



- 2 **[新規アプリケーション ウィザード]** をクリックします。新規アプリケーション ウィザードを開きます。



- 3 [サービス名 (32)] ボックスに、Application (ZSERVICE) インスタンスとして「WINZIP0009」などの名前を入力します。[インスタンスを操作する \(155 ページ\)](#)のインスタンス命名ガイドラインに従います。
- 4 このサービスの対象となるオペレーティング システムを指定する場合は、**[ターゲット オペレーティング システム]** チェック ボックスをオンにし、目的のオペレーティング システムをクリックします。
[ターゲット オペレーティング システム] チェック ボックスがオフの場合、サービスはすべてのプラットフォームで使用可能です。
- 5 Windows インストーラに対応しているアプリケーションのサービスを作成する場合は、**[Windows インストーラ メソッドを設定]** チェック ボックスをオンにする必要があります。
- 6 **[次へ]** をクリックして、アプリケーションのターゲット タイプを選択します。



- 7 **[Application Manager]** チェック ボックスをオンにします。これにより、サブスクリバに対してサービスが必須アプリケーションとして指定されます。

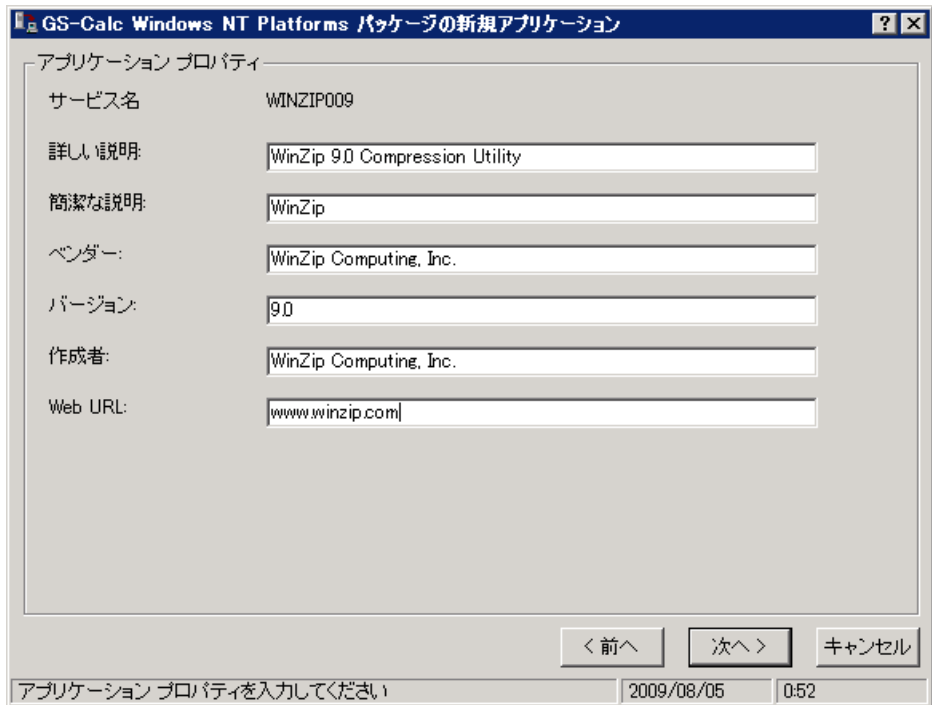


Application Manager では、サブスクリバに配布されるアプリケーションは必須でなければなりません。

または

[Application Self-service Manager] チェック ボックスをクリックして、ユーザーが選択してインストールするオプション アプリケーションとして指定します。

- 8 **[次へ]** をクリックして、アプリケーションのプロパティを入力します。



- 9 [アプリケーション プロパティ] ダイアログ ボックス内のテキスト ボックスに、適切な情報を入力します。
- 10 **[次へ]** をクリックして、**Application Manager** のレポート対象となるイベントを選択します。
- 11 レポートするそれぞれのアプリケーション イベントのチェック ボックスをクリックします。次に、適切なオプション ボタンをクリックして、イベントの成功、失敗、または両方をレポートするかどうかを指定します。
または
Application (ZSERVICE) のベース インスタンスから **ERTYPE** 属性と **EVENTS** 属性の値を継承する場合は、[ベース インスタンスを使用する] をクリックします。イベントレポートは、この 2 つの属性によって制御されます。
- 12 現在の設定をデフォルト設定として保存する場合は、[アプリケーション レベルのイベントレポート] の **[デフォルトとして保存]** をクリックします。
- 13 **[次へ]** をクリックすると、選択したものをまとめて見ることができます。



- 14 **[完了]** をクリックしてアプリケーション インスタンスを作成します。
- 15 アプリケーションが追加されたことを示すメッセージが表示されたら、**[OK]** をクリックします。**ZSERVICE** クラスにインスタンスが表示されます。



新規アプリケーション ウィザードで入力した情報を変更するには、**CSDB Editor** を使用します。**ZSERVICE** インスタンス内で対応する属性を特定して値を変更してください。

エンタイトルメント ポリシーを実装する方法の詳細については、『**Application Manager** および **Application Self-service Manager ガイド**』を参照してください。

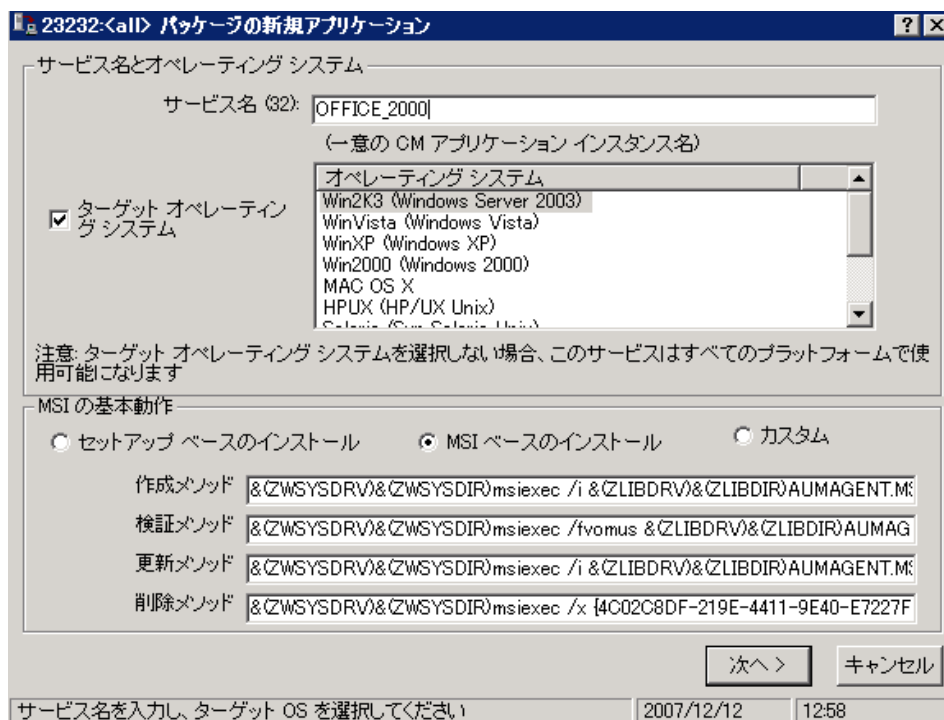
新規アプリケーション ウィザードで MSI の基本動作を定義する

以下のパッケージの場合は、MSI パッケージのコンポーネントを継続的に管理する **Advanced Package Management** ではなく、**Basic Package Management** を使用します。

- 管理インストールをサポートしていないパッケージ。
- **Client Automation** ではインストールまたはアンインストールのみを行い、コンポーネントの管理は行わない。つまり、コンポーネントの検証または修復に **Client Automation エージェント** を必要としません。

Packager for Windows Installer で作成したパッケージの場合、新規アプリケーション ウィザードで [MSI ベースのインストール] が定義できます。これらのパッケージは、CSDB の MSIBASIC クラスに関連付けられています。

図 25 新規アプリケーション ウィザードの MSI の基本動作



管理インストールが実行できないパッケージでは、Client Automation による管理機能が使用できない Basic Package Management がデフォルトになっています。[新規アプリケーション ウィザード] ダイアログ ボックスの [MSI の基本動作] では、パッケージの管理に使用するインストール タイプおよび MSI のネイティブ モードを指定します。

新規アプリケーション ウィザードで [MSI の基本動作] を定義するには

- 1 パッケージのインストール方法に関するインストール タイプを選択します。

セットアップ ベースのインストール

パッケージは SETUP.EXE ファイルでインストールされます。インストール時に MSIEXEC が呼び出されます。このオプションでは、MSI アプリケーションに対してネイティブの setup.exe が実行されます。コマンドラインスイッチ (サイレント インストールを行う /s や完全インストールを行う

ADDLOCAL=ALL など) が **setup.exe** でサポートされている場合は、[作成メソッド] にスイッチが追加できます。すべての **MSI** アプリケーションが同じコマンド ライン スイッチをサポートしているわけではありません。setup.exe の詳細については、お使いのアプリケーションのドキュメントを参照してください。

MSI ベースのインストーラ

パッケージは **MSIEXEC** でインストールされます。

カスタム

パッケージは、カスタム インストール メソッドでインストールされます。

- 2 基本パッケージ管理用に指定されている [作成メソッド]、[検証メソッド]、[更新メソッド]、[削除メソッド] のネイティブ **MSI** のコマンドおよびスイッチを、必要に応じて参照および変更します。

バージョン グループ エディタ

バージョン グループ エディタ は、**Application Manager** がインストールされている場合に **CSDB Editor** で使用できる機能です。バージョン グループ エディタを使用すると、バージョン グループ クラスのインスタンスが作成および編集できます。バージョン グループ エディタの各機能で、バージョン グループの **Version** インスタンスを作成、編集、削除したり、バージョン グループの配布を制御したりすることができます。『**Application Manager** および **Application Self-service Manager** ガイド』を参照してください。

サービスの最適化

サービスの最適化は、サービス内のパッケージの定期的な更新を最も効率的に配布するためにパッチを使用します。新しいパッケージには、前のパッケージでパブリッシュされたファイルの改訂部分および追加部分が含まれています。

パッチ は、既にパブリッシュされ、エージェント コンピュータにインストール済みのアプリケーションをアップグレードまたは修正する際に必要なデータ (バイト) をパッケージ化してパブリッシュしたものです。パッチに格納されているのはパッケージ間の差分だけなので、配布に必要な時間およびネットワーク バンド幅は少なくなります。パッチは、ファイル変更の際に、ファイルが丸ごと置き換える方法よりも効率的に配布できる場合にのみビルドしてください。

サービスの最適化は次のように機能します。

- 1 **Packager** または **Publisher** は、パブリッシュ中のファイルのメッセージ ダイジェスト アルゴリズム (**MD5**) 署名を計算します。**MD5** アルゴリズムでは、メッセージを入力として受け取り、それに対して **128** ビットのフィンガープリント (メッセージ ダイジェスト) が作成できます。この情報は、

Configuration Server に圧縮形式で格納されます。MD5 署名の詳細については、次の Web アドレスを参照してください。

www.faqs.org/rfcs/rfc1321.html

- CSDB 内の PATCH ドメインには、PATCH クラス内の利用可能なパッチのリストが格納されます。パッチのファイル署名は、パッチのデータを格納する関連インスタンスの識別に使用されます。PATCH ドメインの詳細については『Configuration Server データベース リファレンス ガイド』を参照してください。



パッチをユーザーに配布する前に、POLICY ドメインの USER クラス内で ZOBJPTCH 変数を N から Y に変更します。

- CSDB Editor で、[サービスの最適化] は、Application (ZSERVICE) インスタンスのショートカット メニューのオプションです。このオプションを使用すると、選択したアプリケーション コンポーネントのパッチが作成、表示、削除できます。

[サービスの最適化] オプションを使用する

[サービスの最適化] オプションを使用してパッチを作成するには、まず Packager または Publisher でパッケージをパブリッシュさせる必要があります。この方法については、Packager (47 ページ) および Publisher (72 ページ) を参照してください。



パッチは、署名があるパッケージに対してのみ作成可能です。初期設定では、MD5 のみがサポートされています。

バイト レベルの差異計算によるパッチ生成を有効にするために、パッチの対象となるパッケージは、同じロケーション (コンピュータ) からパブリッシュする必要があります。この機能では、インスタンス名のサフィックスにある 8 バイトの CRC が格納されます。



Packager および Publisher は現在、MD5 署名を計算して使用しています。この署名はパッチ機能に不可欠な要素なので、以前に転送されたコンポーネントに対する下位互換性はありません。

ここでは、以下の手順について詳しく説明します。

- パッチの対象となるパッケージの Application (ZSERVICE) インスタンスを SOFTWARE ドメインに作成します。
- サービス最適化ウィザードを使用してパッチを作成します。

この例では、BLD という一連のテキスト ファイルを最適化します。これらのテキスト ファイルは、パッケージ化され、CSDB に転送されています。各ファイルは、SOFTWARE ドメイン内の対応する各 パッケージです。

パッケージを **CSDB** にパブリッシュした後で、**ZSERVICE** インスタンスを作成する必要があります。



新旧パッケージ間のサイズの違いがあまりにわずかなために、パッチを作成すると、かえってファイルのサイズが増えてしまうケースもあります。その場合は、パッチが作成できません。



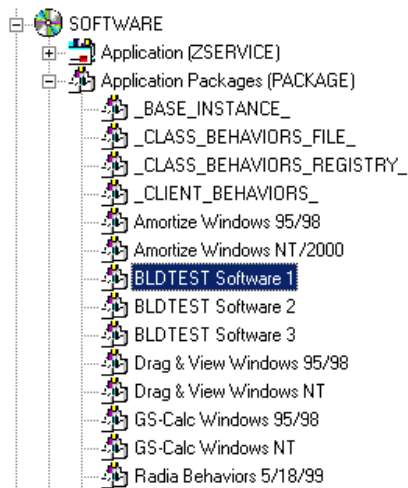
この例で必要なファイルは、以下の命名規則でパブリッシュされています。

- bld1.txt ファイルは、最初は bld.txt という名前でパブリッシュされました。
- 2 番目のファイルが、パブリッシュされる際に bld.txt という名前に変更されたので、元の bld.txt ファイルは bld1.txt という名前になりました。
- 3 番目のファイルが、パブリッシュされる際に bld.txt という名前になったので、2 番目のファイルは bld2.txt という名前になりました。

パブリッシュ時に同じファイル名および同じマシンを使用することで、パッチを正しく作成するのに必要な **CRC** が同じものになります。

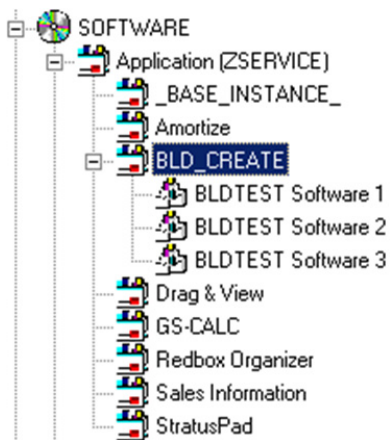
サービスの最適化を設定するには

- 1 ツリービューを展開して、**PRIMARY.SOFTWARE.PACKAGE** クラスを表示し、**BLDTEST** パッケージを指定します。



- 2 **[Application (ZSERVICE)]** クラスを右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。
- 3 ショートカットメニューの **[インスタンスを新規作成]** をクリックします。

- 4 **BLD_CREATE** という新しいインスタンスを作成し、**[OK]** をクリックします。**[BLD_CREATE]** サービスが **CSDB** に追加されます。
- 5 **[Application (ZSERVICE)]** クラスの **[BLD_CREATE]** インスタンスに **BLDTEST1**、**BLDTEST2**、および **BLDTEST3** パッケージをドラッグアンドドロップします。

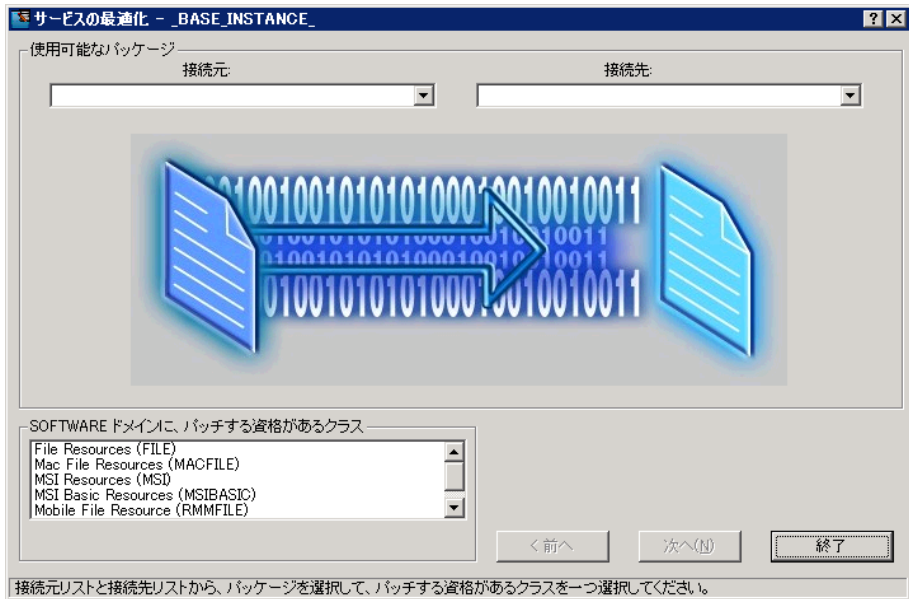


Application Packages (**PACKAGE** クラスから) を格納する **Application (ZSERVICE** クラス) を作成した後に、パッチの作成が開始できます。

ユーザー向けのプランまたはポリシーを作成する場合と同じ方法で、パッチの作成、編集、および削除用のプランを策定することもできます。次に、パッチ作成時に留意する事項をいくつか示します。

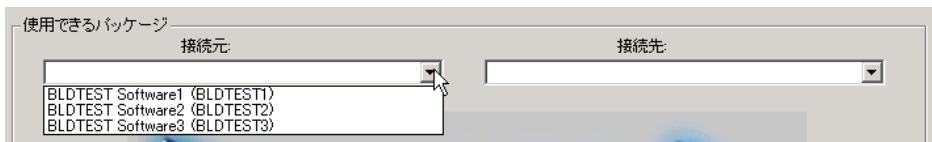
- パッチを作成するパッケージのドキュメントの作成方法をまとめる必要があります。小さなデータベース内で異なるパッチをビルドする場合は、パッチを作成する接続パスのスキーマは比較的わかりやすいものですが、データベースの規模が大きくなると、パッチクラスおよびそのパッチの対象となるパッケージも扱いにくいものになる可能性があります。
- パッチの対象に指定できるのは、**MD5** 署名があるパッケージだけです。
- パッチは、バージョンングとは異なります。パッチの配布に失敗した場合でも、旧バージョンに戻すことはできません。

- 6 **[Application (ZSERVICE)]** クラスの **[BLD_CREATE]** を右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。
- 7 **[サービスを最適化]** をクリックします。サービス最適化ウィザードが表示されます。

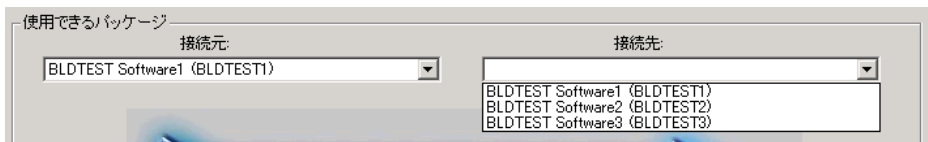


- 8 **【使用できるパッケージ】**の**【接続元】**ボックスの矢印をクリックします。最適化するサービスを適用可能なパッケージが表示されます。**【接続先】**ボックスの矢印をクリックすると、Application (ZSERVICE) のすべてのパッケージが表示されます。この例では、**【接続元】**をクリックすると、Application (ZSERVICE) のBLD_CREATE のすべてのパッケージが表示されます。

手順 6 BLD_CREATE で選択したサービスを適用するパッケージが表示されています。



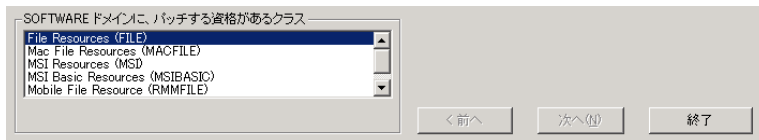
- 9 ドロップダウンリストで、**【BLDTEST Software 1 (BLDTEST1)】** をクリックします。**【使用できるパッケージ】**の**【接続先】**ボックスには、BLD_CREATE サービスでパッチ可能なパッケージが表示されます。
- 10 **【使用できるパッケージ】**の**【接続先】**ボックスをクリックします。最適化するサービスでパッチ可能なパッケージが**【接続先】**に表示されます。
- 11 ドロップダウンリストで、**BLDTEST Software 2 (BLDTEST2)**をクリックします。



- 12 [SOFTWARE ドメインに、パッチする資格があるクラス] で、SOFTWARE ドメイン内のパッチ対象クラスをクリックします。パッケージのファイルリソースが格納されているクラスを選択します。

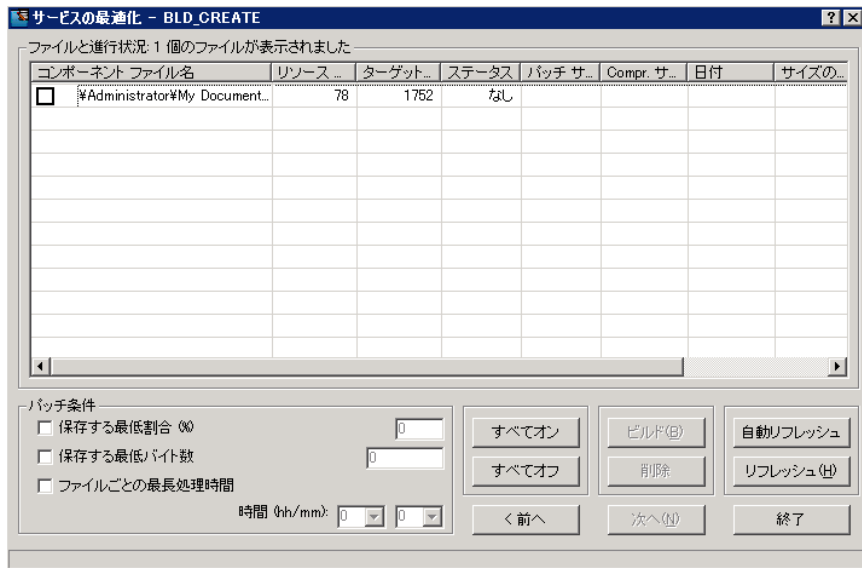
▶ 現在、パッチがビルドできるクラスは、[File Resources (FILE)]、[MAC File Resources (MACFILE)]、[MSI Resources (MSI)]、[MSI Basic Resources (MSIBASIC)]、[Mobile File Resources (RMMFILE)]、[Unix File Resources (UNIXFILE)] です。

この例では、パッチ可能なクラスは [File Resource (FILE)] だけです。



▶ パッケージ内でどのクラスがパッチ可能かを判別するには、[Application (ZSERVICE)] インスタンスを展開して、属性を表示します。インスタンスを確認すると、パッチ可能なリソースが特定できます。

- 13 [File Resource (FILE)] を選択して、[次へ] をクリックして続行します。
[ファイルと進行状況] ダイアログ ボックスが表示されます。



このダイアログ ボックスには、ファイルと進行状況の情報が表示されます。
[使用できるパッケージ] ダイアログ ボックスで指定した内容に基づいて、
インスタンスの情報が収集されます。

下記の表 43 このダイアログ ボックスの [ファイルと進行状況] セクション
にオプションが表示されます。表 44 (184 ページ) は、[バッチ条件] 領域に
オプションが表示されます。

表 43 ファイルと進行状況の情報

カラム	説明
コンポーネント ファイル名	作成中のパッチの名前。
リソース パッ ケージ サイズ	オリジナル リソースのパッケージ サイズ。
ターゲット パッケージ サイズ	オリジナルのターゲット リソースのサイズ。
ステータス	パッケージのステータス。有効な値は、[なし]、[キュー]、 [拒否]、[アクティブ]、[作り付け] のいずれかです。
パッチ サイズ	オリジナルのパッケージ データ (BLD1) と変更されたパッ ケージ データ (BLD2) のサイズの差です。
圧縮後の サ イズ	[リソース パッケージ サイズ] に表示されているパッケージ の圧縮サイズ。

カラム	説明
日付	パッケージがパブリッシュされた日付。
サイズの制限値:	この情報は、[パッチ条件] の [保存する最低割合 (%)] フィールドに入力した値です。この値は、パッチのビルドが完了したときか、パッチ ビルド プロセスが終了するときに表示されます。
% 制限	この情報は、[パッチ条件] の [保存する最低バイト数] フィールドに入力した値です。この値は、パッチのビルドが完了したときか、パッチ ビルド プロセスが終了するときに表示されます。
時間の制限値	この情報は、[パッチ条件] の [ファイルごとの最長処理時間] フィールドに入力した値です。この値は、パッチのビルドが完了したときか、パッチ ビルド プロセスが終了するときに表示されます。

[パッチ条件] のオプションで、パーセント サイズ、バイト数、時間要素などの値を入力すると、パッチのビルドの制約が指定できます。条件を設定すると、ファイル リスト内でチェック ボックスがオンになっている全ファイルに、その条件が適用されます。これにより、パッチの作成が制御できます。

一覧内のファイル数が多い場合は、各ファイルを評価してパッチをビルドするかどうかを指定する手間を省くために、**[すべてオン]** をクリックして、一覧内のすべてのファイルを選択します。次に、[パッチ条件] を設定し、パッチをビルドした方がメリットがありそうなファイルに、パッチのビルドを限定します。

下記の **表 44** は、[パッチ条件] 領域のオプションの詳細について説明しています。これら **3** つのオプションのデフォルトは空 (オンになっていない) のチェック ボックスです。

表 44 [パッチ条件] の情報

ファイル オプション	説明
保存する最低割合 (%)	保存するコンポーネントの最小限の割合 (%) を指定します。この値に達しない場合、パッチはビルドされません。
保存する最低バイト数	パッチが保存する最低限のバイト数を指定します。この値に達しない場合、パッチはビルドされません。
ファイルごとの最長処理時間	パッチに対して最長でどのくらいの処理時間をかけられるかを指定します。ドロップダウン リストで、パッチのビルドにかけられる時間の上限を指定します。時間は、分または時間と分の組み合わせで設定できます。

コンポーネント ファイルを選択すると、パッチのビルド用ボタンが有効になります。

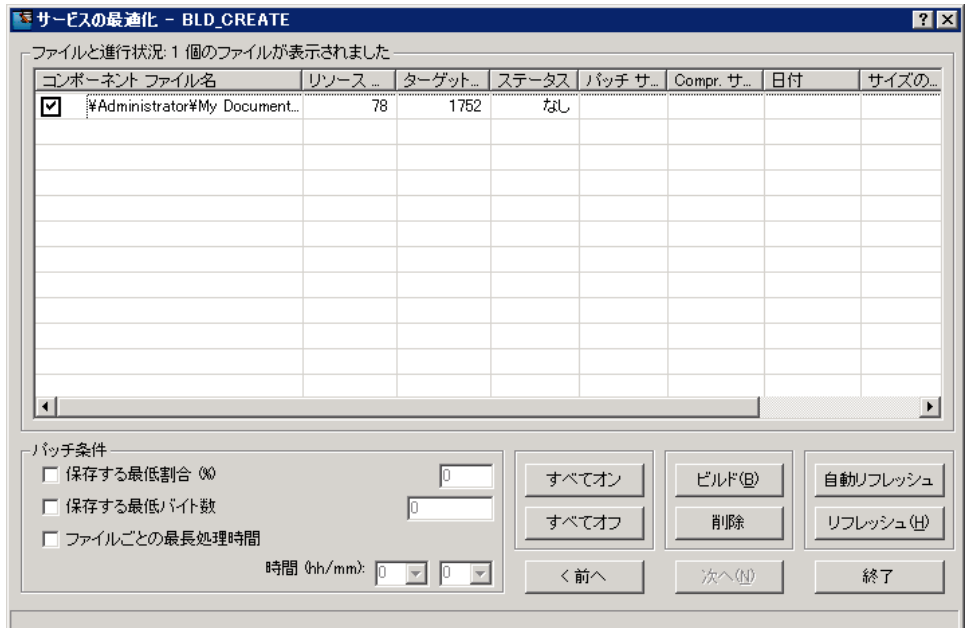
条件を適用するには、対応するチェック ボックスをオンにします。チェック ボックスの隣のデータ入力フィールドが有効になるので、そのデータ フィールドに条件を入力します。各条件が組み合わされてパッチに適用されます。選択したファイルに対してパッチがビルドされるようになるには、適用したすべての条件が満たされなければなりません。

下記の表 45 は、[パッチ条件] ボタンの機能について説明しています。

表 45 [パッチ条件] ボタンの機能

ボタン	アクション
すべてオン	[コンポーネント ファイル名] カラムに表示されている全ファイルが選択されます。
ビルド	一覧内のファイル プロセスを開始します。
自動リフレッシュ	[自動リフレッシュ] をクリックすると、[自動リフレッシュ タイマ] ダイアログ ボックスが表示されます。[自動リフレッシュ] を使用する場合は、1 ~ 99 分のリフレッシュ間隔を入力します。0 を入力すると、自動リフレッシュがキャンセルできます。
すべてオフ	[コンポーネント ファイル名] カラムで選択されている全ファイルの選択が解除されます。
削除	選択したコンポーネント ファイルが削除されます。
リフレッシュ	ビルド ステータスがリフレッシュされます。
前へ	前の画面に戻ります。
次へ	次の画面に進みます。
終了	最適化ウィザードが終了します。

14 パッチを適用するファイルの横のチェック ボックスをオンにします。



15 **[ビルド]** をクリックします。新しいパッチのビルドを確認するメッセージが表示されます。

16 **[はい]** をクリックして続行します。

または

[いいえ] をクリックして終了します。

[はい] をクリックすると、オリジナルとターゲットのペアの現在のパッチが削除され、選択した各ファイル ペアに対するパッチ作成リクエストが Configuration Server に送信されます。

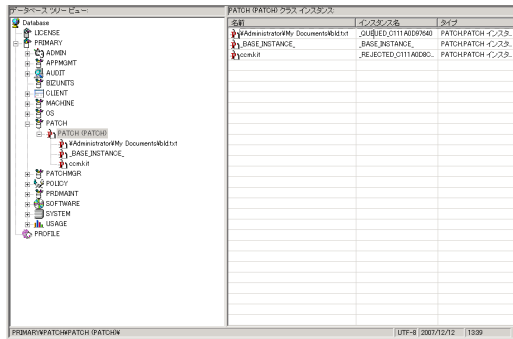
17 **[ステータス]** を更新するには、**[リフレッシュ]** をクリックします。

18 **[終了]** をクリックすると、サービス最適化ウィザードが終了します。

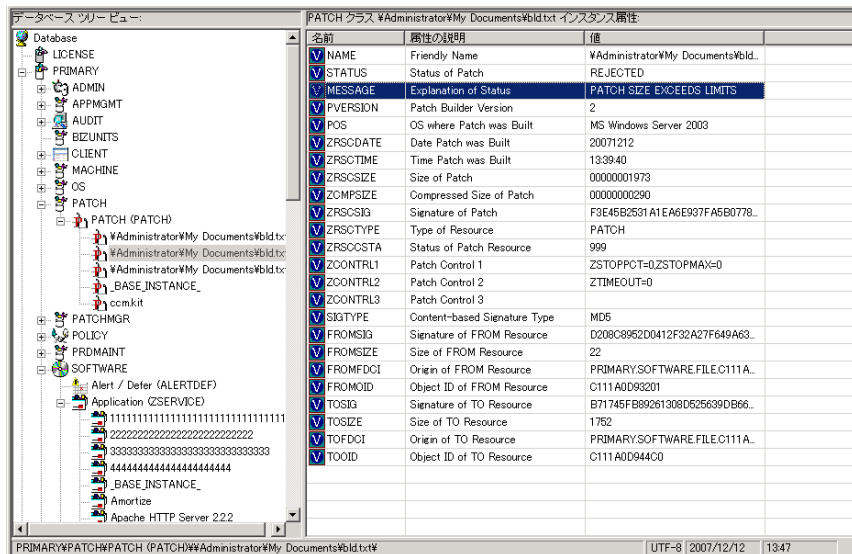
または

[前へ] をクリックすると、[使用できるパッケージ] ダイアログ ボックスに戻り、追加のパッチがビルドできます。

パッチは、PATCH クラスの下にある PATCH ドメインに格納されます。



PATCH.PATCH を調べて、パッチ インスタンスがビルドされたことを確認します。ビルドが拒否されたパッチを調べて、その理由を確認します。要求されたパッチの現在のステータスを確認するには、MESSAGE 変数を参照します。



サービス グループ

Client Automation は、複数のサービス パッケージを必要とする製品を管理することにより、製品のフル インストールやフル オペレーションを実現します。製品が他のサービス パッケージを必要としている場合、または他のサービスに依存している場合は、サービス グループを使用することができます。これには、パッケージ化された MSI 製品も含まれます。この場合は、以下のようなケースが考えられます。

- 複数の MSI サービス パッケージを利用している製品。たとえば、MS Office では、他の言語パック サービスが必要となります。

- **MS Office** のように、サイズが大きい製品。製品スイートの一部の機能だけをインストールする場合に備えて、いくつかの小さな下位サービスに分割しなければならない場合があります。

サービス グループ機能を使用すると、上位のサービス、つまり**マスター**、(ページ) サービス単位で複数のサービスがグループ化できます。この操作により、同じタイプのコンポーネントや関連するコンポーネントを論理的にわかりやすくまとめることができます。

CSDB Editor を使用して定義し、グループ サービスおよびパッケージをマスター サービスに関連付けます。



通知またはタイマーによる更新などのアクションは、必ず**マスター サービス**を対象にしてください。マスター サービスに適用したアクションは、すべての下位サービスに適用されます。

コンポーネントの機能拡張

- **Application Manager**
RADSKMAN コマンドには、複数のサービス リクエストを処理するロジックが含まれます。RADSKMAN では、個々の下位グループに対するリクエストを実行し、最終結果のレポートをマスター サービスに返します。
- **Application Self-service Manager**
Service List サービスリストには、マスター サービスのみが表示されます。

前提条件

サービス グループに対してマスター サービスを設定する前に、以下の設定を変更または確認してください。

- **Configuration Server** (バージョン 4.5 以上):edmprof ファイル内で、MGR_OBJECT_RESOLUTION セクション内の ALLOW_DUPLICATE_INSTANCES が [No] に設定されていることを確認してください。
- **Configuration Server** (バージョン 4.5 以前):edmprof ファイル内で、MGR_OBJECT_RESOLUTION セクション内で次のように設定されていることを確認してください。
 - ALLOW_CIRCULAR_REFERENCE が [Yes] に設定されており、および
 - ALLOW_DUPLICATE_INSTANCES が [No] に設定されていること。
- **CSDB**
複数のサービスをまとめて設定する (インストールに際して依存関係にある各サービスをグループ化する) には、**Application (ZSERVICE)** クラスの

BASE_INSTANCE に ZSVCGRP という変数を追加します。これは ZSVCGRP と呼ばれる変数です。ZSERVICE クラスに追加する場合は、次の表を参考に変数を設定します。

クラスの編集については、[クラスを編集する \(142 ページ\)](#) を参照してください。

表 46 ZSVCGRP 変数値

値	動作
はい	Configuration Server に Y (Yes) と指定すると、サービス グループは、インストールの際に無関係なアプリケーションの集まり、または依存関係にないアプリケーションの集まりとして処理されます。変数を指定しなかった場合、これがデフォルトです。
D	Configuration Server に D (Dependent) と指定すると、サービスグループの下にあるサービスを、インストールの際に依存関係にないものとして処理されます。1 つのサブサービスが失敗した場合、残りのサービスはインストールされません。
いいえ	サービス グループがない場合は、N (No) と指定します。

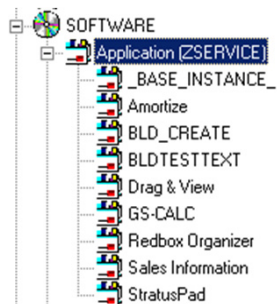
サービス グループ用のマスター サービスの作成

edmprof ファイルに変更を加えた後に、サービス グループ用のマスター サービスインスタンスを作成できます。

CSDB Editor を使用して、マスター サービスに新しい Application (ZSERVICE) インスタンスを作成します。次に、グループのメンバーになる各サービスに、メンバー サービスとマスター サービス間の接続を作成します。サービス メンバーはいつでもマスター サービスに追加することができます。

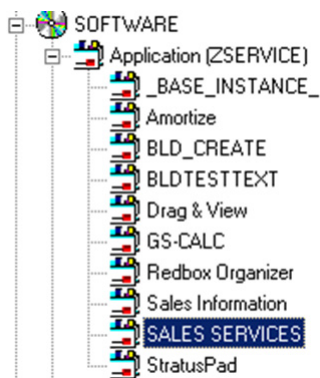
この例では、「Sales Services」というマスター サービス インスタンスを作成します。このマスター サービスは、Amortize サービスと GS-Calc サービスを含みます。

図 26 ZSERVICE クラスのサンプル サービス



サービス グループ用のマスター サービスを作成するには

- 1 CSDB Editor を開き、 PRIMARY.SOFTWARE.ZSERVICE クラスに移動します。
- 2 クラスを展開し、[Application (ZSERVICE)] 内のインスタンスを表示します。
- 3 **[Application (ZSERVICE)]** を右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。
- 4 ショートカット メニューの **[インスタンスを新規作成]** をクリックします。[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 5 新しい ZSERVICE インスタンス (SALES SERVICES) の名前を入力します。
- 6 **[OK]** をクリックしてインスタンスを作成します。新しいインスタンスが Application (ZSERVICE) クラスに表示されます。

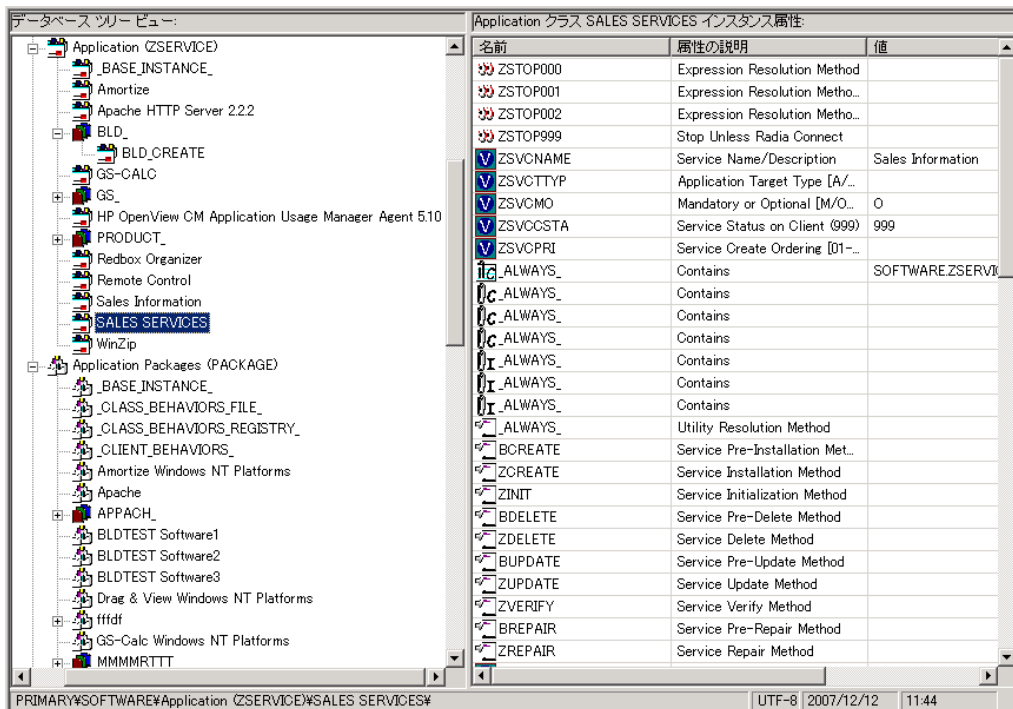


サービスをマスター サービスに追加できるようになりました。

- 7 **[SALES SERVICES]** を右クリックし、ショートカット メニューの **[接続を表示]** をクリックします。[SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックスが表示されます。



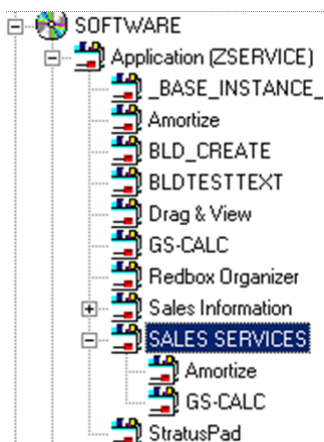
- 8 [SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックスの [Application (ZSERVICE)] をクリックして、[OK] をクリックします。画面のリスト ビューに、ZSERVICE クラスのインスタンスが表示されます。



- 9 右からサービスを選択して **ZSERVICE.SALES SERVICES** インスタンスにドラッグします。
- 10 カーソルがペーパー クリップに変わったらサービスの上にドロップします。
- 11 接続を確認します。
- 12 必要に応じて、概略を示した手順に従ってサービスを追加します。このサービス グループのマスター サービス インスタンスが完了しました。



マスター サービスにグループ化されたサービスは、データベース内でマスター サービスに接続した順番に従って上から順番にインストールされます。マスター サービス グループ内のメンバー サービスは **ZSVCPRI** 内の設定を使用しません。



これで、このマスター サービスをユーザーに配布する準備が整いました。

通知

Notify を使用すると、管理者が 1 つまたは複数のエージェント コンピュータを **Configuration Server** に接続し、指定したアプリケーションが更新または削除できます。**Client Automation** が管理するアプリケーションに基づいて電子メール通知をエージェント コンピュータに送信することもできます。



通知要件の詳細については、『**Application Manager** および **Application Self-service Manager** ガイド』の「**Deploying Applications**」の章を参照してください。

通知機能では、オーディエンス リスト内のエージェント コンピュータと通信します。**Client Automation** がエージェント コンピュータにアプリケーションをインストールすると、そのエージェント コンピュータがオーディエンス リストに追加されます。

通知の使用に際しては、以下のような前提条件があります。

- 通知の前に、サブスクリバが **Configuration Server** に接続していること。通知機能では、**CSDB** の **PROFILE** ファイルに情報が格納されているエージェントにのみ通知を行います。
- サブスクリバが **Client Automation** を使用してアプリケーションを既にインストールしており、指定したアプリケーションのオーディエンス リストに追加されていること。
- (サブスクリバへの通知に電子メールを使用する場合) サブスクリバの電子メール アドレスが、**POLICY** ドメイン内の **USER** クラスにある **USER** インスタンスの **EMAIL** 変数に格納されていること。
- **Configuration Server** が **Notify** 用に適切に設定されている必要があります。**Configuration Server** 設定 ファイル `edmprof` に適切な値を設定する詳細については、**HP ソフトウェア サポート ウェブサイト Engineering Note、OVEN018720: Configuring the Radia Configuration Server for E-mail Notification** を参照してください。




このドキュメントを検索するには、

- **www.hp.com/go/hpssoftwaresupport** に移動してください。
 - **Use self-solve knowledge search** クリックしてください。
 - **HP Passport** ユーザー ID とパスワードを入力します。
 - エンジニアリング ノート番号を **[キーワード、質問、フレーズ、ドキュメント識別子を入力する]** テキストボックスに入力します。
 - **[完全一致]** を選択します。
 - スクロール **製品** リストから、**Client Automation management applications** を選択します。
 - **すべてのバージョン、すべてのオペレーティング システム、技術ドキュメント** を選択します。
 - **[検索]** をクリックします。
- [ビュー オプション] ダイアログ ボックスの [通知] タブで、**CSDB Editor** によるエージェント用通知コマンドの生成方法を選択していること。アプリケーションをインストールするようサブスクリバに通知する際の **UID** 値および **STARTDIR** 値がカスタマイズできます。詳細については、**[通知] タブ (136 ページ)** を参照してください。

CSDB Editor で通知アクションを開始する方法には、以下の 2 種類があります。

- ポリシー クラス インスタンス (USER、DEPT、または WORKGRP) を Application (ZSERVICE) インスタンスにドラッグする方法。オーディエンス リストに含まれるエージェントはいずれもポリシー クラス インスタンスのメンバーであり、アプリケーション インスタンスによって示されているアプリケーションを Client Automation でインストールし、Client Automation で管理しているコンピュータです。
- アプリケーション インスタンスのショートカット メニューで [Notify 認証] を選択する方法。オーディエンス リストに含まれるエージェントは、アプリケーション インスタンスによって示されているアプリケーションを Client Automation でインストールし、Client Automation で管理しているコンピュータです。

 いずれの方法を使用する場合でも、通知を有効にするには、既にアプリケーションがエージェント コンピュータにインストールされている必要があります。

通知が開始されると、CSDB Editor で通知処理を完了するためのダイアログ ボックスが表示されます。どちらの方法で通知を開始しても、表示されるダイアログ ボックスは同じです。

フィルタで CSDB の表示内容を指定する

要求ステートが大きくなった場合は、CSDB Editor で CSDB の内容を制限して表示するように設定すると便利です。これにより、ドメイン、クラス、またはインスタンスの検査や編集の際に、ウィンドウ内を上から下までスクロールして探す手間を省くことができます。CSDB Editor には、ユーザーが定義した条件を基に CSDB の表示内容を制限するフィルタ設定機能があります。この機能は、USER クラスや FILE クラスなど、多数のインスタンスがあるクラスに対して特に有効です。

フィルタ仕様は、CSDB Editor に対してどのドメイン、クラス、インスタンスを表示するかを指示するものです。フィルタは、ドメイン、クラス、またはインスタンスの名前と、指定した条件が一致するかどうかを基に処理されます。

フィルタ仕様には、1 つまたは複数のワイルドカード文字 (「*」や「?」) が指定できます。「*」は、フィルタ対象のコンポーネント名にある任意の数の文字を表します。「?」は、フィルタ対象のコンポーネント名にある任意の 1 文字を表します。

次の表では、有効なフィルタ式の例、およびその式によって選択される名前を示します。

表 47 有効なフィルタ式の例

フィルタ仕様	選択される名前
*	ワイルドカードによってすべての文字が一致したと見なされます。現在有効なフィルタがすべて解除されます。
_*	アンダースコアで始まる名前を示します。
_A	プレフィックスがあり、任意のレベルのプレフィックスの後に「A」が続いている名前を示します。
*.?LL	ピリオドでいったん区切られ、その後に任意の 1 文字と [LL] が続いている名前を示します。
-??WORD.HP?	任意の文字列にダッシュが続き、その後に任意の 2 文字と WORD という文字があり、さらに任意の文字列がピリオドまで続き、次に HP 、さらに任意の 1 文字が続く名前を示します。

適用できるフィルタには、**CSDB Editor** セッション全体にわたって機能するもの (パーマネント フィルタ)と、現在の **CSDB Editor** ウィンドウでのみ有効なもの (テンポラリ フィルタ)があります。

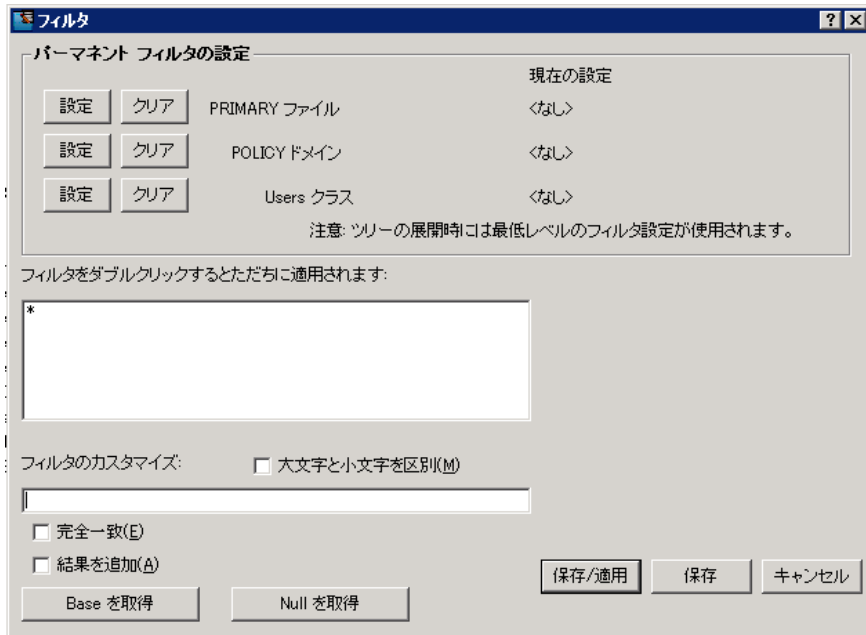
パーマネント フィルタ

パーマネント フィルタ はどの **CSDB Editor** ウィンドウを開いても適用され、**CSDB Editor** セッション全体にわたって機能します。いずれのクラスもそれぞれのパーマネント フィルタに関する指定があります。

パーマネント フィルタの設定または解除は、[フィルタ] ダイアログ ボックスの上部にある [パーマネント フィルタの設定]で行います。

ESB_ というプレフィックスで **USER** クラスのインスタンスをフィルタするパーマネント フィルタを設定するには

- 1 ツリー ビューで、**POLICY** ドメインを展開します。
- 2 ツリー ビューを下にスクロールして、**USER** クラスを探します。
- 3 **USER クラス**を右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。
- 4 **[インスタンスをフィルタ]** をクリックして [インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスを表示します。



- 5 [フィルタのカスタマイズ] ボックスに「**ESB_***」と入力します。
- 6 [パーマネント フィルタの設定] で、ユーザー クラスの横にある **[設定]** をクリックします。フィルタ仕様が表示されます。
- 7 フィルタを適用するには、ダイアログ ボックスの下部の **[保存 / 適用]** をクリックします。ダイアログ ボックスが閉じ、ツリー ビューはフィルタが適用された状態に更新されます。



現在の CSDB Editor セッション内であれば、どのウィンドウを開いても、このフィルタが **USER** クラスに適用されます。

パーマネント フィルタを削除するには

- 1 [インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスで、対応する **[クリア]** ボタンをクリックします。
- 2 **[保存 / 適用]** をクリックしてフィルタを削除します。

テンポラリ フィルタ

[インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスでは、テンポラリ フィルタを適用することもできます。テンポラリ フィルタは、現在の [CSDB Editor] ウィンドウが開いている間だけ有効になります。テンポラリ フィルタを適用するには、[フィルタのカスタマイズ] フィールドでフィルタ仕様を指定し、**[保存 / 適用]** をクリックします。

ESB_ というプレフィックスで USER クラスのインスタンスをフィルタするテンポラリ フィルタを設定するには

- 1 ツリー ビューで、**POLICY** ドメインを展開します。
- 2 ツリー ビューを下にスクロールして、**USER** クラスを探します。
- 3 **USER** クラスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。
- 4 **[インスタンスをフィルタ]** をクリックして [インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスを表示します。
- 5 [フィルタのカスタマイズ] ボックスに「**ESB_***」と入力します。

- 6 **[保存 / 適用]** をクリックします。

テンポラリ フィルタを削除するには

- 1 フィルタ仕様として「*」を指定します。

これはあらゆるドメイン、クラス、インスタンスの名前に一致するので、フィルタを削除することができます。「*」というフィルタ仕様は、高速フィルタリストでよく見かけます。
- 2 **[保存 / 適用]** をクリックしてフィルタを削除します。

ベース インスタンスまたは null インスタンスを表示する

[インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスでは、クラスのベース インスタンスまたは null インスタンスだけが表示されるように設定することもできます。

ベース インスタンスまたは null インスタンスを表示するには

- 1 ツリー ビューで、POLICY ドメインを展開します。
- 2 ツリー ビューを下にスクロールして、USER クラスを探します。
- 3 **USER** クラスを右クリックします。
- 4 ショートカット メニューの **[インスタンスをフィルタ]** をクリックします。
[インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 5 **USER** クラスの **_BASE_INSTANCE_** を表示する場合は **[Base を取得]**、**USER** クラスの **_NULL_INSTANCE_** を表示する場合は **[Null を取得]** をクリックします。
- 6 **[保存 / 適用]** をクリックします。

フィルタ結果を追加する

現在のフィルタ結果の表示内容を保持したまま、追加フィルタを適用したい場合があります。2 つのフィルタ結果を同時に表示するには、次のフィルタを実行する際に **[結果を追加]** チェック ボックスをオンにします。

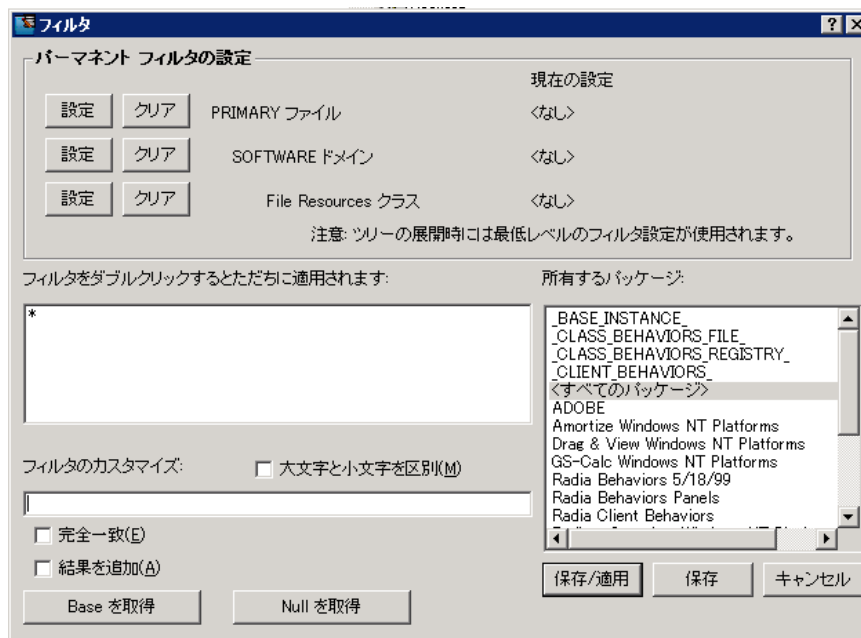
コンポーネント クラスのインスタンスをフィルタする

コンポーネント クラスのインスタンス (**FILE** および **DESKTOP** などのクラスのインスタンス) は、接続先の設定 クラスのインスタンスを基にフィルタすることができます。

コンポーネント クラス (この例では、**SOFTWARE** ドメインの **FILE** クラス) をフィルタする場合、[インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスに、[所有するパッケージ] というスクロール リストが含まれます。図 27 (199 ページ) を参

照)。このスクロール リストにパッケージ インスタンスが表示されます。このスクロール リストにパッケージ インスタンスが表示されます。

図 27 コンポーネント クラスのフィルタ



FILE インスタンスをフィルタして、特定の PACKAGE インスタンスに接続されているものだけを選択するには

- [所有するパッケージ] ボックスの一覧で、パッケージをダブルクリックします。または
- [所有するパッケージ] ボックスの一覧で、パッケージをクリックし、**[保存/適用]** をクリックします。

たとえば、[所有するパッケージ] ボックスの一覧で **[Amortize Windows NT Platforms]** をクリックし、**[保存 / 適用]** をクリックします。[インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスが閉じ、選択したインスタンスが [CSDB Editor] ウィンドウのリスト ビューに表示されます。

高速フィルタ

[フィルタをダブルクリックするとただちに適用されます] というラベルの下にあるボックスでは、使用頻度が高いと思われるフィルタ仕様が表示されます。このフィルタ仕様は、適切な権限を持つシステムの管理者によってカスタマイズ可能です。

このボックス内にあるフィルタを高速フィルタ仕様といいます。ラベルが示すように、目的のフィルタ仕様をダブルクリックすると、そのフィルタ式がすぐに適用されます。高速フィルタは、現在表示されている **CSDB Editor** ウィンドウでのみ有効なテンポラリー フィルタです。

高速フィルタをカスタマイズする

高速フィルタを **CSDB** に保存し、必要な接続を確立すると、[インスタンスをフィルタ] ダイアログボックスに表示されて選択できる高速フィルタのリストが指定できます。[インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスを表示したときに、そのダイアログ ボックス固有の高速フィルタのリストが **CSDB** から取得されます。

CSDB Editor セッションを開始するときに入力したユーザー ID、およびフィルタ対象のコンポーネント (ドメイン、クラス、インスタンス) に基づく解決プロセスで、**CSDB** 内の適切なリストが特定されます。詳細については、『**Essentials ガイド**』の「**Resolution Process**」を参照してください。

特定のドメインに対する高速フィルタのリストが、**PRIMARY** ファイル内の **ADMIN** ドメインにある **ZLIST32** クラスのインスタンスから収集されます。ここで、その仕組みを説明します。

RAD_MAST というユーザー ID でログオンしているとします。管理者のユーザー ID に関連付けられている権限およびデフォルト値は、**PRIMARY** ファイルの **ADMIN** ドメインに格納されています。**ADMINID** クラスには、管理者のユーザー ID ごとのインスタンス (ここでは **RAD_MAST** というインスタンス) があります。

RAD_MAST インスタンスには、**ZADMIN** クラスのインスタンス (ここでは **ZADMIN.MASTER_ADMIN**) への接続が設定されています。

図 28 **RAD_MAST** インスタンスの接続

The screenshot shows the CSDB Editor interface. On the left is a tree view of the database structure, including 'Administrator IDs (ADMINID)' and 'RAD_MAST'. On the right is a table titled 'Administrator IDs クラス RAD_MAST インスタンス属性' (Administrator IDs Class RAD_MAST Instance Attributes). The table has three columns: '名前' (Name), '属性の説明' (Attribute Description), and '値' (Value). The 'ALWAYS' attribute is highlighted, showing its value as 'ZADMIN.MASTER_ADMIN&ZAD...'.

名前	属性の説明	値
ADMNAME	Administrator Name	Master Administrator
ADMDF1	Department Prefix 1	.NULL_
ADMDF2	Department Prefix 2	.NULL_
ADMDF3	Department Prefix 3	.NULL_
ADMDF4	Department Prefix 4	.NULL_
ADMDF5	Department Prefix 5	.NULL_
ADMPFX1	Application Prefix 1	.NULL_
ADMPFX2	Application Prefix 2	.NULL_
ADMPFX3	Application Prefix 3	.NULL_
ADMPFX4	Application Prefix 4	.NULL_
ADMPFX5	Application Prefix 5	.NULL_
ADMPFX6	Application Prefix 6	.NULL_
ADMPFX7	Application Prefix 7	.NULL_
ADMPFX8	Application Prefix 8	.NULL_
ADMPFX9	Application Prefix 9	.NULL_
ADMPFX10	Application Prefix 10	.NULL_
ALWAYS	ZADMIN Connect To	ZADMIN.MASTER_ADMIN&ZAD...

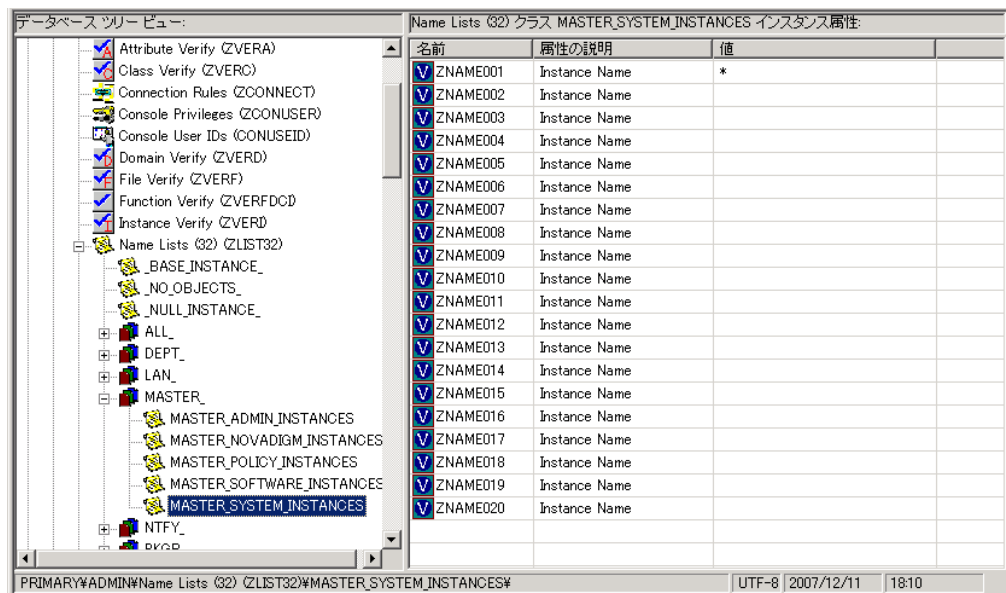
ZADMIN.MASTER_ADMIN への接続属性は、システム メッセージ (&ZADMFUNC) でパラメータを渡します。このシステム メッセージは、ZADMIN.MASTER_ADMIN インスタンスで設定されている接続のうち、どれを実行するかを示します。特定の解決の実行時に、システム メッセージの値と一致する名前を持つ (または ALWAYS が指定されている) 接続だけが実際に確立されます。解決を開始する前に、CSDB Editor によってパラメータの値が設定されます。ここでは、[インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスでインスタンス マスクのリストを取得する必要があるため、ZADMFUNC 変数の値 (すなわち、シンボリック置換後はシステム メッセージの値) が MASKINST に設定されます。

図 29 Client Automation への ZADMFUNC 変数の設定

名前	属性の説明	値
LISTFILE	List Files	ZLIST32.ALL_FILES
LISTDOMN	List File Domains	ZLIST32.ALL_DOMAINS
LISTCLAS	List Domain Classes	ZLIST.ALL_CLASSES
LISTINST	List Class Instances	ZLIST32.ALL_INSTANCES
MASKFILE	List File Masks	ZLIST32.ALL_FILES
MASKDOMN	List Domain Masks	ZLIST32.ALL_DOMAINS
MASKCLAS	List Class Masks	ZLIST.ALL_CLASSES
MASKINST	List Instance Maske	ZLIST32.MASTER_&ZADMDOMN_
CONNECT	Class Connection Rules	ZCONNECT.MASTER_CONNECT...
VEROBJ	List Discreet Instances	ZVERFDIALL_OBJECTS&ZA...
GETINFO	Get Control Information f...	ZLIST.ALL_CLASSES
DELOBJ	Delete Object	ZLIST32.ALL_INSTANCES

これによって、フィルタされるドメイン (SYSTEM) を基に ZLIST32 クラスのインスタンスである ZLIST32.MASTER_& ZADMDOMN_INSTANCES への接続が実行されます。ドメインは ZADMDOMN 変数で示され、CSDB Editor によって動的に設定されます。この変数の値は、管理者がどのクラスを右クリックして [インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックスにアクセスしたかによって決まります。この例では、目的のデフォルト高速フィルタ仕様のリストを含む ZLIST32.MASTER_SYSTEM_INSTANCES (解決プロセスによってシンボリック置換が実行された後で) に接続されます。

図 30 LIST32.MASTER_SYSTEM_INSTANCES への接続



ドメインに対する高速フィルタのリストを変更する場合は、**ZLIST32** クラスに対応するインスタンスを編集します。編集内容は、変更した **ZLIST32** インスタンスに接続するためのユーザー ID を持つすべての管理者に対して適用されます。

特定の管理者を対象にしたカスタム高速フィルタを設定するには、上記の情報を参考にして、**ADMIN.ADMINID** クラスにあるその管理者のユーザー ID インスタンスを、目的の高速フィルタ リストを格納する **ZLIST32** インスタンスに接続します。

CSDB Editor を使用してこれらの変更を行う方法の詳細については、[インスタンスを追加する \(156 ページ\)](#) および [インスタンスを編集する \(157 ページ\)](#) を参照してください。

CSDB で接続規則を維持する

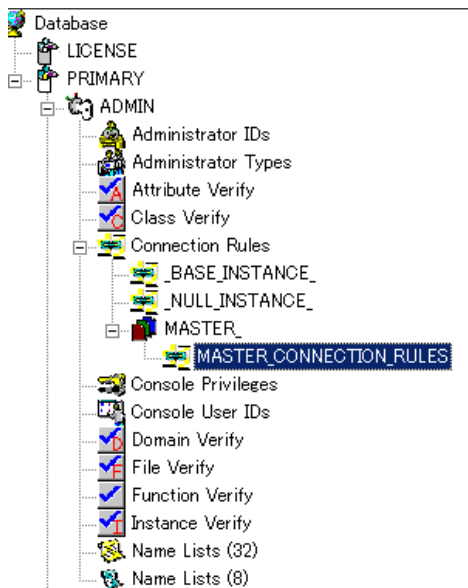
CSDB Editor では、クラスのインスタンス同士がドラッグ アンド ドロップで接続できます。**CSDB** では、クラスのインスタンス同士がドラッグ アンド ドロップで接続できます。

接続規則の概要

新しいクラスをドラッグ アンド ドロップで操作できるようにするには、新しいクラスの規則を確率する必要があります。これらの接続規則は、**PRIMARY** ファイ

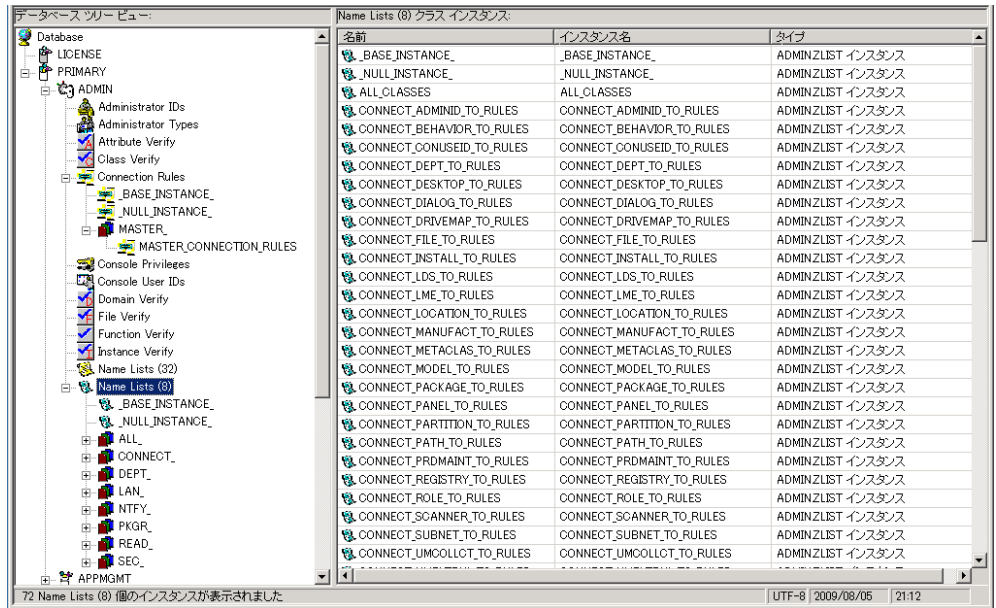
ル、ADMIN ドメインの ZCONNECT クラスの MASTER_CONNECTION_RULES インスタンスに格納されます。

図 31 MASTER_CONNECTION_RULES インスタンス



ZCONNECT クラスには接続規則が含まれ、Name List (ZLIST) クラスにはすべてのクラスのすべての規則が格納されます。接続規則を作成するには、まず ZLIST クラスに規則を作成する必要があります。次に、その規則を ZCONNECT クラスに追加します。

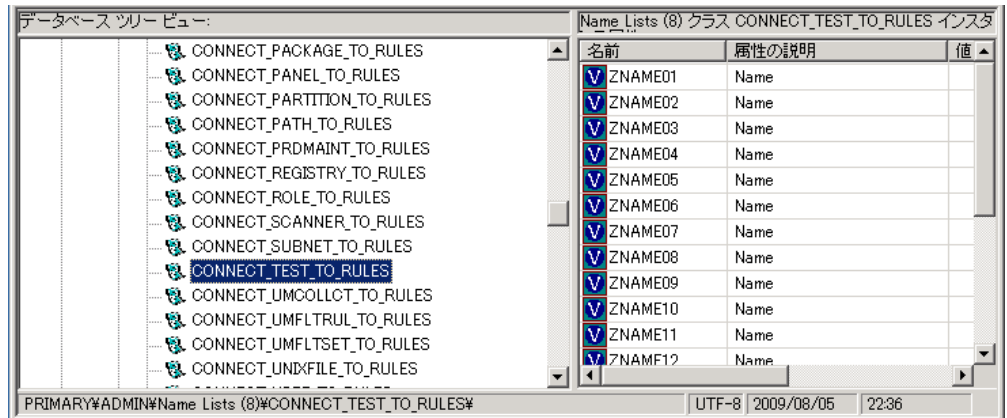
図 32 ADMIN ドメインの Name Lists (ZLIST) クラス



CSDB Editor では、これらの規則に基づいて [接続を表示] ダイアログ ボックスのクラス リストが設定され、ドラッグ アンド ドロップ接続が制御されます。

ここでは、USER クラスに対して確立された接続規則を例に説明します。まず、[図 33](#) (205 ページ) にある ZLIST.CONNECT_USER_TO_RULES インスタンスを確認してください。

図 33 ZLIST.CONNECT_USER_TO_RULES インスタンス



この図に示した **USER** クラスのインスタンスには、以下のクラスへの接続が格納できます。

- WORKGRP
- ZSERVICE
- DEPT
- COUNTRY
- STAGER
- HTTP
- MULTICAST
- MBLCONFIG

ZLIST インスタンスには、**ZLIST** インスタンスによって表されるクラス（この場合は **USER**）から接続するクラスのリスト（最大で **20** クラス）が格納できます。このリストを編集して、他のクラスを追加したり、接続規則からクラスを削除したりすることができます。**CSDB** 内のクラスから接続できるようにするクラスが **20** を超える場合は、**ZLIST** クラス テンプレートを編集して、**ZNAME_{nn}** 変数を追加できます。

接続の規則が **Name List (ZLIST)** クラスで確立されると、その接続タイプが作成されます。ここではドラッグ アンド ドロップの接続規則を作成しているので、**Connection Rules (ZCONNECT)** クラスにクラス変数を追加します。次に、規則変数を編集して、**USER** クラスに対して確立できる接続のタイプを定義します。

これで、新しいクラスに対してドラッグ アンド ドロップで接続が確立できるようになります。下記の 図 34 は、**USER** クラスが格納されている **POLICY** ドメインの接続可能クラスを示しています。

図 34 **POLICY** ドメインの接続可能クラス



新しいクラスで接続を有効にする

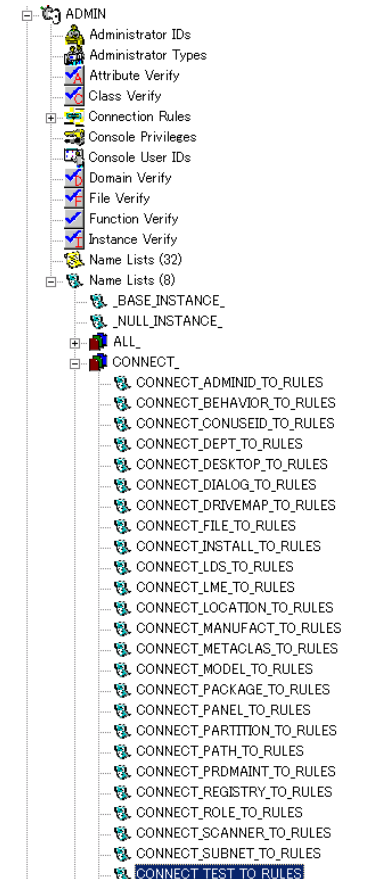
他のクラスへの接続が格納できる新しいクラスを **CSDB** に追加した場合は、次の手順を実行する必要があります。

- 新しいクラスを表すインスタンスを **ZLIST** クラス内に作成します。
- 新しい **ZLIST** クラス インスタンスを設定して、接続規則を使用することができるようにします。
- **ZCONNECT** クラス テンプレートに新しいクラスを追加します。
- **MASTER_CONNECTION_RULES** で、新しいクラスの変数を設定します。

次の手順では、例として **TEST** という新しいクラスの接続を追加する方法を説明します。

- 1 **CONNECT_newclass_TO_RULES** という **ZLIST** クラスのインスタンスを作成します。*newclass* には、たとえば **TEST** などの新たに追加するクラスの名前を指定します。

- 2 CSDB Editor を開き、PRIMARY.ADMIN.Name Lists (8) (ZLIST) クラスに移動します。
- 2 ZLIST を右クリックし、[インスタンスを新規作成] をクリックします。
- 3 新しいインスタンスに上記で推奨している CONNECT_TEST_TO RULES という名前を付けます。この図は、ZLIST クラスに CONNECT_TEST_TO_RULES を追加した状態を示します。



- 4 CONNECT_TEST_TO_RULES インスタンスを編集して、新しいクラスの接続先となるクラスの名前を、それぞれの ZNAME n 変数に設定します。
ここでは、次の図に示すように、例として ZSERVICE クラスおよび WORKGRP クラスに接続できるように ZNAME01 および ZNAME02 に値を設定します。

データベース ツリービュー

Name Lists (8) クラス CONNECT_USER_TO_RULES インスタンス属性

名前	属...	値
√ ZNAME01	Name	WORKGRP
√ ZNAME02	Name	ZSERVICE
√ ZNAME03	Name	DEPT
√ ZNAME04	Name	COUNTRY
√ ZNAME05	Name	STAGER
√ ZNAME06	Name	HTTP
√ ZNAME07	Name	MULTICAST
√ ZNAME08	Name	MBLCONFG
√ ZNAME09	Name	
√ ZNAME10	Name	
√ ZNAME11	Name	
√ ZNAME12	Name	
√ ZNAME13	Name	
√ ZNAME14	Name	
√ ZNAME15	Name	
√ ZNAME16	Name	
√ ZNAME17	Name	
√ ZNAME18	Name	
√ ZNAME19	Name	
√ ZNAME20	Name	

PRIMARY#ADMIN#Name Lists (8)#CONNECT_USER_TO_RULES# UTF-8 2009/08/05 21:14

次に、Connection Rules (ZCONNECT) クラスに接続規則変数を追加する必要があります。

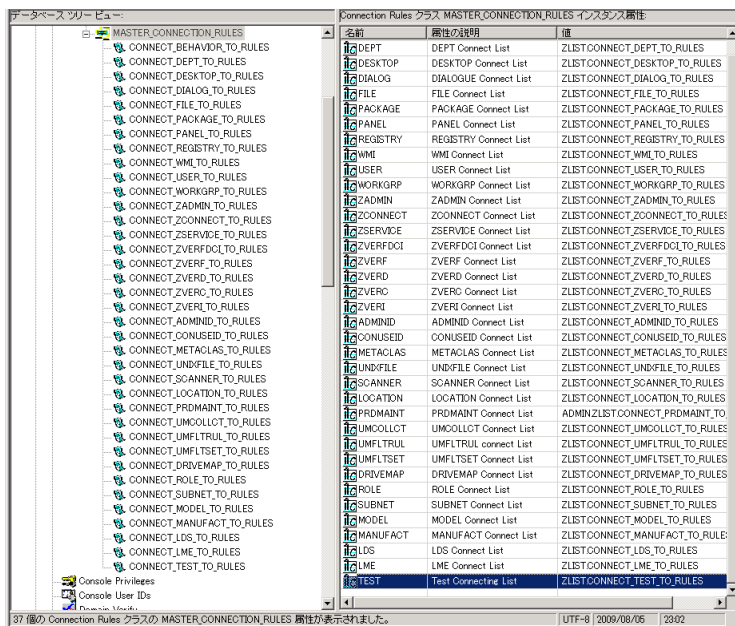
- 5 PRIMARY.ADMIN.ZCONNECT クラスに移動します。
- 6 **ZCONNECT** クラスを右クリックし、ショートカット メニューで **[クラスを編集]** をクリックします。
- 7 新しいクラス変数 (TEST) を、ZCONNECT クラスのクラス テンプレートに追加します。属性の長さは 50 で、説明は「Test Connect List」です。
 - ▶ ZCONNECT クラスに属性を追加する際は、属性タイプを必ず [クラス接続] に変更してください。次の図を参照してください。
 - ▶ クラスの編集については、[クラスを編集する \(145 ページ\)](#) を参照してください。



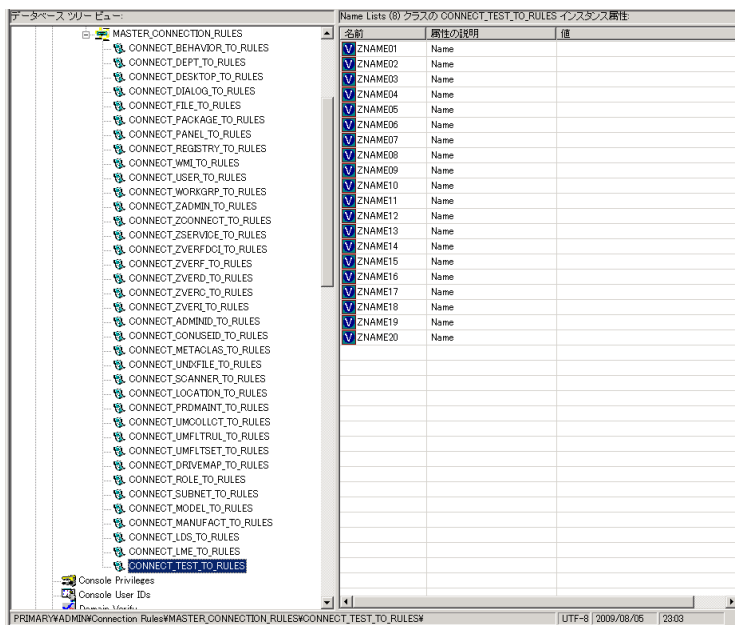
クラス テンプレートに新しい属性を追加したら、**ZCONNECT.MASTER_CONNECTION_RULES** インスタンスで新しい属性の値を設定する必要があります。

- リスト ビュー (画面の右側) で、新しいインスタンスを見つけ、新しい変数の値を **ZLIST.CONNECT_TEST_TO_RULES** に設定します。 *newclass* は、新しいクラスの名前です。

たとえば、次の図で、**TEST** 属性に設定された値を確認してください。



次の図は、MASTER_CONNECTION_RULES に新しい接続規則が追加されたことを示します。これで、新しいクラスの接続がドラッグ アンド ドロップで操作できます。



WI が有効なアプリケーションの管理

この節では、機能セット エディタについて説明します。

機能セット エディタの概要

CSDB Editor は、機能セット エディタを持ち、そのウィザード形式のインターフェイスにより、**Client Automation** で管理する **Windows** インストーラ対応ソフトウェア パッケージの機能が容易に選択および設定できます。**Client Automation** 機能セット エディタを使用することで、パッケージ化および配布のテクノロジーと **Windows** インストーラのさまざまな機能が同時に使用できます。

Office 2000 のリリース以降の **Microsoft** 製品には、**Windows** プラットフォーム上でソフトウェア製品のインストールおよび管理に使用する新しいテクノロジー (**Microsoft Windows** インストーラ) が導入されています。**Client Automation** 製品では、**Windows** インストーラ対応のアプリケーションが以下の方法でインストールおよび管理できます。

Publisher では、**Windows** インストーラ対応アプリケーションが、基本メソッドと詳細なメソッドでパブリッシュおよび設定できます。

 **Windows Installer** 有効アプリケーションに関する詳細については、『**Extensions for Windows Installer Getting Started** ガイド』を参照してください。

Windows Installer 有効アプリケーションに関する詳細については、[Windows インストーラ ファイルをパブリッシュする \(88 ページ\)](#) を参照してください。

CSDB を使用すると、**HP** 製品に **Windows** インストーラの機能セットが格納できます。

Client Automation を使用すると、ポリシーを管理したり状態データを収集したりすることができます。

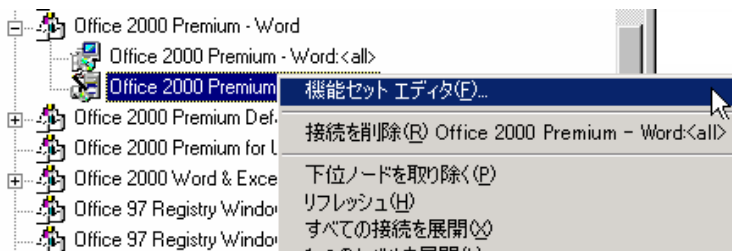
Client Automation では、**Windows** インストーラ変換 (**MST**) ファイルを作成しなくても、**MSI** パッケージのカスタマイズが制御できます。

Client Automation では、以前にインストールされた **Windows** インストーラを探索し、そのパッケージが管理できます。**CM** を使用して配布していない **Windows** インストーラにも対応しています。

機能セット エディタにアクセスする

機能セット エディタにアクセスするには

- 1 機能を編集したいソフトウェア パッケージを表す **Application Packages** インスタンスを探します。
- 2 このインスタンスをダブルクリックして、その **MSI** と **MSIFEATS** の接続を表示します。
- 3 **MSIFEATS** 接続を右クリックすると、下の図のようなショートカット メニューが表示されます。



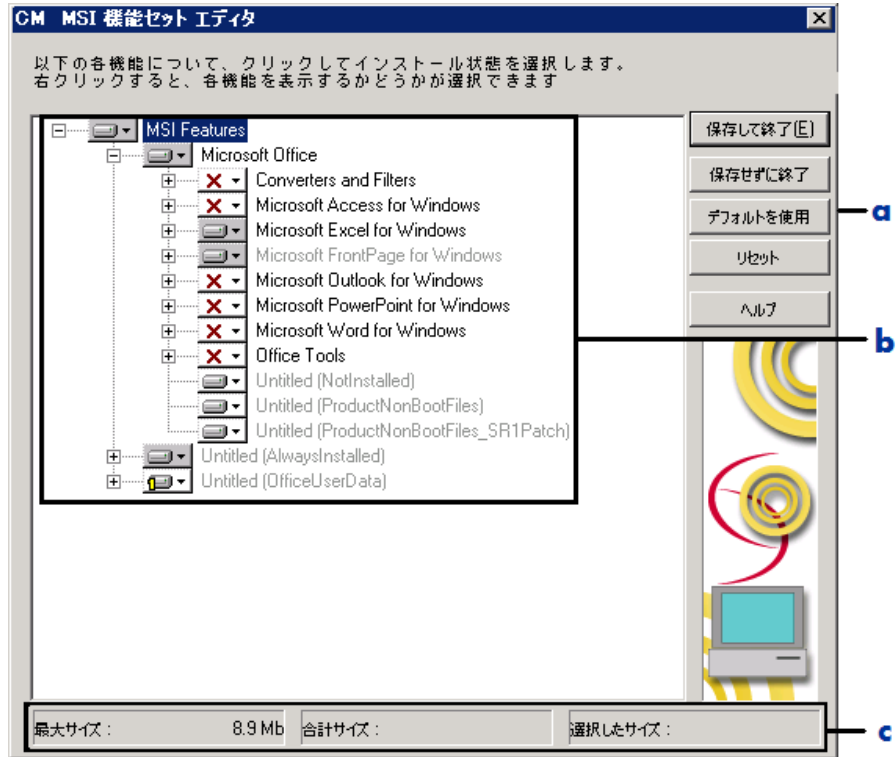
- 4 ショートカット メニューで **[機能セット エディタ]** をクリックします。

[機能セット エディタ] ダイアログ ボックスが表示されます。

MSI 機能セット エディタについて

図 35 (213 ページ) に示すように、機能セット エディタのインターフェイスは、左側のツリー ビュー、右側のボタン リスト、最下部のパッケージ サイズ情報の 3 つで構成されています。

図 35 【機能セット エディタ】ダイアログ ボックス



凡例

- a ボタン
- b ツリー ビュー
- c パッケージ サイズ情報

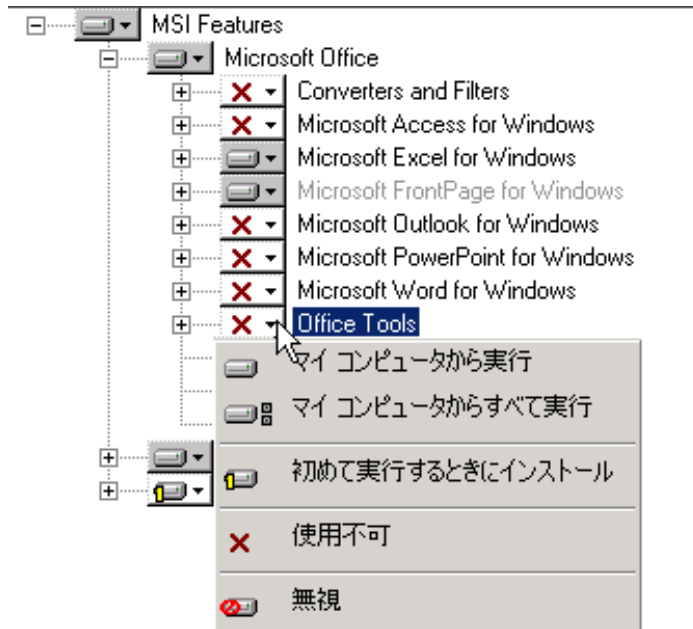
ツリー ビュー

各機能は、ツリー コントロールを使用して移動できるよう階層構造にグループ化されています。上位レベルの機能は、その下位レベルの 2 つ以上の機能 (子機能) で構成されます。ツリー内の移動は、一般的な Windows エクスプローラ ツリーと同じです。

機能メニュー

各機能の横にあるドロップダウン ボタンをクリックすると、機能メニューが表示されます。

図 36 機能メニュー







各機能には、その機能のインストール方法やメンテナンス方法を判別するための属性が割り当てられています。


このツリー内で機能名が太字で表示されているのは、MSI 機能セット エディタの現在のセッションで属性が変更された機能です。

通常、上位レベルの機能に属性を設定すると、その機能を構成するすべての子機能にも自動的に適用されます。この規則の例外については、表 48 (215 ページ)の属性の説明を参照してください。

表 48 機能メニューのオプション

機能のアイコンと名前	機能の説明
 マイ コンピュータから実行	<p>この機能は、エージェント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされ、最適なパフォーマンスを得ることができます。</p> <p>この属性は、すべての子機能に適用されます。子機能の属性が既に [初めて実行するときにインストール] または [使用不可] に設定されている場合には適用されません。</p> <p>子機能は、ツリー上で特定の機能の下に分岐接続された状態で表示されます。</p>
 マイ コンピュータからすべて実行	<p>この機能は、エージェント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされます。子機能のすべての属性は [マイ コンピュータから実行] になり、エージェント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされます。</p> <p>その機能がユーザーのマシンから実行されるため、最適なパフォーマンスを得ることができます。モバイル コンピュータのユーザーは、モバイル環境で使用する際に必要なすべての機能を [マイ コンピュータから実行] または [マイ コンピュータからすべて実行] に設定しておく必要があります。そうしないと、コンピュータのハード ドライブにインストールされていない機能を外出先で使用する場合に、オリジナルのインストール メディアを要求するプロンプトが表示されます。メディアを持ち歩いていない場合は、その機能を使用することができません。</p>
 送信元から実行	<p>この機能は、エージェント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされず、管理インストール ポイント (AIP) から実行されます。これは、通常はエージェント コンピュータにアクセス可能なネットワーク共有です。</p> <p>この属性を選択した場合、その機能のすべての子機能に属性が自動的に適用されます。ただし、既に属性が [使用不可] に設定されている子機能には適用されません。</p> <p>[送信先から実行] および [送信先からすべて実行] 属性は、パフォーマンスを低下させて AIP へのアクティブ接続のニーズに対してローカルハード ドライブの容量を節約します。</p>
 送信先からすべて実行	<p>この機能は、エージェント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされず、AIP から実行されます。これは、通常はエージェント コンピュータにアクセス可能なネットワーク共有です。</p> <p>この属性を選択すると、子機能に現在割り当てられている属性に関わりなく、[送信先から実行] 属性がすべての子機能に自動的に適用されます。</p> <p>[送信先から実行] および [送信先からすべて実行] 属性は、パフォーマンスを低下させて AIP へのアクティブ接続のニーズに対してローカルハード ドライブの容量を節約します。</p>

機能のアイコンと名前	機能の説明
 初めて実行するときにインストール	<p>この機能は、エンド ユーザーがショートカットやメニューからその機能を使用しようとするまでは、エージェント コンピュータにインストールされません。ショートカットからアクセスできる機能のショートカットは、そのパッケージが初めてインストールされたときに配布されます。エンド ユーザーが初めてその機能呼び出すと、機能をサポートするのに必要なファイルがエンド ユーザーのハード ディスクにインストールされ、その後もインストールされたままとなります。次回その機能を使用するときは、エージェント コンピュータから実行されます。</p> <p>このような機能をインストールするためには、エージェント コンピュータで リダイレクタが動作しており、そのコンピュータから Configuration Server に接続できる必要があります。</p> <p>これにより、実際に使用する機能のみがハード ディスクにインストールされるため、エージェント コンピュータのディスクの使用容量を最小限に抑えることができます。一方、エンド ユーザーから見ると、その機能を初めて呼び出したときにインストールが必要になります。</p> <p>この属性を選択した場合、その機能のすべての子機能に [初めて実行するときにインストール] 属性が自動的に適用されます。ただし、既に属性が [使用不可] に設定されている子機能には適用されません。</p>
 使用不可	<p>この機能はインストールされません。ユーザーからは使用できず、他のサービスに影響を及ぼす可能性があります。すべての子機能の属性も、[使用不可] に設定されます。</p> <p>たとえば、あるサービスを MS Word を配布するように定義し、Office のその他の機能をすべて [使用不可] に設定します。そして、別のサービスを MS Excel を配布するように定義し、Office のその他の機能をすべて [使用不可] に設定します。</p> <p>ここで、あるエンド ユーザーが MS Word サービスをインストールしたとします。インストールは正常に完了し、Office の他の機能はインストールされていません。その後しばらくして、同じエンド ユーザーが Microsoft Excel サービスをインストールしたとします。この場合、MS Excel サービスでは、Office の他の機能がすべて [使用不可] に設定されています。そのため、MS Excel はインストールされますが、一方で MS Word はアンインストールされてしまいます。</p> <p>アンインストールされた機能を必要とするオプションをエンド ユーザーが選択すると、もう一度セットアップを実行して機能のインストール状態を変更するよう指示するメッセージが表示されますしかし、Client Automation 製品で管理されているソフトウェアのエンド ユーザーは、通常はセットアップにアクセスできないようになっています。</p> <p>[使用不可] 属性は、エンド ユーザーに使用を許可しない機能にのみ割り当てるようにしてください。また、エンド ユーザーがメッセージを受け取った場合にどのように対処したらよいかを周知しておく必要があります。</p>

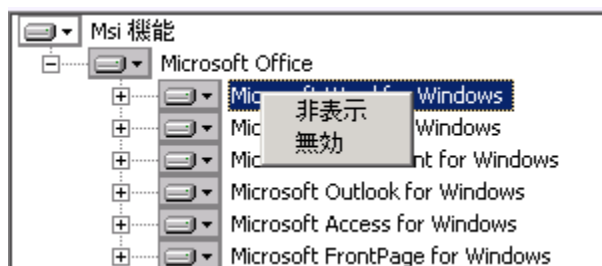
機能のアイコンと名前	機能の説明
 無視	<p>注意: この機能は下位互換用に用意されています。サービスによって無視される必要がある機能を判別する必要はありません。</p> <p>[無視] 属性が設定された機能はインストールされません。エンドユーザーはこの機能が使用できませんが、そのことが他のサービスに影響を及ぼすこともありません。Client Automation の管理製品では、その機能が管理対象ソフトウェアのコンポーネントではないかのように扱われます。すべての子機能の属性も [無視] に設定されます。</p> <p>たとえば、あるサービスを MS Word を配布するように定義し、Office のその他の機能をすべて [無視] に設定します。そして、別のサービスを MS Excel および PowerPoint を配布するように定義し、Office のその他の機能をすべて [無視] に設定します。ユーザーが両方のサービスをインストールすると、2 番目にインストールしたサービスのインストールが、1 番目にインストールしたサービスによってインストールされた機能に影響を受けることはありません。</p> <p>これら 2 つのサービスを、1 つのパッケージから作成して CSDB にパブリッシュすることも可能です。その場合は、パッケージをコピーして別の名前に変更します。次に、これらのパッケージを機能セット エディタを使用して編集します。</p>

このツリー内で機能名が太字で表示されているのは、**MSI 機能セット エディタ** の現在のセッションで属性が変更された機能です。

Hide と Disable 機能

機能名（下図では、**Microsoft Word for Windows** を例として）を右クリックすると、**[表示しない]** と **[無効]** のショートカットメニューが表示されます。

図 37 [表示しない] と [無効] のショートカットメニュー



[表示しない] をクリックすると、機能とそのすべての子機能が、ネイティブの **Microsoft Windows** インストーラの **[機能の追加/削除]** ダイアログ ボックスには

表示されなくなります。[機能の追加/削除] は、エンド ユーザーがコントロールパネルの "プログラムの追加と削除" アプレットを使用してアクセスするダイアログボックスです。

非表示に設定したすべての機能は、MSI 機能セット エディタのツリーでは、機能名の前にプレフィックス (H) が追加された状態で表示されます。


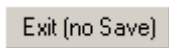
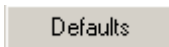


[無効] をクリックすると、機能とそのすべての子機能が Client Automation エージェントによって無視されます。無効にした機能の値は、Client Automation インスタンスの値ではなく、MSI ファイルと MST ファイルの組み合わせから Windows インストーラによって決定されます。

非表示に設定したすべての機能は、MSI 機能セット エディタのツリーでは、機能名の前にプレフィックス [D] が追加された状態で表示されます。

機能セット エディタのボタン

機能セット エディタのボタンは、[機能セット エディタ] ウィンドウの右側にあります。下記の表 49 で、これらのボタンを説明します。

表 49 機能セット エディタのボタン

ボタン	機能の説明
	[保存して終了] をクリックすると、ファイルの属性に加えた変更が保存され、機能セット エディタが終了します。機能セット エディタは、右上隅の X をクリックして終了させることもできます。
	[保存せずに終了] をクリックすると、属性に加えた変更が破棄され、機能セット エディタが終了します。機能セット エディタは、右上隅の X をクリックして終了させることもできます。
	[デフォルト] をクリックすると、すべての機能の属性が、そのソフトウェアの出荷時の MSI ファイル内の設定にリセットされます。このデフォルト設定は、 [保存して終了] をクリックして機能セットを保存しないと適用されません。
	[リセット] をクリックすると、MSI 機能セット エディタの現在のセッションの開始以降に変更した機能設定が元の設定に戻ります。すべての機能の設定が、CSDB から読み込んだ設定にリセットされます。
	[ヘルプ] をクリックすると、CSDB Editor のヘルプ トピックが表示できます。

パッケージ情報

パッケージ情報のセクションには、現在設定している **Windows** インストーラ対応機能のサイズが表示されます。

最大サイズ

機能ツリー内のすべての機能をインストールする場合に、エージェント コンピュータで必要になる可能性のあるディスク容量をバイト単位で示します。ツリー内の **すべての機能** を [マイ コンピュータから実行] 属性または [マイ コンピュータからすべて実行] 属性に設定した場合は、このディスク容量が必要になります。

合計サイズ

機能ツリー内のすべての機能をインストールする場合に、エージェント コンピュータで必要になる可能性のあるディスク容量をバイト単位で示します。ツリー内の **すべての機能** を [マイ コンピュータから実行] 属性または [マイ コンピュータからすべて実行] 属性に設定した場合は、このディスク容量が必要になります。

選択したサイズ

選択されている機能およびその子機能をインストールする場合に、エージェント コンピュータで必要になるディスク容量をバイト単位で示します。このサイズの計算には、[マイ コンピュータから実行] 属性または [マイ コンピュータからすべて実行] 属性に設定されている機能のみが含まれます。

Windows の [プログラムの追加と削除] 設定

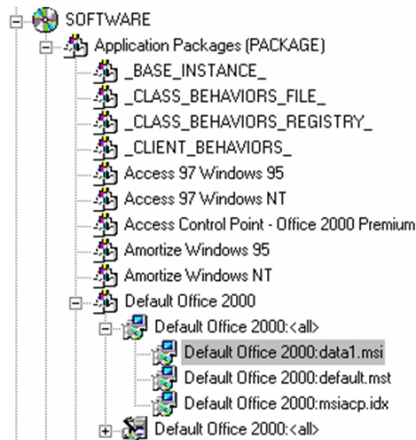
Windows インストーラ対応ソフトウェア パッケージ (**MS Office** など) をエージェント コンピュータにインストールすると、通常であれば **Windows** コントロール パネルの [プログラムの追加と削除] アプリケーション が使用して管理できるアプリケーションのリストに追加されます。

Client Automation では、**Windows** コントロール パネルの [プログラムの追加と削除] アプリケーションにアプリケーションをリストしないようにすることができます。これにより、エンド ユーザーがアプリケーションの **Client Automation** 製品の集中管理に干渉するのを防ぎます。または、**Client Automation** では、[プログラムの追加と削除] アプリケーションによるアクセスに対して個別の機能を選択して非表示にすることができます。

[プログラムの追加と削除] のアプリケーションのリストの排除

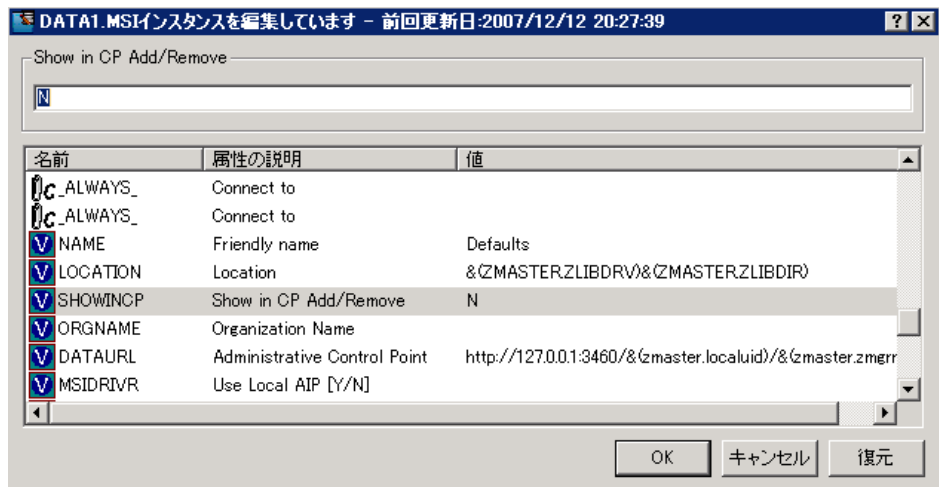
アプリケーション全体が [プログラムの追加と削除] アプリケーションのリストに表示されないようにするには、**CSDB Editor** を使用して、その **Application Packages** クラス インスタンスに接続されている **DATA1.MSI** ファイルで、**MSI** クラス インスタンスの **SHOWINCP** 変数の設定を変更します。

図 38 DATA1.MSI インスタンス



下の図のように、SHOWINCP 変数の値を N に変更します。

図 39 Editing DATA1.MSI インスタンス



Microsoft Windows インストーラ アップデート機能によって表示される機能の非表示

エンド ユーザーが [プログラムの追加と削除] アプリケーションで Windows インストーラ対応ソフトウェア パッケージを選択して **[変更]** をクリックすると、Microsoft Windows インストーラが呼び出されますが、エージェント コンピュータへのインストールで機能进行操作するためのネイティブなユーザー インターフェイスは表示されません。エンド ユーザーが **[機能の追加 / 削除]** をクリック

すると、Microsoft Windows インストーラによって [機能の追加/削除] ウィンドウが表示されます。

MSI Feature Set Editor の [非表示] 機能を使用すると、Microsoft Windows インストーラの [機能の追加/削除] ダイアログ ボックスに個々の機能は表示されないようにすることができます。Client Automation 管理製品のこうした機能を使用することで、アプリケーション ソフトウェアの各機能についてエンド ユーザーによるインストールが制御でき、エンド ユーザーによって不正なインストールが行われるのを防ぐことができます。

Windows インストーラ対応パッケージのコピー

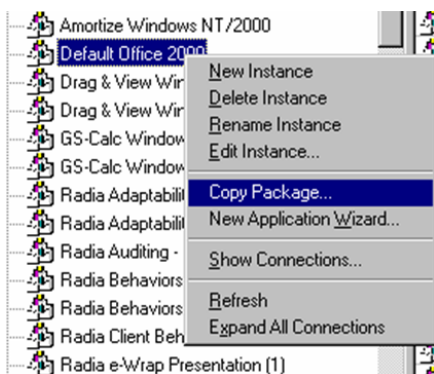
Client Automation 管理製品を使用して Windows インストーラ対応アプリケーションを管理する重要な利点の 1 つは、種類が多岐にわたるソフトウェア パッケージが特定でき、それらが対象のユーザーに確実に配布できる点です。

Client Automation の詳細な機能を使用すると、包括的な AIP を 1 つだけ作成し、これを CSDB に転送させるだけです。多岐にわたる機能セットはすべて、個別のパッケージとして CSDB 内にカプセル化されます。

新しい機能セットを作成するには

既存のパッケージをコピーし、個別にニーズに合わせて編集します。

- 1 [Application Packages] インスタンスを右クリックし、表示されたショートカットメニューで **[パッケージをコピー]** をクリックします。



パッケージ インスタンスをコピーすると、すべてのパッケージのコンポーネント インスタンスがコピーされ、それには時間がかかることを通知するメッセージが表示されます。

- 2 [パッケージのコピー] を継続するには **[はい]** をクリックします。

[パッケージのコピー] をキャンセルするには **[いいえ]** をクリックします。

[パッケージをコピー]を実行すると、パッケージ インスタンスと、そのパッケージ インスタンスに属すすべてのコンポーネント クラス インスタンスがコピーされます。新規に作成されたパッケージは、元のパッケージの完全なコピーになります。この操作では、各パッケージがそのコンポーネントに対する制御を引き継ぐことで、CSDB 内の整合性が維持されます。

- 3 [パッケージとコンポーネントのコピー] ダイアログ ボックスで、新しくコピーされたパッケージの名前を入力します。
- 4 **[OK]** をクリックして続行します。CSDB 内のパッケージのコピーにしばらく時間がかかります。
- 5 新たにコピーされたパッケージが **CSDB Editor** のツリー ビューに表示されたら、パッケージの下に表示される **MSIFEATS** インスタンスを右クリックし、ショートカットメニューで **[機能セット エディタ]** をクリックします。
MSI 機能セット エディタを開きます。
- 6 配布しないアプリケーションのプロパティは [無視] に設定します。
- 7 **[保存して終了]** をクリックすると、パッケージの機能セットが更新されます。このパッケージを適切なポリシー (**USER**、**DEPT**、**WORKGRP**) インスタンスに接続すれば、シングル機能がスタンドアロン アプリケーションとして配布および管理できます。

機能セットをネイティブ モードで管理する

企業によっては、アプリケーションのパッケージ化と **Client Automation** の管理を別々の人が担当する場合があります。MSI 機能セット エディタで変換 (MST) ファイルを編集しない場合もあるかもしれません。機能セットをネイティブ MSI モードで管理するには、パッケージと MST ファイルを次の手順でパブリッシュします。

- 1 **Publisher** を詳細モードで使用し、ACP を作成して Windows インストーラパッケージをパブリッシュします。

パッケージをパブリッシュしたら、**CSDB Editor** を使用して、**Application Packages (PACKAGE)** インスタンスから `SOFTWARE.MSIFEATS.packageprefix_*` への接続を削除します。
- 2 複数の MST ファイルがある場合は、**Publisher** をコンポーネントの選択モードで使用し、各 MST ファイルを個別のパッケージとして転送させます。これにより、各 MST ファイルの新しい **PACKAGE** インスタンスが作成されます。
- 3 **MSI PACKAGE** インスタンスを、各変換ファイルの **PACKAGE** インスタンスに接続します。

- 4 変換パッケージごとに 1 つずつ **Application (ZSERVICE)** インスタンスを作成します。
- 5 サブスクライバを、適切な変換パッケージのサービスに割り当てます。

▶ *.MST ファイルを変更したり置き換えたりすると、そのアプリケーションをアンインストールまたは再インストールするための **MSIEXEC** が呼び出されます。

サービスをインストールまたは修正すると、**MSIFEATS** オブジェクトが存在しないことが検知され、ネイティブ **MSI** モード (**MSIEXEC**) が使用されます。その結果、データの送信元の適切なロケーションで **MSIEXEC** がネイティブに呼び出されます。**MSIEXEC** が呼び出され **MSIEXEC MST** ファイルが 1 つしか存在しないことが検知されると、**MSIEXEC** を呼び出すコマンドラインに .MST ファイルが追加されます。**MSIEXEC** が呼び出され、**MST** ファイルが複数存在することが検知されると、**MSIEXEC** は **MSI** ファイルに対してのみ実行されます。**MSI** のネイティブな動作は、更新および修復に使用します。

▶ **Feature Set Editor (MSIFEATS)** ではまだ使用できない機能を、**MST** ファイルを使用して新しい機能として含めた場合、その **MST** ファイルからの新しい機能は **MSI** サービスにも含まれます。一方、**MST** ファイルに含まれている機能が既に **MSIFEATS** オブジェクト内に存在する場合は、**MSIFEATS** に指定されている機能状態が使用され、追加の **MST** ファイルに含まれている機能は無視されます。**MST** ファイルのみを使用して **MSI** パッケージを管理する場合は、この節で説明した手順を使用してください。

レジストリ ファイル エディタ

レジストリ ファイル エディタを使用すると、**Client Automation** パッケージに関連付けられたレジストリ キーのプロパティや値が編集できます。

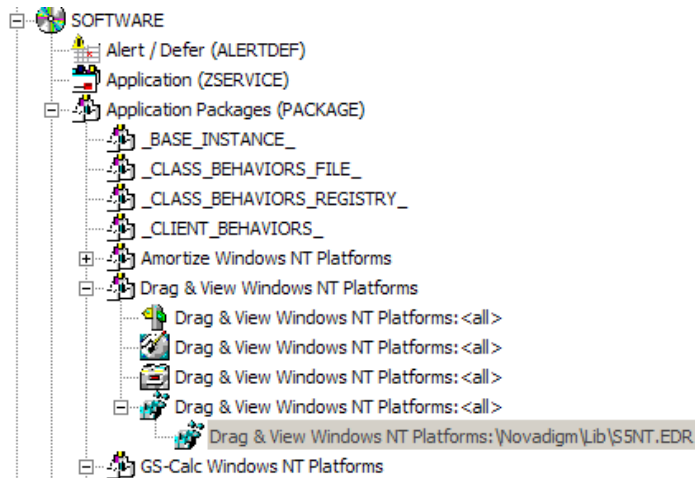
Packager を使用してパッケージを作成する場合、そのパッケージのレジストリに対するすべての変更は、**LIB** ディレクトリ内のファイル (拡張子 **.EDR**) に格納されます。このファイルを修正する場合は、レジストリ ファイル エディタを使用します。修正したファイルは **CSDB** に再転送され、インスタンスが更新されます。

レジストリ ファイル エディタにアクセスする

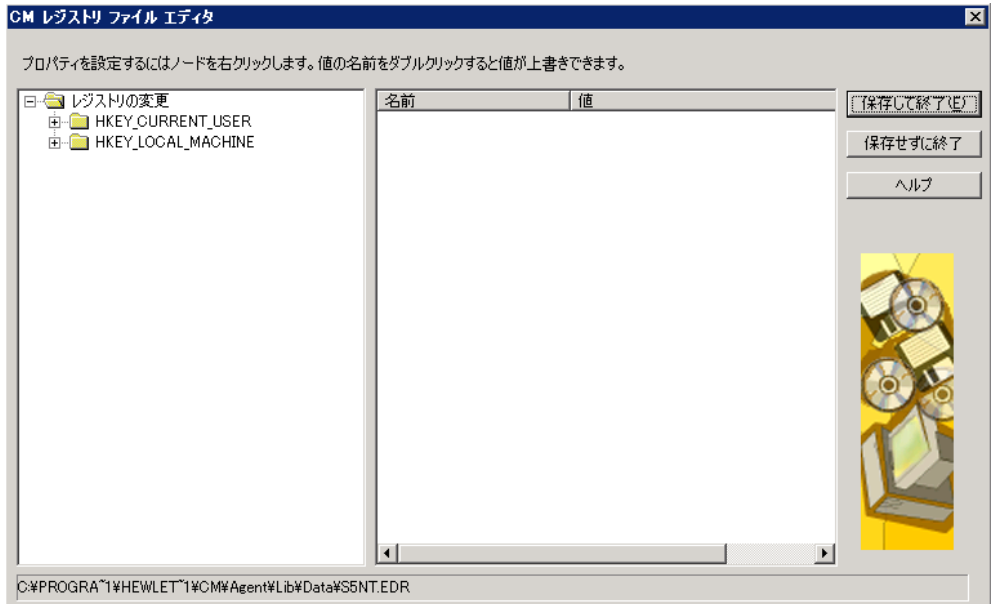
レジストリ ファイル エディタにアクセスするには

- 1 レジストリ設定を編集したいソフトウェア パッケージを表す **Registry Resources** インスタンスを探します。

- 2 ツリー ビューで、インスタンスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。たとえば、**Drag & View Windows NT** プラットフォーム パッケージのレジストリ インスタンスを見つけて右クリックします。



- 3 **[レジストリ リソースを編集]** をクリックします。**[レジストリ ファイル エディタ]** ダイアログ ボックスが表示されます。



- ツリー ビュー (左側) には、レジストリ ファイル内のキーを表すノードが表示されます。
- リスト ビュー (中央の [名前] と [値]) には、選択したレジストリ キーのコンテンツが表示されます。
- 右側のボタンを使用すると、保存して (または保存せずに) 終了したり、レジストリ ファイル エディタのヘルプ機能にアクセスしたりすることができます。

プロパティ設定ショートカット メニュー


レジストリ ファイル エディタのプロパティを設定するには、レジストリ ファイル エディタ内のツリー ビューの任意のノードを右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。

このショートカットメニューの各オプションは、以下の節で説明しています。

アクティブ

[アクティブ] を選択すると、レジストリ キーがパッケージに含まれます。

非アクティブ

[非アクティブ] を選択すると、レジストリ キーはパッケージには含まれません。アクティブでないノードは、そのフォルダ上に  が表示されます。

配布/検証

[配布 / 検証] をクリックすると、次のサブメニューが表示されます。

- **無条件 / 強制**
レジストリ キーは、既にデスクトップに存在する場合でも、サブスクリバが **Configuration Server** に接続するたびに配布されます。この設定では、修正または削除されたレジストリ キーが修復されます。この設定は、アプリケーション ソフトウェアの動作を保証するために変更してはならないレジストリ キーに使用します。
- **無条件 / 存在**
レジストリ キーは、初回の配布の時点か、削除されたときに配布されます。ただし、ユーザーが修正したレジストリ キーの値はリセットされません。これはデフォルトの設定です。
- **存在 / 存在**
レジストリ キーは、サブスクリバのデスクトップに存在しない場合にのみ配布されます。レジストリ キーが存在するかどうかは、初回の配布の時点、および以降の接続時ごとにチェックされます。この設定では、ユーザーがレジストリ キーの値が完全に制御でき、何らかの理由でレジストリ キーが削除された場合でも再配布されます。

新しいキー

[新しいキー] は、レジストリに新しい値を追加する場合に選択します。新しいキーの名前を入力するためのダイアログ ボックスが表示されます。**[OK]** をクリックすると新しいキーが作成され、**[キャンセル]** をクリックするとレジストリ ファイル エディタに戻ります。

新しい値

[新しい値] は、新たに作成したキーや既存のレジストリ キーに値を追加する場合に選択します。以下の情報を入力するためのダイアログ ボックスが表示されます。

値の名前

レジストリ ファイルに追加する値の名前を入力します。この名前は、[レジストリ ファイル エディタ] ウィンドウの中央部分に値名として表示されます。

データ タイプ

このドロップダウン メニューを使用すると、使用可能なデータ タイプのリストからデータ タイプが選択できます。選択できるデータ タイプは以下のとおりです。

- **REG_SZ**
説明的な情報に最も一般的に用いられるテキスト シーケンス。これはデフォルトの設定です。
- **[REG_DWORD]**
4 バイト長の正数で表されるデータ。二進数、十六進数、または十進数で表示されます。
- **REG_EXPAND_SZ**
拡張可能なデータ文字列このテキストには、アプリケーションからの呼び出しによって置換される変数を含めることができます。
- **[REG_MULTI_SZ]**
ユーザーが判読可能な複数のテキスト エントリを含む文字列。

常に削除

[常に削除] は、レジストリ キーの下にあるすべての値を **Radreg32 Delete** 操作中に削除する場合にクリックします。このオプションをオンにすると、キーの下にあるすべての値が、バックアップ **EDR** ファイル内にある元のレジストリ値を復元することなく削除されます。

削除しない


[削除しない] は、キーの下にあるすべての値を **Radreg32 Delete** 操作中に保持する場合にクリックします。

削除 (デフォルト)

【削除 (デフォルト)】 は、値の削除または復元に関する **Radreg32 Delete** 操作で通常の **Delete** 動作を実行するときをクリックします。


レジストリ キーを編集する

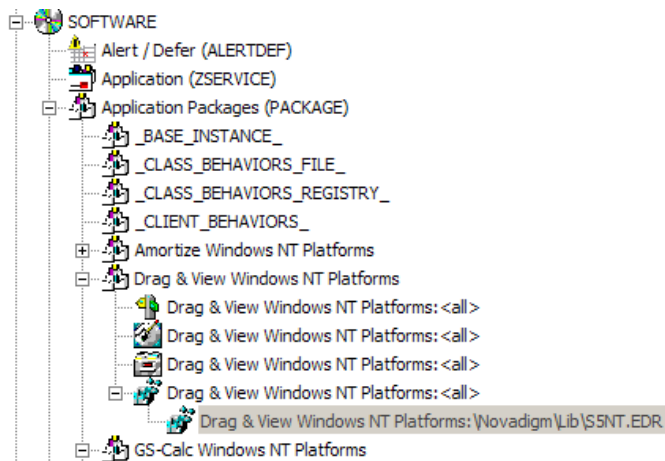
レジストリ キーの値を編集するには、レジストリ ファイル エディタを使用します。レジストリ キーの情報を編集するには、この節の手順例に従ってください。

 レジストリ ファイル エディタを使用する際は、細心の注意を払って作業を進める必要があります。各レジストリ キーの機能を十分理解せずに編集すると、パッケージやサービスが使用できなくなるおそれがあります。

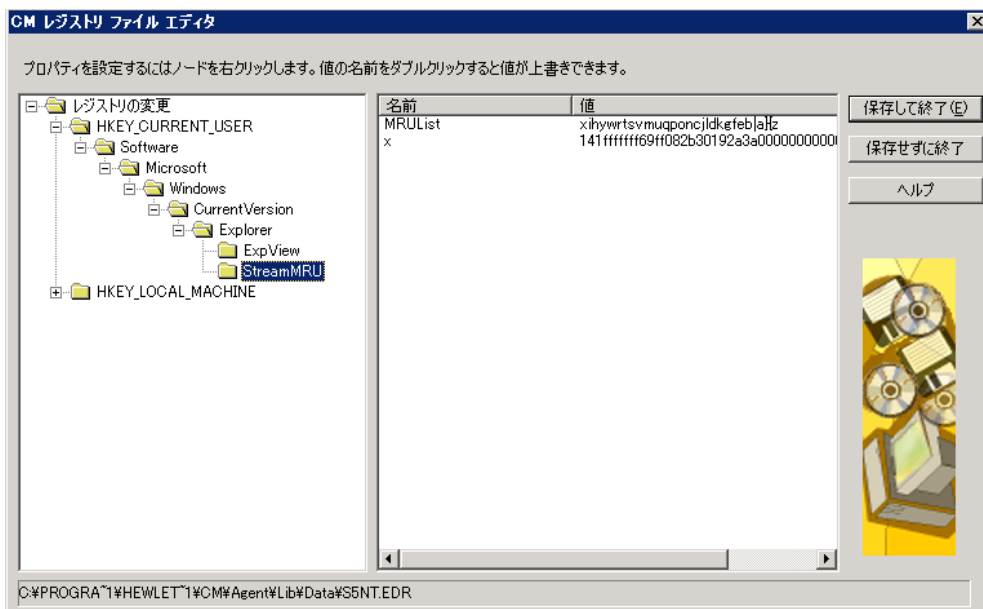
レジストリ キー内のデータを編集するには

- 1 Windows タスクバーの **【スタート】** → **【すべてのプログラム】** → **【HP Client Automation Administrator】** → **【Client Automation Administrator CSDB Editor】** の順をクリックします。**【CSDB Editor のセキュリティ情報】** ダイアログ ボックスが表示されます。

 出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。セキュリティ管理者がこの設定をインストールの過程で変更している場合があります。必要に応じて、セキュリティ管理者に確認して、ユーザー ID とパスワードを取得してください。
- 2 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、**【OK】** をクリックします。**CSDB Editor** の起動画面が表示されます。
- 3 **【PRIMARY】** をダブルクリックします。
- 4 **【SOFTWARE】** ドメインを展開し、**【Application Packages (PACKAGE)】** クラスを展開します。
- 5 **【Drag & View Windows NT Platforms】** パッケージを展開します。
- 6 レジストリ インスタンスを展開します。



- 7 レジストリ ファイルを右クリックして、ショートカットメニューから **[レジストリ リソースを編集]** をクリックします。[レジストリ ファイル エディタ]が表示されます。
- 8 リスト ビューでノードをクリックして展開し、レジストリ キーのコンテンツを表示します。
- 9 リスト ビューでレジストリ キーの名前をダブルクリックします。



[値を上書き] ダイアログ ボックスが表示されます。

10 [新しい値] ボックスでデータを編集します。

11 **[OK]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

または

[キャンセル] をクリックして、変更内容を保存せずにダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ キーのデータを編集するには

1 リスト ビューでレジストリ キーの名前をダブルクリックします。

2 **[リセット]** をクリックします。

3 **[OK]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

または

[キャンセル] をクリックして、変更内容を保存せずにダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ ファイル エディタを閉じる

レジストリ ファイルのインスタンスへの変更が完了したら、レジストリ ファイル エディタを閉じます。

レジストリ ファイル エディタを閉じるには

1 **[保存して終了]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

または

[保存せずに終了] をクリックして、変更を保存せずにダイアログ ボックスを閉じます。

2 変更を保存して閉じる場合は **[はい]** をクリックします。

または

レジストリ ファイル エディタに戻る場合は **[いいえ]** をクリックします。

AMP Editor

AMP Editor は、アプリケーションプロファイルを作成および修正するためのツールです。**Application Management Profiles** およびその編集方法については『**HP Client Automation Application Management Profiles ユーザー ガイド(AMPs ガイド)**』を参照してください。

4 Linux および Macintosh 用 Administrator

この章は以下を目的としています。

- **Administrator** をインストールするためのシステム要件について理解する。
- グラフィカルまたは非グラフィカル モードを使用して **Administrator** をインストールできるようになる。
- **Linux** 用の **Agent Explorer** を使用方法を習得する。
- **Publisher** を使用方法を習得する。

はじめに

LINUX 用 Administrator には次の 2 つのコンポーネントがあります。Publisher および Agent Explorer.

Macintosh 用 Administrator には次の 1 つのコンポーネントがあります。Publisher

インストール

LINUX 用および Macintosh 用 Administrator をインストールする方法について説明します。

システム要件

- Configuration Server が動作しているコンピュータへの TCP/IP 接続。

プラットフォーム サポート

サポートされているプラットフォームの詳細については、本リリースに付属のリリース ノートを参照してください。

前提条件

- エージェントをルート (または **sudo** コマンドを発行可能な Mac OS X 管理者ユーザー ID として) インストールすることを強くお勧めします。
- Client Automation エージェントをローカル ファイル システムにインストールします。
- Administrator ソフトウェアのグラフィカル コンポーネントを実行する予定の場合は、LINUX 環境変数 **DISPLAY** が環境内に設定されていることを確認してください。設定されていない場合は、インストールはデフォルトで非グラフィカル インストールになります。ただし、グラフィカル表示をリダイレクトしたいホスト名または IP アドレスを指定するためにこの変数を設定することができます。

表 50 DISPLAY 変数の設定

対象	タイプ
C シェル	setenv DISPLAY IP address または hostname:0.0
Bourne、Bash、または Korn シェル	DISPLAY=IP address または hostname:0.0 export DISPLAY

▶ DISPLAY 環境変数が環境内に設定されていない場合は、インストールはデフォルトで非グラフィカルインストールになります。

トラブルシューティング

Client Automation エージェントのインストール中に問題が発生した場合は、テクニカル サポートに問い合わせる前に次の手順を実行してください。

- インストール コマンド ラインにテキスト **-loglevel 9** を追加して診断追跡を有効にします。
 - ▶ インストール オプション **-loglevel 9** は、インストールの問題を診断するためにのみ使用してください。
- インストールを実行した ユーザー ID のホーム ディレクトリ内にある `tmp/setup/setup.log` にアクセスします。

推奨事項

- **Administrator** をルートとしてインストールして実行することを強く推奨します。
 - ▶ 管理対象リソースに所有者およびグループ指定を適用するにはルート権限が必要です。

インストール メソッド

Administrator をインストールするには、次のいずれかを実行してください。

- インストール手順をインストール メディアから直接実行します。

- インストール メディアからファイルを一時ディレクトリにコピーしてインストール手順を実行します。

コマンドライン上の複数のパラメータを利用して **Administrator** をインストールすることもできます。

`-mode plain`

例: `./install -mode plain`

Administrator をプレーン モードでインストールします。インストール グラフィックは、プレーン モードで表示されます (動画はなし)。これは、ネットワーク大域幅が問題になる可能性があるリモート インストールに役立ちます。

`-mode text`

例: `./install -mode text`

Administrator を非グラフィック インストールを使用してテキスト モードでインストールします。インストールは、完全にコマンド ライン上で行われます。インストールは **DISPLAY** 環境変数が設定されていない場合には、デフォルトでテキスト モードになります。

Administrator LINUX 用 または Macintosh 用 インストール

LINUX 用および Macintosh 用 **Administrator** をインストールする方法について説明します。

グラフィカル インストール

ここでは、グラフィカル ユーザー インターフェイス (GUI) を使用して LINUX 用または Macintosh 用 **Administrator** をインストールする方法について説明します。

GUI を使用して LINUX 用または Macintosh 用 **Administrator** をインストールするには

▶ **Administrator** インストールを実行しているユーザーの ユーザー ID が以前に **Client Automation** エージェントをインストールしている場合は、**Administrator** の場所はデフォルトで **Client Automation** エージェント実行可能ファイルの場所になります。

- 1 ご使用のオペレーティング システムによって、現在の作業ディレクトリをインストール メディア上の正しい UNIX サブディレクトリに変更してください。

例: RedHat 用:

```
/Configuration Server/management infrastructure/  
administrator_workstation/linux/
```

- 2 `./install` (Mac OS X の場合は、`sudo ./install`) と入力して、**Enter** キーを押します。[よろこぞ] ウィンドウが表示されます。
- 3 **[次へ]** をクリックします。HP Software ライセンス契約ウィンドウが表示されます。
- 4 ソフトウェア ライセンス条件を読み、**[同意する]** をクリックします。



以前に **Client Automation** エージェントをインストールしたユーザー ID で **Administrator** をコンピュータにインストールしている場合は、インストール プログラムは、**Configuration Server** の IP アドレスを次に表示します。次の 3 つのウィンドウ、**[Administrator ロケーション]**、**[Lib ディレクトリ]**、および **[Log ディレクトリ]** は、**Client Automation** エージェントがインストールされていないコンピュータに **Administrator** をインストールするときのみ必要です。

[Administrator ロケーション] ウィンドウが表示されます。

- 5 **Administrator** をインストールしているディレクトリの名前を入力するか、**[ブラウズ]** をクリックしてそこに移動します。
- 6 **[次へ]** をクリックします。指定したディレクトリが既に存在する場合は、場所を確認するプロンプトが表示されます。
 - 既存のディレクトリを更新する場合は、**[OK]** をクリックします。
 - ディレクトリの場所を変更する場合は、**[キャンセル]** をクリックします。**[Lib ディレクトリ]** ウィンドウが表示されます。
- 7 **Client Automation** で作成された固有情報を格納するディレクトリの名前を入力するか (lib ディレクトリ)、**[ブラウズ]** をクリックしてそこに移動します。
- 8 **[次へ]** をクリックします。**[Log ディレクトリ]** ウィンドウが表示されます。
- 9 **Client Automation** で作成されたログ ファイルを格納するディレクトリの名前を入力するか、**[ブラウズ]** をクリックしてそこに移動します。
- 10 **[次へ]** をクリックします。**[Configuration Server の IP アドレス]** ウィンドウが表示されます。
- 11 パブリッシュ先の **Configuration Server** の IP アドレス (形式:xxx.xxx.xxx.xxx) またはホスト名を入力します。
- 12 **[次へ]** をクリックします。**Configuration Server** ポート番号ウィンドウが表示されます。
- 13 **Configuration Server** のポート番号を入力します (デフォルトは **3464** です)。
- 14 **[次へ]** をクリックします。パッケージの設定ウィンドウが表示されます。

- 15 パッケージの設定ウィンドウに表示される設定を確認します。設定を変更したい場合は、該当するウィンドウに到達するまで **[戻る]** をクリックします。
- 16 パッケージの設定が完了したら、**[インストール]** をクリックします。**Administrator** がインストールされます。

コマンドラインによるインストール

ここでは、Linux 用または Macintosh 用 **Administrator** の非グラフィカルインストール(コマンドラインを使用)について説明します。

コマンドラインを使用して Linux 用または Macintosh 用 **Administrator** をインストールするには

- 1 コマンド プロンプトで、現在の作業ディレクトリをインストール メディア上の正しいオペレーティング システム サブディレクトリに変更してください。

例：HP-UX の場合：

```
/Configuration Server/management_infrastructure  
/administrator_workstation/hpux/
```

- 2 `./install -mode text` (Mac OS X の場合は、`sudo ./install -mode text`) と入力して、**Enter** キーを押します。

Administrator のインストールが開始されます。

- 3 **c** と入力し、**Enter** キーを押します。



以前に **Client Automation** エージェントをインストールしたユーザー ID で **Administrator** をコンピュータにインストールしている場合は、インストールプログラムは、**Configuration Server** の IP アドレスを次に表示します。次の 3 つのセクション、**[Administrator ロケーション]**、**[Lib ディレクトリ]**、および **[Log ディレクトリ]** は、**Client Automation** エージェントがインストールされていないコンピュータに **Administrator** をインストールするときのみ必要です。

- 4 **Administrator** のインストールの場所を指定して、**Enter** キーを押します。
- 5 **Client Automation** 固有オブジェクトの場所を指定して (IDMLIB)、**Enter** キーを押します。
- 6 **Client Automation** によって作成されたログ ファイルの場所を指定して (IDMLOG)、**Enter** キーを押します。
- 7 **Configuration Server** の IP アドレスを指定して、**Enter** キーを押します。

- 8 **Configuration Server** のポート番号を指定して、**Enter** キーを押します。
- 9 選択したインストール設定事項を確認します。**Administrator** をその設定でインストールする場合は、**Enter** キーを押してデフォルトを受け入れ (Y) インストールを開始するか、または **n** と入力してインストール情報を再入力します。
- 10 設定したインストール プロセスを完了するには、**Enter** キーを押します。**Administrator** がインストールされます。

Agent Explorer

Agent Explorer は Linux に使用することができますが、Macintosh には使用できません。

Agent Explorer の起動

次の手順は、Agent Explorer を開く、および閉じる方法を説明しています。

Agent Explorer を開くには、

- **[HP Client Automation Administrator]** フォルダの **[Client Automation Administrator Agent Explorer]** をクリックするか、

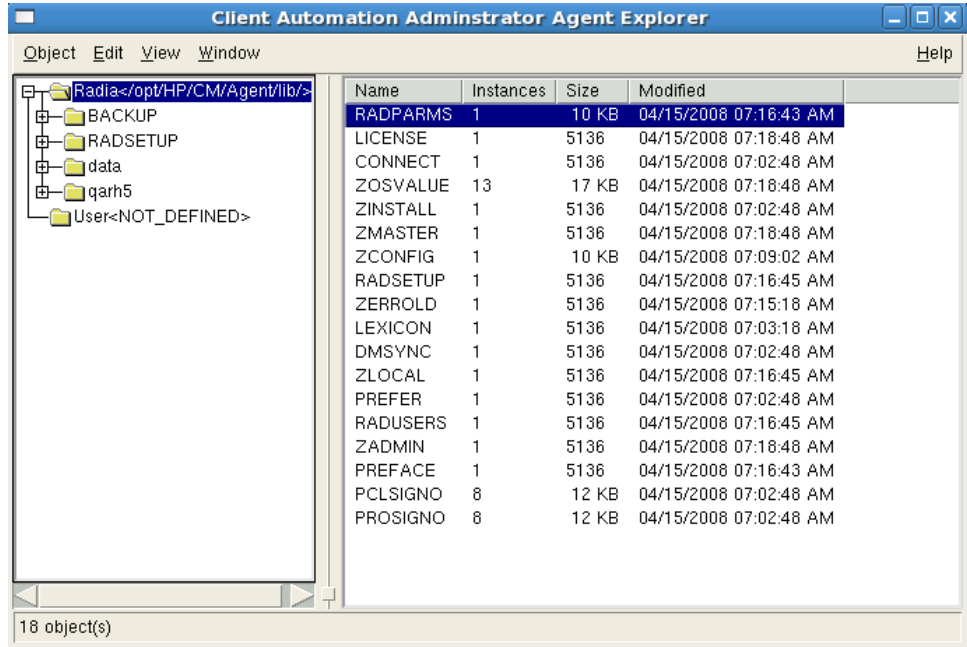
または

コマンドラインで `./radobjed` と入力します。

Agent Explorer が開き、右側にオブジェクトリストが表示されます。図 40 (238 ページ) を参照してください。オブジェクトリストには、表示および編集可能な **Client Automation** オブジェクトの名前が含まれます。

▶ 「Z」で始まるオブジェクトは、**Client Automation** で使用されます。作成するオブジェクトに名前を付けるときには、「Z」から始まる名前をクリックしないよう推奨します。

図 40 Agent Explorer ウィンドウ



オブジェクト リスト ウィンドウのメニュー

[Agent Explorer] ウィンドウのメニューを使用して、新しいオブジェクトを開く、コピー、削除、名前変更、および作成し、Agent Explorer を移動します。

オブジェクト メニュー

オブジェクト メニューを使用して、新しいオブジェクトを開く、コピー、削除、名前変更、および作成します。

図 41 オブジェクト リスト ウィンドウのオブジェクト メニュー

Object	Edit	View	Window
New...			Ctrl+N
Open...			Ctrl+O
Copy...			Ctrl+C
Rename			
Delete			Del
Change User Directory...			
Exit			

表 51 【オブジェクト】メニューのオプション

メニュー オプション	機能
新規作成	【新規作成】 をクリックして、[新しいオブジェクトが作成] ダイアログ ボックスに新しいオブジェクトの名前を入力します。
開く	オブジェクト リストのオブジェクトを選択して 【開く】 をクリックします。オブジェクト ビュー ウィンドウが開き、変数およびオブジェクトのヒープを編集および管理できます。
コピー	オブジェクト リストのオブジェクトを選択します。 【コピー】 をクリックして、新しいオブジェクトの名前を入力します。同じ変数と値を持った新しいオブジェクトが作成されます。
名前の変更	オブジェクト リストのオブジェクトを選択します。 【名前の変更】 をクリックします。オブジェクトの新しい名前を入力します。
削除	オブジェクト リストからオブジェクトを選択します。 【削除】 をクリックすると、オブジェクト リストから削除されます。削除された後は、オブジェクト、そのヒープ、および変数は復元できません。
ユーザー ディレクトリを変更	
終了	【終了】 をクリックして Agent Explorer を終了します。

[編集] メニュー

[すべて選択]

[すべて選択] をクリックして、オブジェクト リスト内のすべてのオブジェクトを選択します。すべてのオブジェクトに対して同時に [オブジェクト] メニューのアクションを実行することができます。

表示メニュー

[リフレッシュ]

画面をリフレッシュします。

テーブル ウィンドウ メニュー

[すべて閉じる]

[すべて閉じる] をクリックして、開いているオブジェクトをすべて閉じます。

オブジェクト ビュー ウィンドウのメニュー

オブジェクト表示ウィンドウには、表示または編集できる **Client Automation** オブジェクトの内容が表示され、次の 4 つのドロップダウン メニューがあります。[オブジェクト]、[編集]、[ビュー]、[ウィンドウ]。

オブジェクト メニュー

オブジェクト メニューを使用して、オブジェクトの情報を参照し、行った変更を保存し、オブジェクトを閉じます。

図 42 【オブジェクト】メニュー

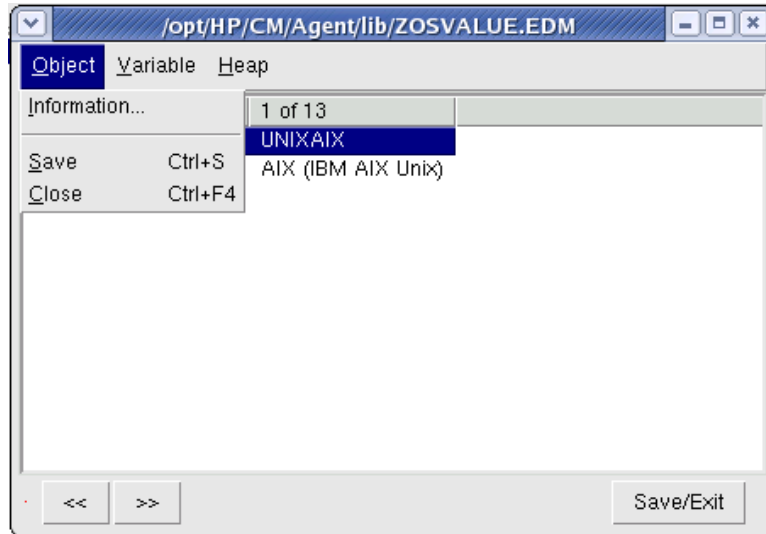


表 52 【オブジェクト】メニューのオプション

メニュー オプション	機能
情報	[オブジェクトの情報] 画面を表示します。
保存	行った変更を保存します。
閉じる	オブジェクト ビュー ウィンドウを閉じます。

変数メニュー

変数メニューを使用して、変数を追加、削除、および名前変更し、変数の値に基づいてオブジェクト内のヒープ間を管理および移動します。

図 43 [変数] メニュー

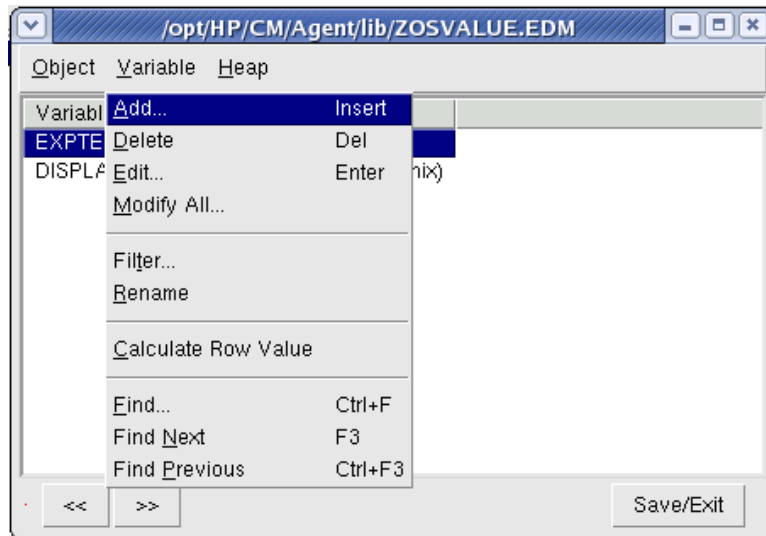


表 53 [変数] メニューのオプション

メニュー オプション	機能
追加	ユーザー指定名を持つ変数をオブジェクトに追加します。
削除	オブジェクトから変数を削除します。
編集	変数の値を変更します。
すべてを修正	オブジェクト内のすべてのヒープのこの変数の値を変更します。
フィルタ	ユーザー指定文字列を含むすべての変数を表示します。
名前の変更	オブジェクト内の変数の名前を変更します。
行の値を計算	選択した変数に対して、オブジェクト内のすべてのヒープに対するすべての十進数エントリのみを合計します。
検索	ユーザー選択変数に対して、値にユーザー指定文字列を含むヒープを検索します。マルチヒープ オブジェクトでのみ利用可能です。

メニュー オプション	機能
次へ検索	検索する文字列を入力するために [検索] コマンドを使用した後に、このコマンドはその文字列の次のオカレンスを検索します。
前へ検索	検索する文字列を入力するために [検索] コマンドを使用した後に、このコマンドはその文字列の前のオカレンスを検索します。

ヒープ メニュー

[ヒープ] メニューを使用して、オブジェクト内のインスタンスを追加、削除、およびコピーし、オブジェクト内のインスタンス間を移動します。

インスタンスはヒープとも呼ばれます。オブジェクト内の各インスタンスを表示するには、オブジェクト ビュー ウィンドウの一番下にある [>>] または [<<] をクリックします。

図 44 ヒープ メニュー

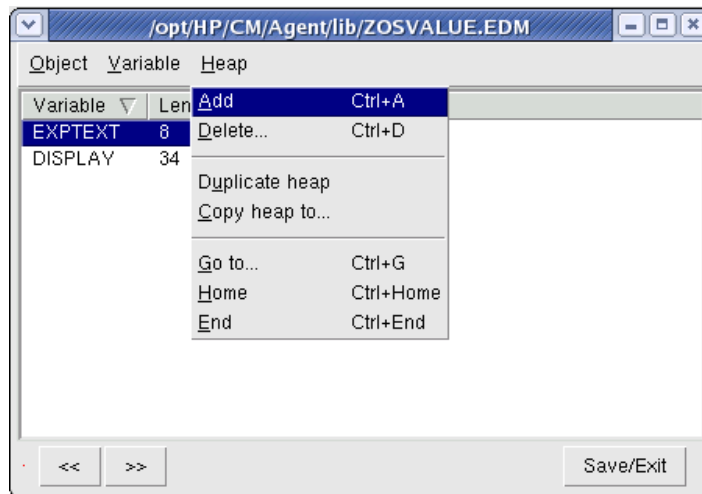


表 54 [ヒープ] メニューのオプション

メニュー オプション	機能
追加	空白の値を持つインスタンスを追加します。[変数] → [編集] と選択して値を入力します。

メニュー オプション	機能
削除	選択したインスタンスを削除します。[>>] または [<<] をクリックして、削除するインスタンスに移動します。
ヒープを複製	選択したインスタンスのコピーを、値を含めて作成します。[>>] または [<<] をクリックして、複製するインスタンスに移動します。
ヒープのコピー先	選択したインスタンスを [インスタンスのコピー先] ダイアログ ボックスに入力したオブジェクトにコピーします。
移動先	[新しいインスタンスの数] ダイアログ ボックスに入力した番号のインスタンスに移動します。
ホーム	オブジェクトの最初のインスタンスに移動します。
末尾	オブジェクトの最後のインスタンスに移動します。

Packager

Packager は、**Linux** または **Macintosh** では使用できません。これらオペレーティング システムの両方に対して、パッケージ機能は **Publisher** の一部です。

Publisher

Publisher は、**Linux** および **Macintosh** オペレーティング システムで利用可能です。この節では、両方の使用方法について説明します。

Linux 用 および **Macintosh** 用 **Publisher** は、コンポーネントの選択という 1 つのパブリッシュ モードのみを備えています。

コンポーネントの選択モードでは、パッケージを作成するためのファイル、ディクショナリ、およびリンクなど、アプリケーションを構成する個別のコンポーネントを選択します。

コンポーネントの選択モードでは、以下の 4 つの段階でパブリッシュを行います。

- 1 パブリッシュするファイルを個別に**選択**します。
- 2 ファイルのプロパティおよびメソッドを**編集**します。
- 3 パッケージおよびサービスのオプションを**設定**します。

- 4 ファイルを CSDB にパブリッシュします。


前提条件

コンポーネントの選択モードでアプリケーションをパブリッシュする前に、パッケージ化マシンにターゲット アプリケーションをインストールします。これにより、選択時に必要なファイルがコンピュータに保存されます。

パブリッシュ

この節では、コンポーネントの選択モードの一般的なパブリッシュ手順を説明し、Windows 用 Publisher を参照することによって、表示されるそれぞれの画面についての詳細を示します。Linux および Macintosh 用 Publisher でのパブリッシュは、配布オプション以外は、Windows 用のパブリッシュと同一です。Linux および Macintosh では、[ユーザー コンポーネント] および [マシン コンポーネント] オプションは利用できません。次のタスク 2 を参照してください。

コンポーネントの選択モードでパブリッシュするには

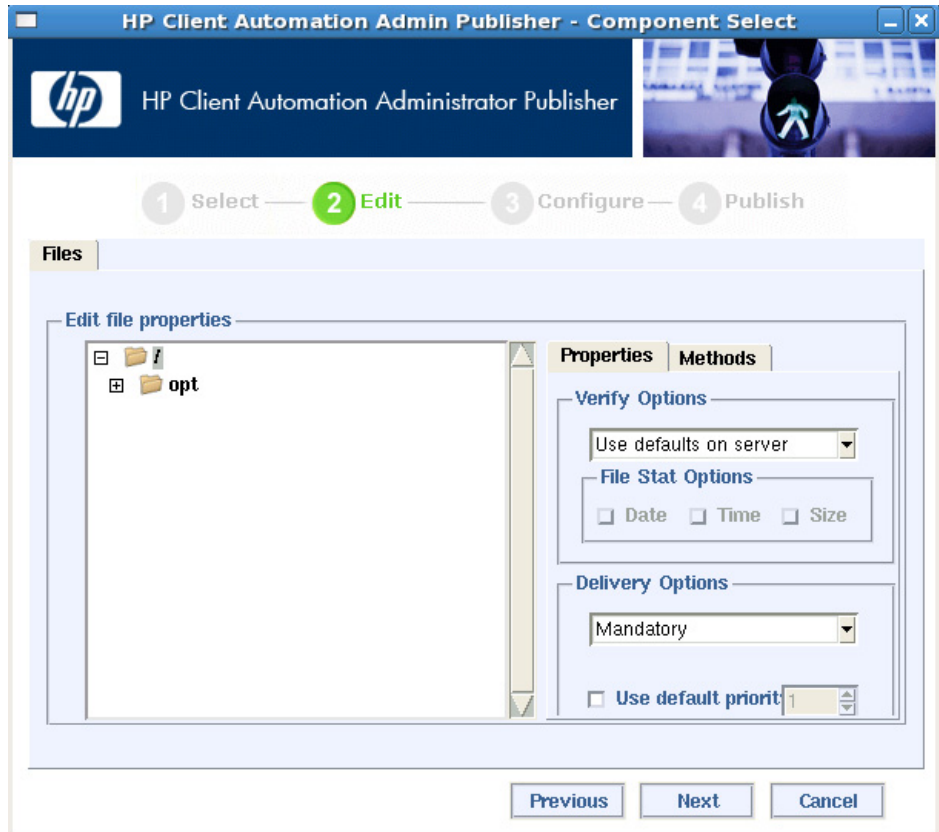
- 1 ルートとしてログ オンします。
- 2 Administrator をインストールした場所から Publisher を起動して ./publishr を実行させるには
- 3 ユーザー ID とパスワードを該当するフィールドに入力します。
 -  出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更している場合があります。必要に応じて、Client Automation セキュリティ管理者に確認し、ユーザー ID とパスワードを取得してください。ユーザー ID とパスワードは大文字と小文字が区別されます。
- 4 パブリッシュするデータのタイプ ボックスで、**[コンポーネントの選択]** のデフォルト選択をそのままにします。(これは、現在 UNIX および Macintosh で使用できる唯一のパブリッシュ モードです。)
- 5 **[OK]** をクリックします。[選択] ウィンドウが開きます。

Task 1 パブリッシュするファイルを選択する

[パブリッシュするファイルを選択] ウィンドウを使用して、パッケージに含めるすべてのファイルを選択します。このプロセスは、Windows 用 Publisher のものと同じです。パブリッシュするファイルを選択する (74 ページ) を参照してください。

Task 2 ファイルのプロパティおよびメソッドを編集する

[編集] ウィンドウを使用して、ファイルおよびフォルダのプロパティおよびメソッドを編集します。このプロセスは、配信オプションを除いて、Windows 用 Publisher のものと同じです。Linux および Macintosh バージョンの Publisher では、[ユーザー コンポーネント] および [マシン コンポーネント] オプションは利用できません。



類似性については、[プロパティおよびメソッドを編集する \(76 ページ\)](#) を参照してください。

Task 3 パッケージおよびサービス情報を入力する

[コンフィギュレーション] ウィンドウを使用して、パッケージに名前を付け、追加の説明情報を含め、ハードウェアおよびオペレーティング システムの設定に基づいてパッケージ配布制限を設定します。[サービス情報] ウィンドウを使用して、サービスに関する説明情報、および配布後の管理方法についての情報を入力します。これらのプロセスは、[クラス] ドロップダウン リストのオプション以外は、Windows 用 Publisher のものと同じです。Linux の場合は、利用可能な

唯一のクラスは **UNIXFILE** であり、Macintosh の場合は、利用可能な唯一のクラスは **MACFILE** です。

類似性については、[パッケージおよびサービス情報を入力する \(85 ページ\)](#) を参照してください。

Task 4 パッケージのパブリッシュ

[パブリッシュ] ウィンドウでは、パッケージおよびサービス情報を表示して、それをパブリッシュします。このプロセスは、Windows 用 **Publisher** のものと同じです。[パッケージのパブリッシュ \(87 ページ\)](#) を参照してください。

UNIX File Resources (UNIXFILE)

パブリッシュ プロセス中に、**UNIXFILE** 属性 が定義されます。これらの属性は、所有者およびグループ関連付けとそれぞれのパブリッシュされたリソースのパーミッションを定義します。パブリッシュされた各パッケージは、対応する **UNIXFILE** インスタンス が **PRIMARY** ファイル内にあります。**CSDB Editor** を使用して、これらの属性を表示および変更します。

▶ 次の手順では、**CSDB Editor** を使用します。**CSDB Editor** は、現在 32 ビット Windows プラットフォームで利用可能です。詳細については、[CSDB Editor \(125 ページ\)](#) を参照してください。

CSDB Editor を使用して UNIXFILE クラス インスタンスを表示するには

- 1 **[Start]** → **[Programs]** → **[HP Client Automation Administrator]** → **[Client Automation Administrator CSDB Editor]**。
[CSDB Editor のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 2 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、**[OK]** をクリックします。

▶ 出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更している場合があります。この設定は、**[パスワードの変更]** チェック ボックスをオンにして、**[新しいパスワード]** と **[新しいパスワードの確認]** の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力して変更することもできます。

- 3 **[PRIMARY]** をダブルクリックします。
- 4 **[SOFTWARE]** をダブルクリックします。
- 5 **Unix File Resources (UNIXFILE)** をダブルクリックします。

- 適切なアプリケーションをダブルクリックします。リスト ビューにそのアプリケーションの **UNIXFILE** インスタンスの属性が表示されます。

インスタンス属性を変更するには、リスト ビューで属性の名前をダブルクリックします。開いているボックスで変更を加えて、**[OK]** をクリックします。

パブリッシュされた所有者、グループ、およびパーミッションの考慮事項

UNIXFILE クラスは属性 **ZPERUID** および **ZPERGID** を含んでいます。これらの属性は、転送されたリソースのユーザー ID およびグループ パーミッションを定義します。これらの属性は、パブリッシュ セッション中に入力され、転送されているリソースのユーザー ID およびグループ関連付けを反映しています。また、パーミッション文字は、パブリッシュ中に取得されて **UNIXFILE.ZRSCRASH** 属性に格納されます。これらの属性は、**CSDB Editor** を使用して変更できます。

表 55 UNIXFILE クラス固有の属性

属性	説明
ZPERUID	転送されているリソースに関連付けられているユーザー ID。リソースは配布されると、 HPCA Application Manager がルートで実行されていて、エージェント ワークステーションにユーザー ID が存在している場合、このユーザー ID によって所有されます。
ZPERGID	転送されているリソースに関連付けられているグループ ID。リソースは配布されると、 HPCA Application Manager がルートで実行されていて、エージェント ワークステーションにグループが存在している場合、このグループに関連付けられます。
ZRSCRASH	これは管理対象リソース パーミッションの 4 桁の八進法でなければなりません (例: 7555)。これはパブリッシュされたリソースの特性に基づいてパブリッシュセッション中に入力されます。
DIRPERMS	ディレクトリ構造が存在しないときに、管理対象外フォルダに割り当てられたパーミッション。 Client Automation は、この属性が定義されていない場合は、 umask 設定に基づいてパーミッションを割り当てます。 たとえば、管理対象ファイル <code>file.txt</code> が <code>/opt/newlocation</code> に配置された場合に、ディレクトリ <code>/newlocation</code> が存在しないと、作成されます。これは、管理対象外ディレクトリです。 1 つ以上のファイルが新しい場所にインストールされると、最初にインストールされたファイルが割り当てられるパーミッションを決定します。

Client Automation Agent がルート以外のユーザー ID で実行されている場合:

- 配布されたすべてのリソースは、ユーザー ID と **HPCA Application Manager** を実行しているユーザー ID のグループと関連付けられます。
- パブリッシュ中に、リソースの所有者およびグループは **UNIXFILE** インスタンス データ内に格納されます。インスタンス内の所有者およびグループ属性は、 唯一のルートが所有者およびグループ特性に変更を実行できる能力を持場合に、**Client Automation** エージェントがルートとして実行されている場合にのみ適用されます。
- **Client Automation** エージェントの機能は、接続を実行しているユーザー ID に対する現在のユーザー ID およびグループ メンバーシップのパーミッション制約に制限されています。
- **Client Automation** は ディレクトリ パーミッションがルート以外のユーザーまたはグループ メンバーシップが書き込みするのを禁止しているディレクトリには展開できません。
- **Client Automation** は、異なる UID および/または GID で所有されている場合でも、既にエージェント ワークステーション上にある **Client Automation Management** の下に配置されたリソースにパーミッションを設定できない場合があります。
- **Client Automation** は、ルート権限を必要とするエージェント メソッドを起動できなくなります。

HPCA Application Manager がルートとして実行されていて、

- リソースの所有者名が **ZPERUID** に定義されていて、ユーザー ID がエージェント ワークステーション上にある場合は、リソースは指定されたユーザー ID によって所有されます。
- リソースのグループ名が **ZPERGID** に定義されていて、グループがエージェント ワークステーション上に存在する場合は、リソースは指定されたグループに関連付けられます。



セキュリティ違反を防ぐには、次の点に注意してください。

リソースの所有者が **ZPERUID** に定義されていて、エージェント ワークステーション上に存在しない場合は、管理対象リソースの所有者指定は **"nobody" (uid 60001)** に設定されます。

リソースのグループが **ZPERGID** に定義されていて、エージェント ワークステーション上に存在しない場合は、管理対象リソースのグループ指定は **"nobody" (gid 60001)** に設定されます。

A コンポーネント インスタンスを修正する

(非プロダクション環境限定)

この付録は以下を目的としています。

- ファイル タイプ コンポーネントを追加、編集、置換する際に詳細なオプションを使用する場合の制約について理解する。
- ファイルの配布済みコンテンツは、**CSDB Editor** 内からダイナミックに編集できるようになる。
- パブリッシュしたパッケージ内のファイルに配信されたデータのコンテンツ全体は、**CSDB Editor** を使用して置換することができるようになる。
- ソフトウェア パッケージを再パブリッシュすることなく、パッケージのファイルや動作のコンポーネント インスタンスが追加できるようになる。



この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のエージェントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのエージェントにその変更が配信されるためです。

この付録では、ファイルの配布済みコンテンツを **CSDB Editor** 内からダイナミックに編集する方法について説明しています。

下記の **図 45** は、コンポーネント変更用のショートカットメニュー コマンドを示しています。

図 45 インスタンスのショートカットメニュー

インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...
このコンポーネントを編集... コンポーネント データを置換
接続を表示(S)...
リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L)

コマンドの使用例

次の表に、どのような場面でこれらのオプションを使用してコンポーネント インスタンスを修正するか例を示します。

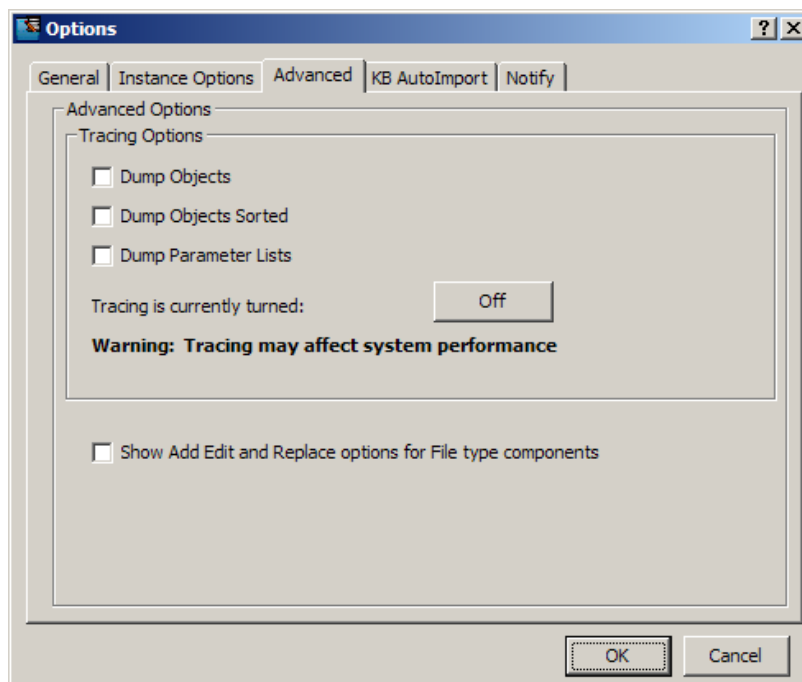
表 56 詳細なコンポーネント編集コマンドの使用例

コマンド	一般的な使用例
このコンポーネントを編集	ファイルに配布されたシリアル番号を変更する。 readme ファイル、ドキュメント、スプレッドシート、ロゴ画像、PDF のコンテンツを編集する。
コンポーネントデータを置換	パッケージ内の既存ファイルのコンテンツ全体を、CSDB 外部の別ファイルのコンテンツで置換する。
コンポーネントを追加	別のパッケージ ファイルをテンプレートとして使用して、新しいファイル インスタンスをパッケージに追加する。

コンポーネントの追加、編集、置換コマンドにアクセスする

次の設定は、[オプション] ダイアログ ボックスの [詳細] タブで利用可能です。
[ファイル タイプコンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]

図 46 [オプション] ウィンドウの [詳細] タブ



適用可能なインスタンスのショートカット メニューでこれらのコマンドを有効にするには、**[ファイル タイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]** チェック ボックスをオンにします (この設定は、必ず非プロダクション環境で実施してください)。

▶ この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のエージェントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのエージェントにその変更が配信されるためです。

このオプションを選択すると、[インスタンス] ショートカット メニューが開きます (図 45 252 ページ) を参照してください。

コンポーネントを編集する

[このコンポーネントを編集] オプションを使用すると、任意のエディタを選択して、ファイル インスタンスの配布済みコンテンツがダイナミックに修正できます。ファイルへの変更を保存すると、修正されたファイルが **Configuration Server** に送信 (再転送) され、**CSDB** 内のインスタンスが更新されます。

▶ この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のエージェントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのエージェントにその変更が配信されるためです。

たとえば、**CSDB Editor** でパッケージ化および表現したコンポーネント インスタンスの配布可能コンテンツが編集できます。編集後のファイルは、必ず元のファイルと同じ名前前で保存する必要があります。パッケージ内の既存のファイルは、編集したファイルによって直ちに置換されます。パッケージは **CSDB Editor** によって自動的にパブリッシュされるため、手動で再パブリッシュする必要はありません。

元のコンポーネントのコンテンツは、**CSDB Editor** には保持されません。

パッケージを作成して **CSDB** に転送する詳細については、**Publisher (72 ページ)** を参照してください。

コンポーネントを編集するには

▶ コンポーネント エディタはコンポーネントのターゲット オペレーティング システムを知りません。インスタンスを編集する前に、**HP** では、値が編集によって変更されてはならない次の属性の値、およびその他の属性の値をメモ (またはエクスポート) することを推奨します。

ZRSCMEMM (PDS Member Name)

ZRSCCRC (Resource CRC)

ZRSCPADM (PDS AdminID)

ZPUBVER (Packager/Publisher Version)

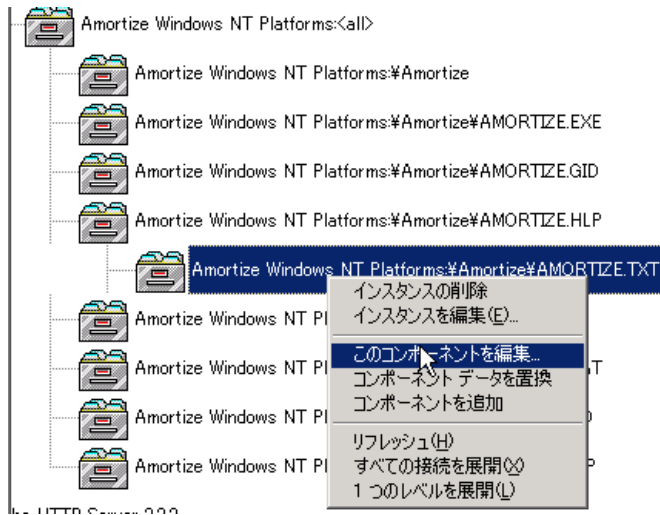
これらの属性の値が編集プロセスの結果として変更された場合は、元の値を復元することを推奨します。

たとえば、コンポーネントが **Windows** オペレーティング システムを対象としている場合は、**ZRSCMEMM**、**ZRSCCRC**、および **ZRSCPADM** 属性は適用せず **null** でなければなりません。コンポーネントの編集後に、これらの属性が **null** 以外の値を表示する場合は、挿入された値をクリアしてください。同様に、その他の属性 **ZPUBVER**

などの値は、編集によって変更されないまま残ります。変更された場合は、**ZPUBVER** を元の値に復元してください。

- 1 CSDB Editor で **[オプション]** ウィンドウの → **[詳細]** タブに移動し、**[ファイルタイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]** チェックボックスをオンにします。
- 2 CSDB で、変更したいコンテンツを含むソフトウェア パッケージに属するファイルインスタンスを探します。
- 3 ツリー ビューで、インスタンスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。

下の図は、**Amortize NT Platforms** パッケージ内の **Amortize.TXT readme** ファイル インスタンスのショートカット メニューです。コマンドとして、**[このコンポーネントを編集]**、**[コンポーネント データを置換]**、および **[コンポーネントを追加]** が表示されています。



- 4 ショートカット メニューの **[このコンポーネントを編集]** をクリックします。AMORTIZE.TXT ダイアログ ボックスのエディタ セレクタが開きます。

このダイアログ ボックスを使用して、このファイルの修正に常に使用するエディタを選択します。たとえば、**AMORTIZE.TXT** ファイルを Notepad.exe で開くには、**[メモ帳]** をダブルクリックします。**[エディタ セレクタ]** ダイアログ ボックスが表示されます。

このダイアログ ボックスの使用方法については、**[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用する (257 ページ)** を参照してください。

- 5 **[エディタ]** ボックスでエディタをダブルクリックします。選択したエディタが起動し、選択していたファイル コンポーネント インスタンスが開きます。

- 6 ファイルのコンテンツに必要な変更を加え、元のファイルと同じ名前で作成します。



ファイルを別の名前で作成すると、**CSDB Editor** で選択したファイルに加えられた変更は元のファイルには反映されません。

- 7 エディタを閉じます。
- 8 必要に応じて、**[OK]** をクリックしてインスタンスへの変更を保存し [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを閉じます。
- 9 [ファイルの再転送] ダイアログ ボックスが表示され、データベースで選択したインスタンスへの変更を確定するかどうかを尋ねるダイアログ ボックスが表示されます。
 - 変更を保存し、変更したファイルのパブリッシュとデータベースへの転送を実行する場合は **[はい]** をクリックします。
 - 編集および編集セッションをキャンセルする場合は、**[いいえ]** をクリックします。データベース インスタンスは変更されていません。

変更を確定すると、**ZRSCDATE**、**ZRSCTIME**、および **ZRSCSIZE** のインスタンス属性に、編集後のファイルのサイズと日付が反映されます。

File Resources class Amortize Windows NT/2000/XP:\Amortize\AMORTIZE.TXT Instance Attributes:		
Name	Attribute Description	Value
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCNAME	Resource Name	&ZRSCCFIL
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCCFIL	Resource File Name	\Amortize\AMORTIZE.T...
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCMO	Mandatory/Optional on Client [M/O]	0
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCVRFY	Verify Resource File on Connect	Y
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCCONF	Confirm File Download [Y/N]	Y
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCRASH	DOS File Attribute [R/A/S/H]	A
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCSTYP	Server File Type [BINARY/TEXT]	BINARY
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCMEM	PDS Member Name	21859BAE
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCDATE	Resource Date Stamp - From Promote	20021023
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCTIME	Resource Time Stamp - From Promote	16:27:40
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCSIZE	Resource Size - From Promote	00000001193
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCVERS	Resource Version - From Promote	
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCSTA	Client File Status	999
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCCKPT	Resource Checkpoint	
<input checked="" type="checkbox"/> ZRSCCRC	Resource CRC	



HP では、すべての属性の値を元の値と比較し、不必要に変更された値を復元することを推奨します。たとえば、元は **null** だった **OS** 関連属性の値をクリアすることが必要な場合があります。詳細については、254 ページのこの手順の最初にある注意テキストを参照してください。

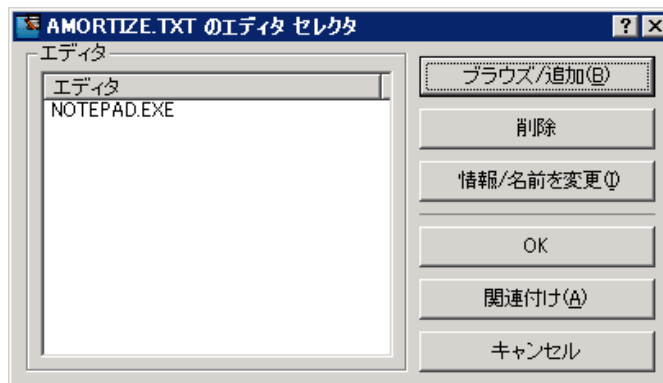
[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用する

[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用すると、ダイアログ ボックス名に名前が表示されているファイルの編集に常に使用するエディタが選択できます。

エディタを選択するには、[エディタ] リストのいずれかのエントリを選択します。また、**[関連付け]** をクリックして、**Windows** でそのファイル拡張子に関連付けられているデフォルトのエディタを使用することもできます。

[エディタ] リストに表示されるエディタを追加、削除、またはその名前を変更するには、右上にある 3 つのボタンを使用します。

図 47 コンポーネントの編集で使用する [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス



次の表は、[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスの各ボタンのアクションをまとめます。

表 57 [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスのボタン

ボタン	アクション
ブラウズ/ 追加	[ファイルをブラウズ] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスを使用すると、エディタのリストに追加するプログラムが選択できます。[ブラウズ] ダイアログ ボックスで選択したエントリは、[エディタ] リストで強調表示していたエントリのすぐ下に追加されます。
削除	選択した (強調表示されている) プログラムが [エディタ] リストから削除されます。

ボタン	アクション
情報/名前を変更	選択しているエディタ プログラムのプログラム名やパスを記載したダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスを使用すると、[エディタ] リストに表示される簡略名をそのプログラムに割り当てることができます。
OK	選択した (タイトル バーに名前が表示されている) ファイルを、強調表示されているエディタで開きます。 [エディタ] リストのエントリをダブルクリックしてファイルを開くこともできます。
関連付け	選択した (タイトル バーに名前が表示されている) ファイルを、 Windows でそのファイル タイプに関連付けられているデフォルトのエディタで開きます。関連付けがない場合は、再び [エディタ セレクト] ダイアログ ボックスが表示され、そこでエディタを指定するか、編集をキャンセルすることができます。
キャンセル	選択したコンポーネントまたはパッケージに変更を加えずに [このコンポーネントを編集] コマンドをキャンセルします。

コンポーネント データを置換する

[コンポーネント データを置換] コマンドは、パッケージ化済みファイルのコンテンツ全体を、データベース外部の既存のファイルのコンテンツで完全に置換する必要がある場合に使用します。たとえば、新しい `Readme.TXT` があり、そのコンテンツ全体を置換したいとします。その場合はまず、改訂後の `Readme.TXT` ファイルを **CSDB Editor** の外部に準備します。次に、**CSDB Editor** 内から [コンポーネント データを置換] コマンドを使用して、既存の `Readme.TXT` のコンテンツを新しい `Readme.TXT` のコンテンツで置換します。[コンポーネント データを置換] コマンドを使用した場合は、パッケージ化済みファイルの配信済みコンテンツのみが置換され、そのプロパティは置換されません。



この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。プロダクション環境のエージェントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのエージェントにその変更が配信されるためです。

"すべての" コンポーネント データを置換するには

- 1 **CSDB** 内のパッケージ化済みコンポーネントを置換するため、その置換データを表すコンテンツを格納したファイルを **CSDB Editor** の外部で準備します。準備するファイルの名前は、どのような名前でも構いません。



[コンポーネント データを置換] コマンドを使用すると、CSDB Editor から選択したファイルのデータ コンテンツ全体が、準備したファイルのコンテンツによって置換されます。この手順を進める前に、準備したファイルのコンテンツを十分に検証してください。

- 2 CSDB Editor で **[オプション]** ウィンドウの → **[詳細]** タブに移動し、**[ファイルタイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]** チェックボックスをオンにします。
- 3 CSDB で、置換したいデータを格納するソフトウェア パッケージのファイル インスタンスを探します。
- 4 ツリー ビューで、インスタンスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。

下の図は、**Amortize NT Platforms** パッケージ内の **Amortize.TXT** readme ファイル インスタンスのショートカット メニューです。コマンドとして、**[このコンポーネントを編集]**、**[コンポーネント データを置換]**、および **[コンポーネントを追加]** が表示されています。



- 5 ショートカット メニューの **[コンポーネント データを置換]** をクリックします。**Windows** の標準の **[ファイルを開く]** ダイアログ ボックスが表示されます。
- 6 準備したファイル (CSDB Editor から選択したファイルのデータを置換するためのコンテンツを格納するファイル) の格納場所に移動します。
- 7 置換データを格納するファイルを選択して **[開く]** をクリックします。確認メッセージが表示されます。
- 8 データを置換する場合は **[はい]** を、データの置換を中止する場合は **[いいえ]** をクリックします。

[はい] をクリックすると、データのコンテンツ全体が選択したファイルのデータで置換され、そのパッケージが自動的に再パブリッシュされます。

ZRSCDATE、ZRSCTIME、ZRSCSIZE のインスタンス属性には、前に示したように、新しいファイルのサイズと日付が反映されます。

[いいえ] をクリックすると、置換コマンドがキャンセルされます。

コンポーネントを追加する

[コンポーネントを追加] コマンドは、ファイル コンポーネントおよび動作コンポーネントに対してのみ使用できます。ファイルは常に所有するパッケージに属しているため、多くの場合、追加コマンドはパッケージの接続から実行することになります。新しいファイルを追加するには、既存のパブリッシュ済みファイルのプロパティをコピーします。ファイルをまったくゼロの状態から（つまり、Packager から転送されていないファイルから）作成することはできません。



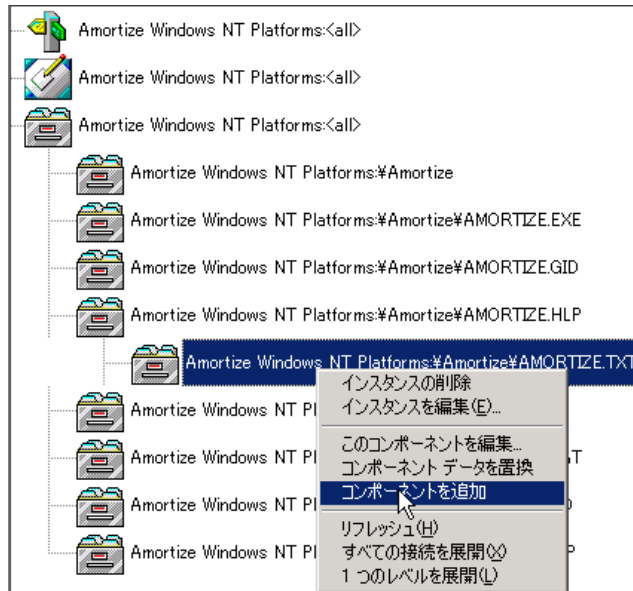
この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。プロダクション環境のエージェントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのエージェントにその変更が配信されるためです。

新しいファイルはテンプレートとして使用するインスタンスを選択することによって追加されます。CSDB Editor は、テンプレートの LOCATION 変数から新しいインスタンスへのパスを継承します。テンプレートを選択したら、そのテンプレートを右クリックしてショートカット メニューの **[コンポーネントを追加]** をクリックします。[ファイルを開く] ダイアログ ボックスが表示され、パッケージに追加するファイルが選択できます。最後の確認ダイアログでは、必要に応じてプロセスを中止することもできます。**[はい]** をクリックした場合は、[ファイルを開く] ダイアログ ボックスで選択したファイルが転送されます。これで、パッケージに新しいファイルが格納されたことになります。

コンポーネントをパッケージに追加するには

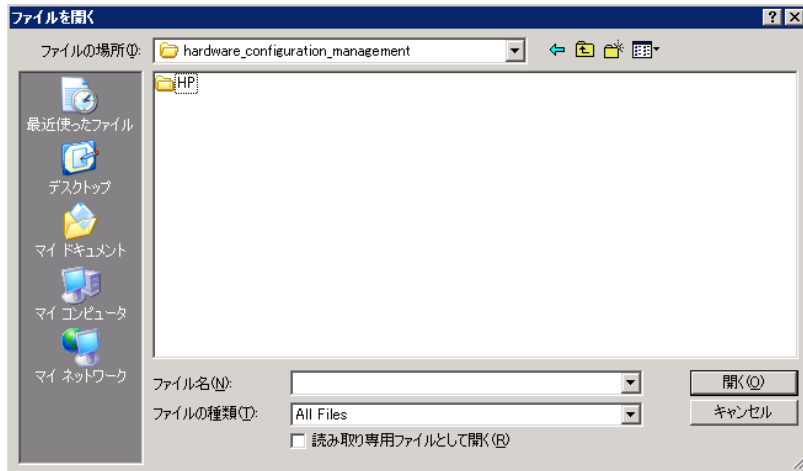
- 1 CSDB Editor で **[オプション]** ウィンドウの → **[詳細]** タブに移動し、**[ファイルタイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]** チェックボックスをオンにします。
- 2 追加するコンポーネントのテンプレートとして使用するため、適切な LOCATION 変数が格納されているソフトウェア パッケージのファイル インスタンスを探します。
- 3 ツリー ビューで、テンプレート ファイルのインスタンスを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。

下の図は、Amortize Windows NT Platforms パッケージ内の Amortize.TXT readme ファイル インスタンスのショートカット メニューです。コマンドとして、[このコンポーネントを編集]、[コンポーネント データを置換]、および [コンポーネントを追加] が表示されています。



- 4 ショートカット メニューの **[コンポーネントを追加]** をクリックします。Windows の標準の [ファイルを開く] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 5 パッケージに追加するために準備したファイルの格納場所に移動します。

たとえば、AMORTIZE2.TXT という名前のファイルを準備した場合であれば、下の図のようにその格納場所に移動します。この例では、このコンポーネントをパッケージに追加します。



- 6 テンプレート ファイルと同じ **LOCATION** 変数を格納するファイルを追加するには、準備したファイルを選択して **[開く]** をクリックします。確認メッセージが表示されます。
- 7 **[OK]** または **[キャンセル]** をクリックします。

[OK] をクリックすると、追加したファイルが転送され、パッケージが再パブリッシュされます。追加したファイルの **LOCATION** のインスタンス属性には、テンプレートファイルのロケーションが反映されます。

[いいえ] をクリックすると、**[コンポーネントを追加]** コマンドがキャンセルされます。

B 命名規則

Configuration Server Database (CSDB) に格納されたソフトウェアを整理するのに役立つ命名規則について説明します。

アプリケーションをパブリッシュする際、以下のような要件がサブスクライバごとに異なっている場合があります。


- オペレーティング システム
- ハードディスクの空き容量
- プロセッサ、メモリなど
- 職務権限などの要因に応じて変更すべきデータやアプリケーション

こうした要件の違いにより、1 つのオブジェクトのパッケージを複数作成しなければならない場合があります。CSDB 内のデータを整理しておくには、命名規則を作成して組織内で使用することをお勧めします。

ここでは、独自の基準を作成するためのベースとして使用できるいくつかの例を紹介します。

情報を分類する

一般には、アンダースコア (_) を含む一意の上位識別子を使用して、CSDB の情報を分類することを検討します。CSDB Editor では、アンダースコアより前の識別子を元にインスタンスがグループ化されます。

 上位識別子をアンダースコア (_) なしで使用する場合でも、CSDB Editor のフィルタリング機能を使用して、その識別子のインスタンスのみを表示することは可能です。

たとえば、ローンの償却を計算するアプリケーションに Windows 2000/XP 用と Windows Server 2003 用の 2 つのバージョンがある場合、それぞれ AMORTIZE_2000/XP および AMORTIZE_2003 と命名することができます。

POLICY ドメインの命名規則

以下のような基準をベースとし、それを応用することをお勧めします。ワークグループのインスタンスを命名する場合は、サブスクリバを適切にグループ化できる情報を使用します。たとえば、部門と所在地によって組織化されている企業の場合、次のような基準を適用することができます。

表 58 USER クラスの命名規則

フォーマット	説明	例
USERID	サブスクリバを識別します。	SJones
DIV_LOC_DESC	所有者または割り当て先を定義します。	CTS_CLE_EVERYONE
DIV	部門を識別します。	CTS (Corporate Technology Services)
LOC	所在地を識別します。	CLE (クリーブランド)
DESC	グループの説明を追加します。	EVERYONE (すべてのユーザー)

SOFTWARE ドメインの命名規則

部門と所在地によって組織化されている企業では、次のような基準でデータを分類することができます。

表 59 PACKAGE クラスの命名規則

フォーマット	説明	例
DIV_LOC_APPNAME_VER_OS	アプリケーションを定義します。	CTS_CLE_WINZIP_80_XP
DIV	部門を識別します。	CTS (Corporate Technology Services)
LOC	所在地を識別します。	CLE (クリーブランド)
APPNAME	アプリケーションを識別します。	WINZIP
VER	アプリケーションのバージョンを識別します。	80

フォーマット	説明	例
OS	アプリケーションが動作している OS を識別します。	XP

表 60 Delivery クラスおよび Auditing クラス*

* SOFTWARE ドメインの他のすべてのクラス

フォーマット	説明	例
REG_DIV_LOC_APPNAME_VER_OS	アプリケーションを定義します。	NAM_CTS_CLE_WINZIP
REG	地域を識別します。	NAM (北米)
DIV	部門を識別します。	CTS (Corporate Technology Services)
LOC	所在地を識別します。	CLE (クリーブランド)
APPNAME	アプリケーションを識別します。	WINZIP

組織に適合した規則を策定するには、ある程度の時間がかかります。しかし、事前に規則を作成し、それをしっかりと管理者全員に伝えておけば、後々の混乱を防ぐことができます。

索引

3

32 ビットアーキテクチャ, 23

6

64 ビットアーキテクチャ, 23

A

ADDLOCAL 引数, 34

ADDSOURCE 引数, 34

addtosvc パラメータ, 100

Admin CSDB Editor

オプション, 129

[KB AutoImport] タブ, 135

[通知] タブ, 136

ショートカットメニュー, 141

制御機能, 129

ツリー構造の表示, 137

データベース、ツリービューの変更, 137

データベースに対するフィルタ, 194

開く, 125

Admin CSDB Editor のツールバー ボタン, 128

Admin Packager

ログオン, 57

Admin Publisher

ログオン, 245

デフォルトのプロパティの設定, 47

Administrator

インストール

インストール ウィザード, 32

コマンドライン, 35

インストールプログラム, 30

削除

インストール ウィザード, 37

コマンドライン, 37

システム要件, 30

Administrator for Windows の削除

コマンドライン, 37

Administrator for Windows の削除

インストール ウィザード, 37

Administrator システム要件

UNIX, 232

Administrator のインストール方法

UNIX, 233

Windows, 30, 36

Administrator のシステム要件

Windows, 30

ADVERTISE 引数, 35

AIP, 30

aiparguments 設定, 101

aiplocation 設定, 101

AIP を使用してパブリッシュ, 93

Application Packages インスタンス, 説明, 21

AppSync, 88

ARBITRAT 属性, 55, 80

ASYCFILT.DLL, 57

attr CLASS {body} パラメータ, 101

B

Batch Publisher, 26

-batchmsi パラメータ, 103

Behaviors advanced publishing option, 96

C

-cfg パラメータ, 100, 103

COMCAT.DLL, 57

COMCTL32.OCX, 57

COMDLG32.OCX, 57

Configuration Server Database

Configuration Server のプロパティ表, 149

インスタンスの削除, 161

インスタンスの名前を変更, 161

追加

インスタンス, 156

インスタンス : コピー, 156

クラス, 142

クラス : コピー, 142

クラス属性, 151

コンポーネント, 260

- ドメイン, 142
- ツリー ビューの変更, 137
- ツリー構造の表示, 137
- ナビゲーション履歴
 - 下位ノードを取り除く, 138
- 破棄, 138
- フィルタ, 194
- 編集, 141
 - インスタンス, 157
 - クラス, 145
- Configuration Server Database 新しいクラス、作成, 144
- Configuration Server データベース
 - オプションの属性編集, 152
 - クラスの削除, 155
 - 追加
 - インスタンス
 - 新規作成, 156
 - ドロップダウンリスト, 153
 - フラグ属性, 152, 153
- Configuration Server のプロパティ、表, 149

D

- DATA1.MSI, 219
- [Deflate] (圧縮設定), 51
- deleteaip 設定, 101
- Desktop インスタンス, 説明, 22
- DHCP. (ダイナミック ホスト設定プロトコルを)
- DIRPERMS, 248
- DISPLAY 属性, 232
 - 設定, 233

E

- enableperuser 設定, 101
- execui 設定, 101

F

- Feature Set Editor
 - navigating the tree, 213
- FILE インスタンス, 説明, 21
- file パラメータ, 103

H

- Hide feature, 217

- HPCA Core, 15
- HPCA Satellite, 15
- HPCAE-ADMIN72.MSI, 31, 36

I

- IDMLIB ディレクトリ, 236
- IDMLOG, 236
- Installed on First Use feature, 216

K

- [KB AutoImport] タブ, 135

L

- LOCATION 変数, 260
- log ディレクトリ, 104
- loglevel 9, 233

M

- msi {body} パラメータ, 101
- MSI ファイル用にローカル キャッシュを使用, 97
- MSIEXEC, 223
- MSIFEATS, 212, 222, 223
- MSI 置換値送信元, 107
- mst ファイル, 103, 222
- MSVBVM60.DLL, 57

N

- Name Lists クラス, 204
- Native Packaging, 27
- notify
 - 説明, 192
- null インスタンス, 198

O

- [OK] ボタン, 258
- OLEAUT32.DLL, 57
- OLEPRO32.DLL, 57

P

- PACKAGE インスタンス, 説明, 21
- PACKAGE クラス インスタンス, 59
- package パラメータ, 100

PATCH クラス, 178, 186
PATCH ドメイン, 178, 186
Path インスタンス, 説明, 22
path パラメータ, 101
pkgdesc パラメータ, 100
pkgname パラメータ, 100, 106
publishmode 設定, 101
publishr 実行可能ファイル, 245
pubport. ログ ファイル, 104

R

Radreg32 Delete 操作, 226
radskman, 188
REG_DWORD, 226
REG_EXPAND_SZ, 226
REG_MULTI_SZ, 226
REG_SZ, 226
Registry File Editor
 closing, 229
 setting properties, 225
 shortcut menu options, 225
Registry Resources インスタンス, 223
REMOVE 引数, 35
Run all from My Computer feature, 215
Run all from Source feature, 215
Run from My Computer feature, 215
Run from Source feature, 215

S

service パラメータ, 100
setup.exe, 30
SHOWINCP 変数, 219, 220
STDOLE2.TLB, 57
svcdesc パラメータ, 100
svcname パラメータ, 100

T

ThinApp, 88

U

UNIX File Resources, 247
UNIX 用 Administrator
 インストール
 コマンドラインの使用, 236

UNIXFILE インスタンス, 247
UNIXFILE クラス, 248
UNIXFILE.ZRSCRASH 属性, 248
UNIXFILE 属性, 247
UNIX 用 Administrator
 インストール
 GUIの使用, 234
UNIX 用 Administrator
 システム要件, 232
UNIX 用 Administrator をインストールするための
 プレーンモード, 234
UNIX 用 Administrator をインストールするため
 テキストモード, 234

V

VMware, 88

W

Windows インストーラ AIP, 作成, 36
Windows インストーラ ファイル, 88
Windows インストーラ メソッドを設定, 172
Windows インストーラ ログ, 36

Z

ZCONTEXT 属性, 50
ZCREATE 属性, 79
ZDELETE 属性, 55, 80
ZERROR インスタンス, 53
ZFILEUPD 属性, 55, 80
ZINIT 属性, 79
ZLIST クラス, 203
ZOBJPTCH 変数, 178
ZPERGID 属性, 248, 249
ZPERUID 属性, 248, 249
ZPUBVER, 254
ZRSCCRC, 254
ZRSCMEM, 254
ZRSCMO 属性, 50
ZRSCPADM, 254
ZRSCPRI 属性, 50
ZRSCRASH 属性, 248
ZRSCVRFY 属性, 49, 52, 53, 78
ZSVCGRP 変数, 189
ZSVCPRI, 192
ZUPDATE 属性, 55, 80

あ

- アーキテクチャ, 23
- [アクティブ] オプション
 - 制御ファイル, 66
 - ファイル, 65
 - フォルダ, 66
 - レジストリ キー, 69
- 新しい値, 226
- 新しいキー, 226
- [新しいクラスが追加されたとき] チェック ボックス, 131
- 圧縮設定
 - Deflate, 51
 - なし, 52
- [アップグレード] 基本パブリッシュ オプション, 99
- [アップグレード] パブリッシュ オプション, 95

い

- 一時クラス, 146
- インクルード接続, 148
- インスタンス
 - コピー, 156
 - 削除, 161
 - 新規作成して追加, 156
 - 追加, 156
 - 名前の変更, 161
 - プレフィックス名, 139
 - 編集, 157
- [インスタンス オプション] タブ, 132
- オプションの説明, 132
- インスタンス プロパティ
 - 検証オプション
 - オプション, 50, 79
 - 検証しない, 50, 78
 - 検証する統計値, 49, 77
 - コンテンツ (CRC チェック), 49, 78
 - 最新でない場合にのみ更新する, 49, 78
 - 内部バージョンをチェックする, 49
 - データ オプション
 - 圧縮設定
 - Deflate, 51
 - データのないインスタンスを転送させる, 52
 - リソースの転送設定, 52
 - 普通, 52
 - メンテナンス, 52

- 配信オプション
 - デフォルト プロパティを使用する, 50, 79
 - 配信の優先度の上書き, 50, 79
 - マシン, 51
 - [インスタンス プロパティ] ダイアログ ボックス
 - インストール モニタ モード
 - [管理エージェント] タブ, 48
 - インスタンス更新メソッド
 - インストール モニタ モード, 55
 - コンポーネントの選択モード, 80
 - インスタンスのプロパティ
 - エージェントの動作
 - インスタンス更新メソッド, 55
 - ファイルアービトレーションメソッド, 55
 - ファイル更新/追加メソッド, 55
 - リソース アンインストールメソッド, 55
 - 検証オプション
 - 存在しない場合にのみ配布する, 49, 78
 - マネージャで指定されているデフォルトを使用する, 49, 77
 - データ オプション
 - 圧縮設定
 - なし, 52
 - リソースの転送設定
 - システム ファイルを保護する, 52
 - ロック メソッドを強制する, 52
 - 必須, 50, 78
 - ユーザー, 50
 - ユーザー指定, 51
 - [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックス
 - インストール モニタ モード
 - [エージェントの動作] タブ, 53
 - [データ オプション] タブ, 51
 - [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックス, 66
 - インスタンス名、プレフィックス, 139
 - [インスタンス名の変更] ダイアログ ボックス, 161
 - [インスタンスをフィルタ] ダイアログ ボックス, 195, 198
 - [インスタンスを編集] ダイアログ ボックス, 133, 157
- インストール
 - Administrator
 - コマンドライン, 35
 - Administrator
 - インストール ウィザード, 32

- UNIX 用 Administrator
 - コマンドラインを使用, 236
- UNIX 用 Administrator
 - GUI の使用, 234
 - インストール モニタ モードによるソフトウェアのインストール, 62
- インストール ウィザード
 - Administrator for Windows のインストール, 32
 - Administrator for Windows の削除, 37
- インストール モニタ モード
 - [インスタンス プロパティ] ダイアログ ボックス
 - [エージェントの動作] タブ, 53
 - [管理エージェント] タブ, 48
 - [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックス
 - [データ オプション] タブ, 51
 - 更新されたファイル, 66
 - [システム コンフィグレーション] ウィンドウ, 59
 - ソフトウェアのインストール, 62
 - [パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウ, 62
 - [プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウ, 65
 - [デスクトップ] タブ, 67
 - [レジストリ] タブ, 68
- インストール モニタ モードノ [セッション タイプ] 領域, 58
- インストール モニタ モード : 前提条件, 56
- インストール モニタ モードの [エージェント動作] タブ, 53
- インストール モニタ モードの [システム ファイルを保護する], 52
- インストール モニタ モードの [データの無いインスタンスを転送させる], 52
- インストール モニタ モードの デスクトップ アイテムの [存在] 検証オプション, 68
- インストール モニタ モードの [デスクトップ] タブ, 67
- インストール モニタ モードの [ファイル] タブ, 64
- インストール モニタ モードの [普通データ オプション], 52
- インストール モニタ モードの [メンテナンスのデータ オプション], 52

- インストール モニタ モードの [レジストリ] タブ, 68
- インストール モニタ モードの [ロック メソッドを強制する], 52
- インストール モニタ モードの圧縮設定, 51
- インストール モニタ モードのユーザー指定の配信オプション, 51
- インストール モニタ モードの [タイプ] メニュー コマンド, 68
- インストール モニタ モード
 - 概要, 47
 - 説明, 21
- インターネット キャッシュを保存, 97

え

- エイリアス名, 152
- エージェント メソッドのコマンドライン, 54
- エージェントの動作
 - インスタンス更新メソッド, 55
 - ファイル アービトレーション メソッド, 55
 - ファイル更新/追加メソッド, 55
 - リソース アンインストール メソッド, 55
- エージェントのプロパティ
 - 実行, 149
 - 保護, 149
- [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス, 255
 - 使用, 257
 - ボタン, 257
- [エディタ] ボックス, 255

お

- [オプション] 配信オプション
 - インストール モニタ モード, 50
 - コンポーネントの選択モード, 79
- [オプション] 割り当てタイプ, 86
- [オペレーティング システム] ボックス, 59

か

- 下位ノードを取り除く, 138
- 管理インストール ポイント, 215, 221
 - [可用部分] ウィンドウ インストール モニタ モード
 - [後] チェック ボックス, 60
 - [前] チェック ボックス, 60
 - [管理エージェント] タブ

- 検証オプション, 49
- [管理エージェント] タブ
 - 配信オプション, 50
- [管理エージェント] タブ
 - インストール モニタ モード, 48
- [管理オプション] 基本パブリッシュオプション, 98
- 管理対象アプリケーション, 97
- 管理のタイプ, 86
- [関連付け] ボタン, 258
- 関連ドキュメント, 17

き

- 機能セット エディタ
 - ショートカット メニュー, 212
 - [表示しない] 機能, 217
 - プログラムの追加と削除, 219, 220
 - [無効] 機能, 217
- 機能セット エディタのボタン, 218
- [機能の選択] 詳細パブリッシュ オプション, 93
- 基本パブリッシュ モード, 98
 - [アップグレード], 99
 - 管理オプション, 98
 - [追加のファイル], 99
 - 変換, 99
- キャッシュのロケーション, 97
- [キャンセル] ボタン, 258

く

- クラス
 - コピー, 142
 - 削除, 155
 - 新規作成, 144
 - 接続タイプ, 148
 - 属性のタイプ
 - 式, 147
 - 接続, 148
 - 変数, 147
 - メソッド, 148
 - 追加
 - インスタンス, 156
 - コンポーネント, 260
 - 属性, 151
 - 編集, 145
- クラス エディタ, 142
- クラス タイプ

- コンポーネント, 147
 - ポリシー, 147
- クラス情報、プロパティ, 145
- クラス接続, 148
- クラスのタイプ
 - <none>, 147
 - configuration, 147
 - 値, 147
- [クラスを編集] ダイアログ ボックス, 131, 145
- クリーンなコンピュータ, 定義, 30
- [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックス, 48
- グローバル デフォルト, 変更, 48

け

- 検証オプション
 - 完全な検証, 68
 - 検証しない, 50, 68, 78
 - 検証する統計値, 49, 77
 - コンテンツ (CRC チェック), 49, 78
 - コンポーネントの選択モード, 77
 - 最新でない場合にのみ更新する, 49, 78
 - 存在, 68
 - 存在しない場合にのみ配布する, 49, 78
 - 内部バージョンをチェックする, 49
 - マネージャで指定されているデフォルトを使用する, 49, 77
- 検証しない
 - インストール モニタ モード, 50
 - コンポーネントの選択モード, 78
- 検証する統計値
 - インストール モニタ モード, 49
 - コンポーネントの選択モード, 77

こ

- 更新されたファイル、インストール モニタ モード, 66
- 高速フィルタ, 199
- 高速フィルタ
 - カスタマイズ, 200
 - カスタム, 202
 - 説明, 200
- このコンポーネントを編集
 - コマンド, 252
 - 説明, 254

- コマンドライン
 - Administrator for Windows の削除, 37
 - Windows でパブリッシュするファイルを定義する, 103
 - インストール
 - Administrator for Windows, 35
 - UNIX 用 Administrator, 236
- コマンドライン
 - Windows でのパブリッシュ, 100
- コンテンツ (CRC チェック)
 - インストール モニタ モード, 49
 - コンポーネントの選択モード, 78
- コンポーネント
 - パッケージへの追加, 260
 - 編集, 254
- コンポーネント エディタ, 254
- コンポーネント クラス, 198
 - フィルタ, 198
- コンポーネント クラスのインスタンス, 198
- コンポーネント データ、置換, 258
- コンポーネント データを置換
 - コマンド, 252
 - 説明, 258
- コンポーネント、追加, 260
- コンポーネントの選択
 - 説明, 21
- コンポーネントの選択モード
 - 概要, 244
 - 検証オプション, 77
 - 配信オプション, 78
- コンポーネントの追加
 - コマンド, 252
- コンポーネントの編集, 254
- コンポーネントを追加する
 - 説明, 260

さ

- サービス グループ, 187
 - 前提条件, 188
 - マスター サービス, 188
- サービス、作成, 170
- サービスの最適化, 177, 178
 - 使用, 178
- サービスの最適化を設定するには, 179
- 最新でない場合にのみ更新する
 - インストール モニタ モード, 49

- コンポーネントの選択モード, 78
- サイレントインストール, 36
- 削除 (デフォルト), 227
- [削除] ボタン, 257
- 削除オプション, 37
- 削除しない, 227

し

- 式属性タイプ, 147
- [システム コンフィグレーション] ウィンドウ
 - インストール モニタ モード
 - 必要な最低, 60
 - 必要なメモリ サイズの下限, 60
- システム ファイル保護
 - インストール モニタ モード, 52
 - 転送時の強制保護, 52
- SFP. システム ファイル保護を参照
- システム ファイルを保護する
 - ファイルのパブリック時, 52
- [システム設定] ウィンドウ
 - インストール モニタ モード, 59
 - コンポーネントの選択, 85
- [自動] 管理タイプ, 86
- [しない] (圧縮設定), 52
- ジャスト インタイム, 67
- [手動] 管理タイプ, 86
- [詳細] タブ, 134
 - オプションの説明, 134
- [詳細] パブリッシュ モード, 91
 - 既存のものアップグレード, 96
 - 動作, 96
 - マシン/ユーザー, 95
- 詳細パブリッシュ モード
 - 機能の選択, 94
 - 変換, 95
 - 常時接続, 148
 - [使用不可] 機能, 216
 - [情報/名前を変更] ボタン, 257
 - ショートカット メニュー, 141
- MD5 署名, 178
- 所有するパッケージ, 198
- 進捗状況バー、表示, 36
- シンボリック置換, 106

す

スキャン

- 対象の指定, 61
- ファイル システム, 62

- [スキャンするディレクトリ] ボックス, 62
- [スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウ, 62
- [スキャンするファイル コンテンツ] ボックスの一覧, 61

せ

制御ファイル、編集, 66

- セキュリティ ダイアログ ボックス, 125
- [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ, 58
- 接続、有効化, 206
- 接続規則, 202
- 接続規則変数, 208
- 接続属性タイプ, 148
- 設定ファイル
 - 使用, 100
 - 複数, 104
- 選択したファイル, 表示, 64
- 選択したリンク, 67
- 選択したレジストリ キー, 68
- 前提条件, 16
- [全般] タブ, 130

そ

- 属性、エイリアス, 152
- 属性タイプ式, 147
 - 接続, 148
 - 変数, 147
 - メソッド, 148
- 属性にインスタンスのエイリアス名を含める, 152
- [存在/存在] オプション, 70, 82, 225
- 存在しない場合にのみ配布する
 - コンポーネントの選択モード, 78
- 存在しない場合にのみ配布する：インストール モニタ モード, 49

た

- ターゲット オペレーティング システム
- 新規アプリケーション ウィザード, 172

- ターゲット ディレクトリ, 31, 36
- 対象とするオペレーティング システム
 - コンポーネントの選択, 85
- ダイナミック ホスト設定プロトコル, 56

つ

- [追加のファイル] 基本パブリッシュ オプション, 99
- 通知
 - STARTDIR を指定, 136
 - UID を指定, 136
 - 開始, 194
 - マシン名で, 136
- [通知] タブ, 136
- 常に削除, 226
- ツリー ビュー、操作, 137

て

- データ オプション
 - 圧縮設定, 51
 - データのないインスタンスを転送させる, 52
 - リソースの転送設定, 52
 - システム ファイルを保護する, 52
 - 普通, 52
 - メンテナンス, 52
 - ロック メソッドを強制する, 52
- [データ オプション] タブ
 - インストール モニタ モード, 51
- デスクトップ アイテムの [完全な検証] オプション
- インストール モニタ モード, 68
- デスクトップ アイテムの [検証しない] オプション
- インストール モニタ モード, 68
- [デフォルト プロパティを使用する]
- インストール モニタ モード, 50
- デフォルト プロパティを使用する
- コンポーネントの選択モード, 79
- デフォルトのプロパティ, 設定, 47
- 電子メール通知, 193
- 転送
 - 説明, 21
 - その間に作成されるインスタンス, 21
 - パッケージ, 70, 87
- テンポラリ フィルタ
 - 削除, 198
 - 設定, 197

説明, 197

と

ドメイン、ファイルへの追加, 142

な

内部バージョンをチェックする、インストールモ
ニタモード, 49

[長いファイル名を使用] チェック ボックス, 93

ね

ネイティブモード, 222

値を上書き、制御ファイル, 66

は

バージョングループ エディタ、説明, 177

ハードウェア構成要素, 108

パブリッシュ, 108

パーマネント フィルタ, 195

削除, 197

設定, 195

説明, 195

配信オプション

オプション, 50, 79

コンポーネントの選択モード, 78

デフォルトプロパティを使用する, 50, 79

配信の優先度の上書き, 50, 79

必須, 50, 78

マシン, 51, 68

ユーザー指定, 51

配信の優先度の上書き

インストール モニタ モード, 50

コンポーネントの選択モード, 79

バイト レベルの差異計算によるパッチ生成, 178

パスポート登録, 8

パッケージ

定義, 20

転送, 70, 87

複製, 221

パッケージ化、定義, 20

パッケージ情報

ドメイン

インストール モニタ モード, 59

コンポーネントの選択, 84

パッケージの説明

インストール モニタ モード, 59

コンポーネントの選択, 85

パッケージ名

インストール モニタ モード, 59

コンポーネントの選択, 84

リリース番号

インストール モニタ モード, 59

コンポーネントの選択, 85

パッケージのコピー, 221

パッケージの名前, 6, 103, 104, 106

バッチ モード, 103

パッチ条件

情報, 184

ボタンの機能, 185

パッチのビルド, 184

パッチのビルドの制約, 184

パブリッシュ

UNIX 用の概要, 244

Windows のコマンドラインで, 100

インストール モニタ モード

概要, 47

説明, 21

コンポーネントの選択

概要, 73

説明, 21

複数の .msi ファイル, 103

ひ

[非アクティブ] オプション

制御ファイル, 66

ファイル, 65

フォルダ, 65

レジストリ キー, 69

非管理対象アプリケーション, 97

日付と時刻の制約, 60

[必須] 配信オプション

インストール モニタ モード, 50

コンポーネントの選択モード, 78

[必須] 割り当てタイプ, 86

必須接続, 148

必要ディスク容量, 34

必要なオペレーティング システム

コンポーネントの選択, 85

必要なプロセッサ速度

インストール モニタ モード, 60

必要なメモリ

インストール モニタ モード, 60

コンポーネントの選択, 85

[表示しない] と [無効] のショートカット
メニュー, 217

ふ

ファイル

デフォルトのプロパティの設定, 47

ドメインの追加, 142

プロパティの編集, 65

ファイルアービトレーションメソッド

インストール モニタ モード, 55

コンポーネントの選択モード, 80

[ファイル] タブ

インストール モニタ モード, 65

ファイル更新/追加メソッド

コンポーネントの選択モード, 80

ファイル更新/追加メソッド

インストール モニタ モード, 55

ファイルと進行状況の情報, 183

[ファイルのコンテンツを比較する] チェック
ボックス, 61

ファイルのフィルタ, 64

ファイルのプロパティの設定

インストール モニタ モード

[デスクトップ] タブ, 67

[ファイル] タブ, 65

[レジストリ] タブ, 68

コンポーネントの選択, 76

フィルタ, 194

高速, 199

テンポラリ

削除, 198

設定, 197

説明, 197

パーマネント

削除, 197

設定, 195

説明, 195

フィルタ、削除, 65

フィルタ結果、追加, 198

フィルタ仕様

説明, 194

有効な式, 194

例, 194

複数インスタンス

選択, 158

編集, 158

複数のインスタンス

[インスタンスを編集] ダイアログ ボックス, 159
復旧, 97

[ブラウズ/追加] ボタン, 257

プレフィックス、複合名での使用, 139

[プログラムの追加と削除] アプリケーション, 219

[プログラムの追加と削除] アプレット, 220

[プロパティ] オプション、レジストリ キー, 69

[プロパティ] 詳細パブリッシュ オプション, 94

[プロパティを設定] オプション

フォルダ, 66

[プロパティを設定] オプション

ファイル, 65

分割バーを画面右側に固定, 132

へ

ベース インスタンス, 198

ベース インスタンスを使用する, 87

[変換] 基本パブリッシュ オプション, 99

[変換] 詳細パブリッシュ オプション, 94

変換ファイル, 103, 222

変数属性タイプ, 147

ま

[マシン/ユーザー] パブリッシュ オプション, 95

マシン配信オプション

インストール モニタ モード

デスクトップ アイテム, 68

ファイル, 51

マスター サービス, 188

作成, 189

マニュアルの変更点, 4

マネージャで指定されているデフォルト検証を使用する

コンポーネントの選択モード, 77

マネージャで指定されているデフォルトを使用する

インストール モニタ モード, 49

む

[無効] 機能, 217

[無視] 機能, 217

[無条件/強制] オプション, 69, 81, 225
[無条件/存在] オプション, 69, 81, 225

め

命名規則, 17, 263
POLICY ドメイン, 264
SOFTWARE ドメイン, 264
メソッド属性タイプ, 148
メッセージダイジェスト アルゴリズム, 177

ゆ

ユーザーが MSI 機能を管理, 98
ユーザーごとのインストールを有効にする, 95
ユーザーごとの使用可能なリソース, 95
ユーザー配信オプション
インストール モニタ モード, 50
デスクトップ アイテム, 68
ユーザー, 50, 68

り

リソース アンインストール メソッド
インストール モニタ モード, 55
コンポーネントの選択モード, 80
リソース インストール メソッド
コンポーネントの選択, 79
コンポーネントの選択モード, 79
リソースの転送設定

インストール モニタ モード, 52
システム ファイルを保護する, 52
普通, 52
メンテナンス, 52
ロック メソッドを強制する, 52
リソースの転送設定, メンテナンス, 52

れ

レジストリ
値の復元, 69
値の編集, 69
表示, 68
プロパティの設定, 69
レジストリ キー、編集, 227
[レジストリ] チェック ボックス, 61
レジストリ ファイル エディタ, 223
アクセス, 223
レジストリ インスタンス, 説明, 22
レジストリ リソース インスタンス, 説明, 22

ろ

ローカルでの修復を使用, 97
ログオン ダイアログ ボックス, 125
ロック ファイル メソッド, 52

わ

割り当てのタイプ, 86

